特 258
875

歷代古法帖 四

(十七帖)

特258
875

展大古法帖 （第四卷） （第三回配本）

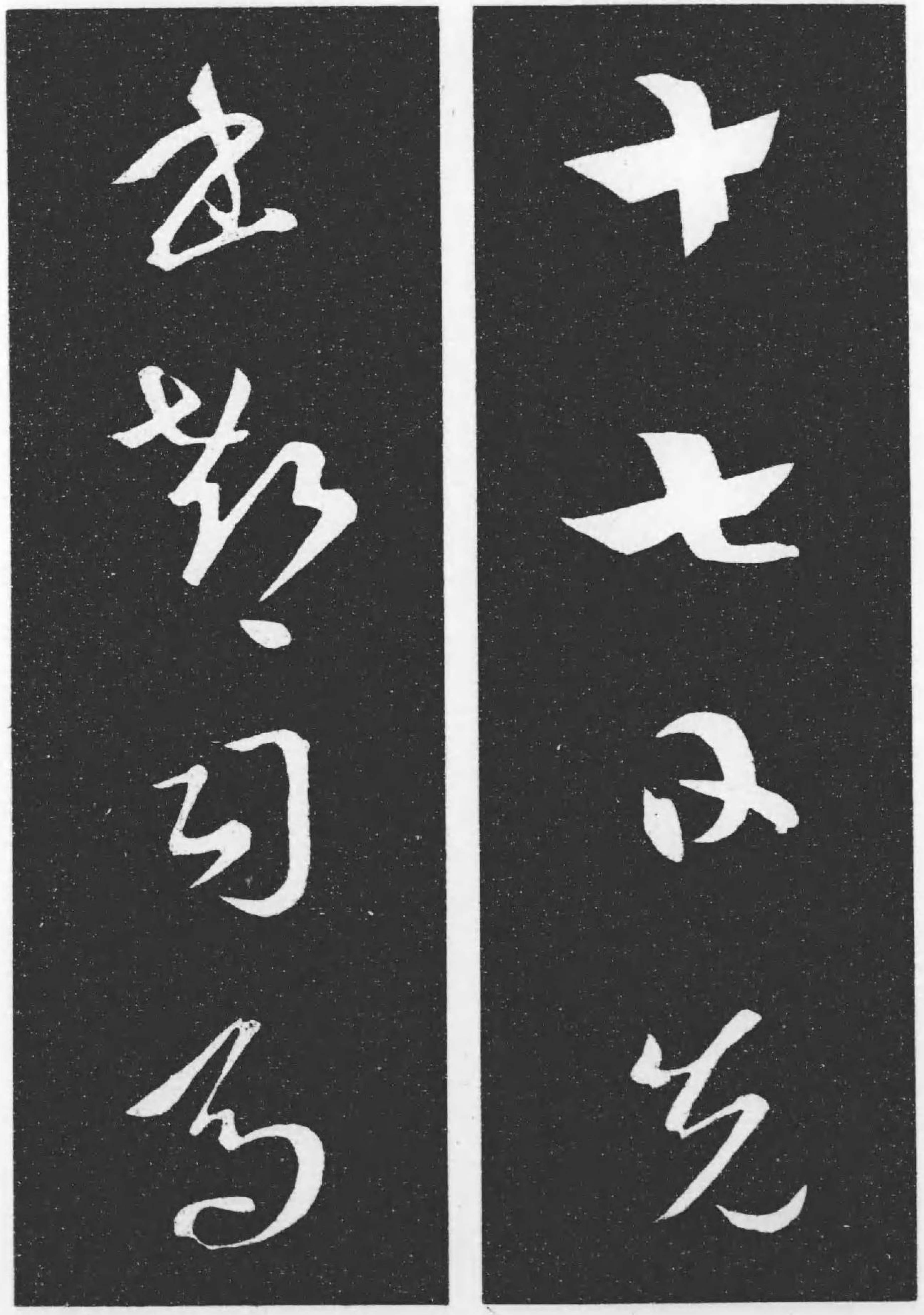
十七帖

中央書道協會

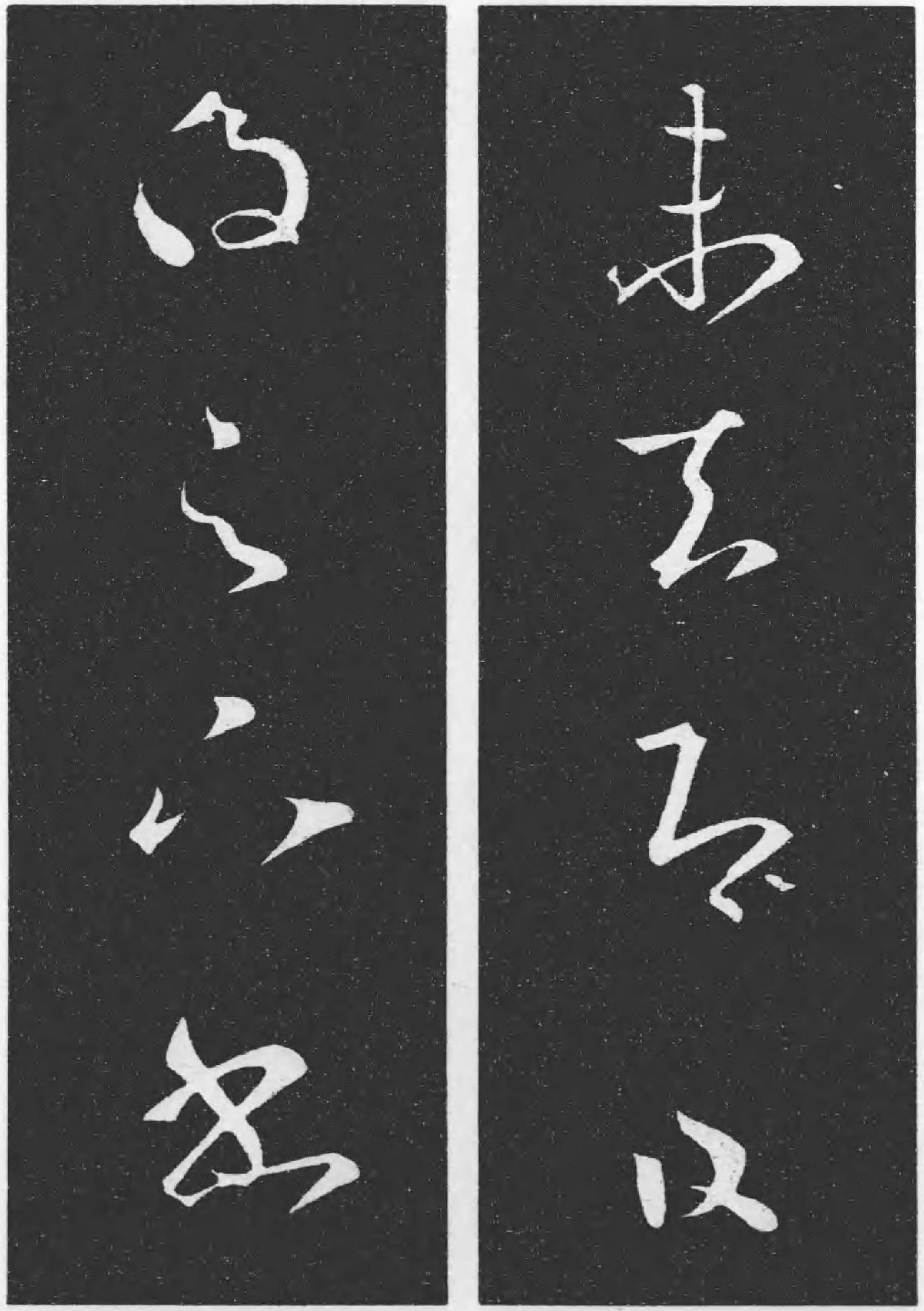
一、本書は聽氷閣本十七帖を寫眞で展大したものであります。これはこの帖が一番鋒芒が鮮明で初學の者にもよく判るからであります。

一、しかしこの聽氷閣本は筆法轉折の處が悉く截斷してゐて、中には不自然の様な所も有りますから、他の拓本から展大したものを卷末に附して比較研究の出來るやうにして置きました。

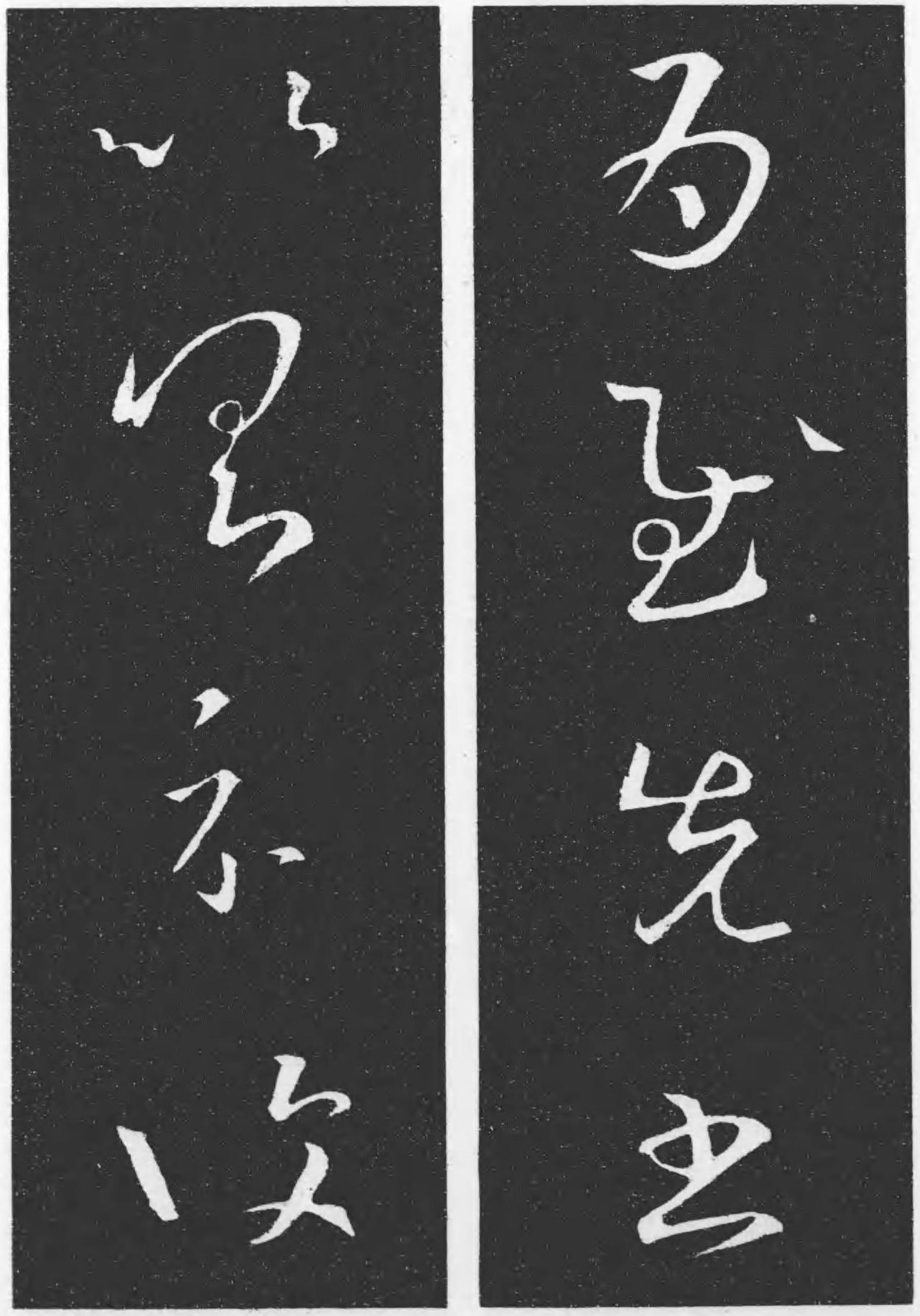
一、草書文字を展大すると文字と文字との連絡の点に於いて、やゝ無理が出來ますが、かゝる所は原本によつて研究あらんことを切望いたします。なほ展大すると点劃がすべてやゝ細目に見えますからこの点も注意あらんことをお願致します。たゞこの二点に留意して此の帖によつて研究せらるれば原本によるよりは非常に樂で、しかも効果が甚大です。また古來眞によく臨書の出來る書家は極めて稀ですから、つまらぬ臨書本によるよりか本帖による方が安全且つ確實です。



十七日先書。郗司馬

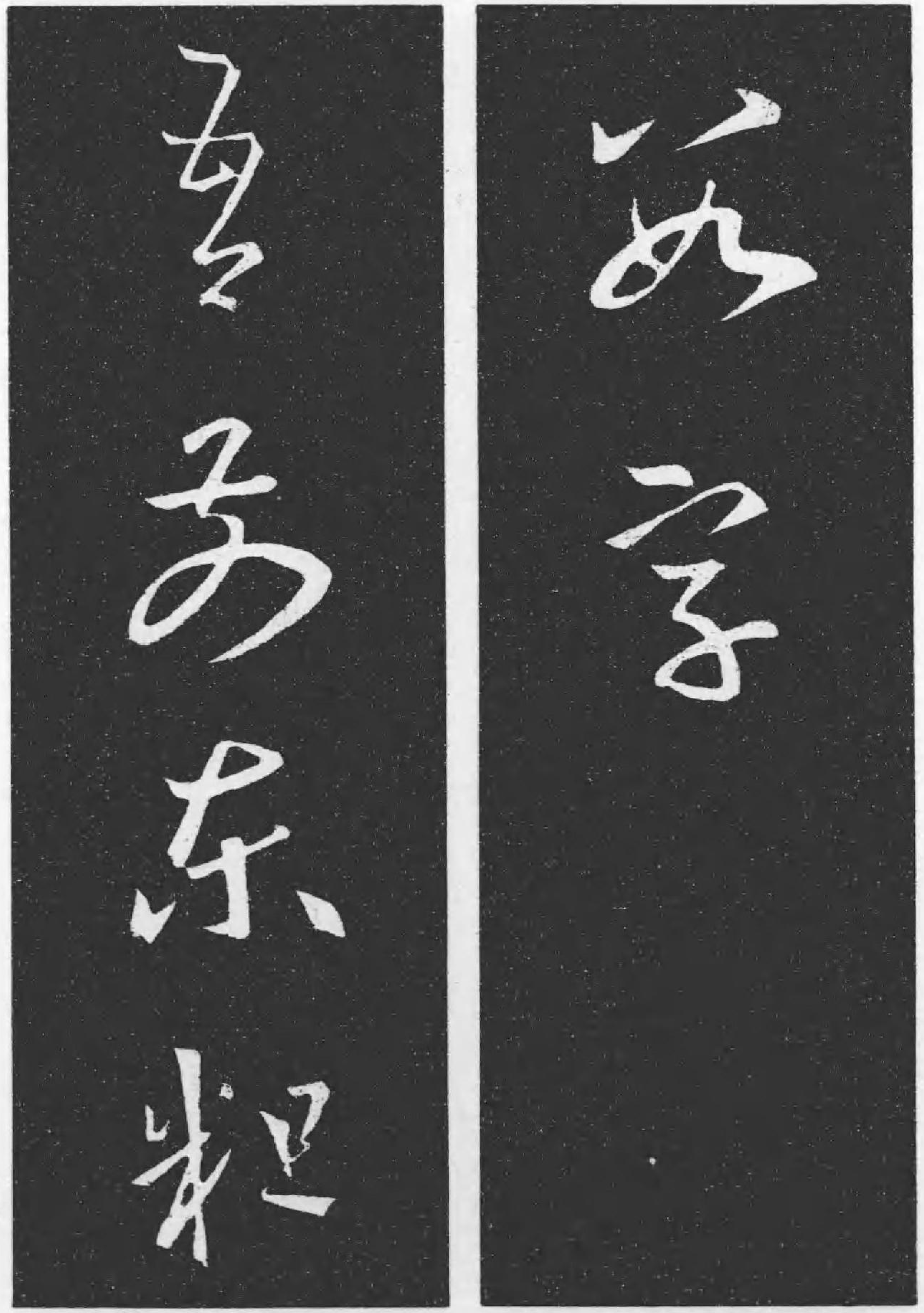


未去。卽日得足下書。

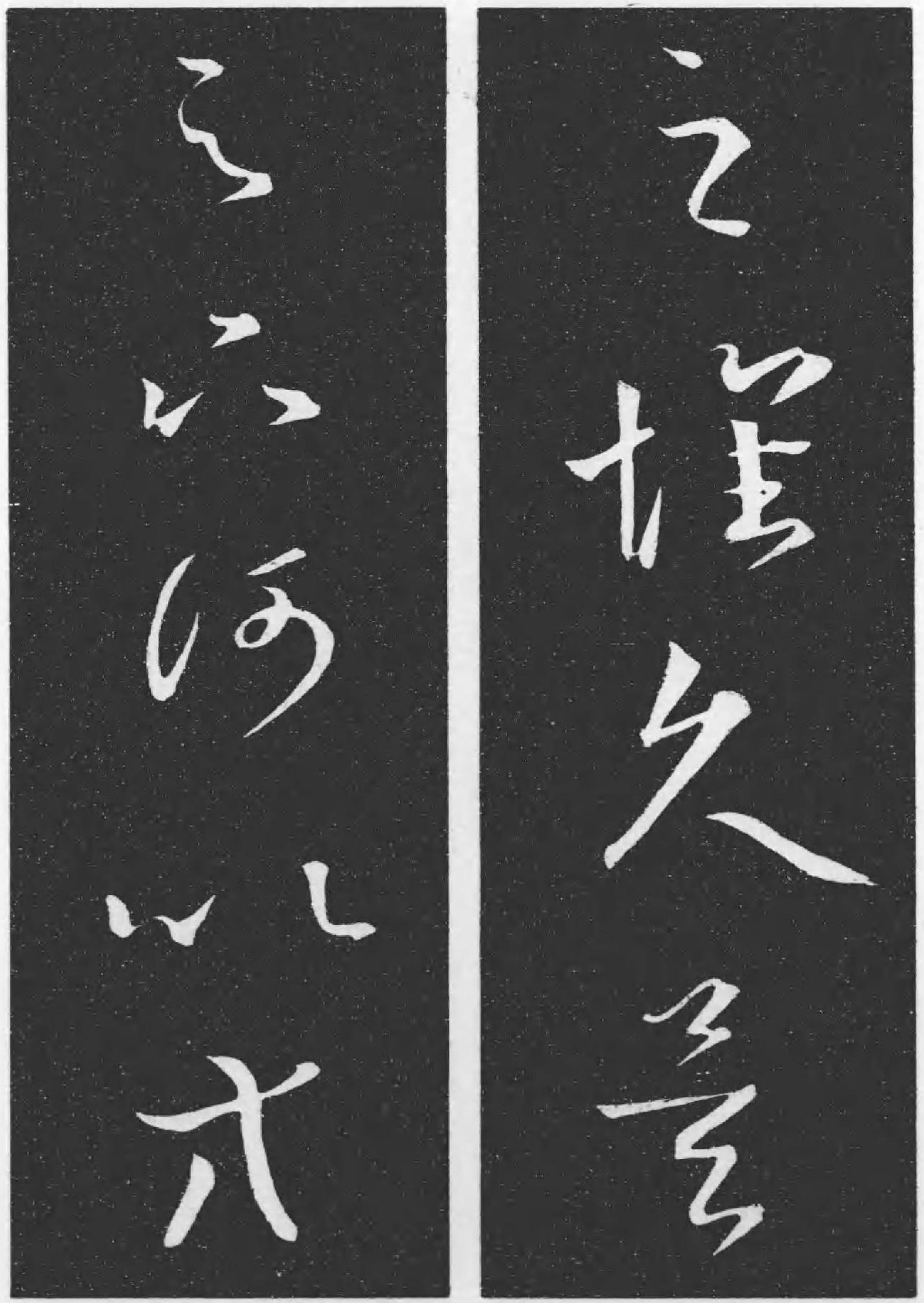


爲慰。先書以具示。復

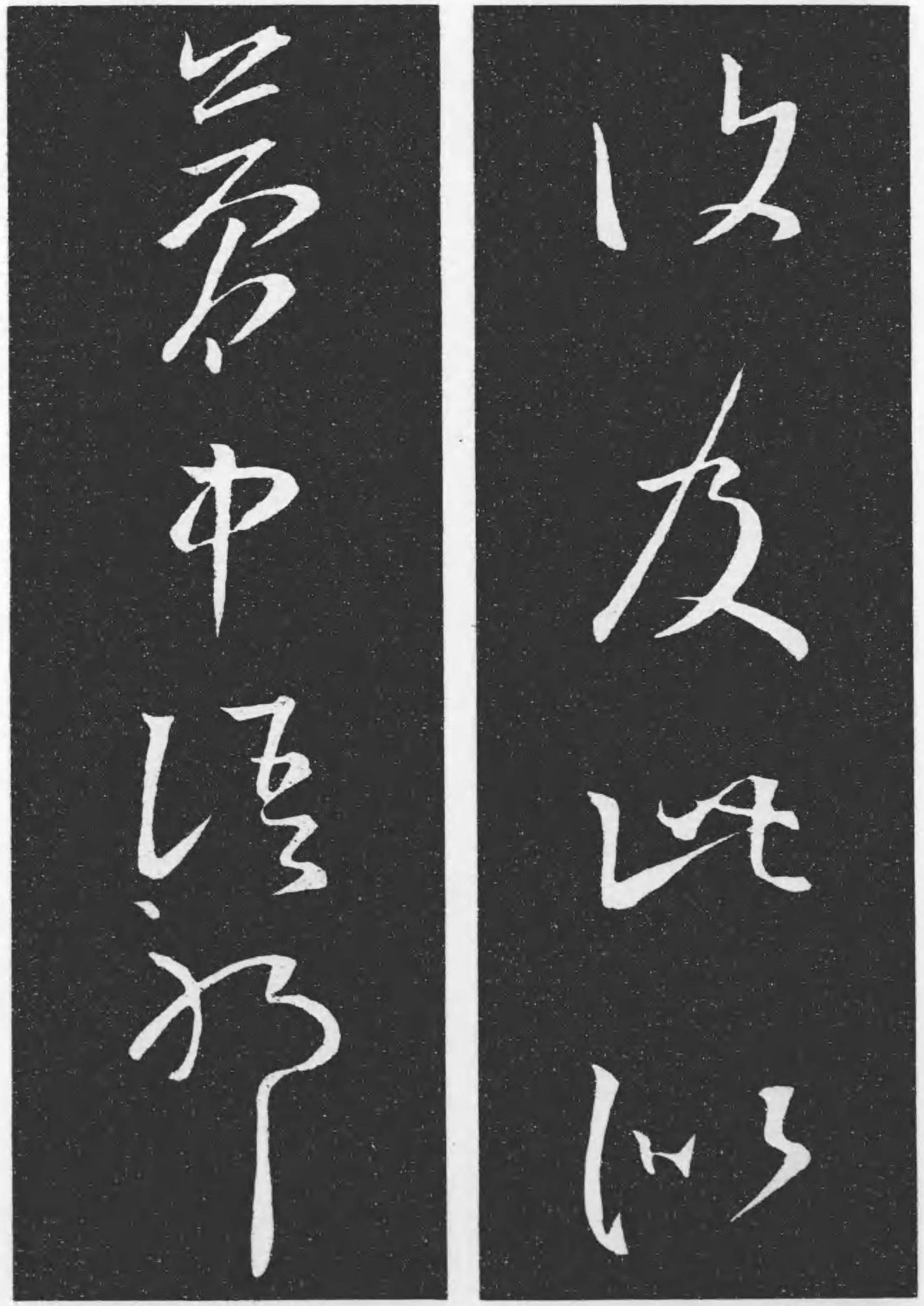
數字。吾前東。粗



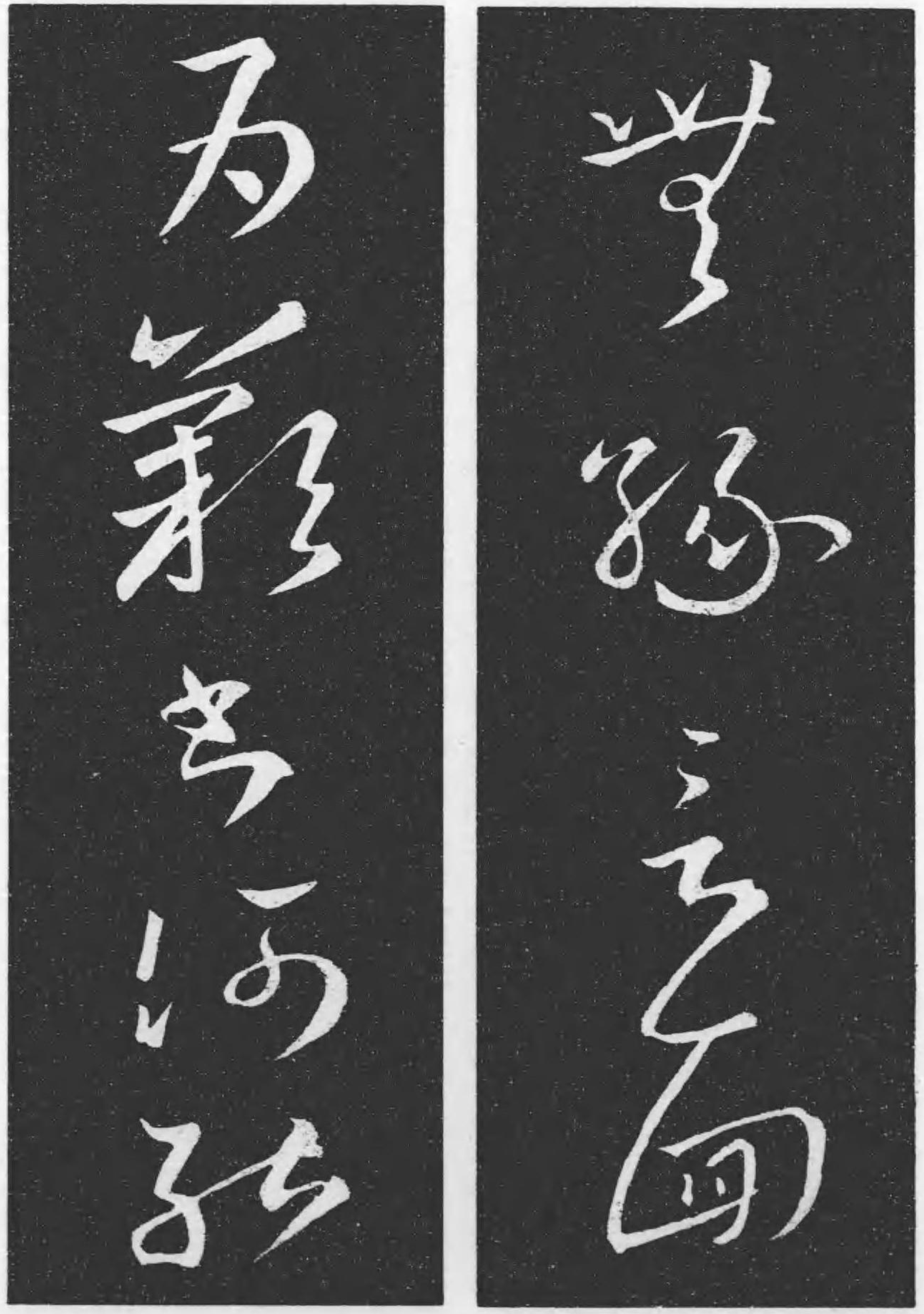
足作佳觀。吾爲逸民



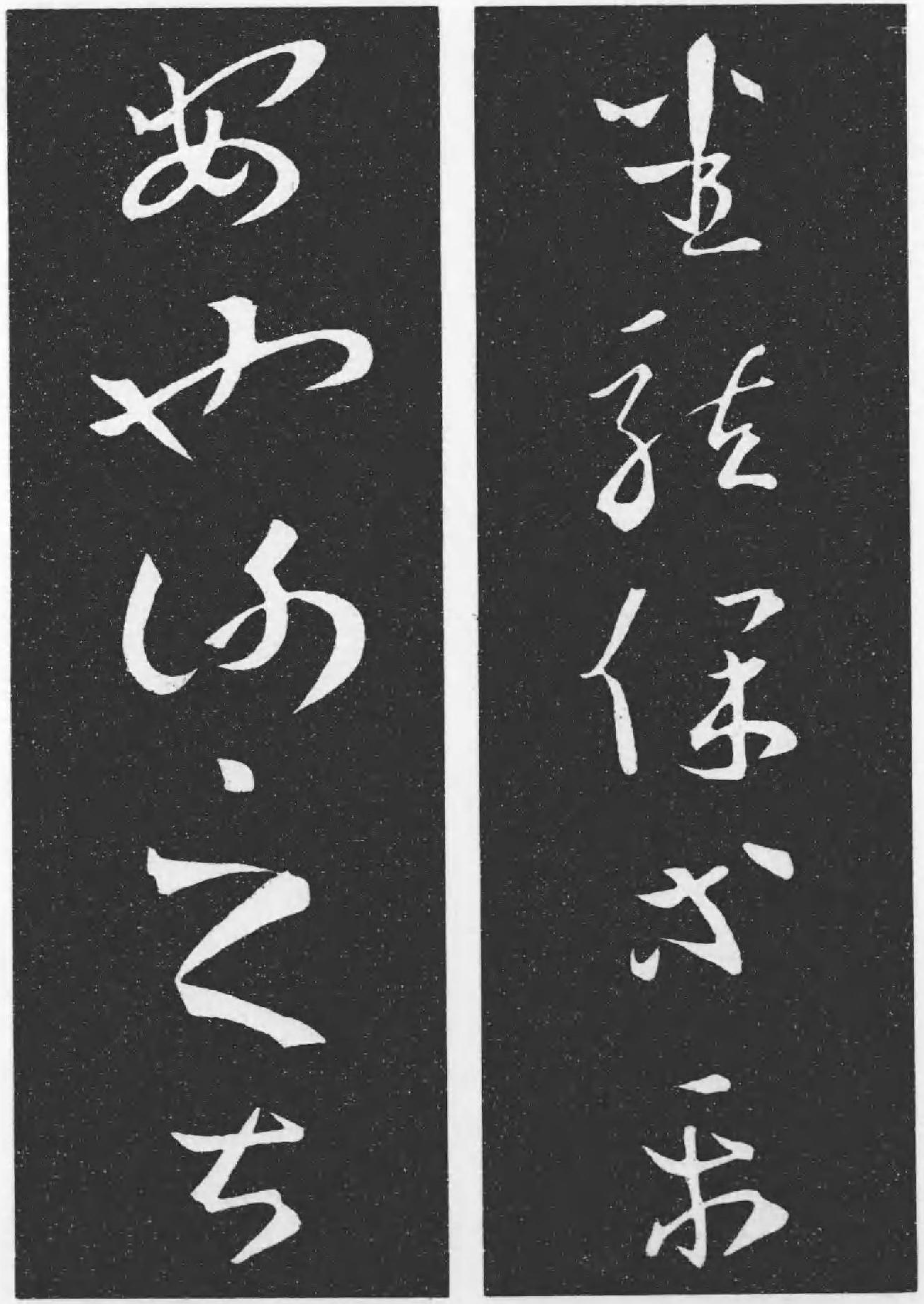
懷久矣 足下何以



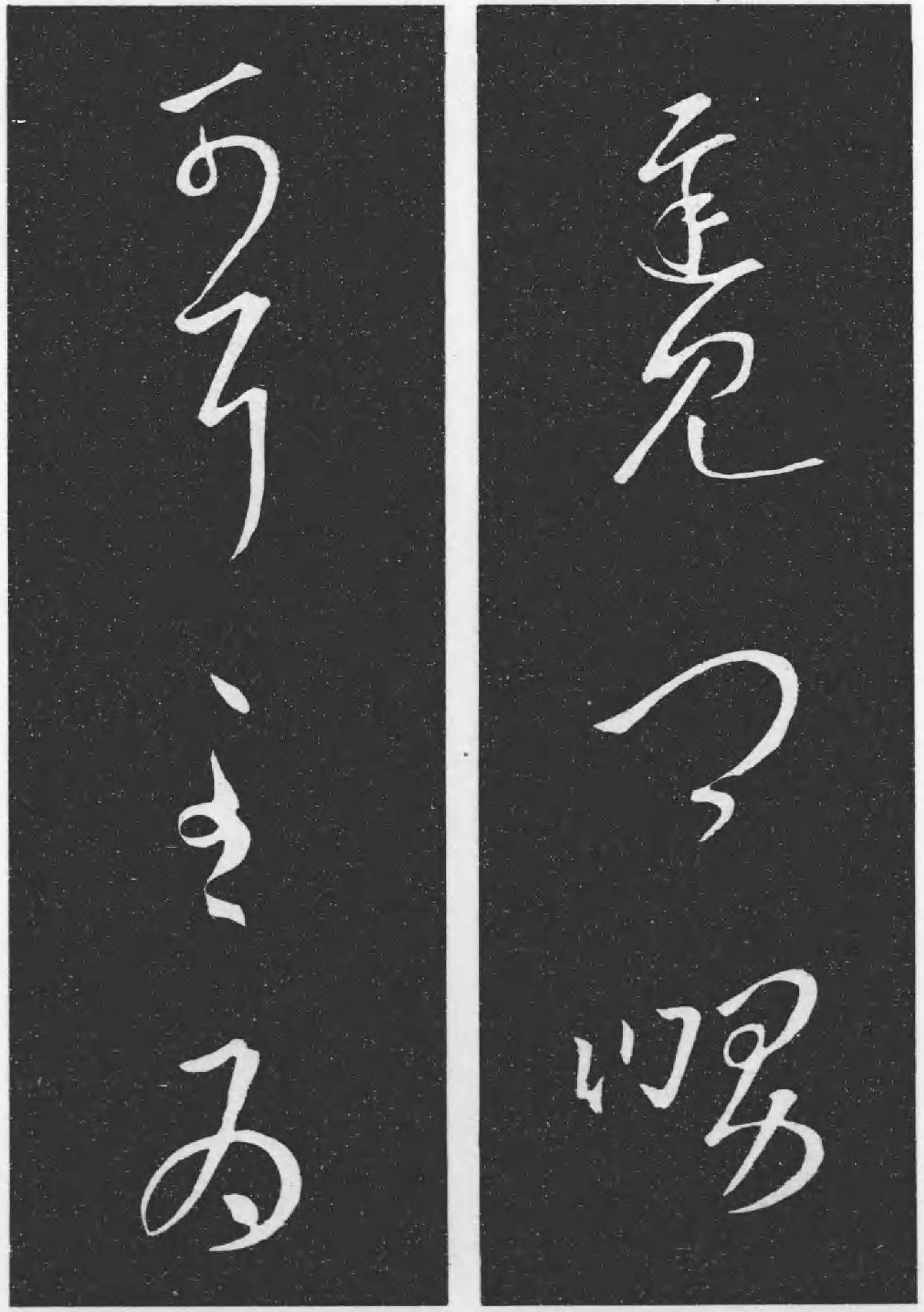
復乃此。似夢中語耶



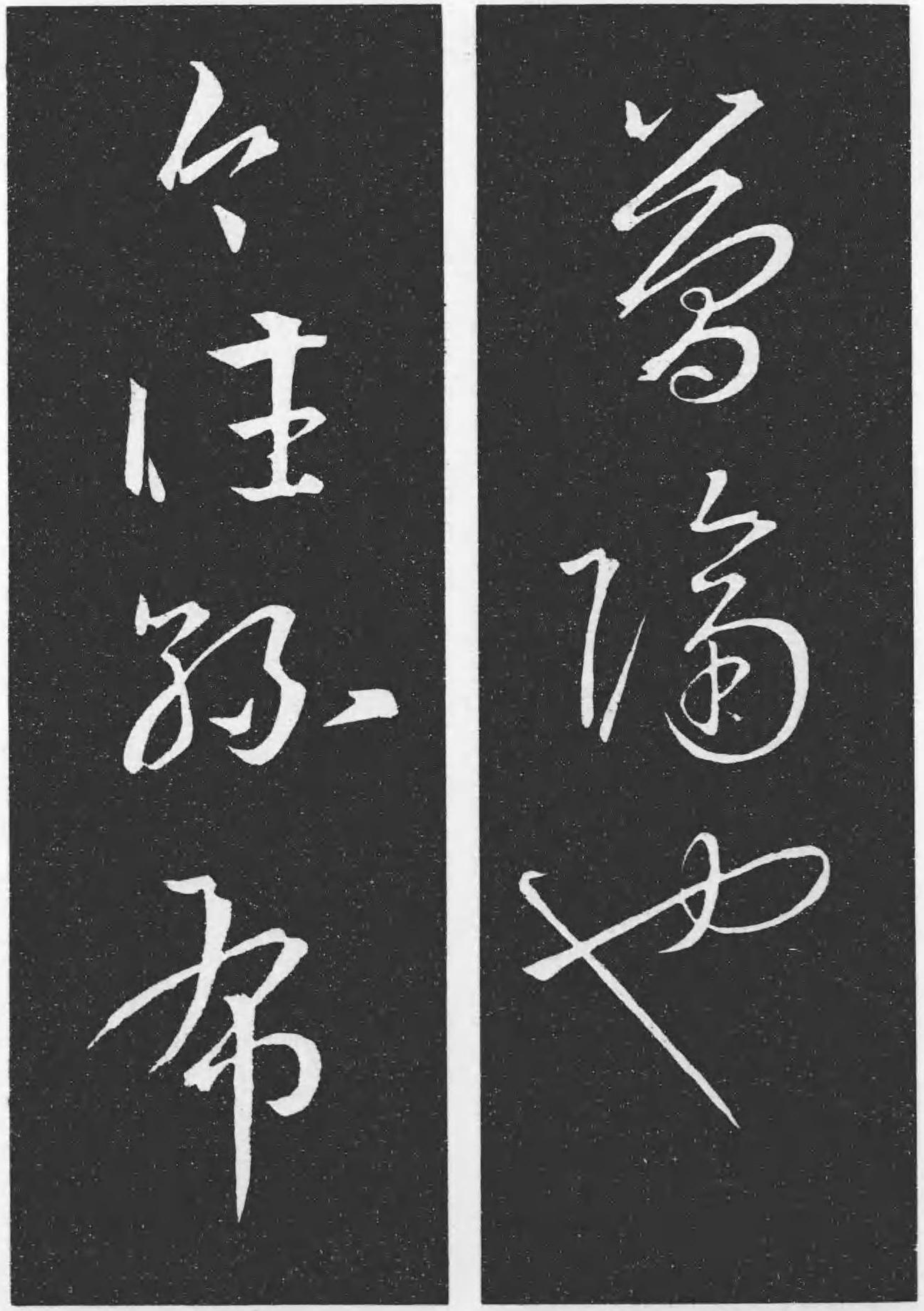
無緣言面。爲歎。書何能



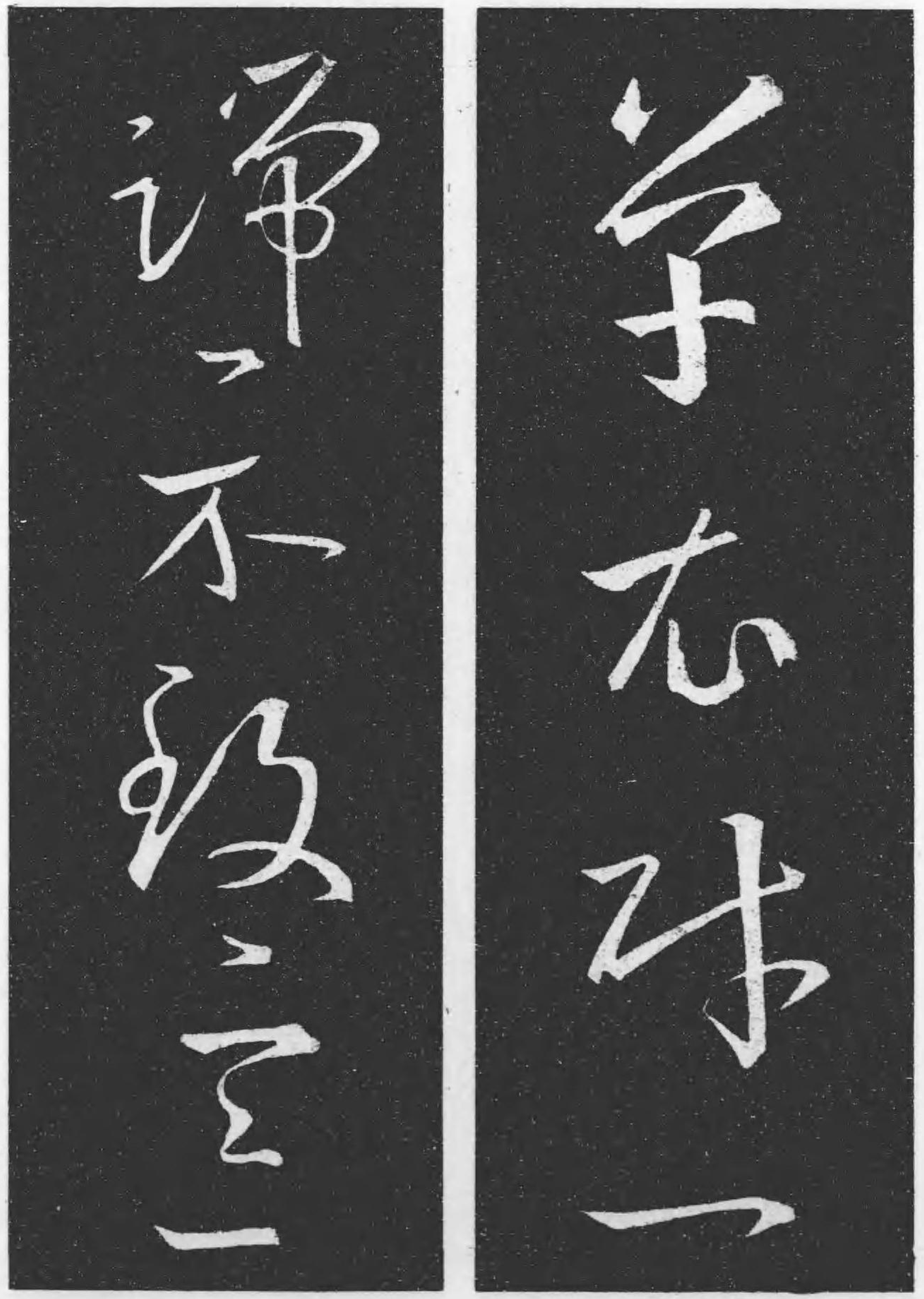
悉。龍保等平安也。謝之。甚



遲見卿。舅可耳。至爲

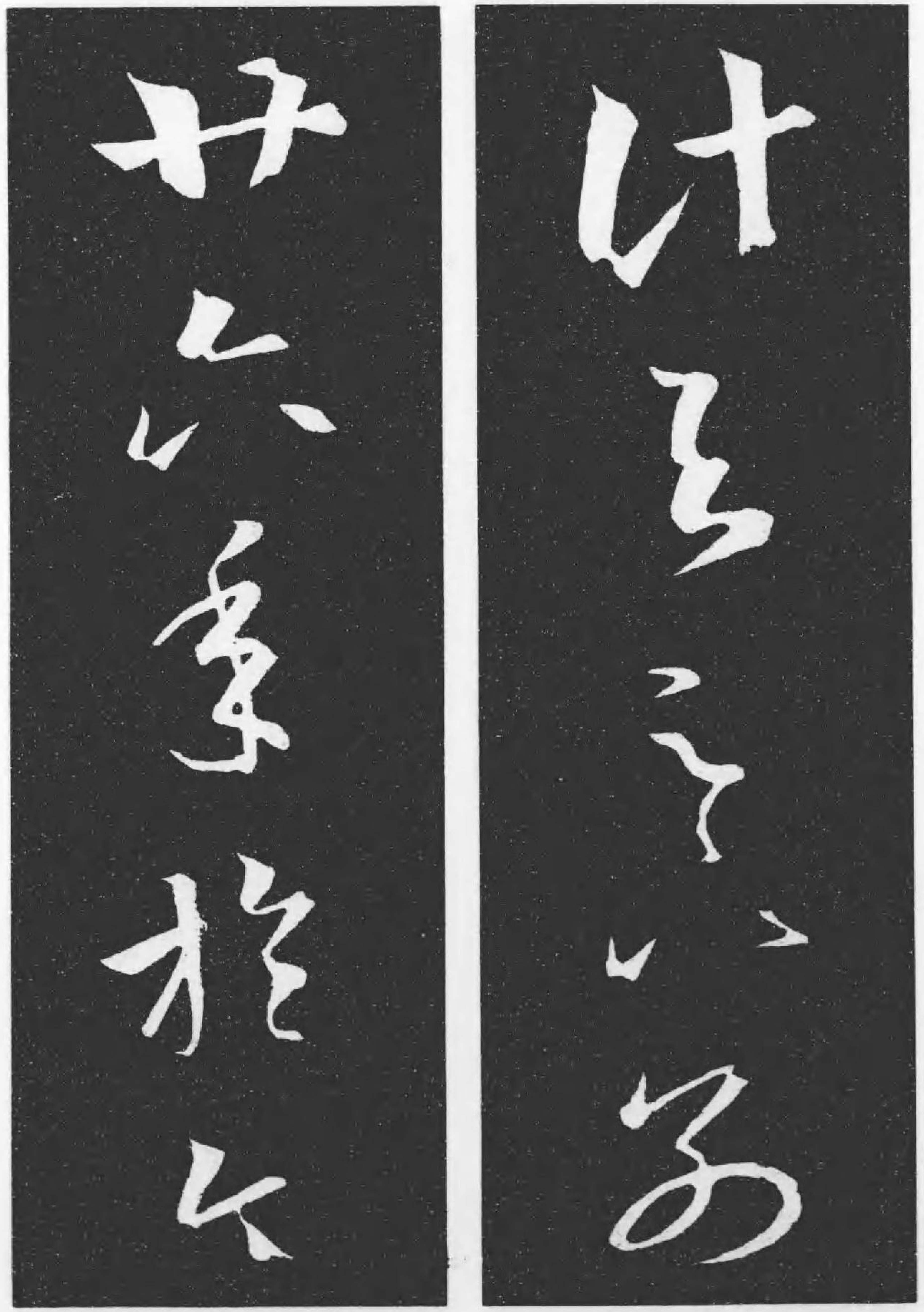


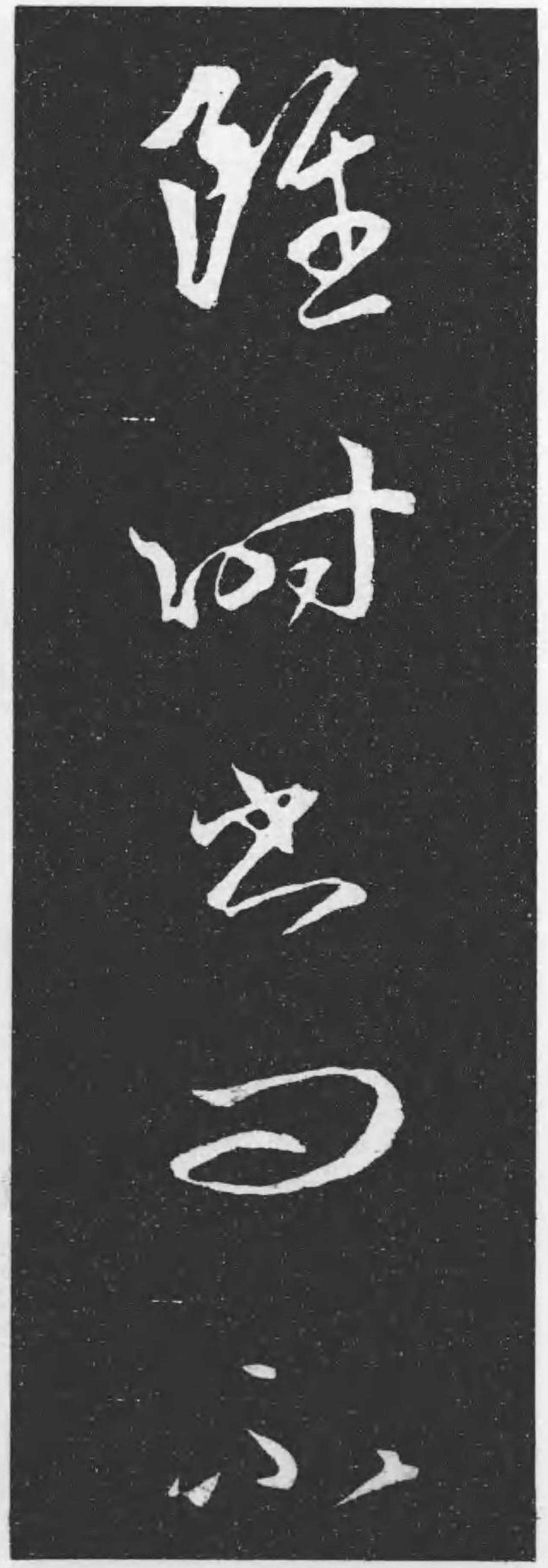
簡隔也。今往絲布



單衣財一端。示致意

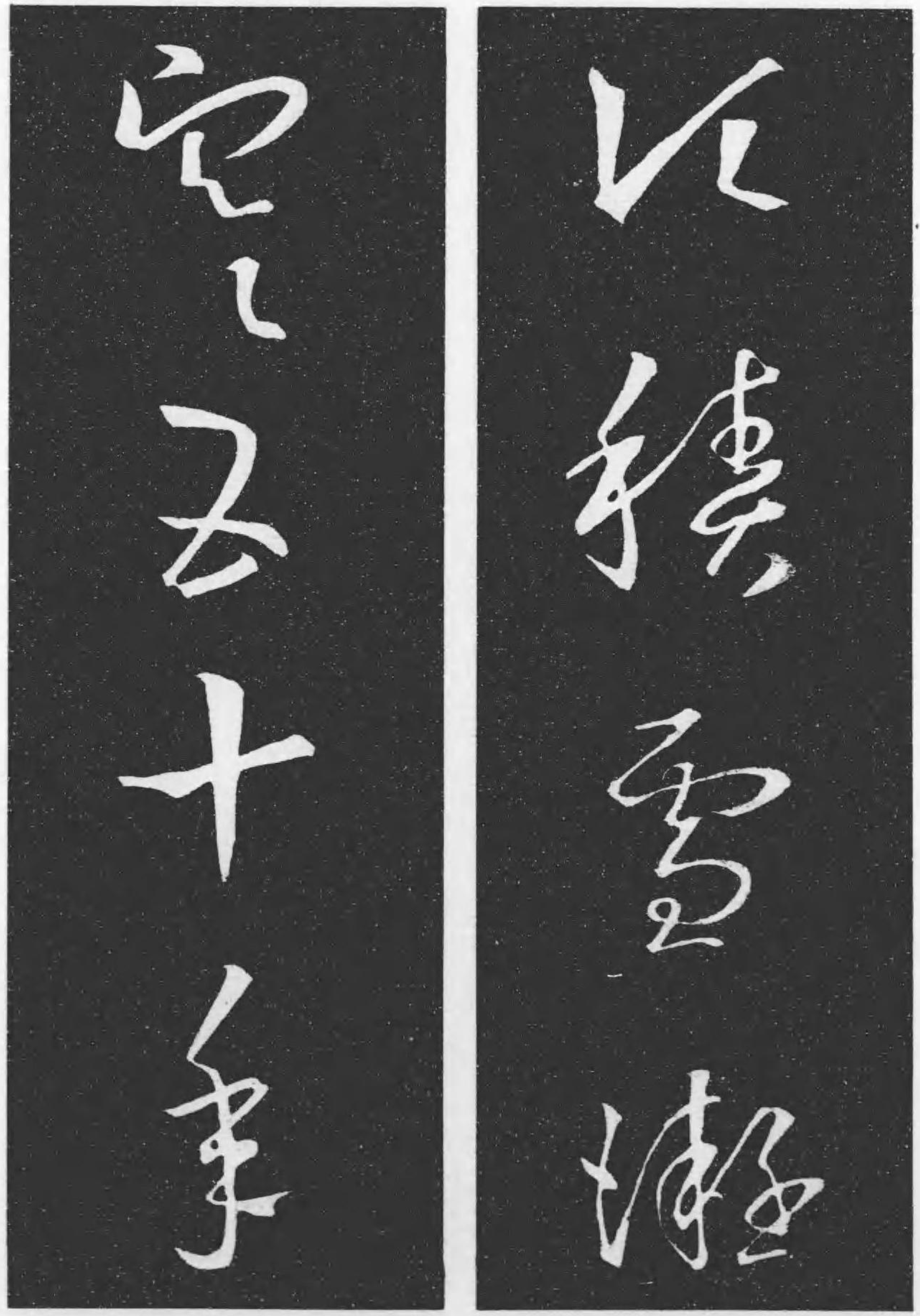
計與足下別。廿六年於今





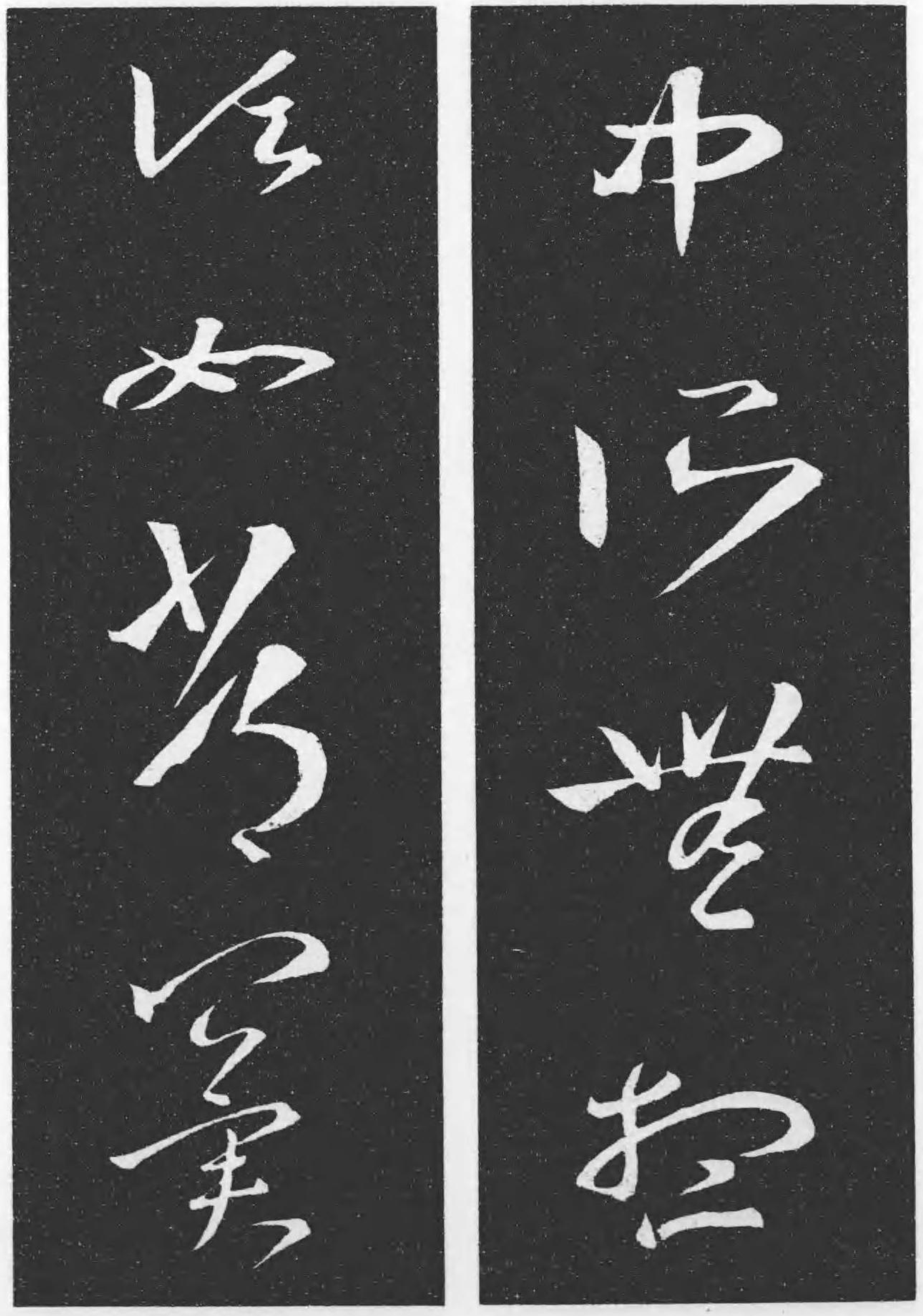
雖時書問不解洞懷。省足

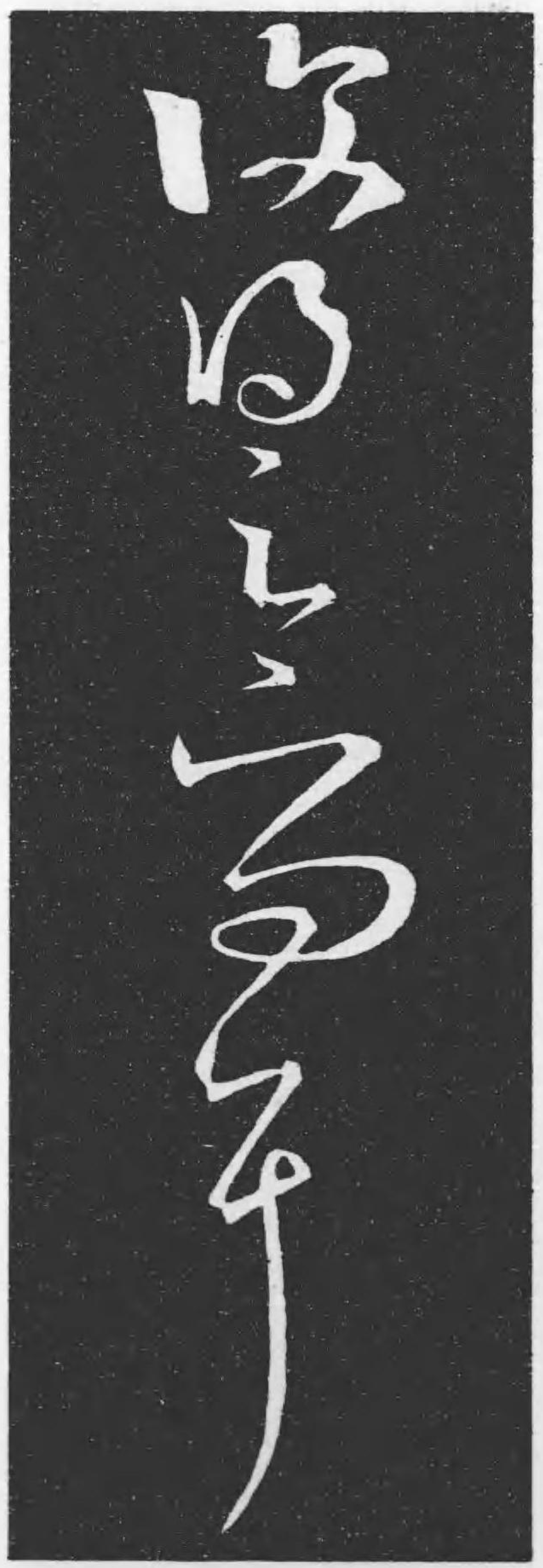
下先後二書。但增歎慨。



頃積雪凝寒。五十年

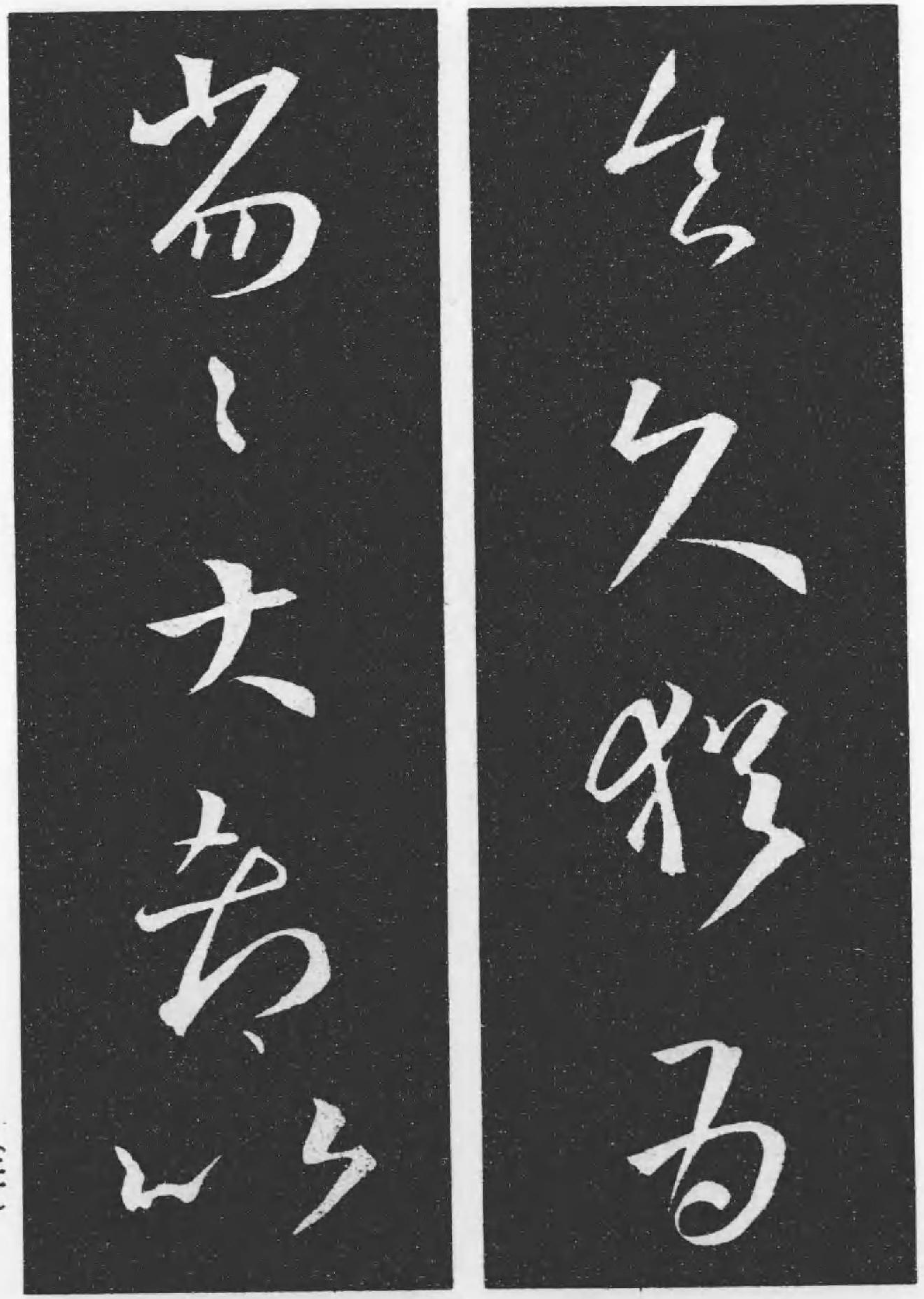
中所無。想。頃如常。冀



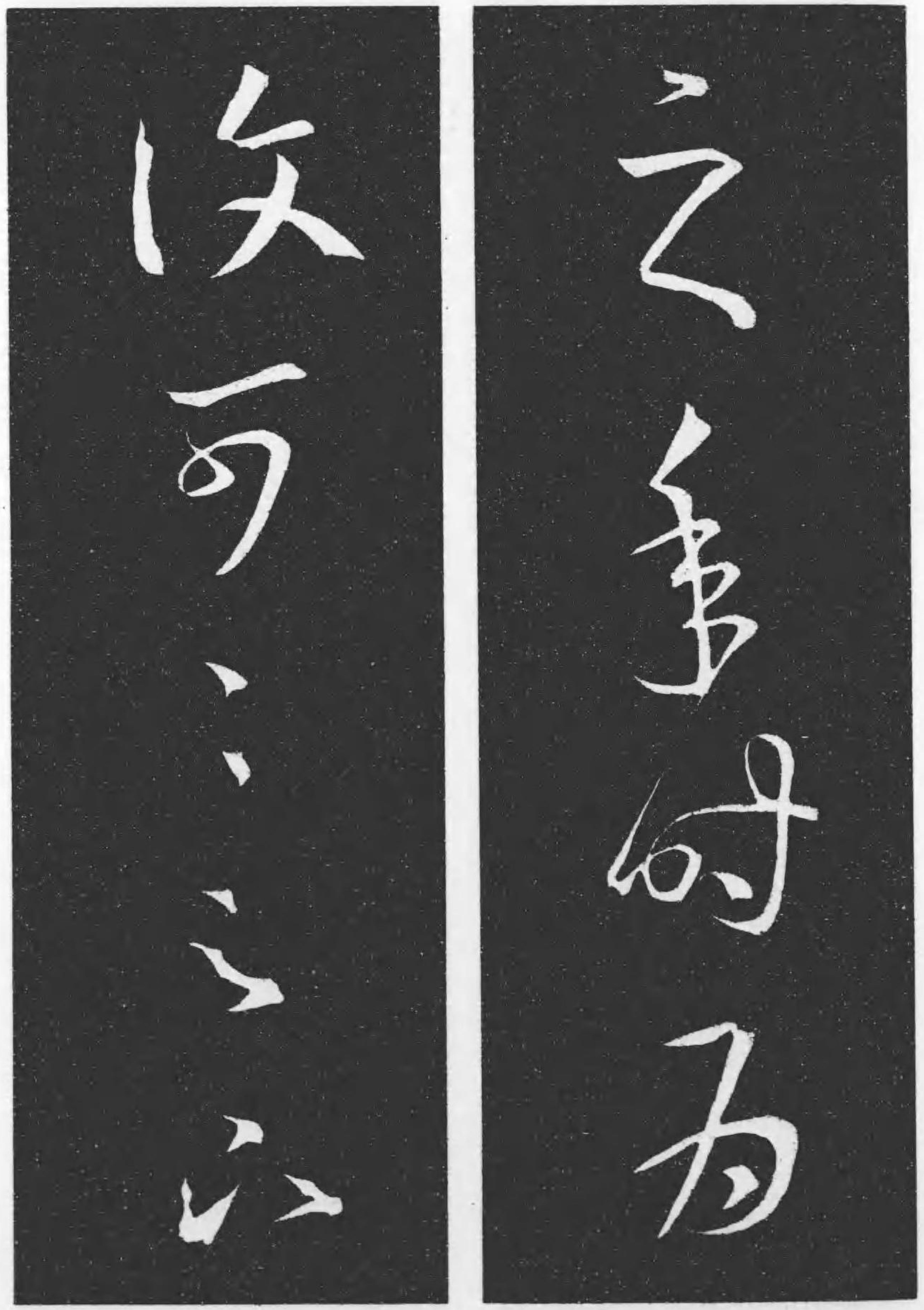


來夏秋間。或復得足下問耳

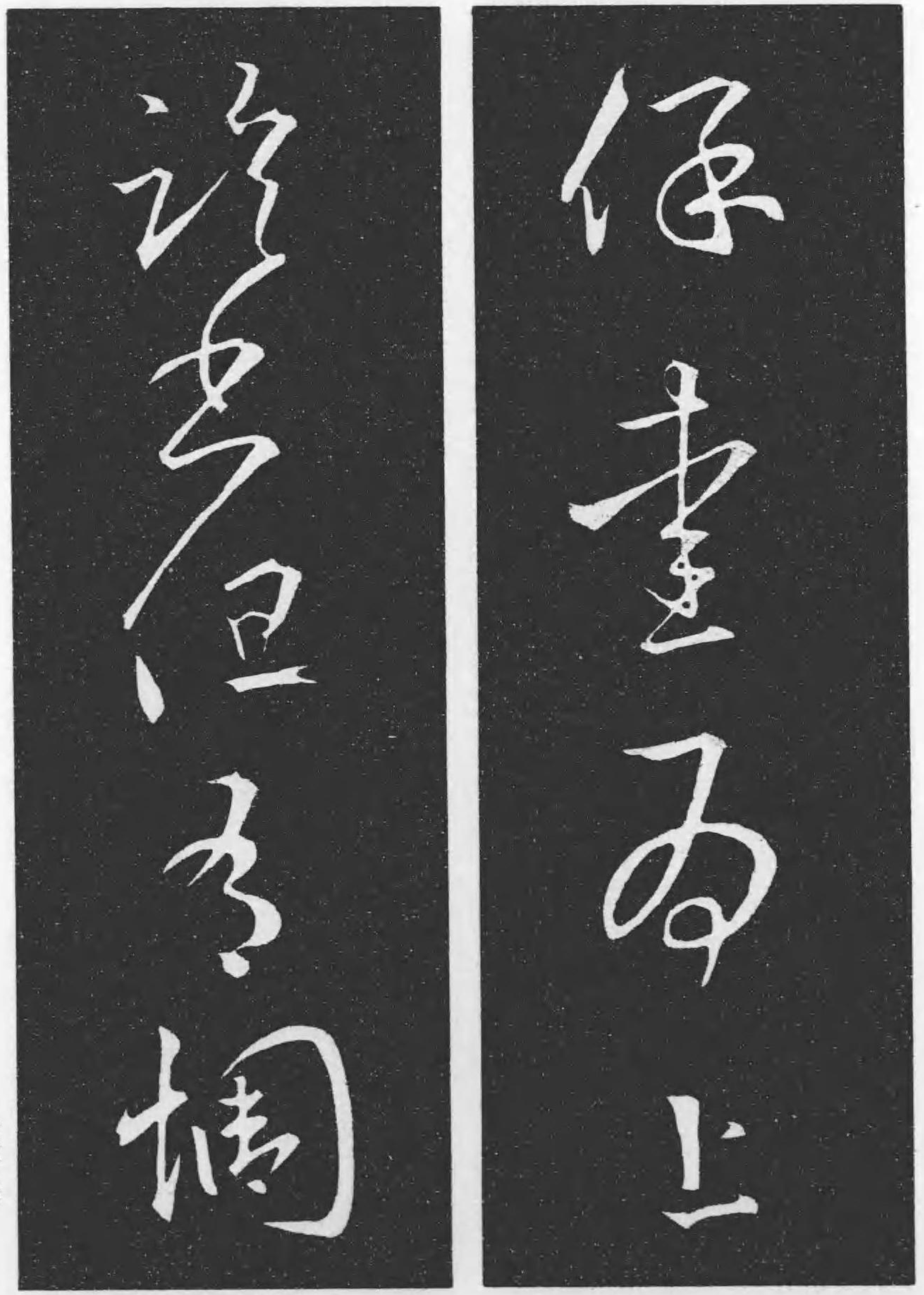
比者悠々。如何可言。吾服



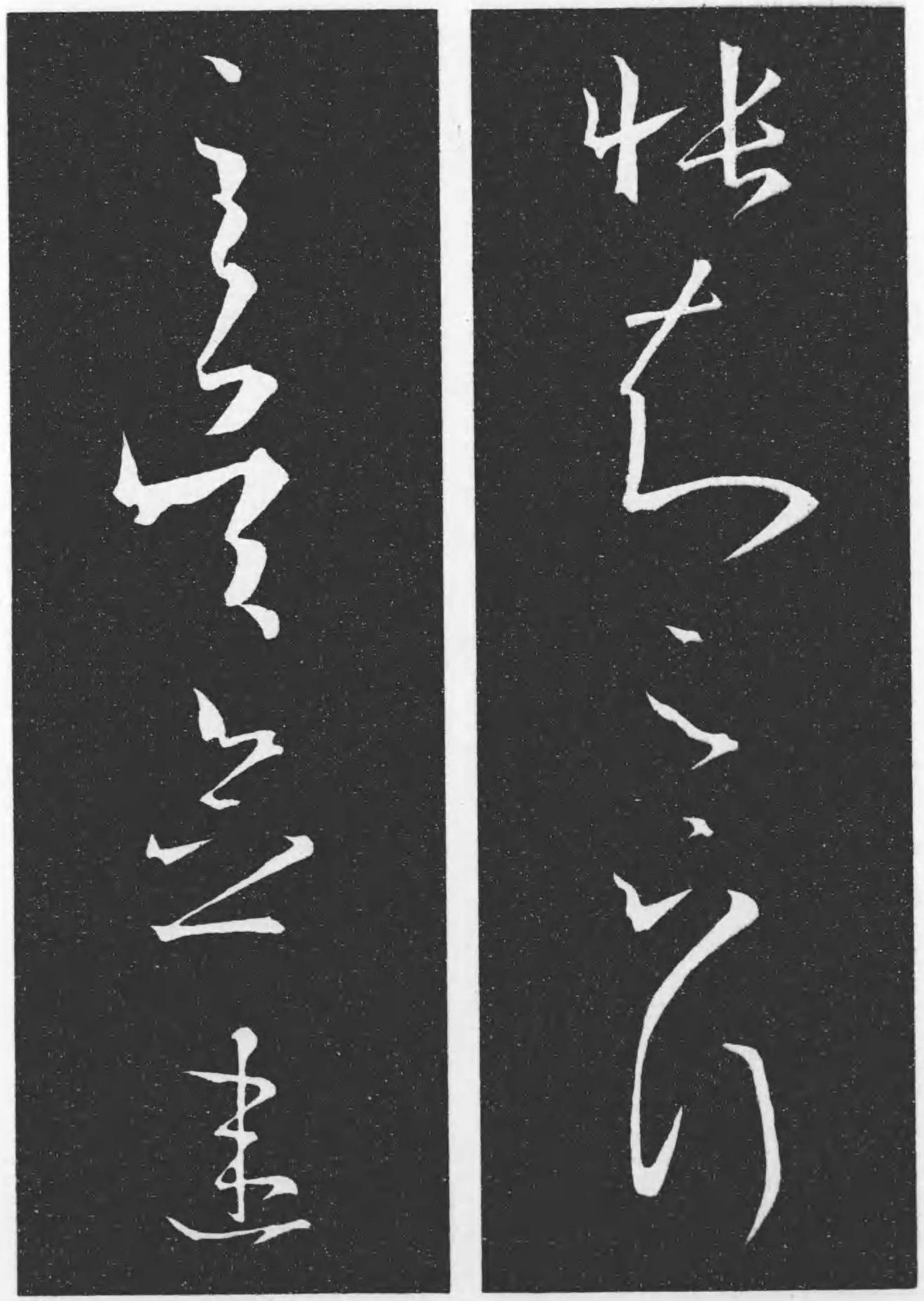
食久。猶爲劣々大都比



之年時。爲復可々。足下



保愛爲上。臨書但有惆

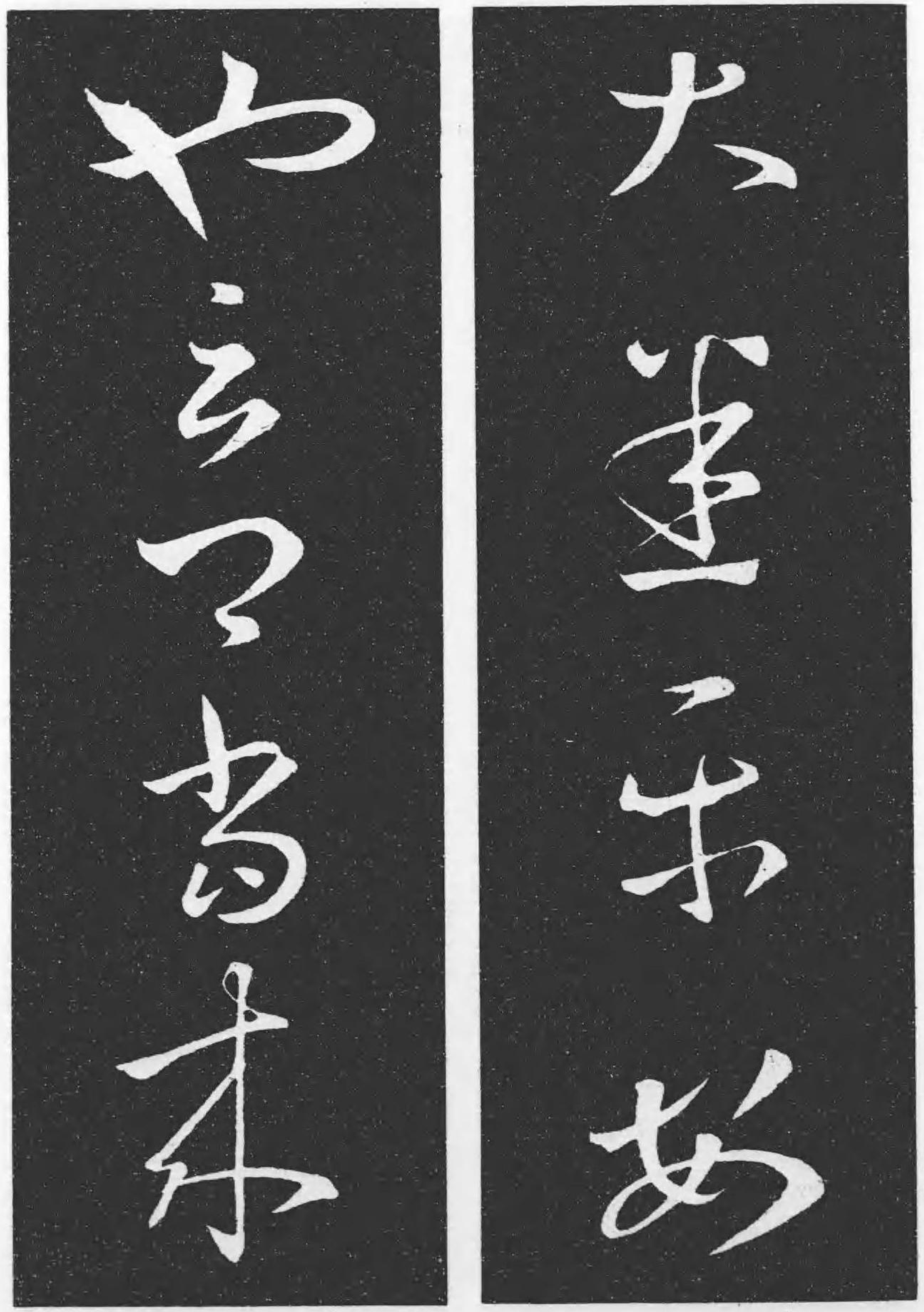


悵。知足下行至吳會。違

離不可居。叔當西耶。

遲知問。瞻近無緣

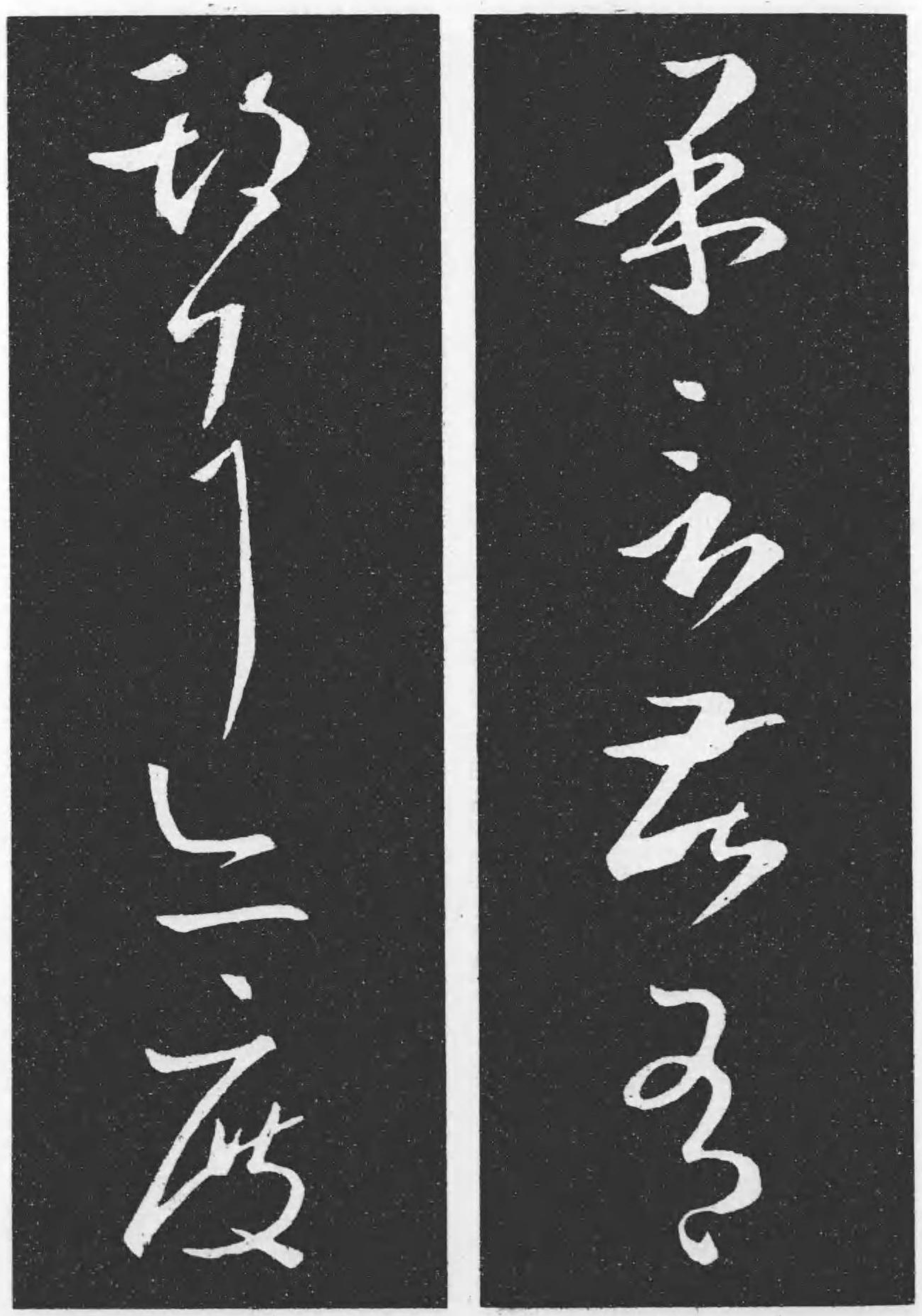
省告。但有悲歎。足下小



大悉平安也。云卿當來

居此。喜遲不可言。想必

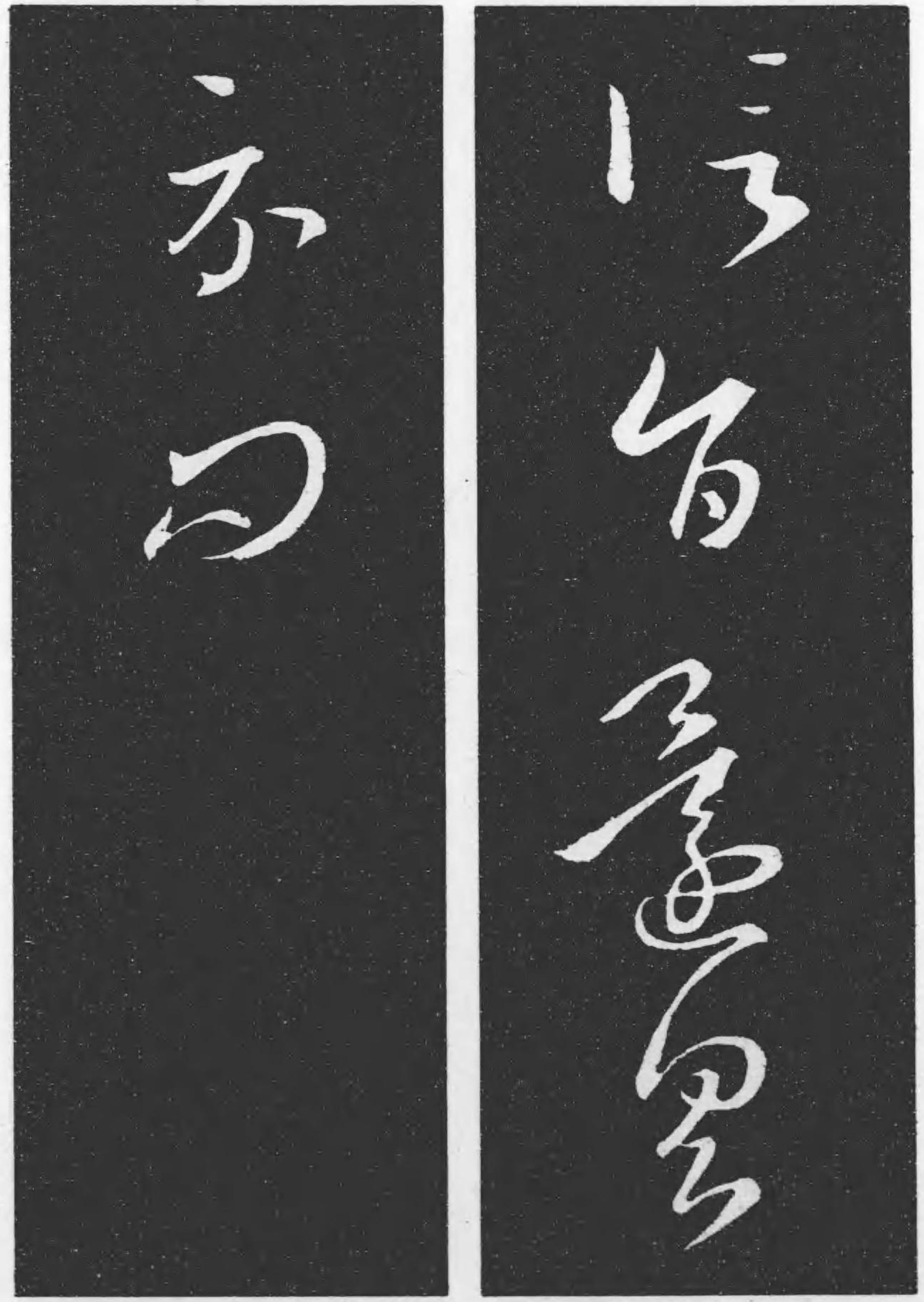
果言。告有期耳。亦度



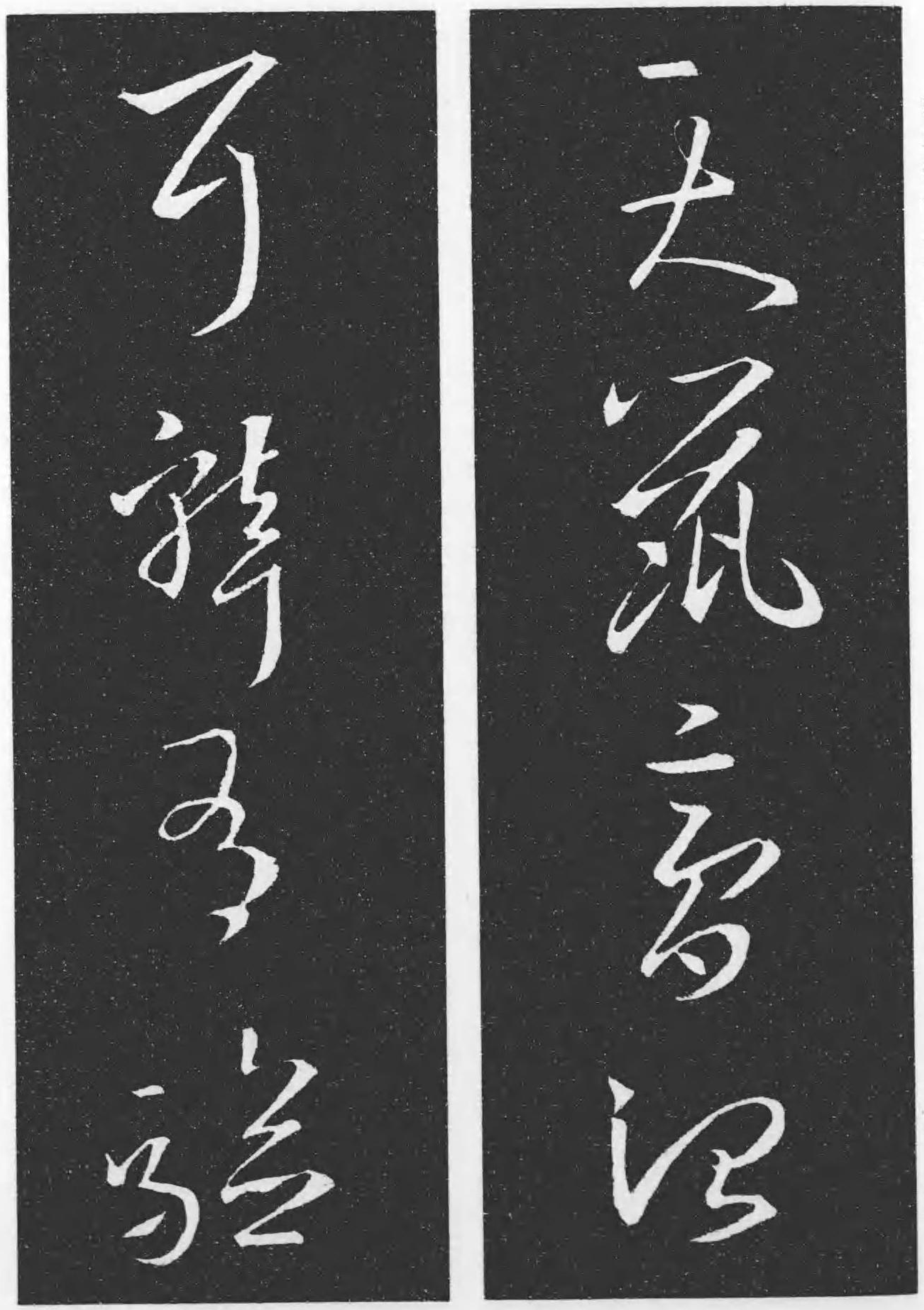
卿當不居京。此旣避。又節

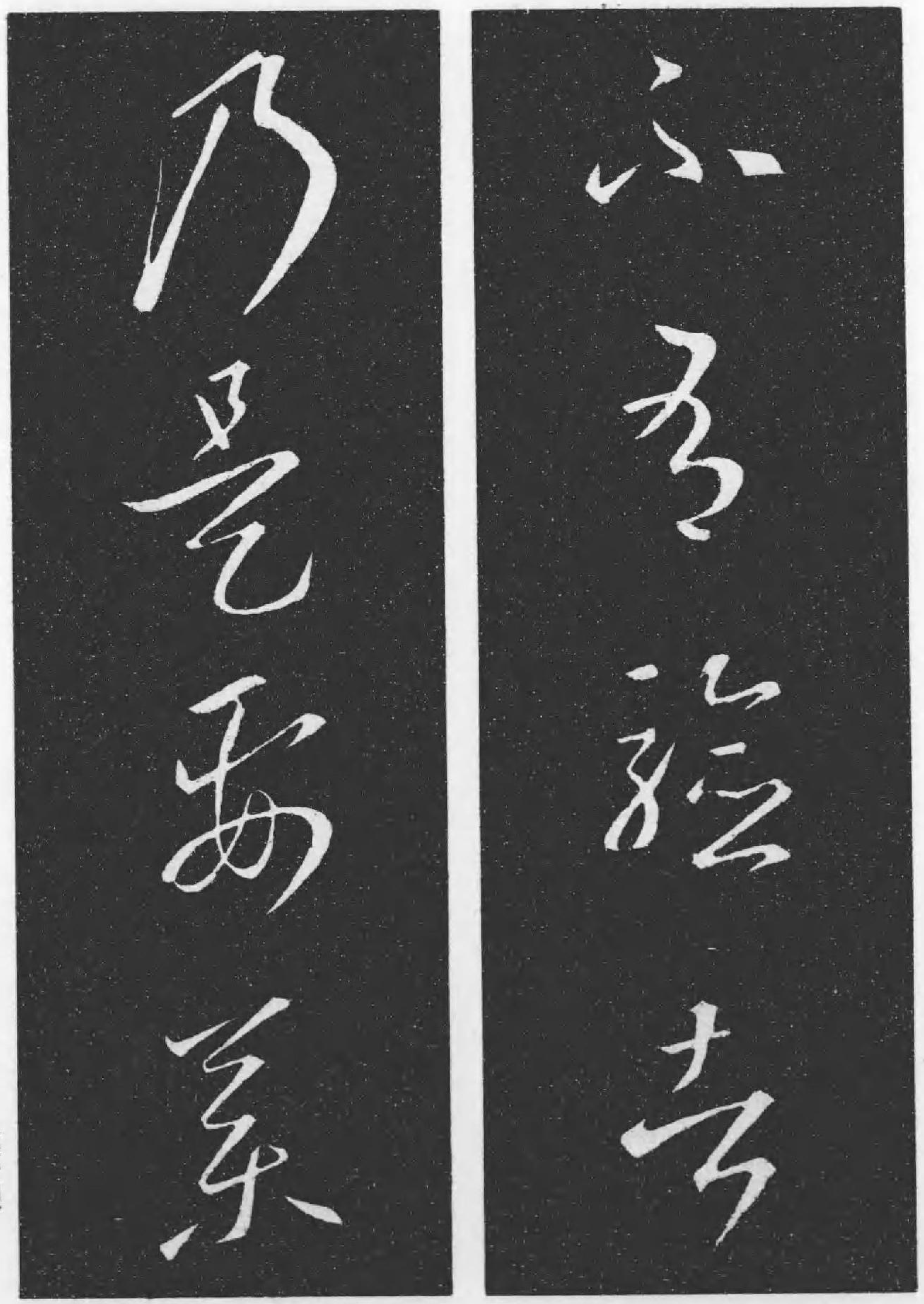
氣佳。是以欣卿來也。此

信旨還。具示問

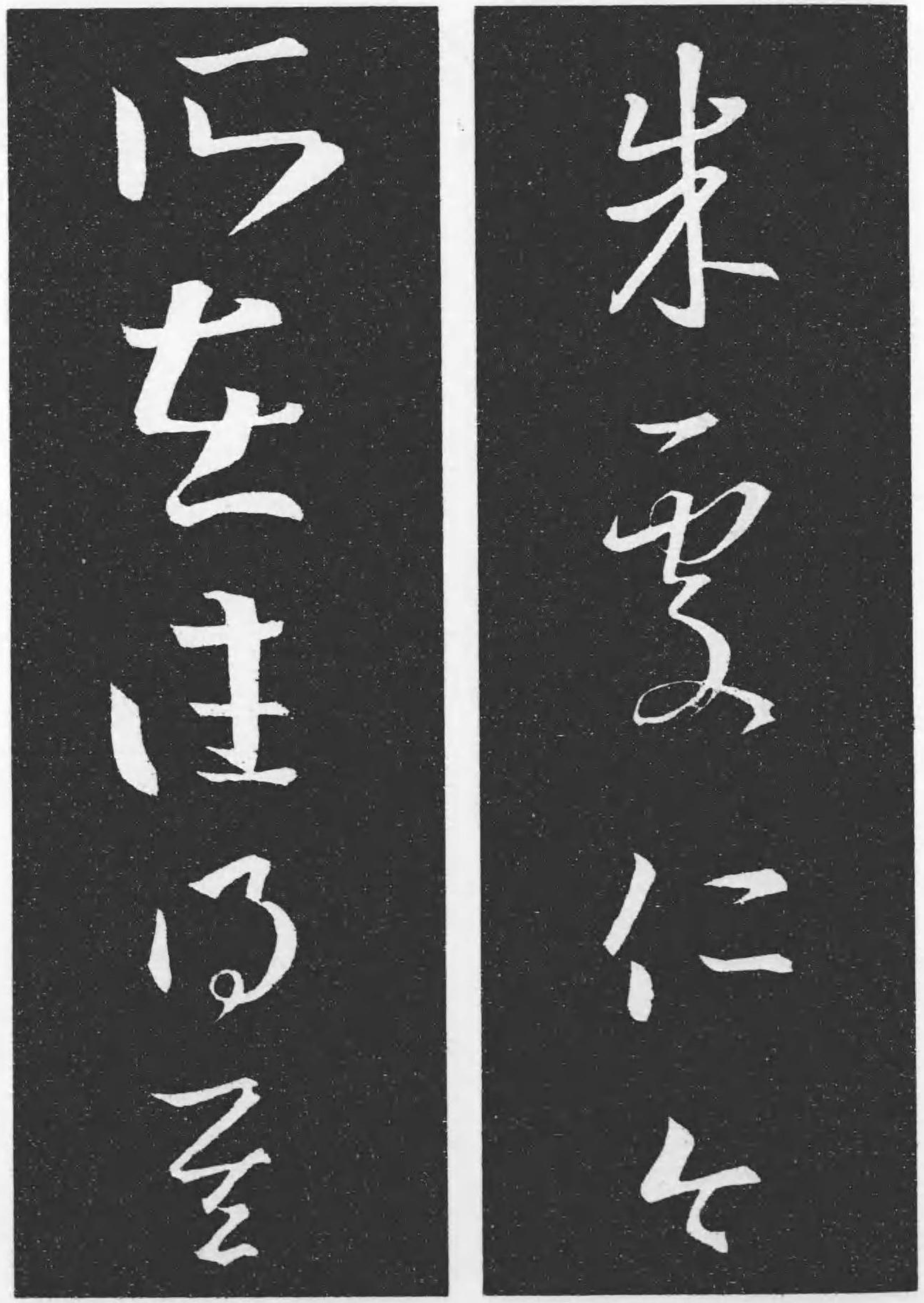


天鼠膏治耳聾。有驗

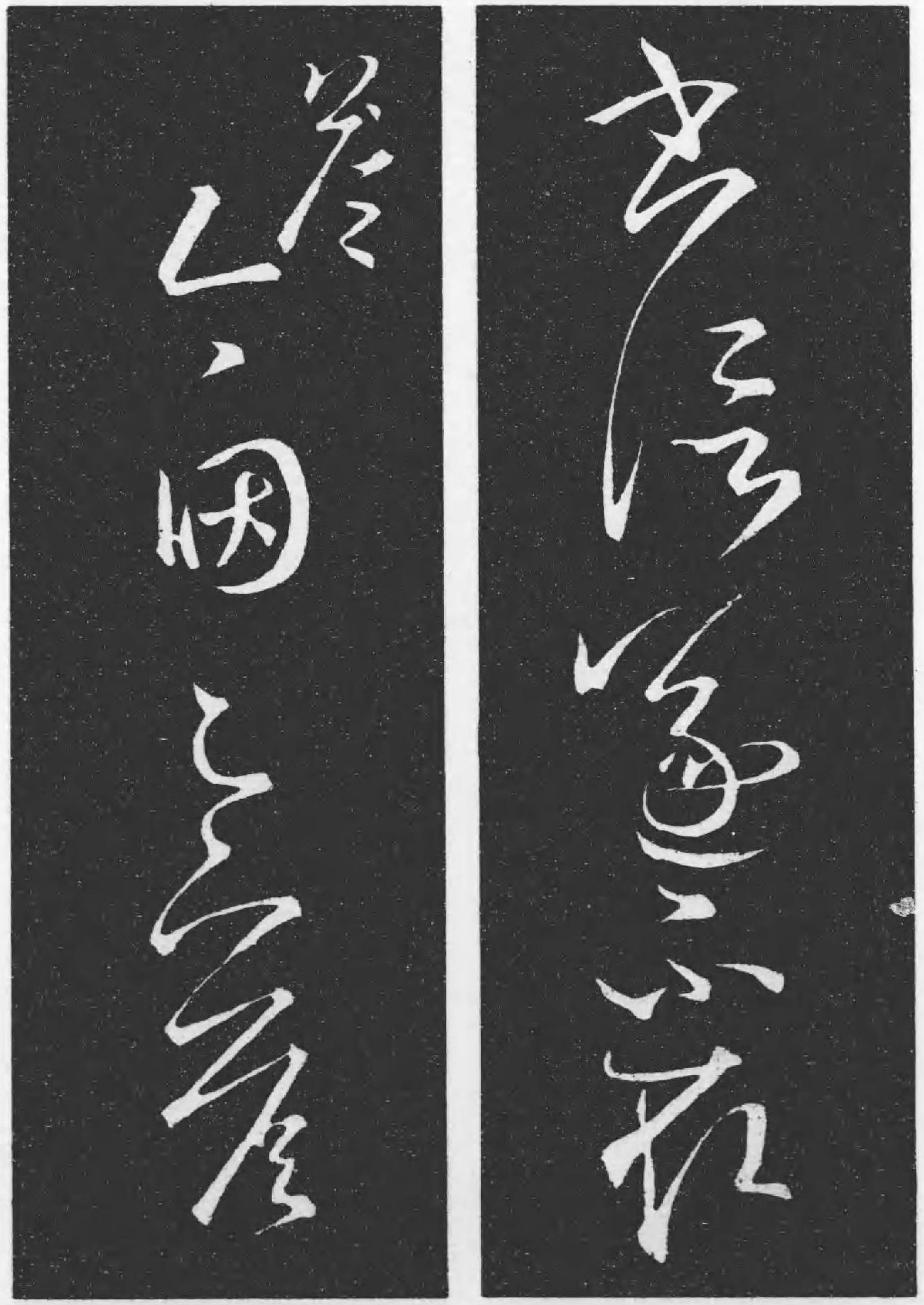




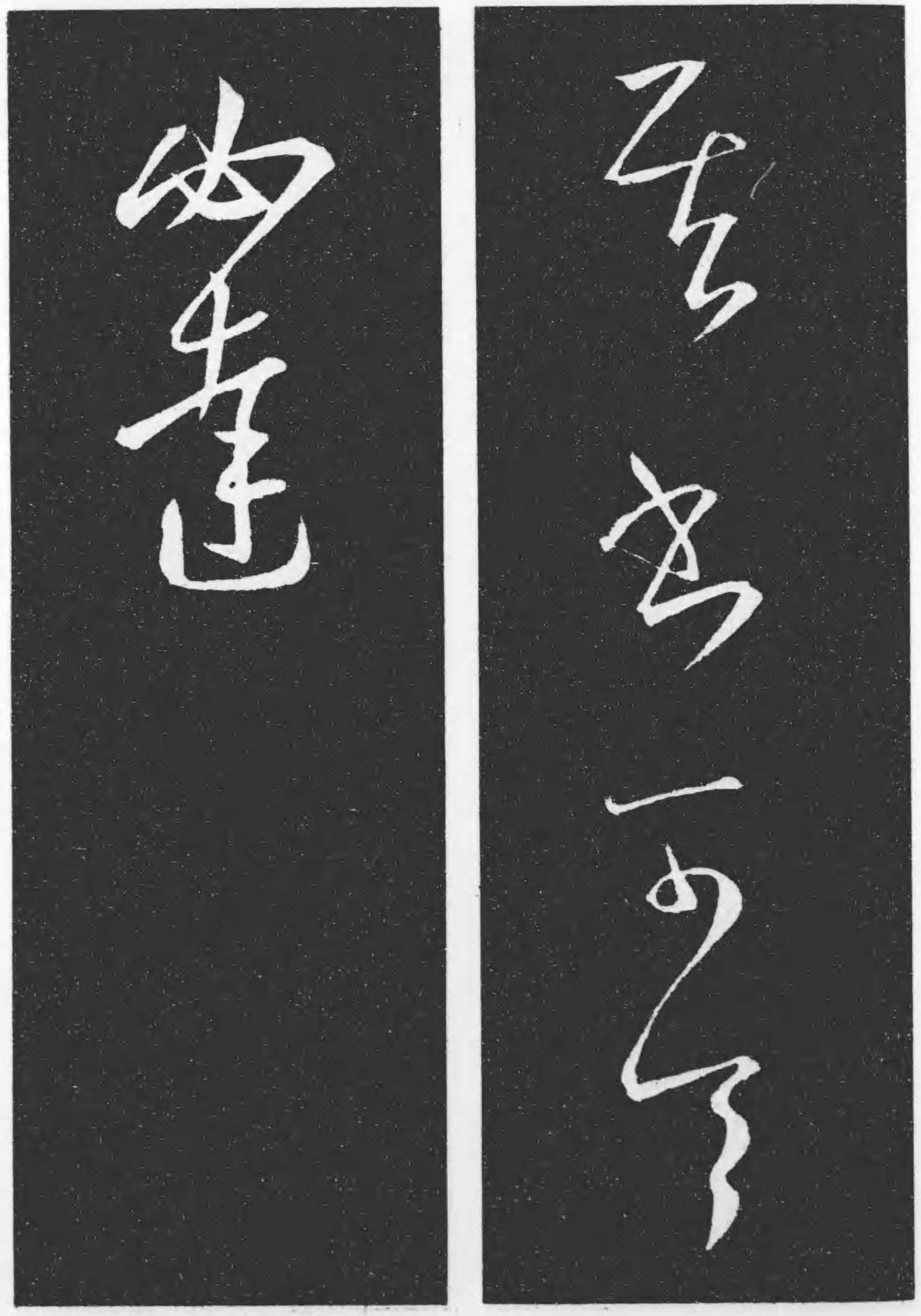
不。有驗者乃是要藥



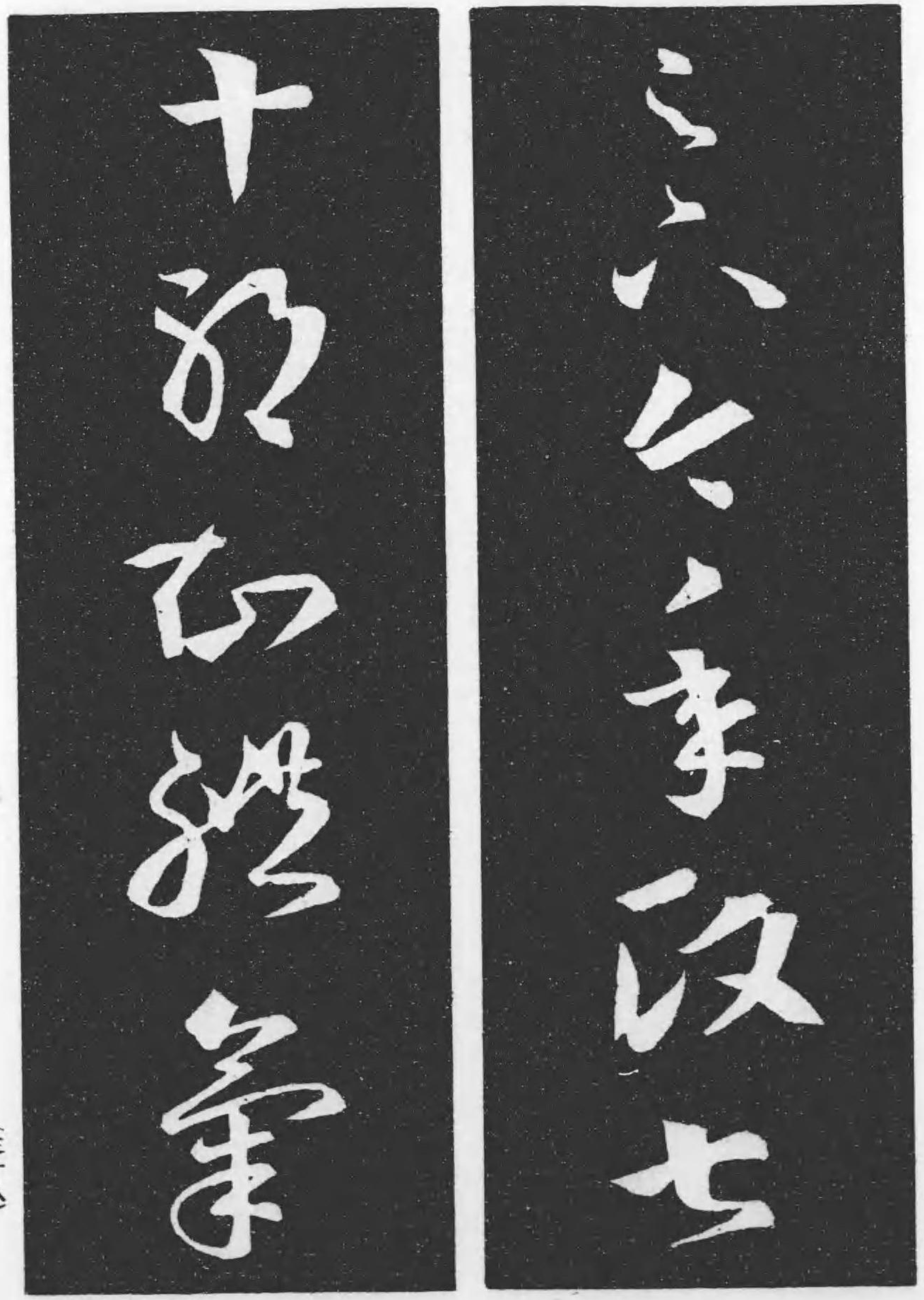
朱處仁今所在。往得其



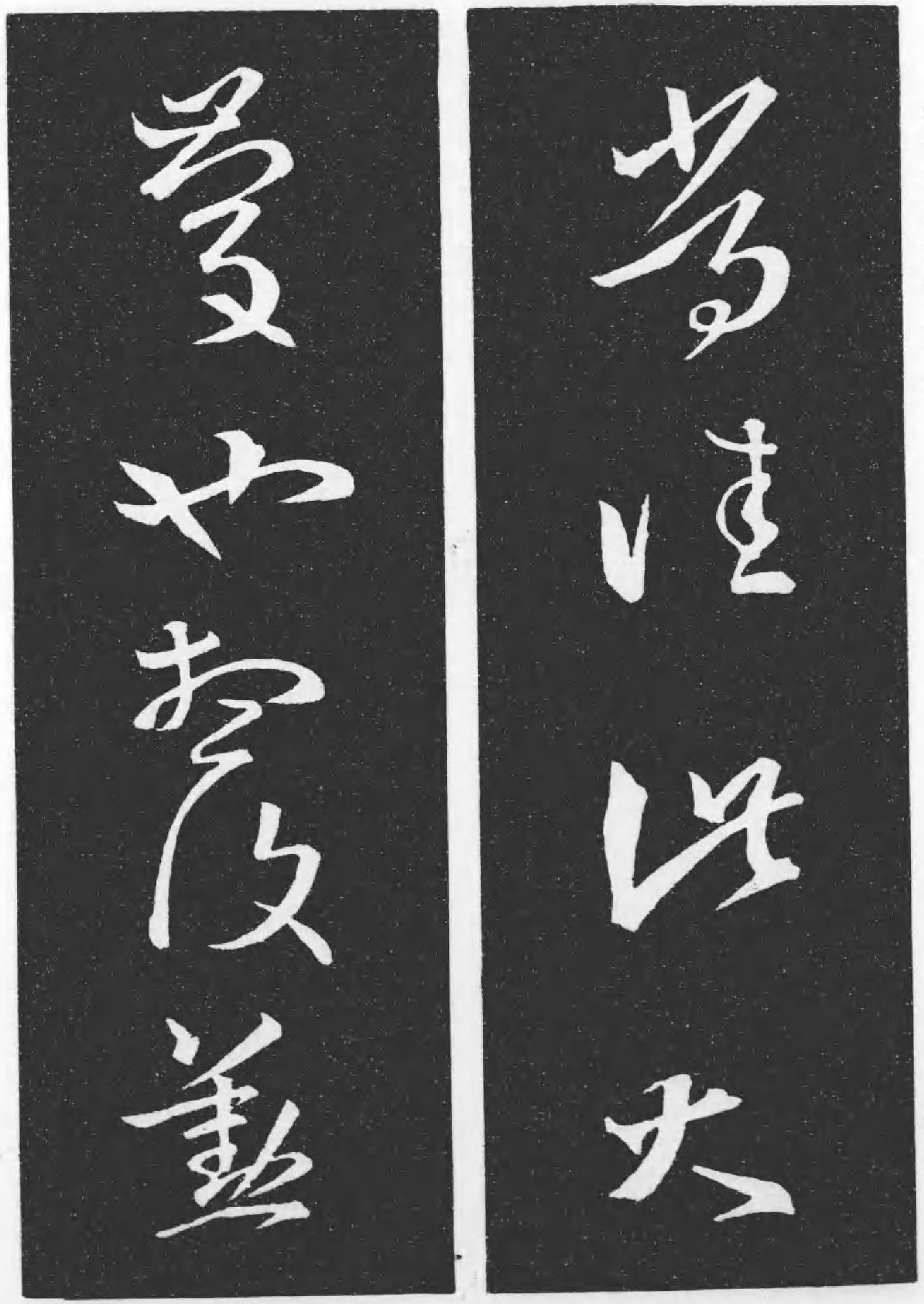
書。信遂不取答。今因足下答



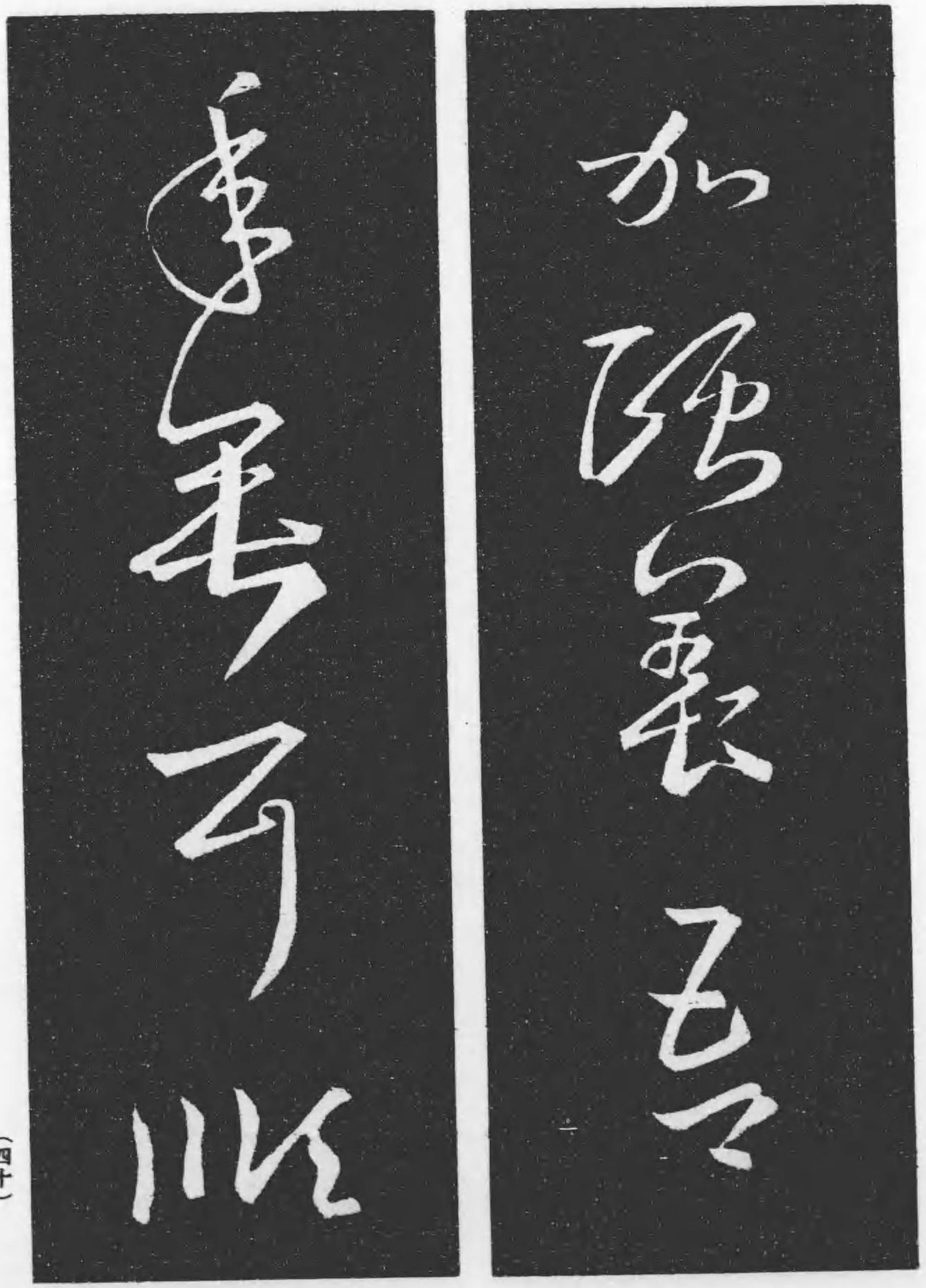
其書。可令必達。



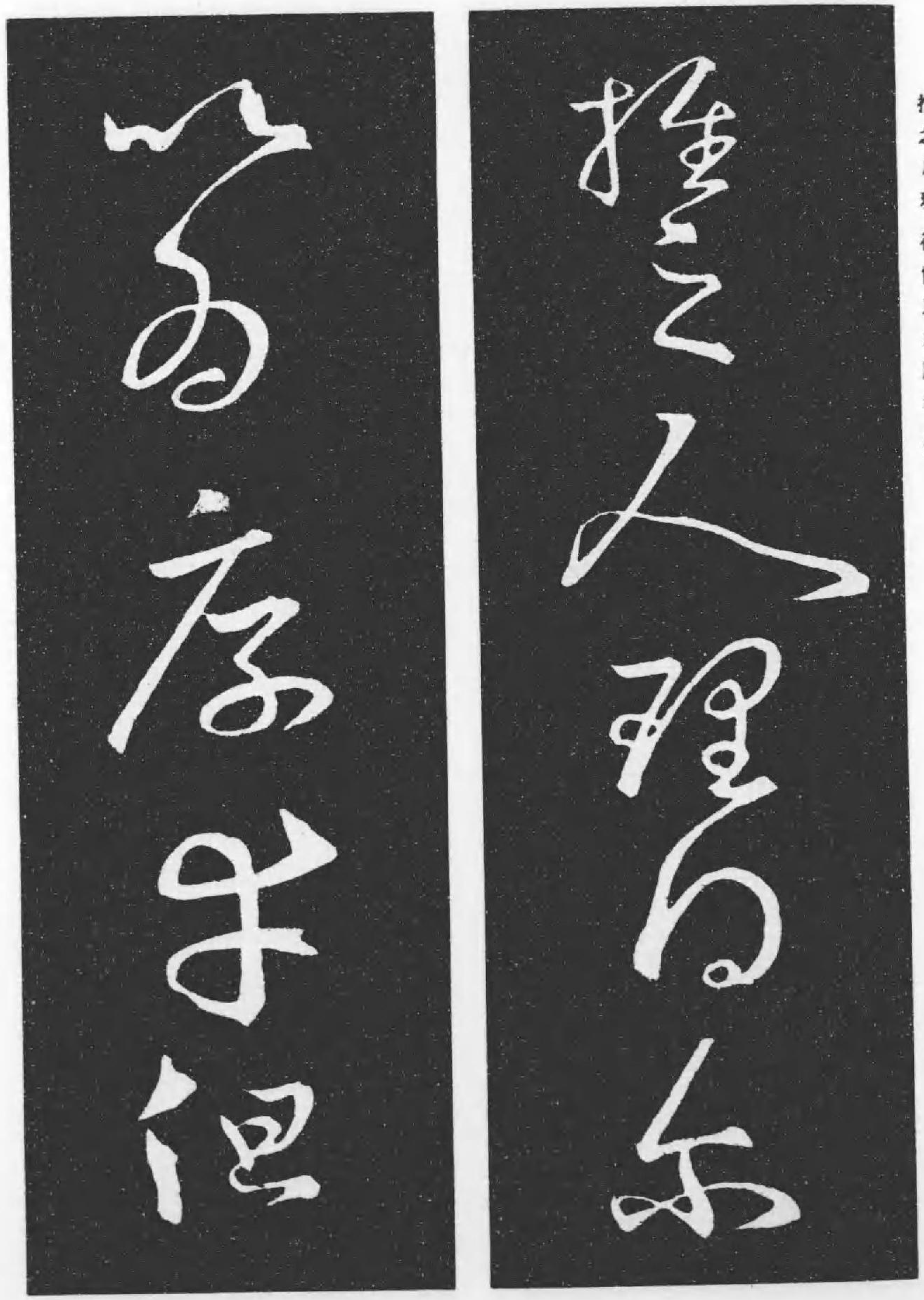
足下年政七十耶。知體氣



當佳。此大慶也想復勤



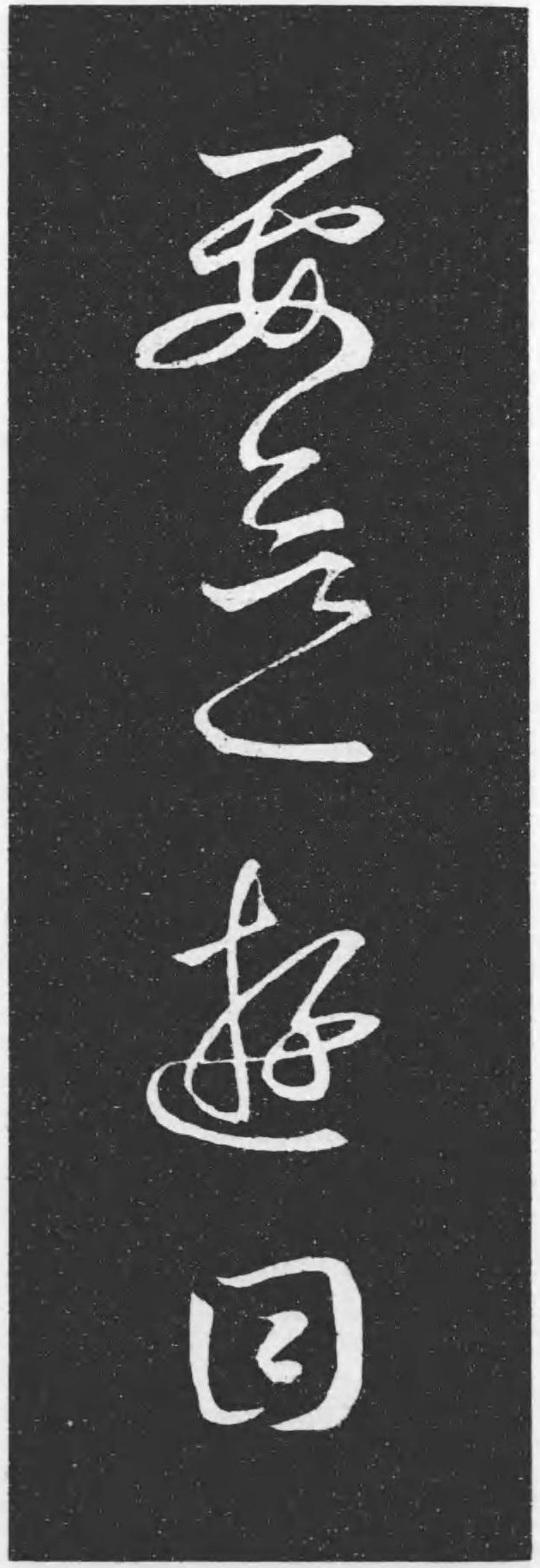
加頤養。吾年垂耳順。

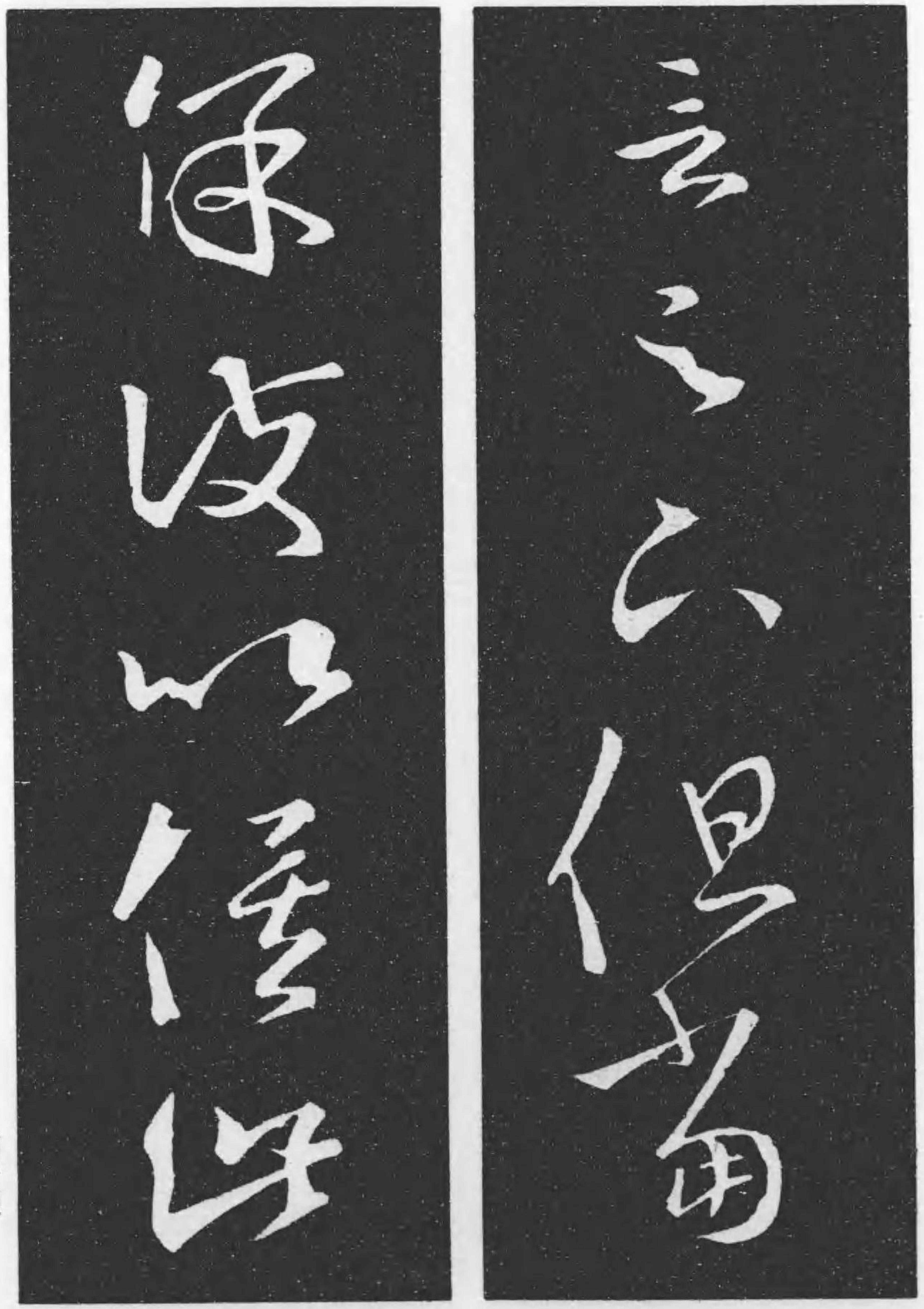


推之人理。得儕以爲厚幸。但

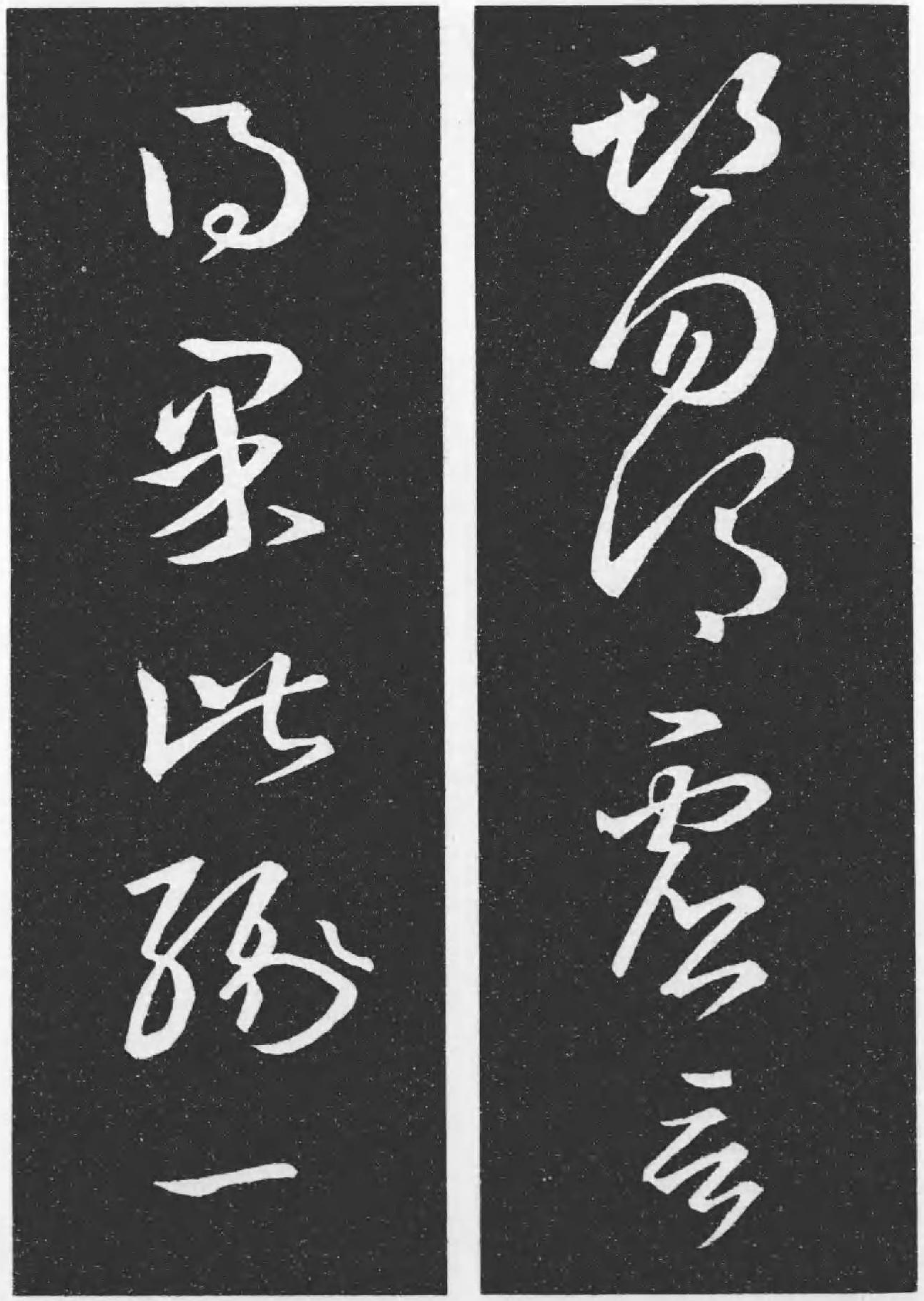
恐前路轉欲逼耳。以爾

要欲一遊目汶領。非復常

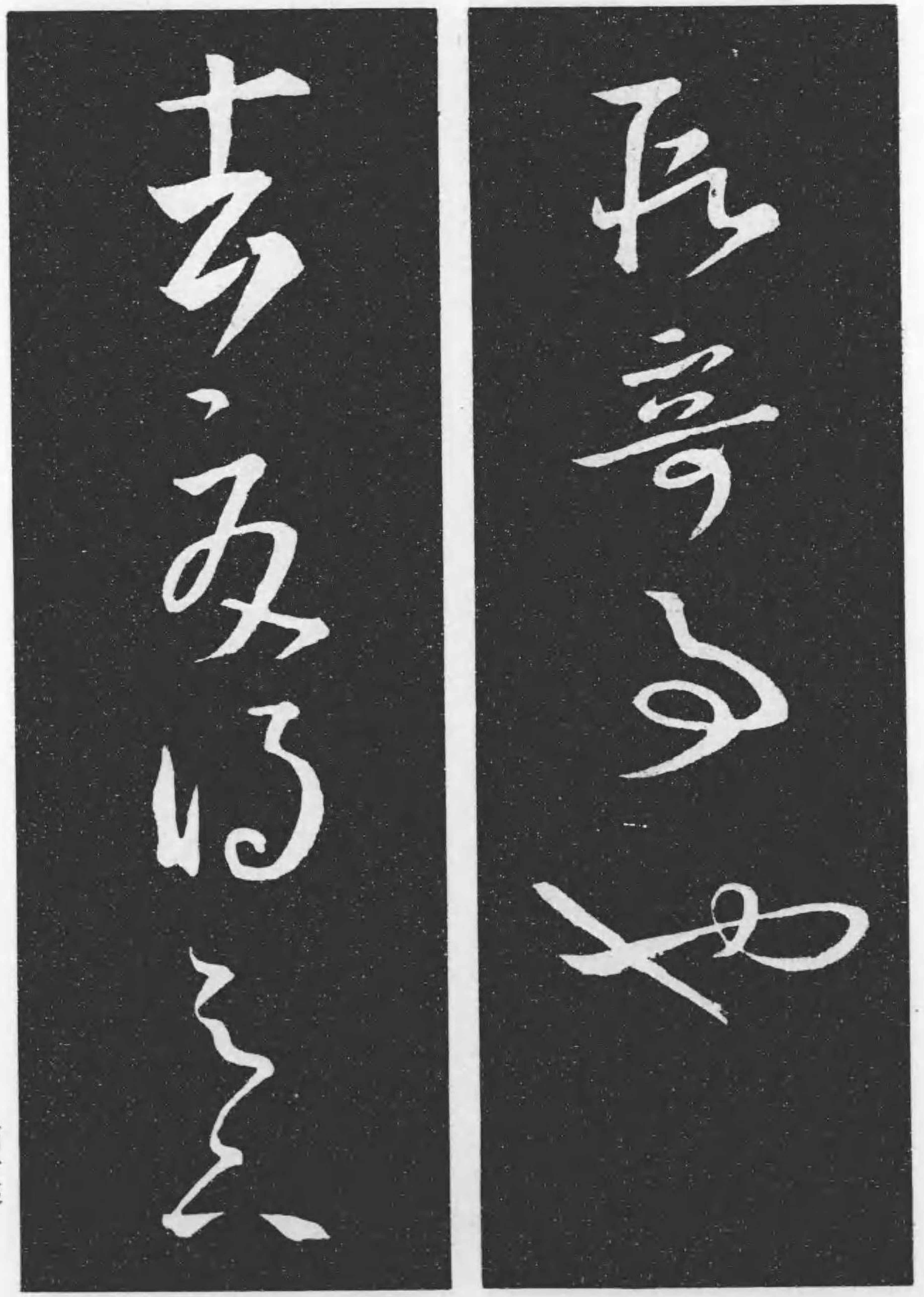




言。足下但當保護以俟此

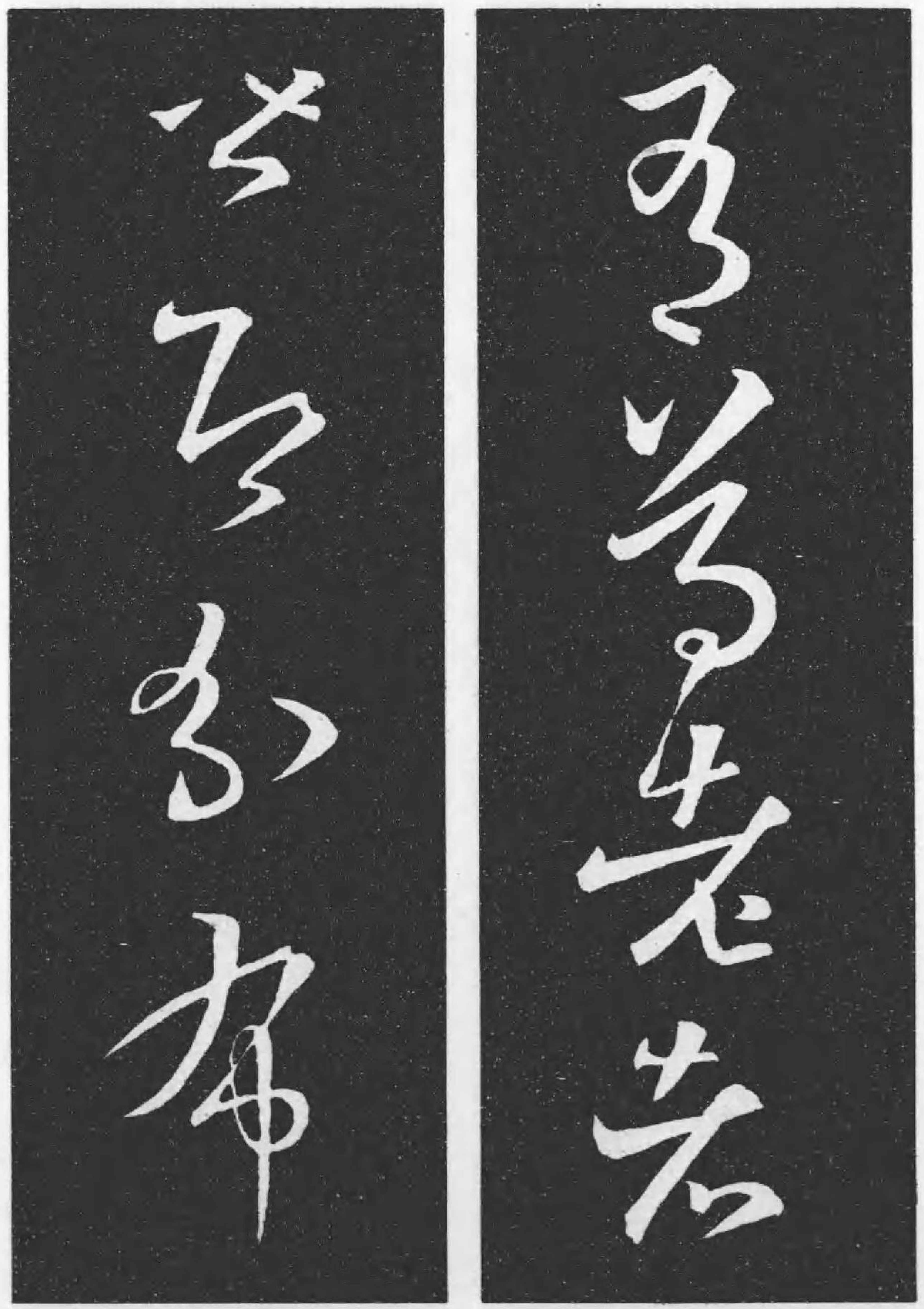


期。勿謂虛言。得果此緣。一

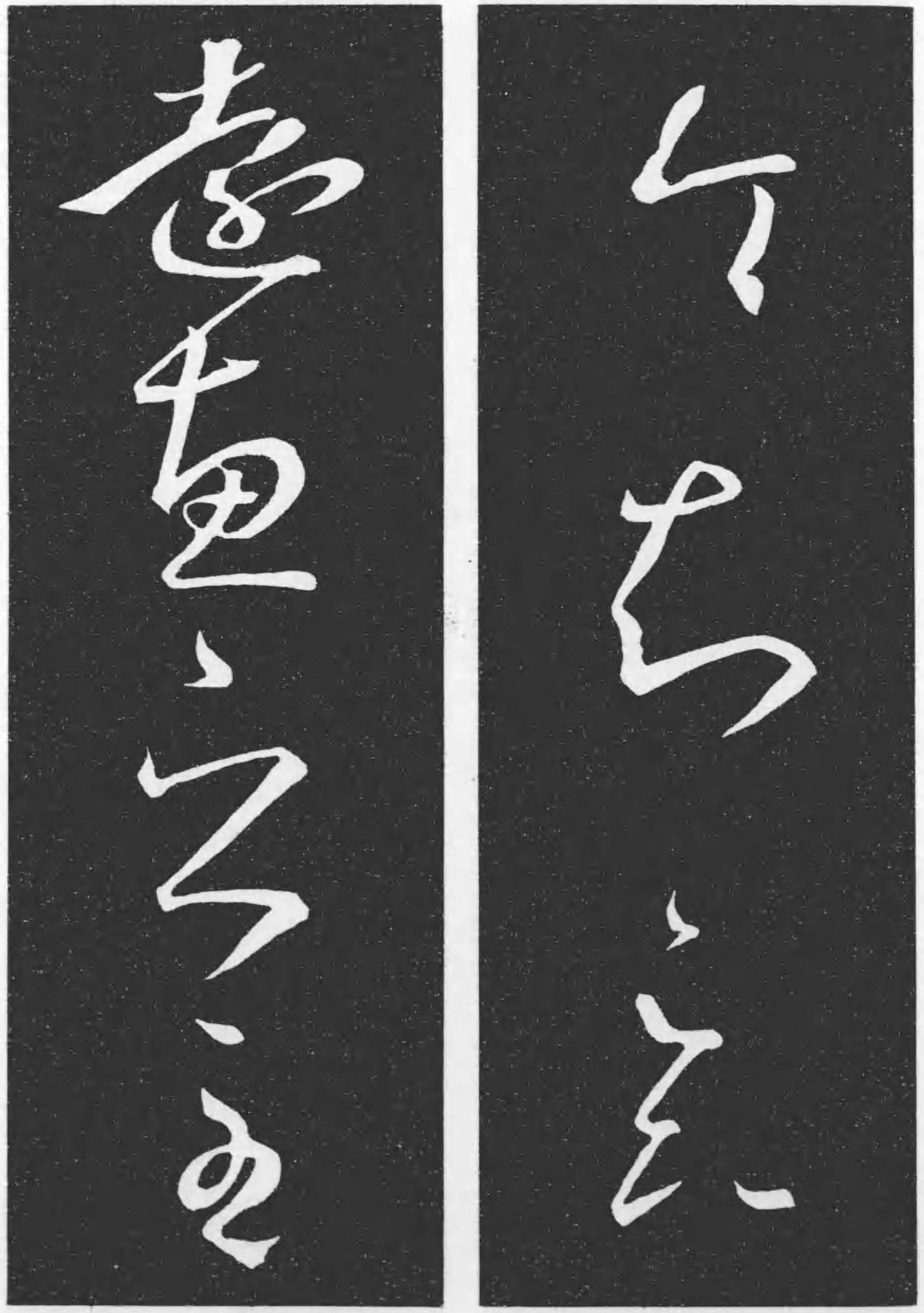


段奇事也。去夏得足下

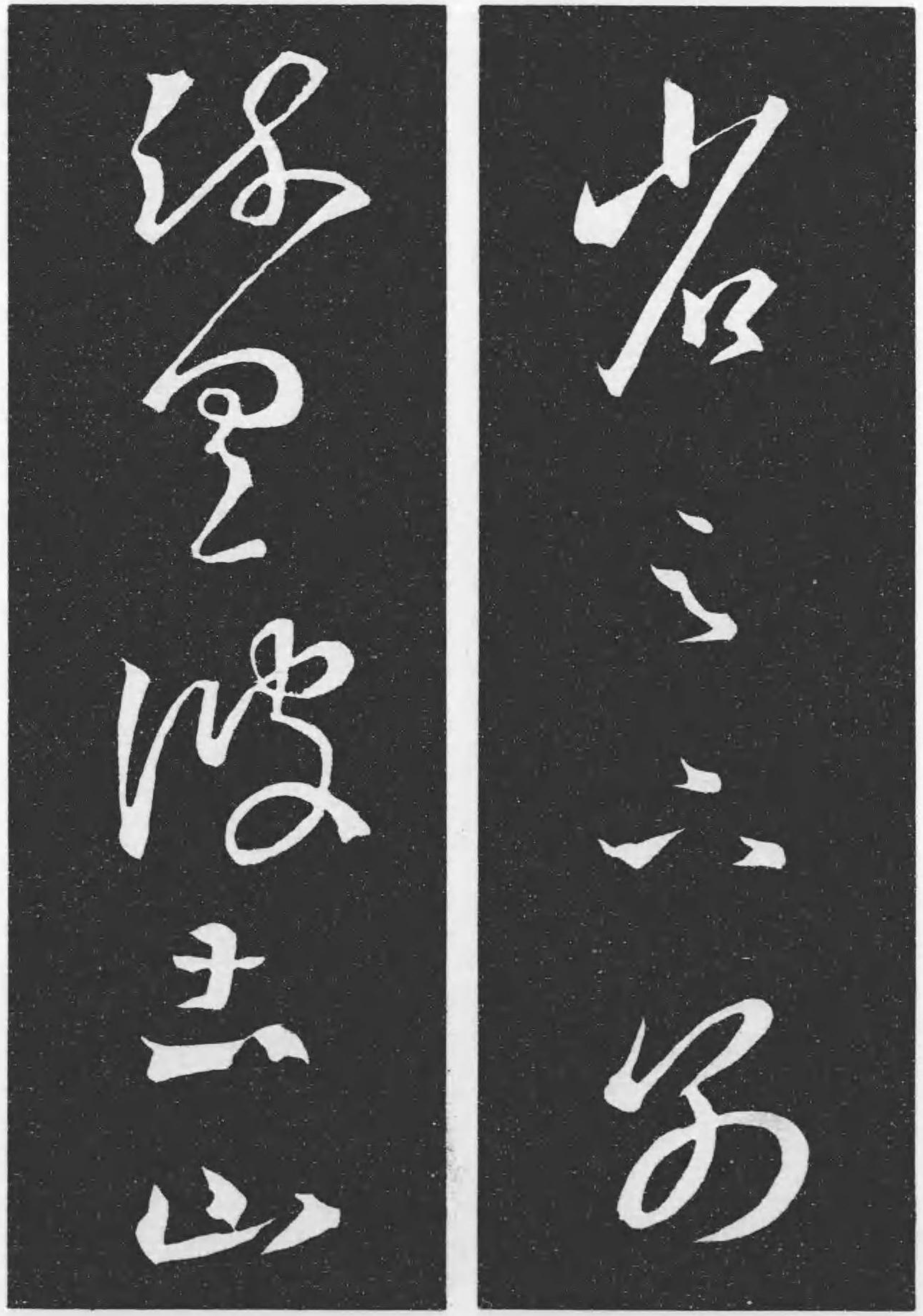
致邛竹杖。皆至此士人多



有尊老者。皆卽分布

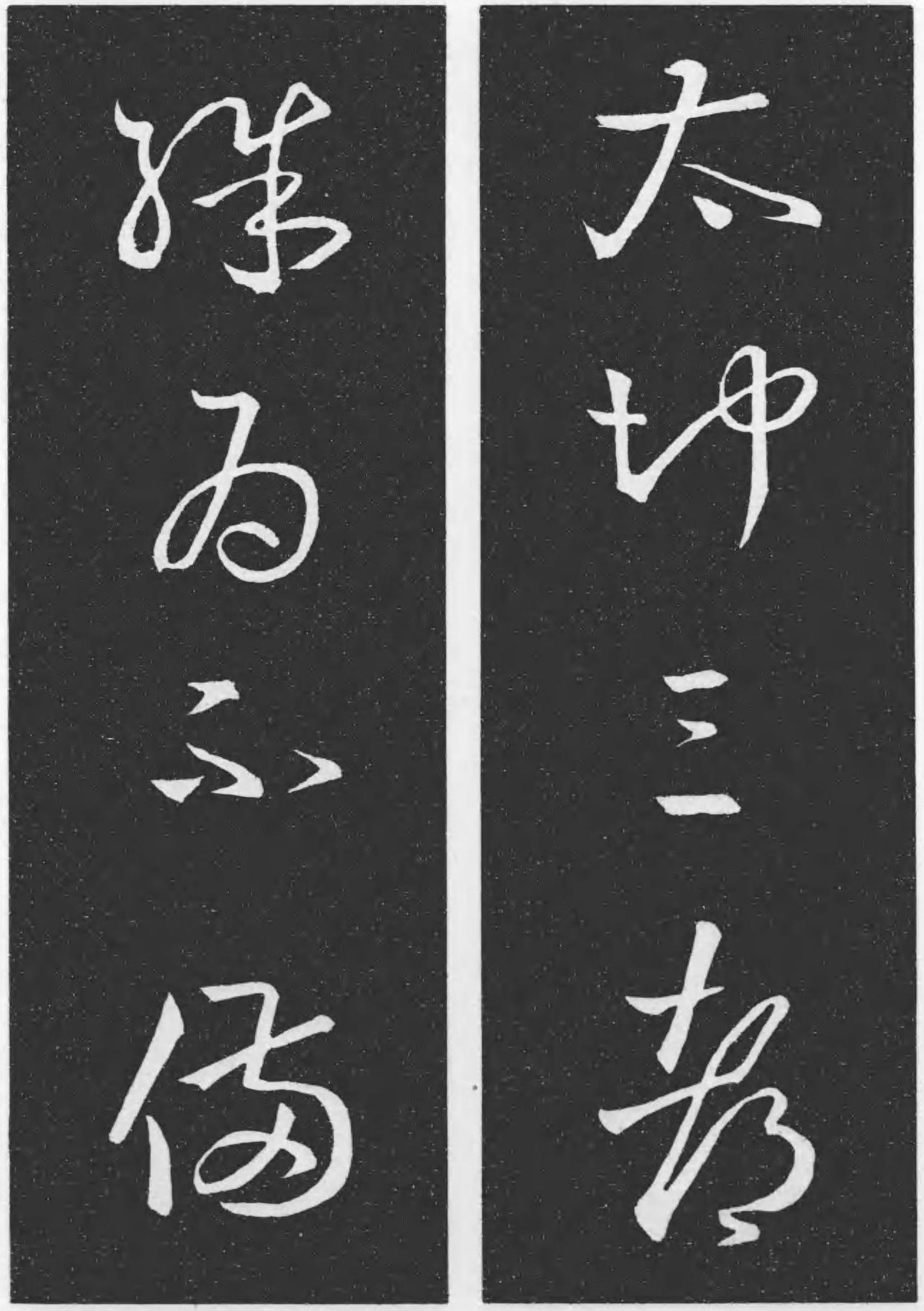


令知足下遠惠之至。

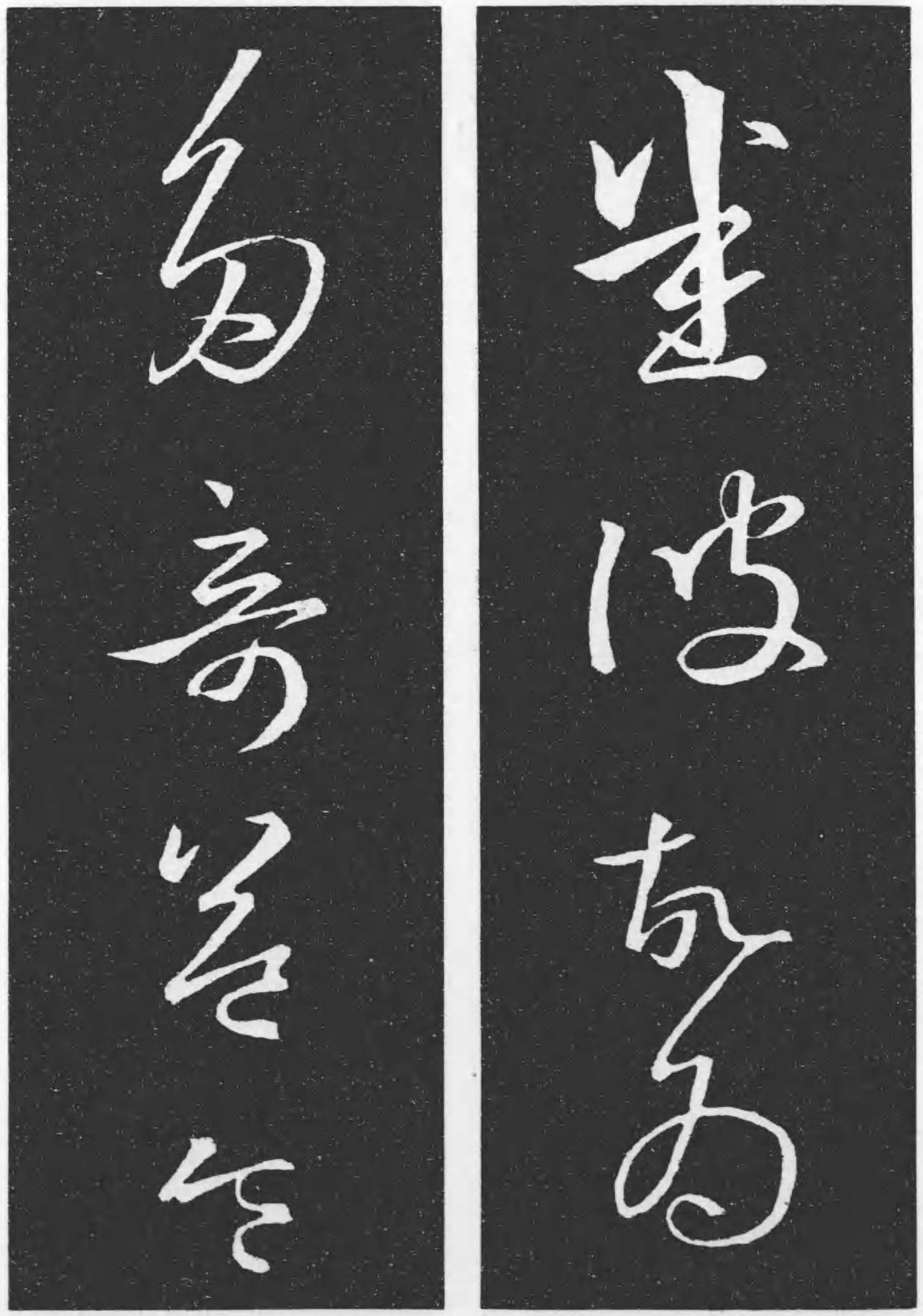


省足下别疏。具彼土山

川諸奇。楊雄蜀都左

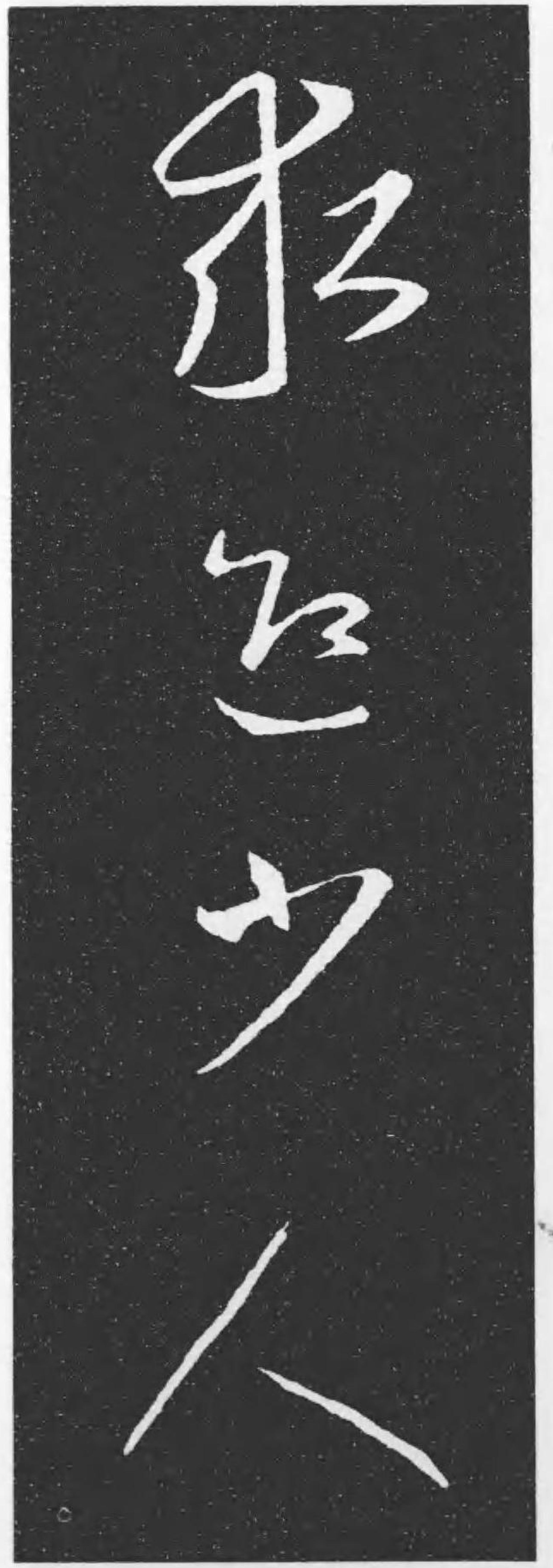


太沖三都。殊爲不備

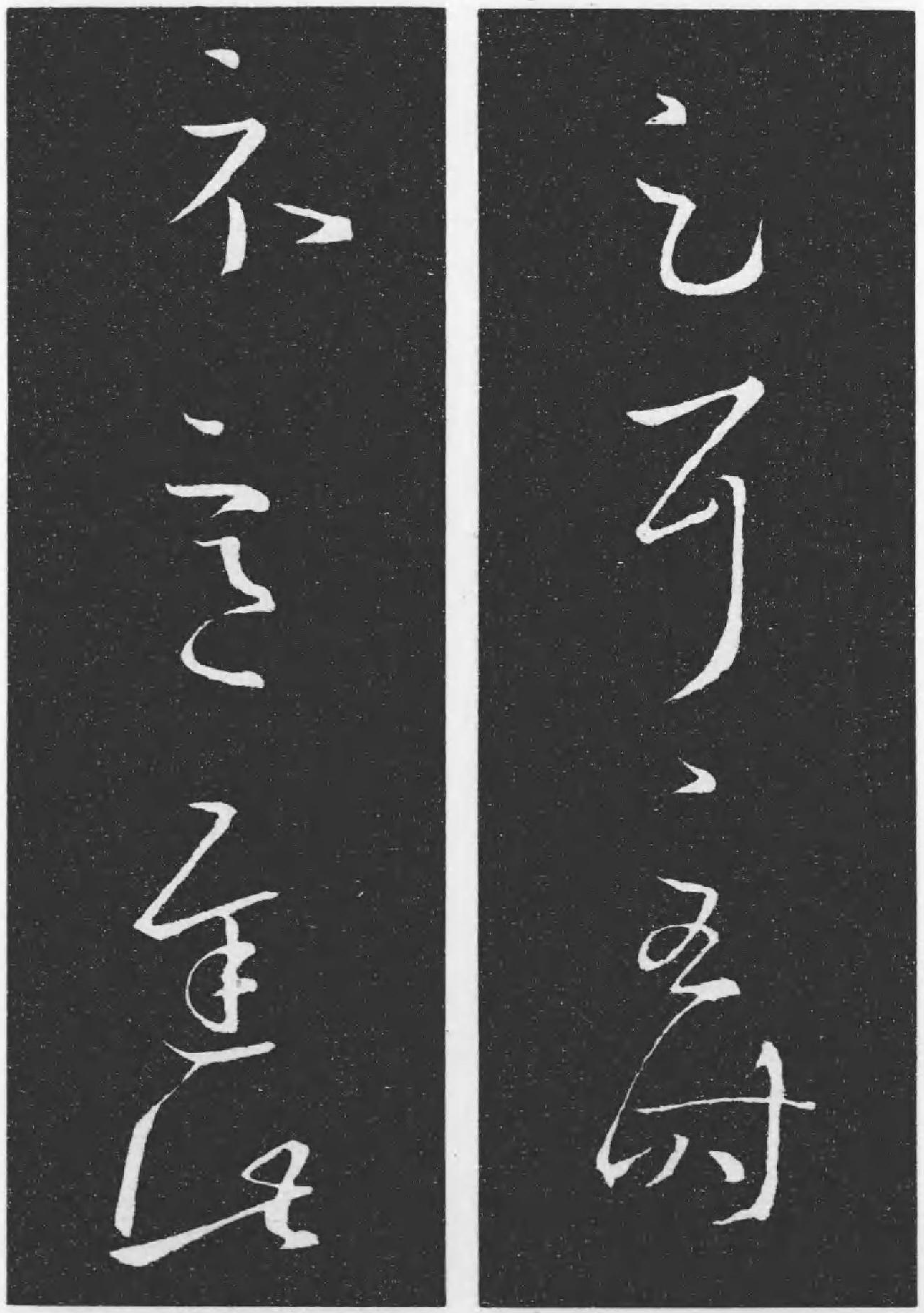


悉。較故爲多奇。益令

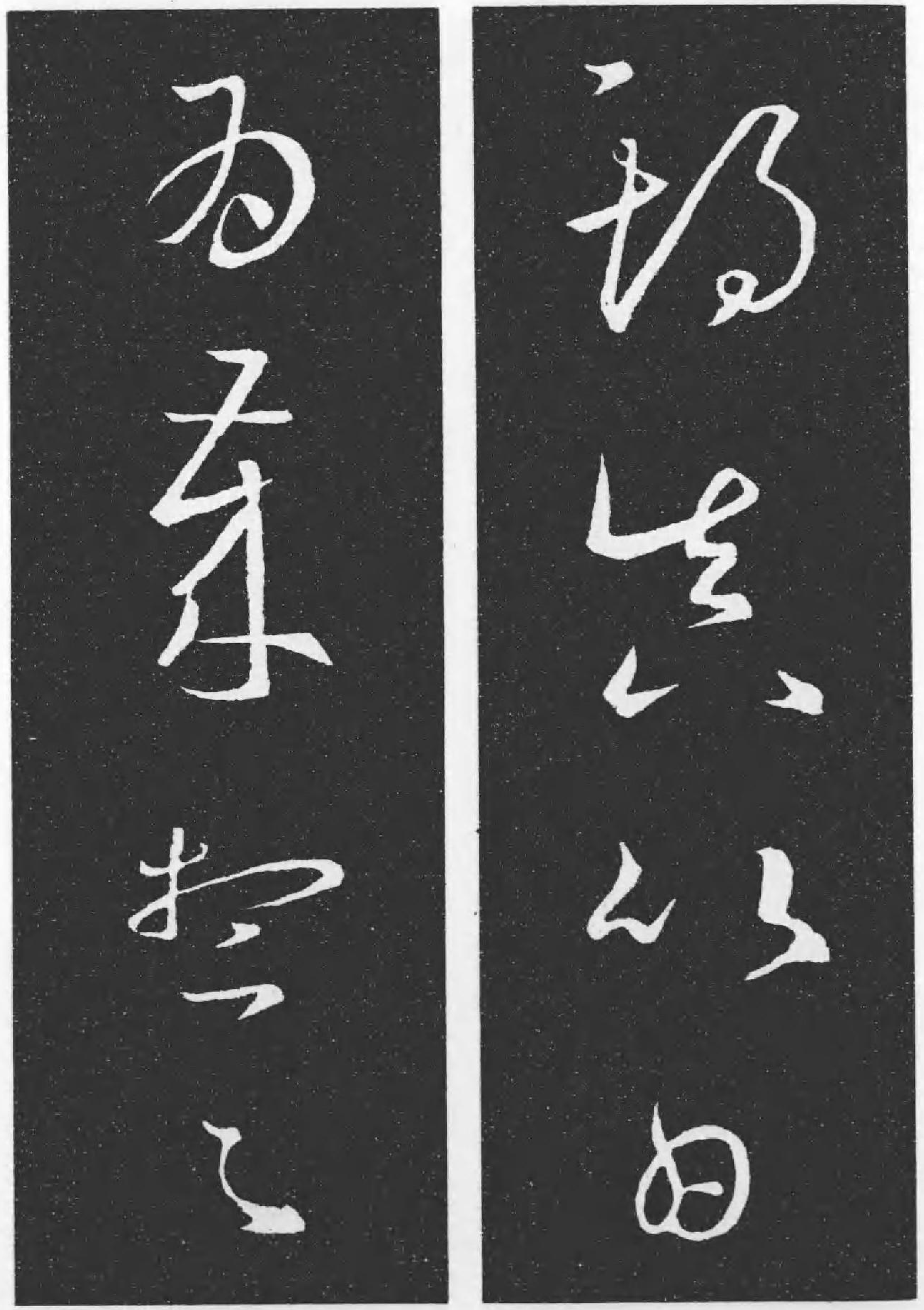
其遊目意足也。可得



果當告卿求迎。少人

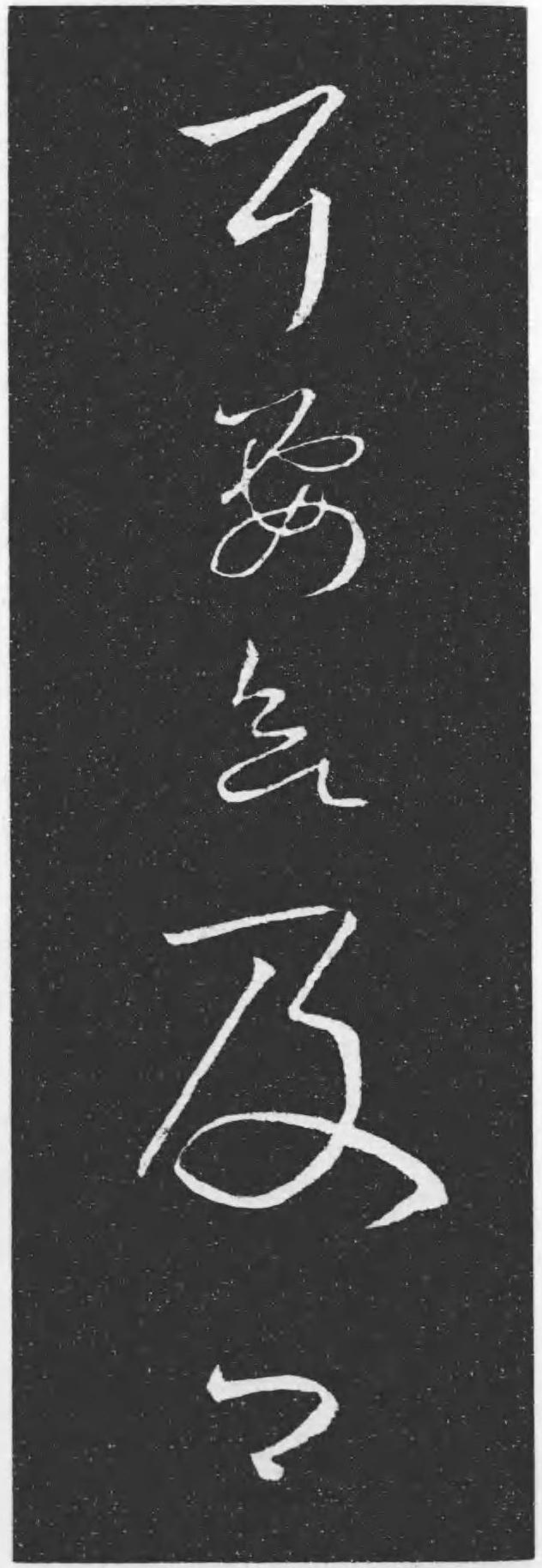


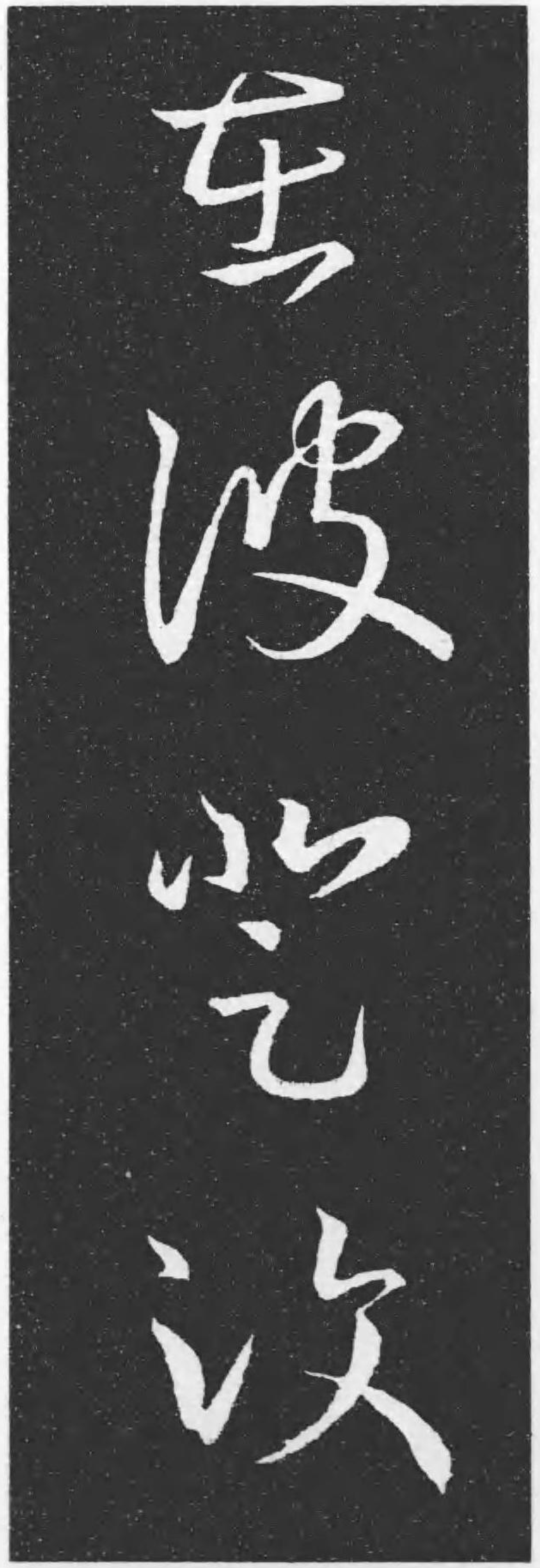
足耳。至時示意。遲此



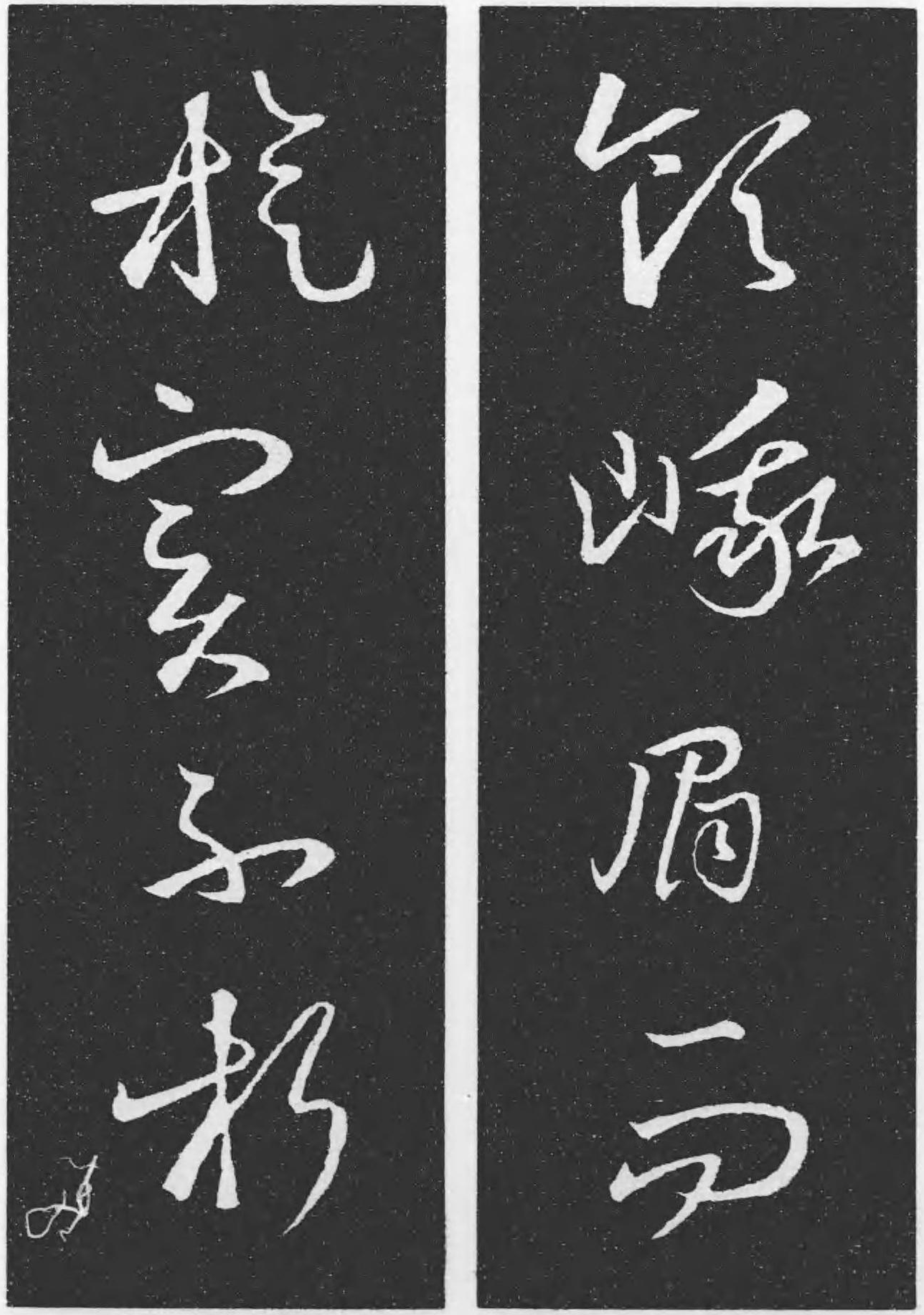
期。眞以日爲歲想足

下鎮彼土未有動理

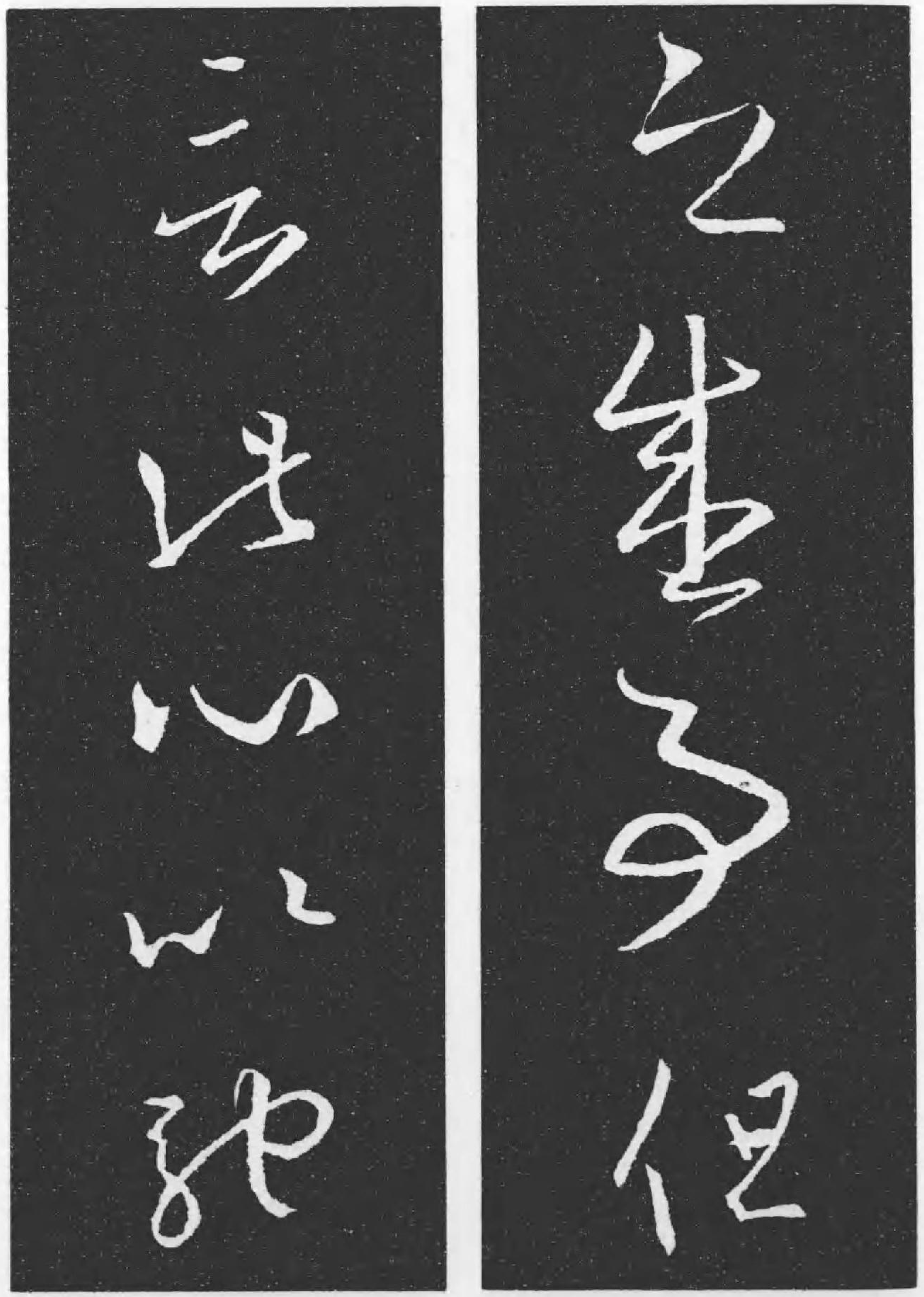




耳。要欲及卿在彼登汝



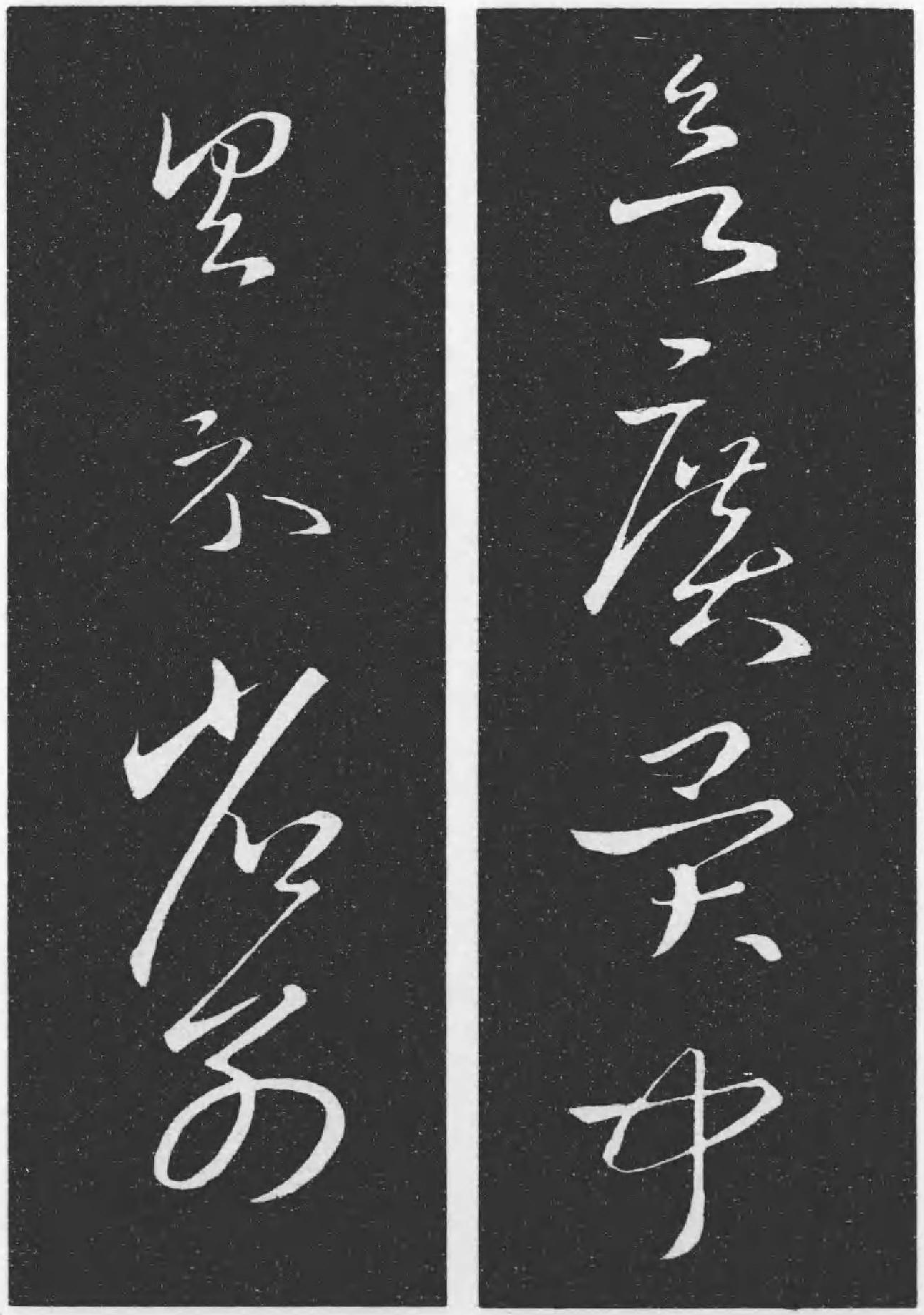
領峨眉。而旋。實不朽



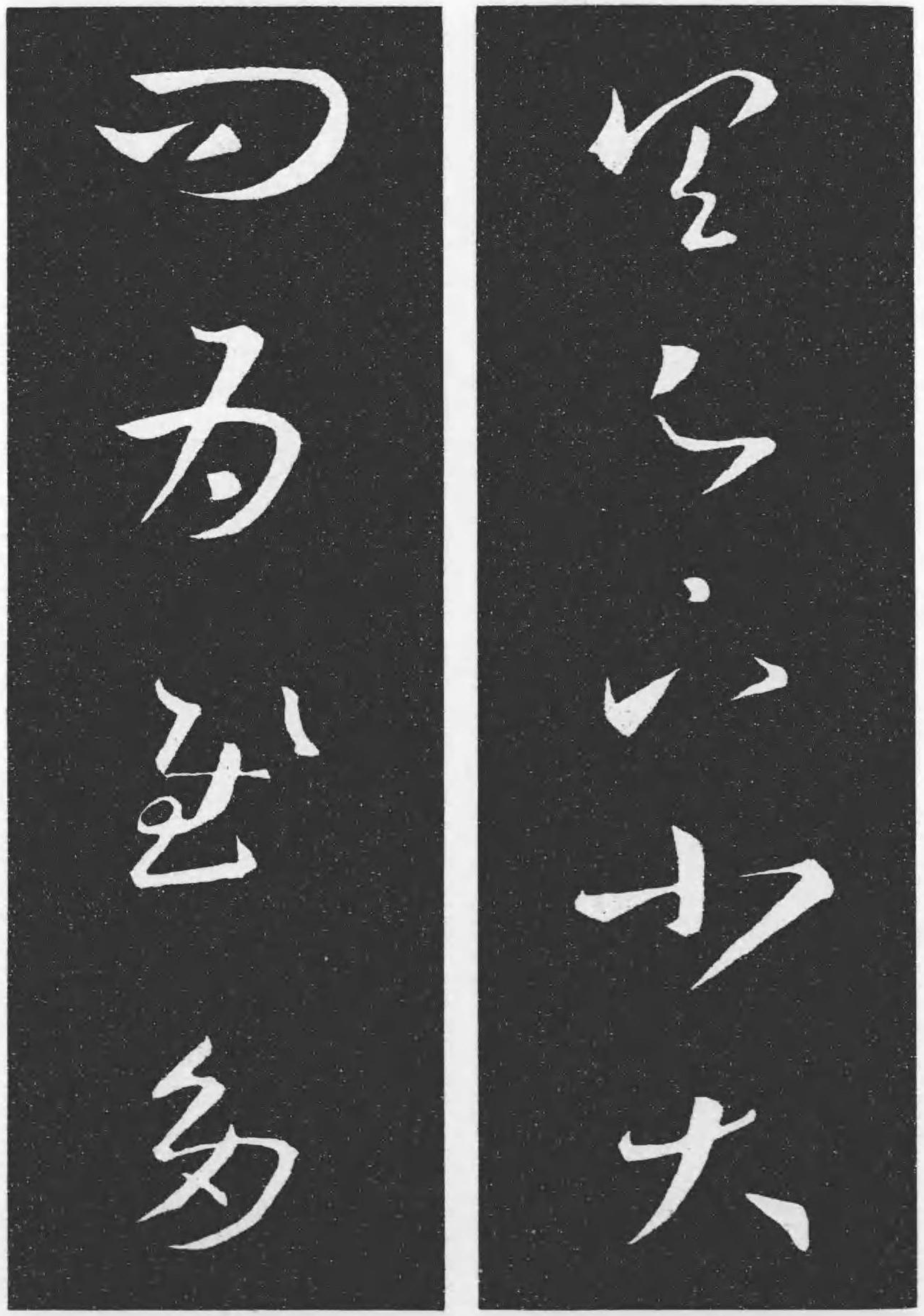
之盛事。但言此。心以馳

於彼矣。彼疆井火

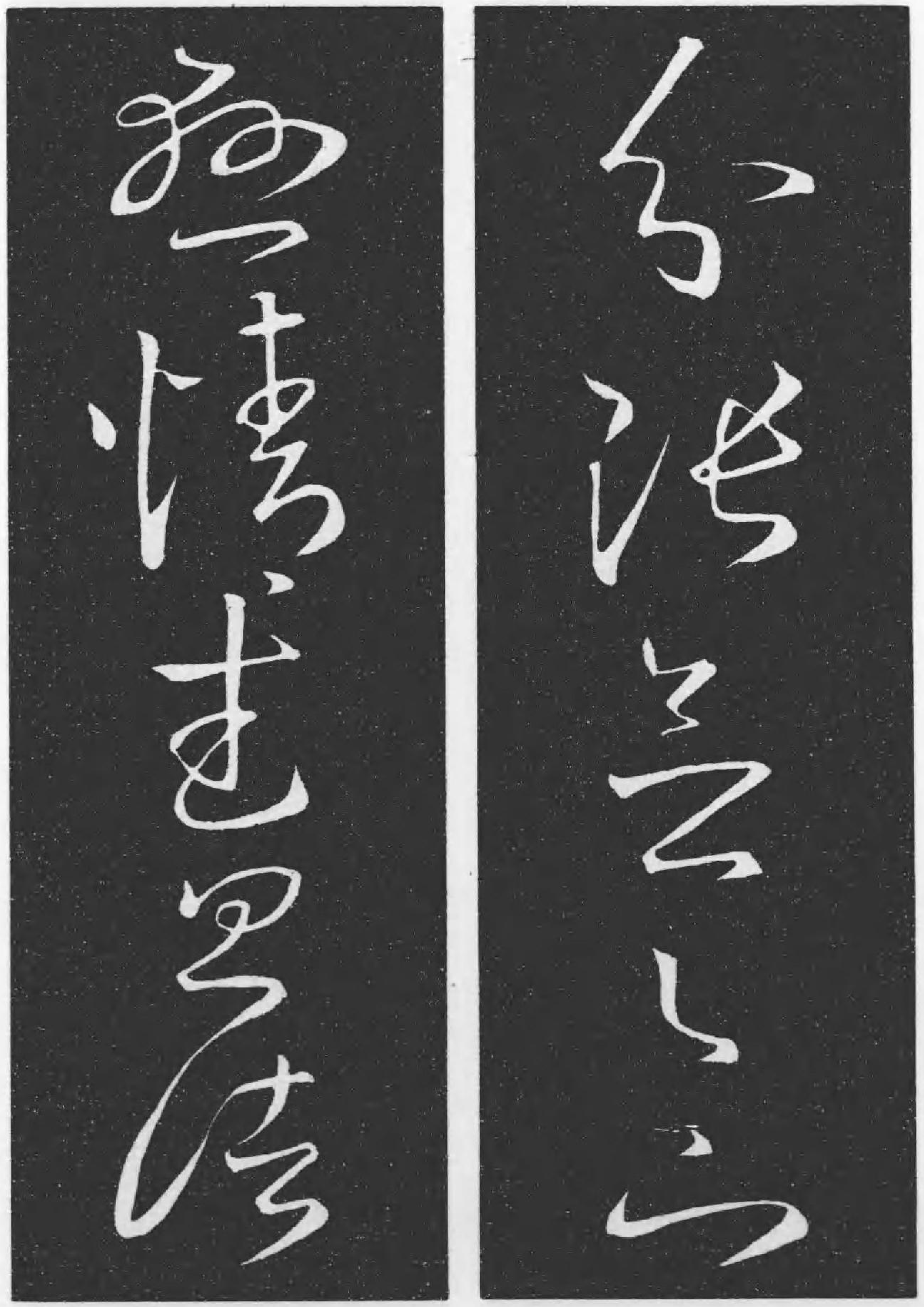
井者在不。足下目見不。爲



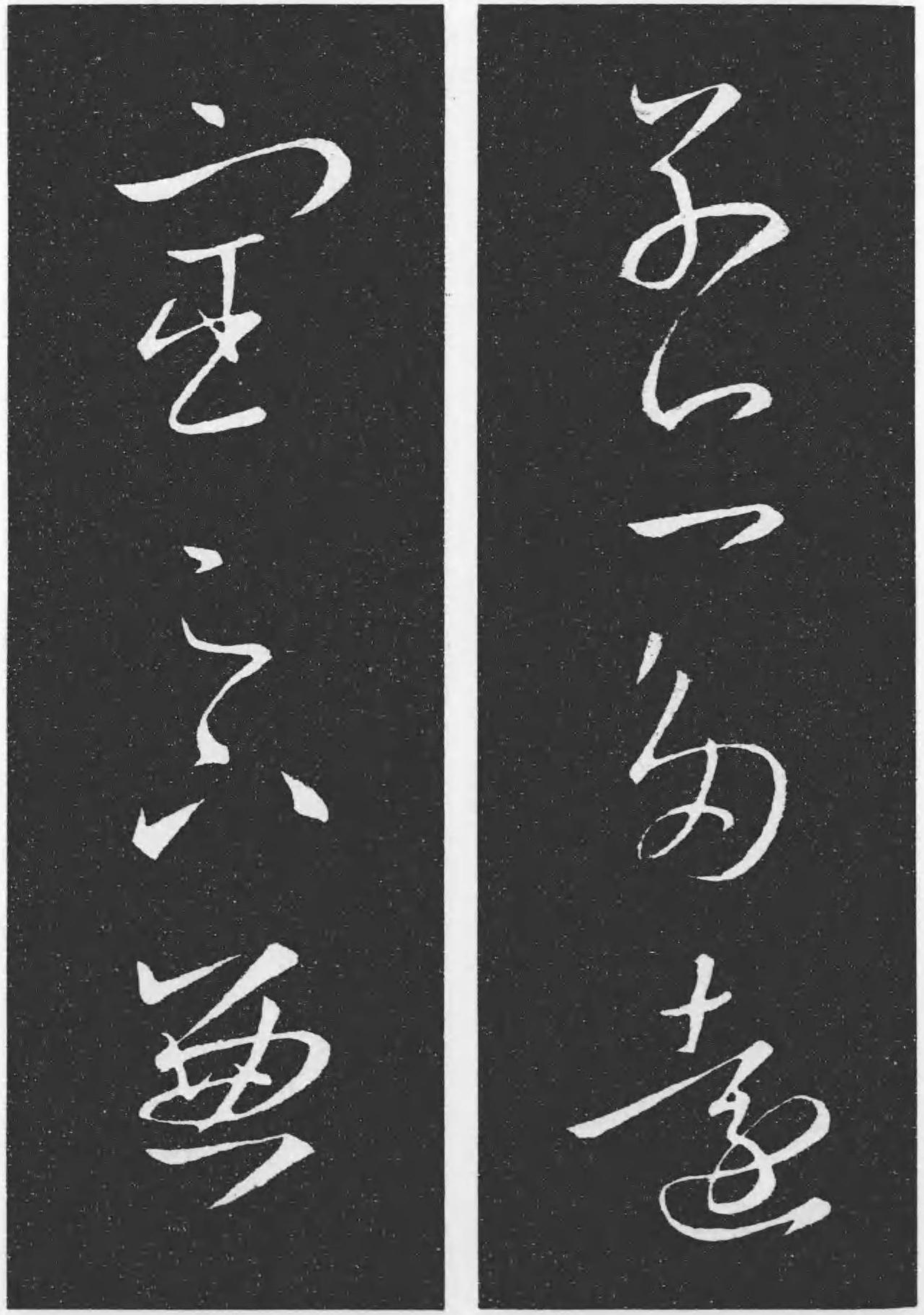
欲廣異聞。具示省別



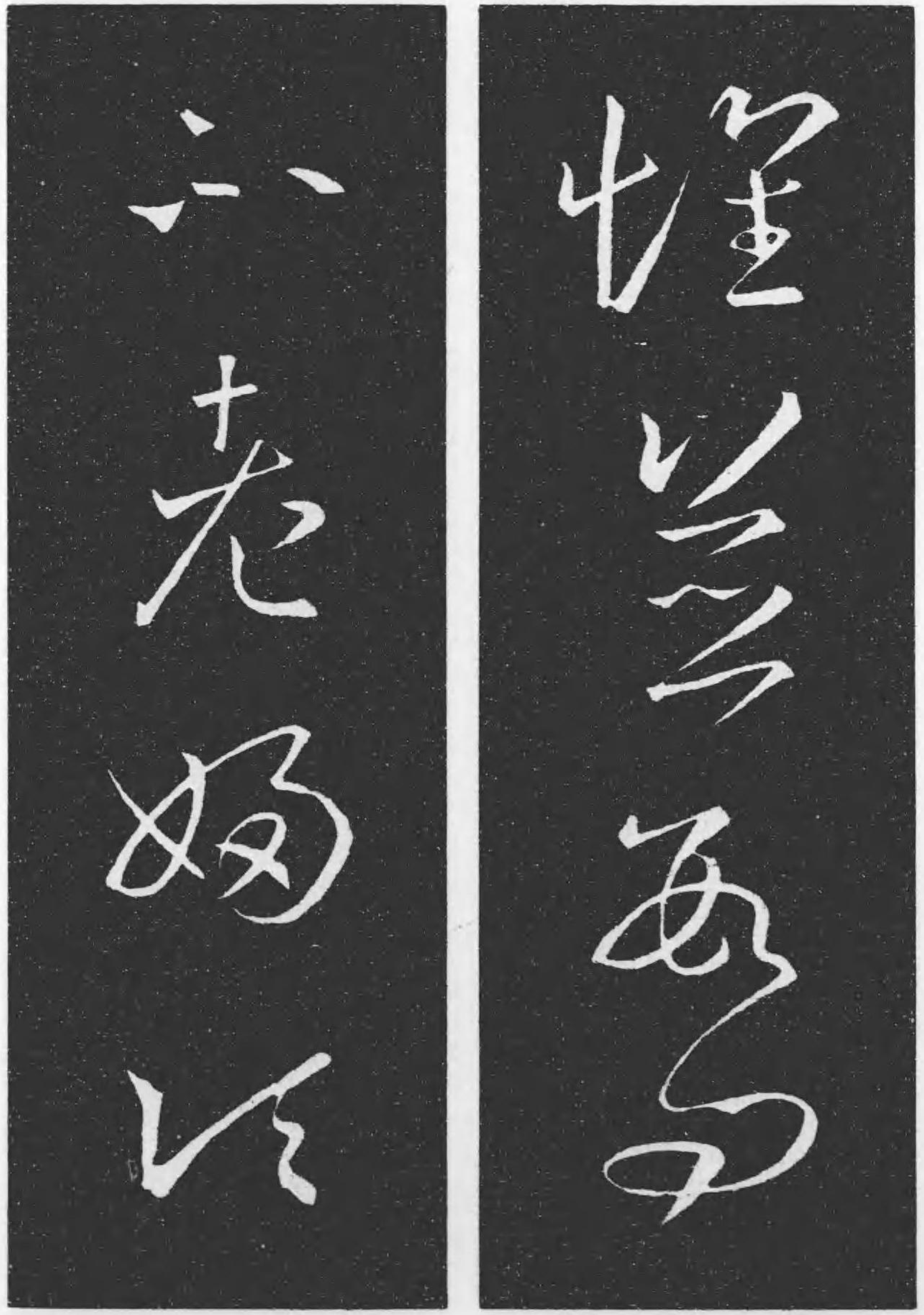
具足下小大問。爲慰。多



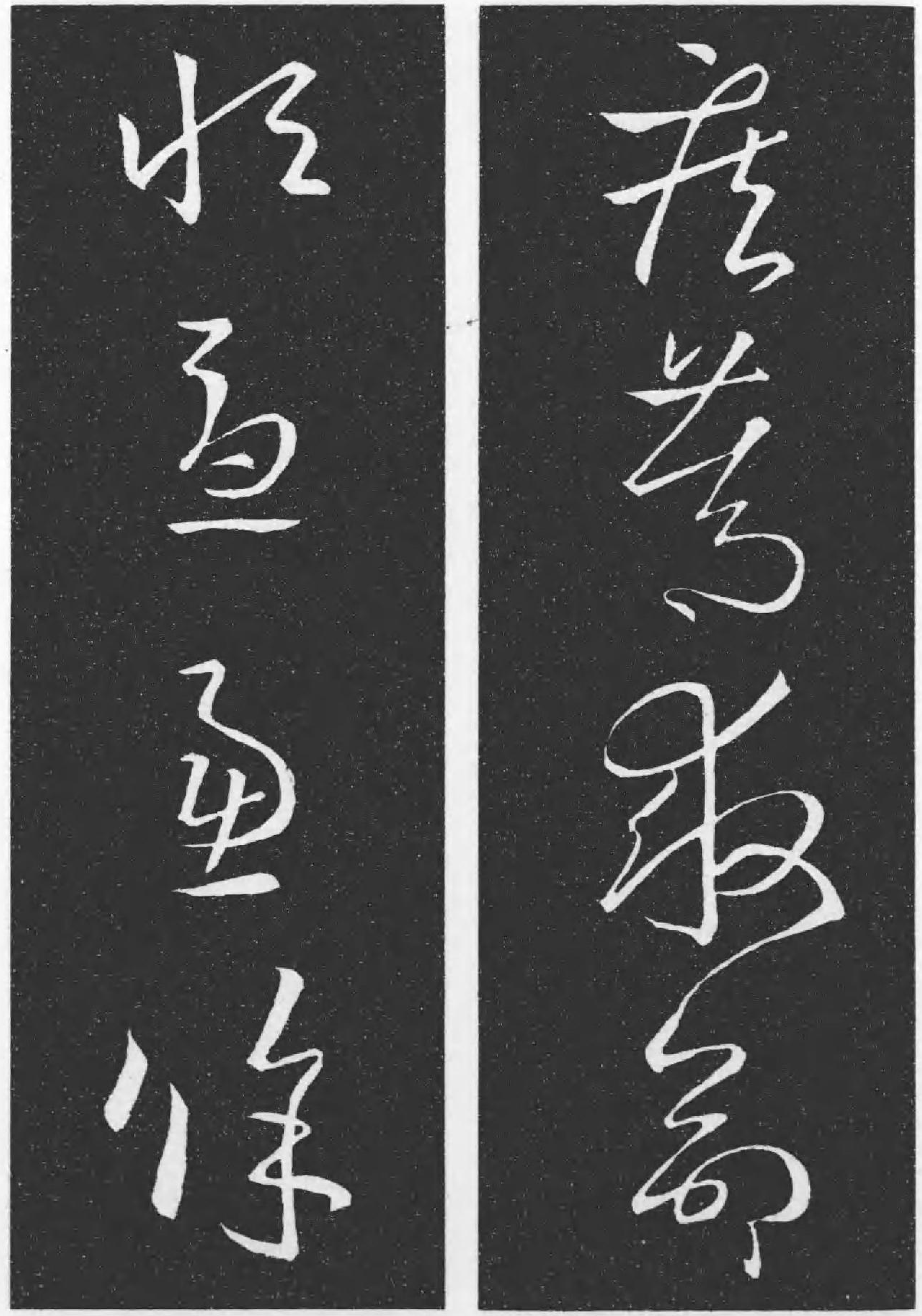
分張。念足下懸情。武昌諸



子。亦多遠宦。足下兼

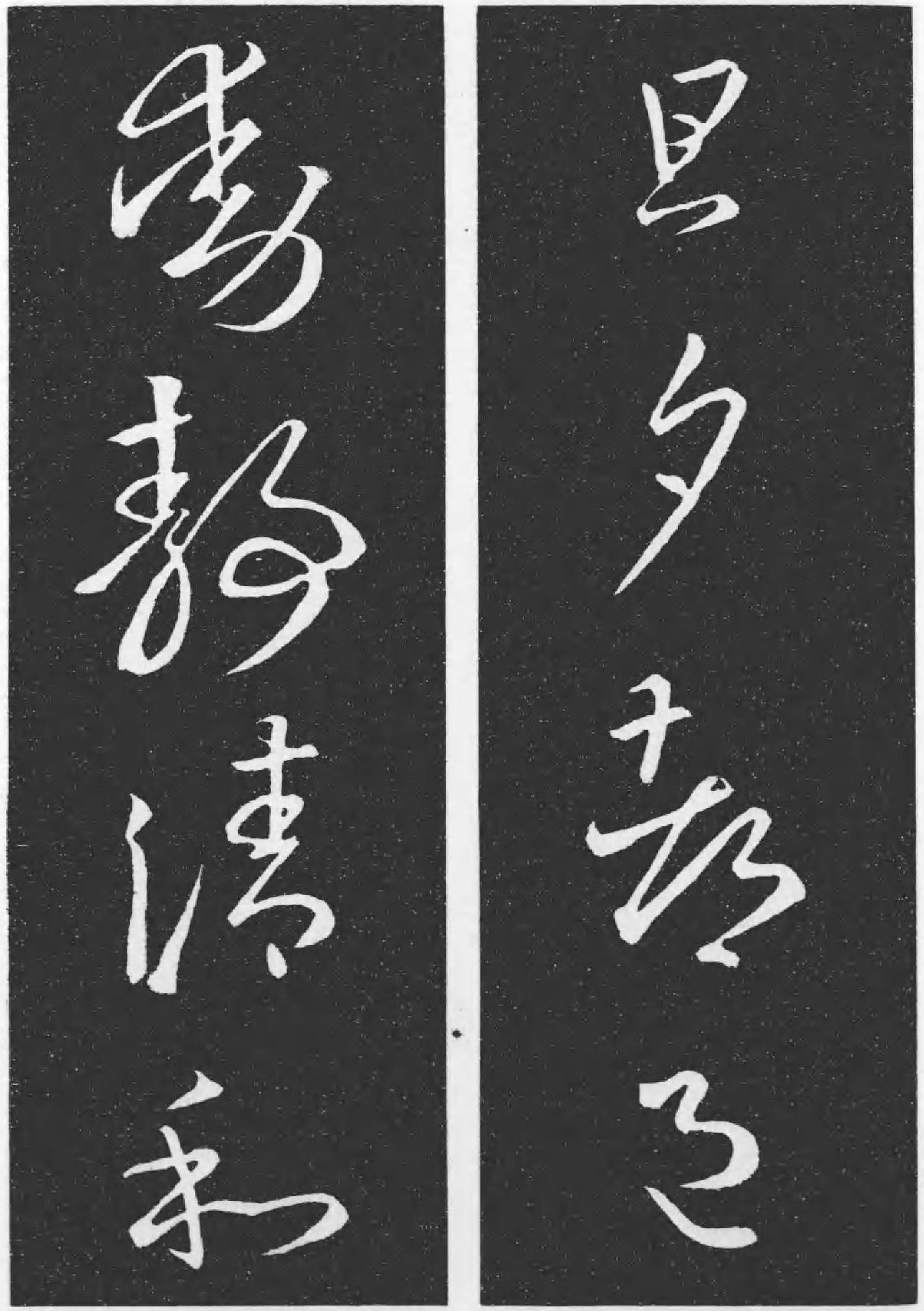


懐。並數問不。老婦頃

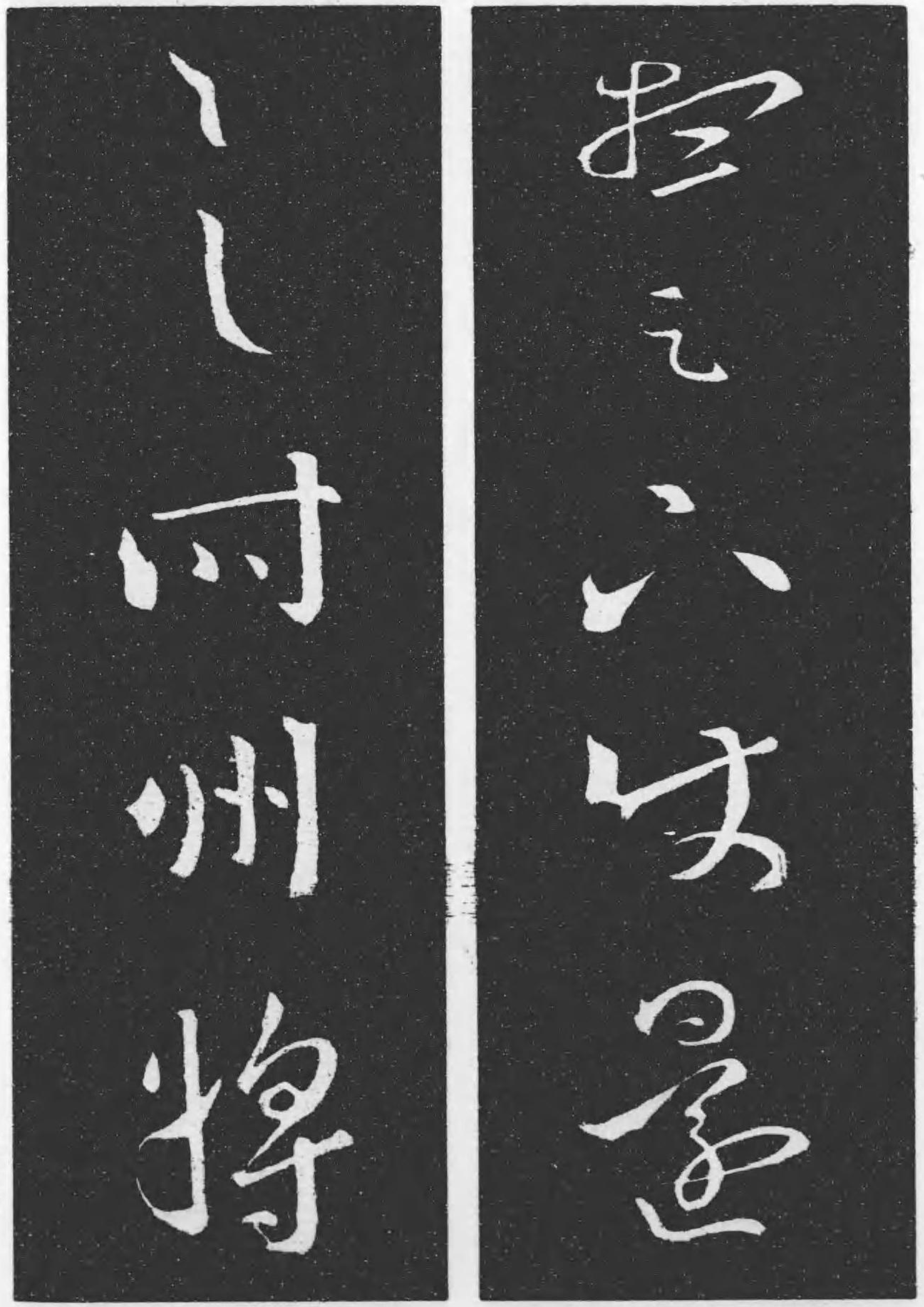


疾篤救命。恒憂慮。餘

粗平安。知足下情 至。

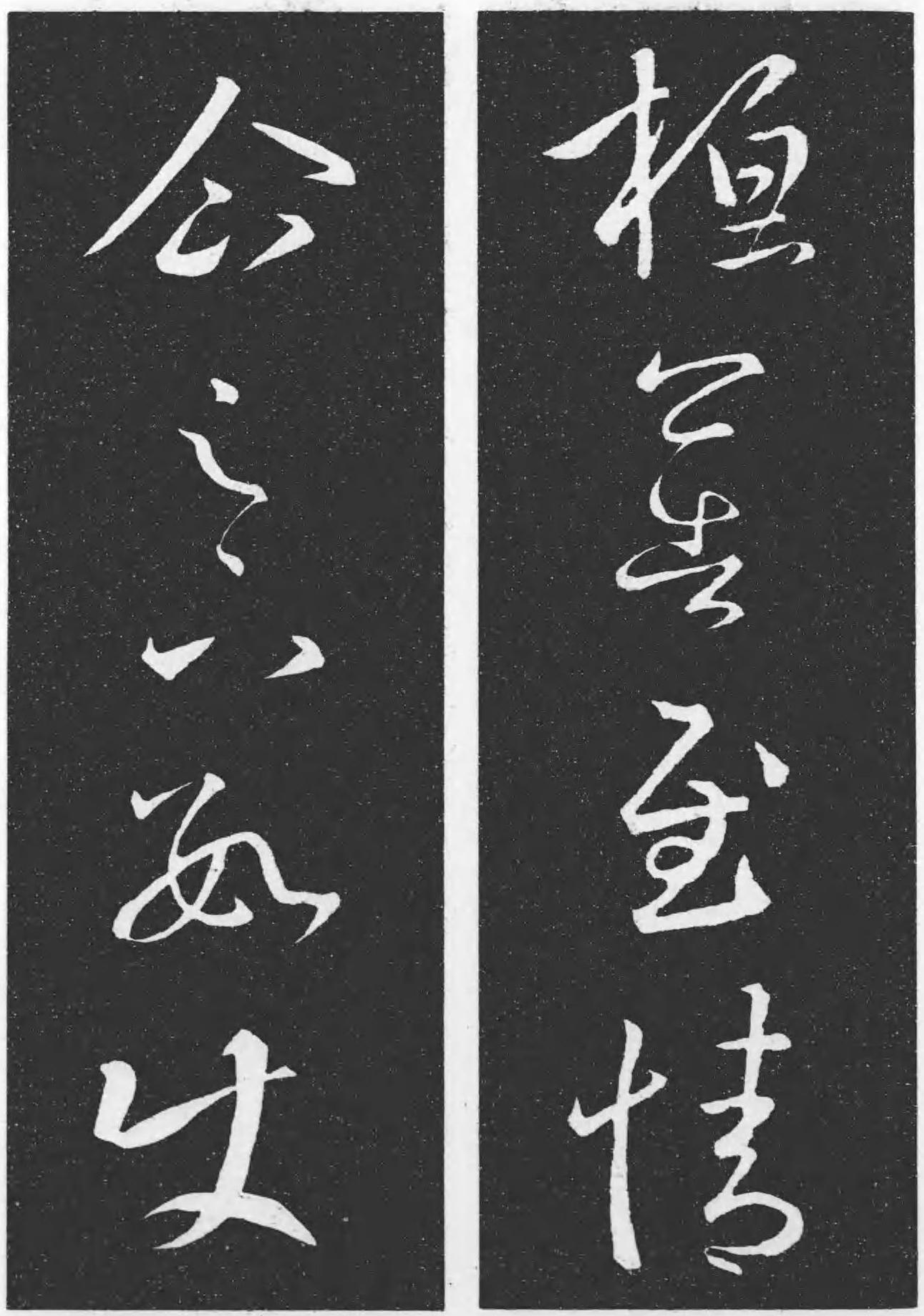


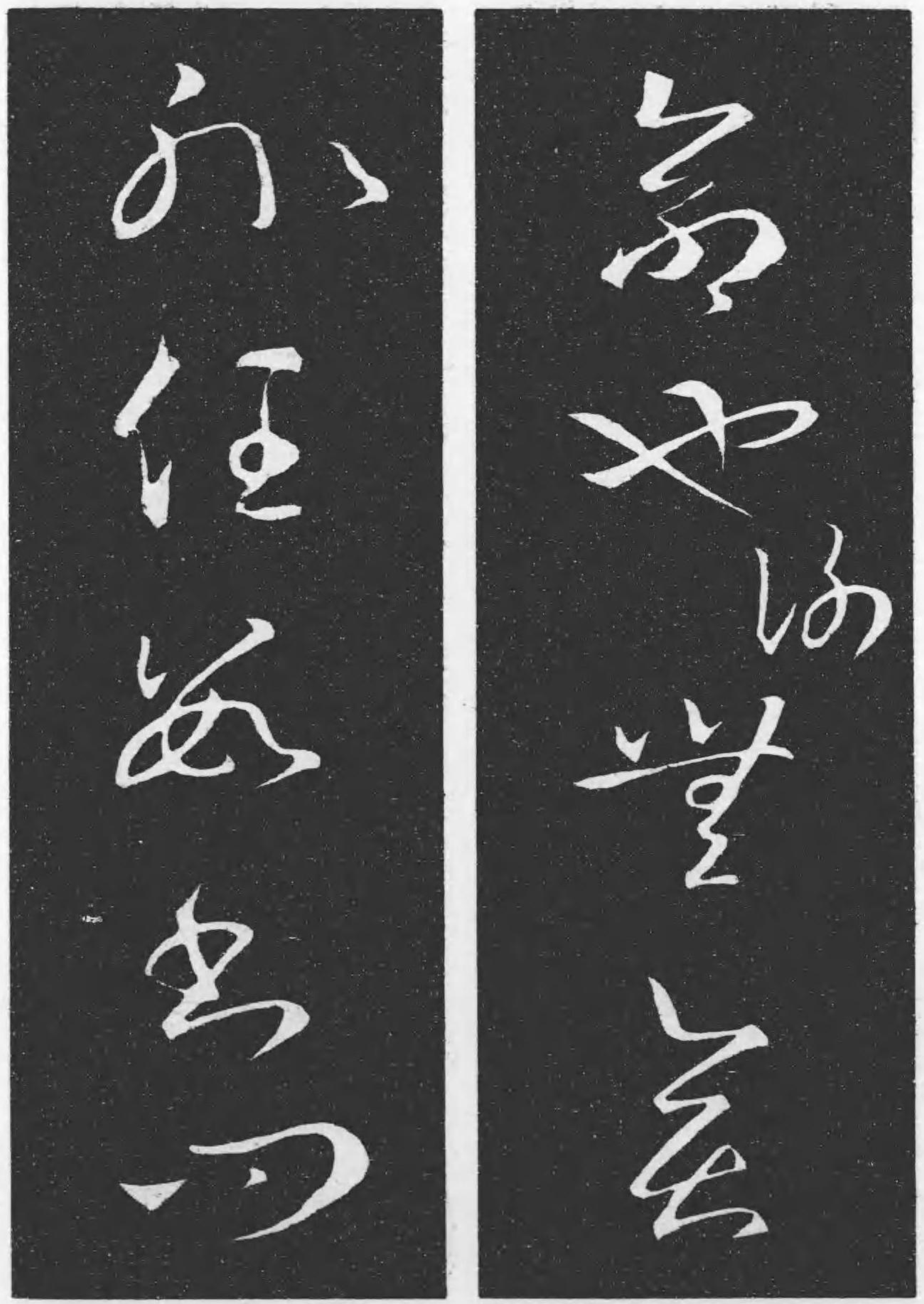
旦夕都邑動靜 靜和。



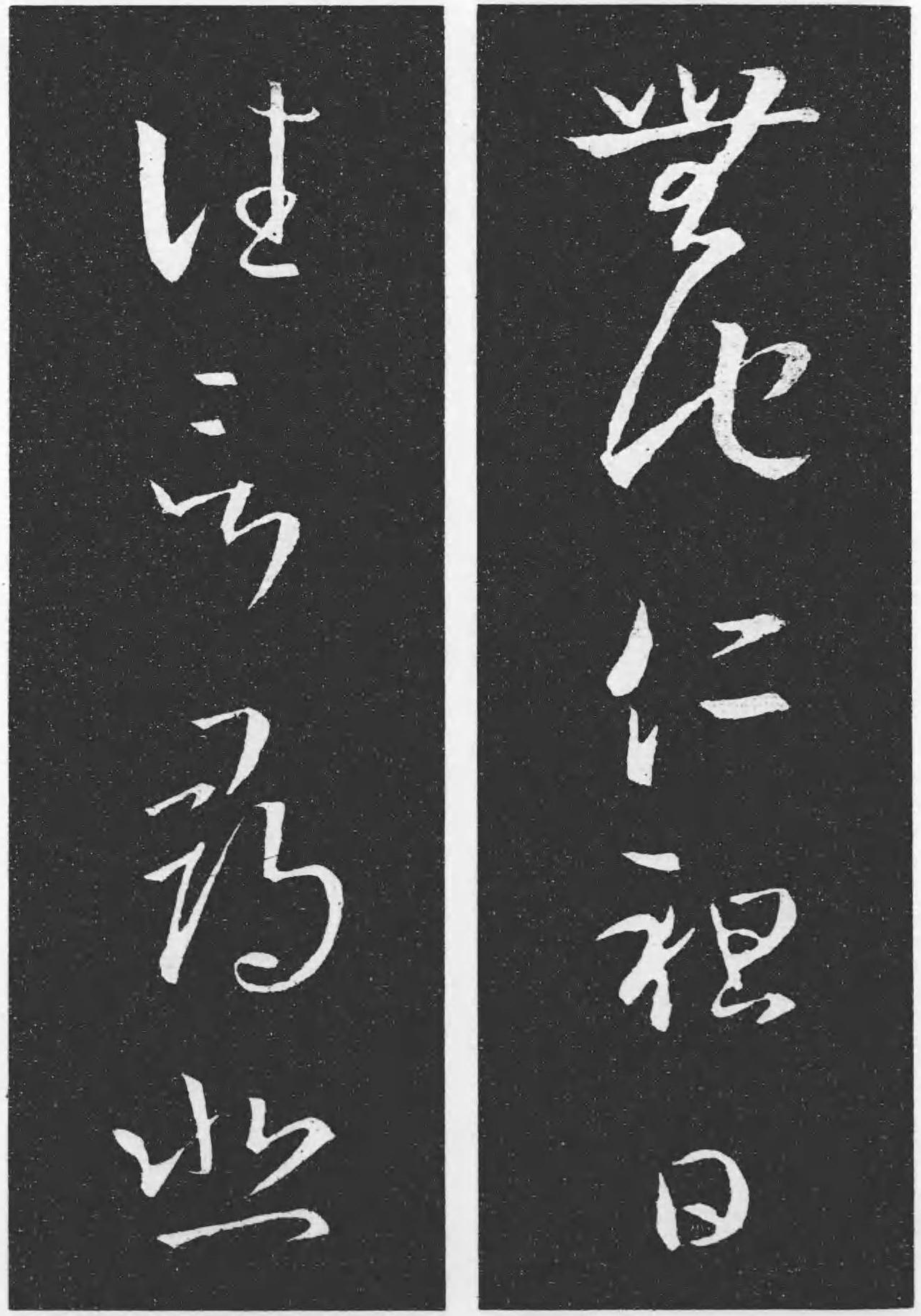
想足下使還。具時。州將

桓公告慰 情企足下數使

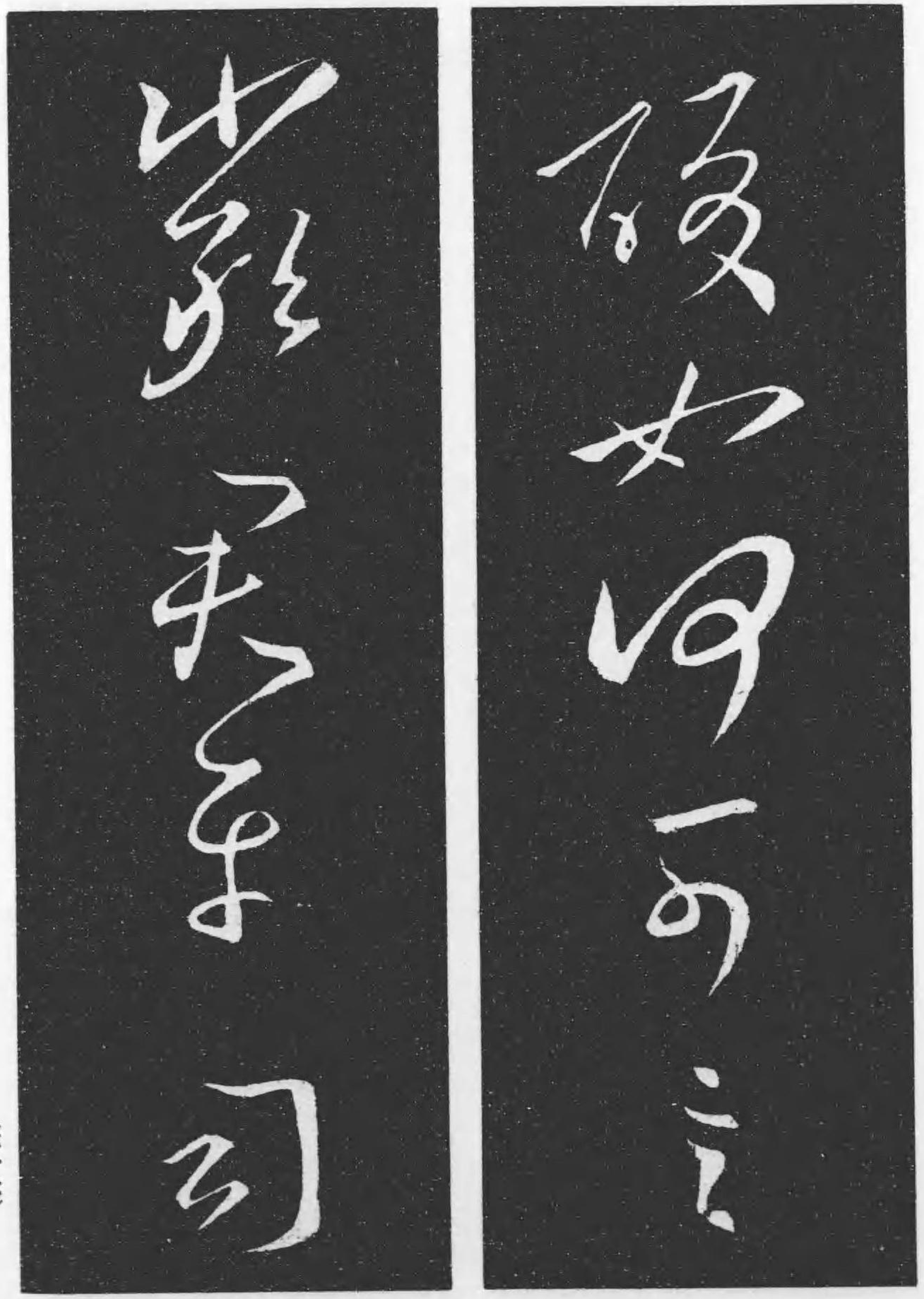




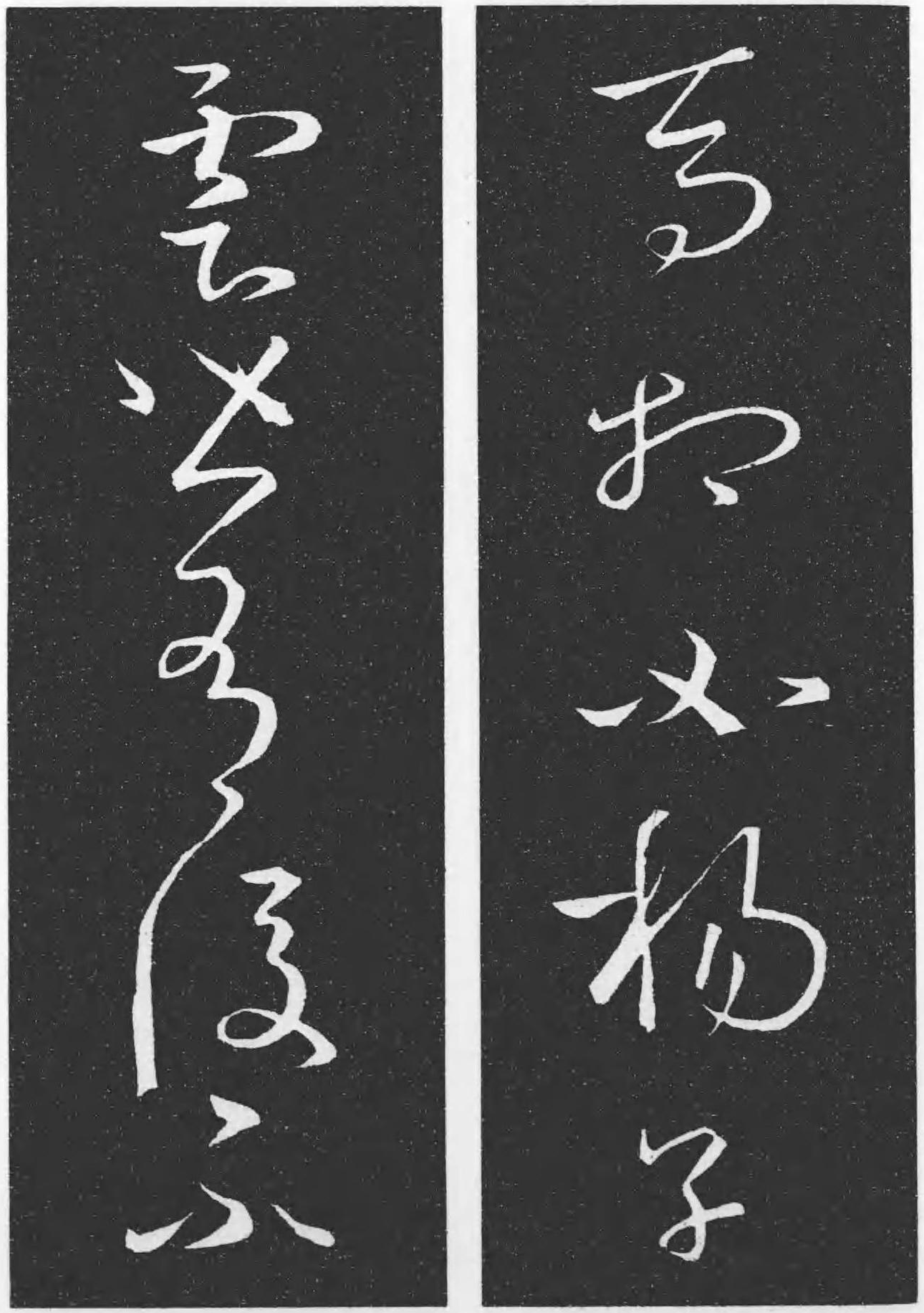
命也。謝無奕外任。欽書問。



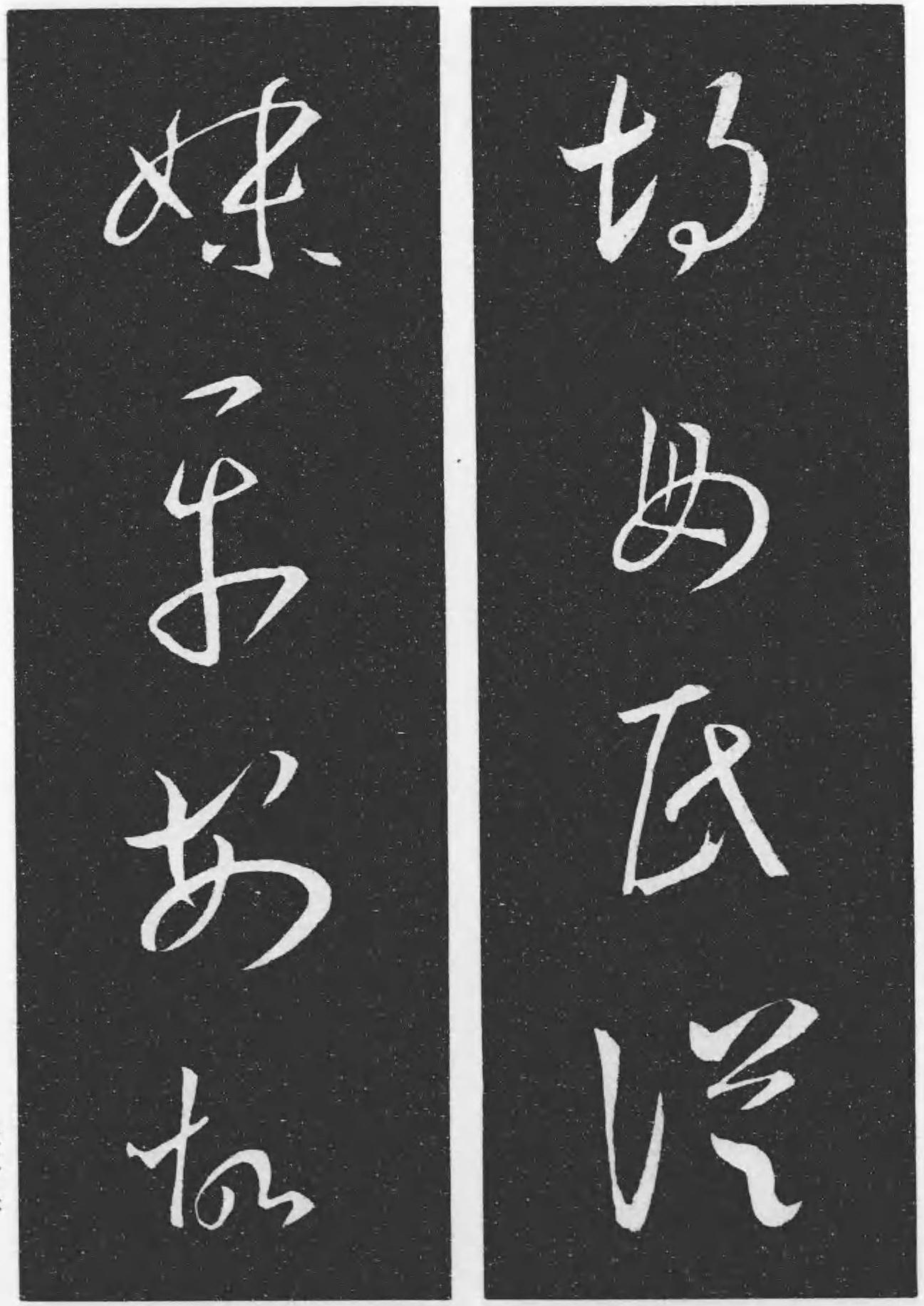
無他。仁風日往。言尋悲



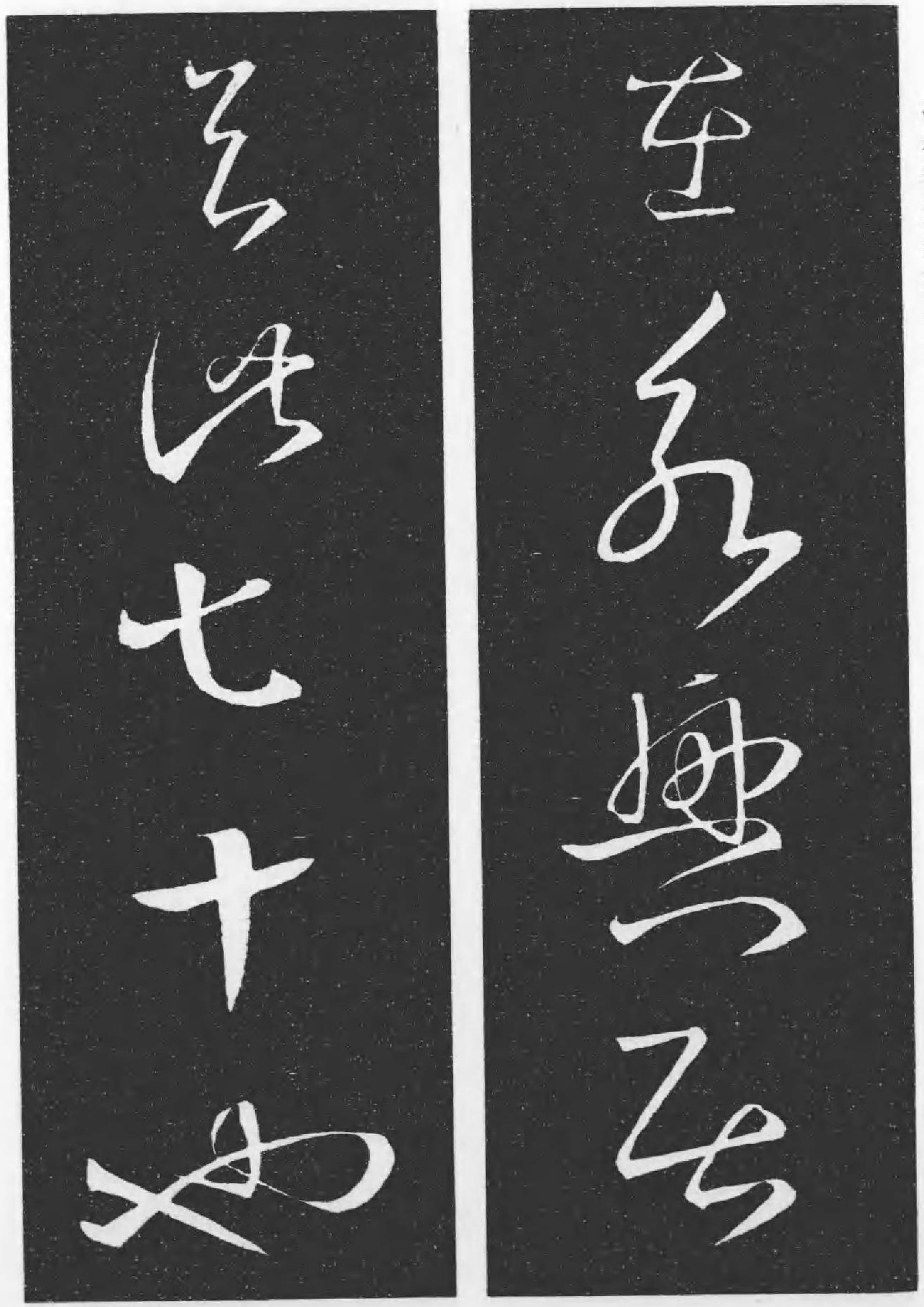
陵。如何可言。嚴君平。司



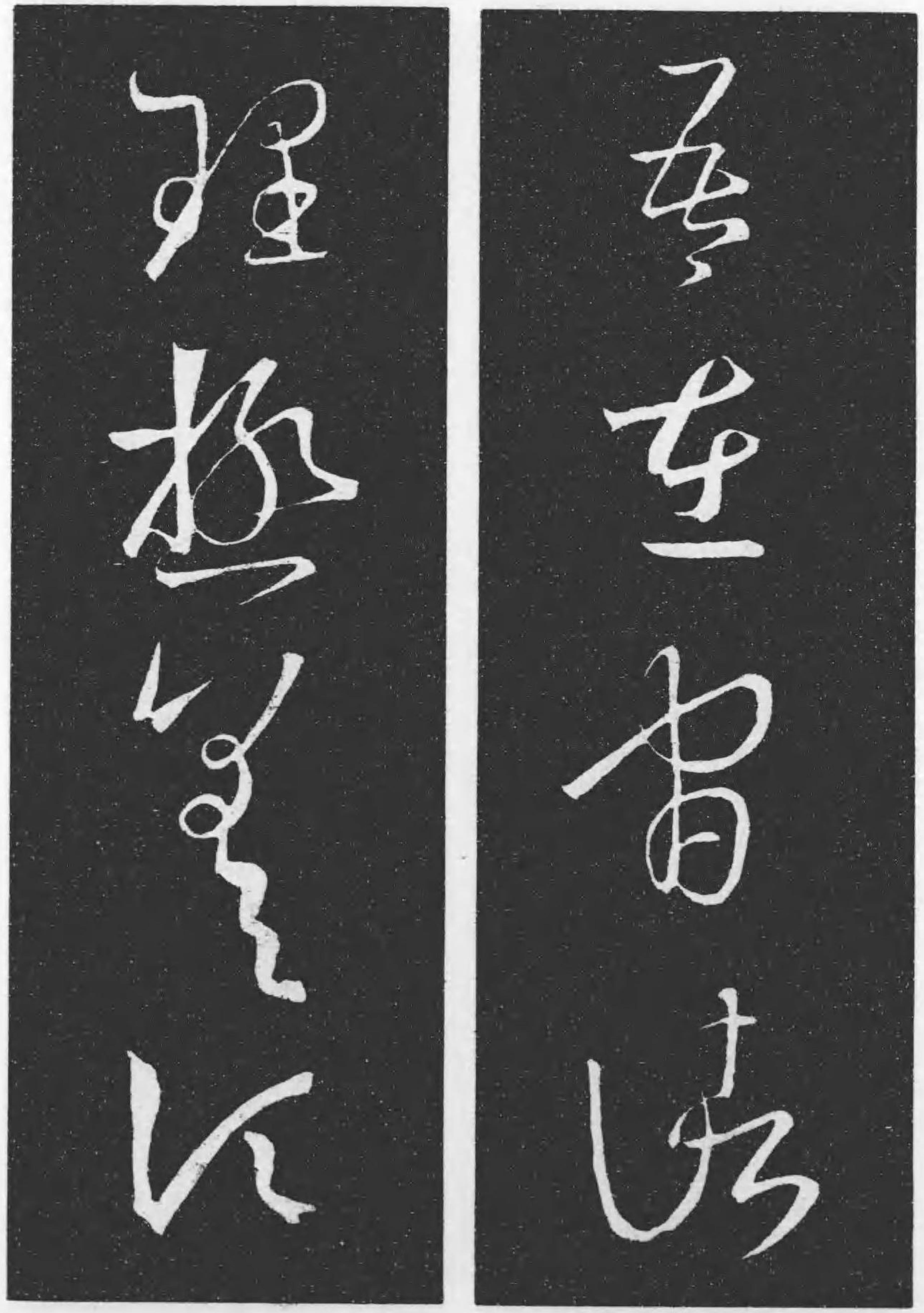
馬相如。楊子雲皆有後不。



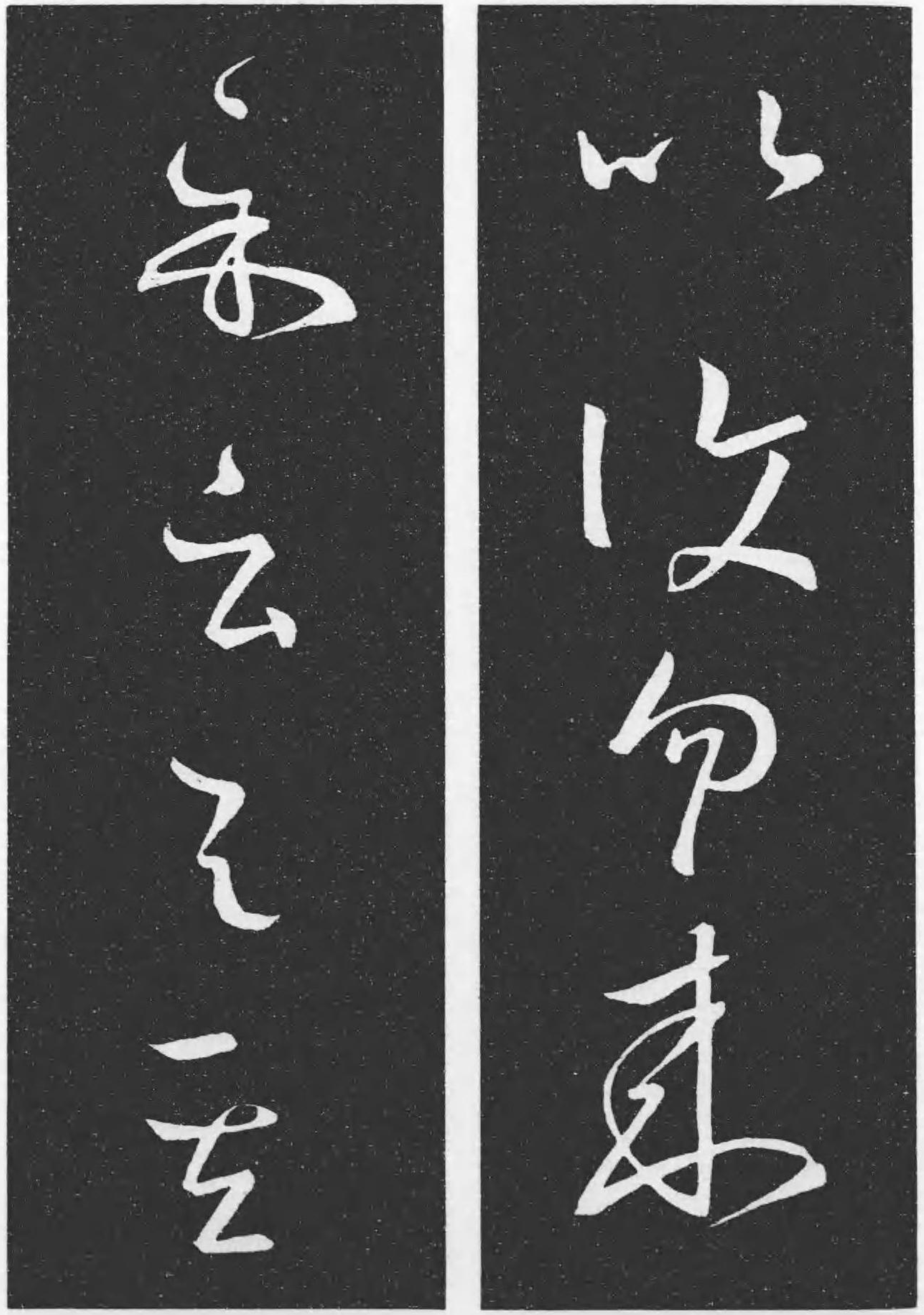
胡母氏從妹平安。故



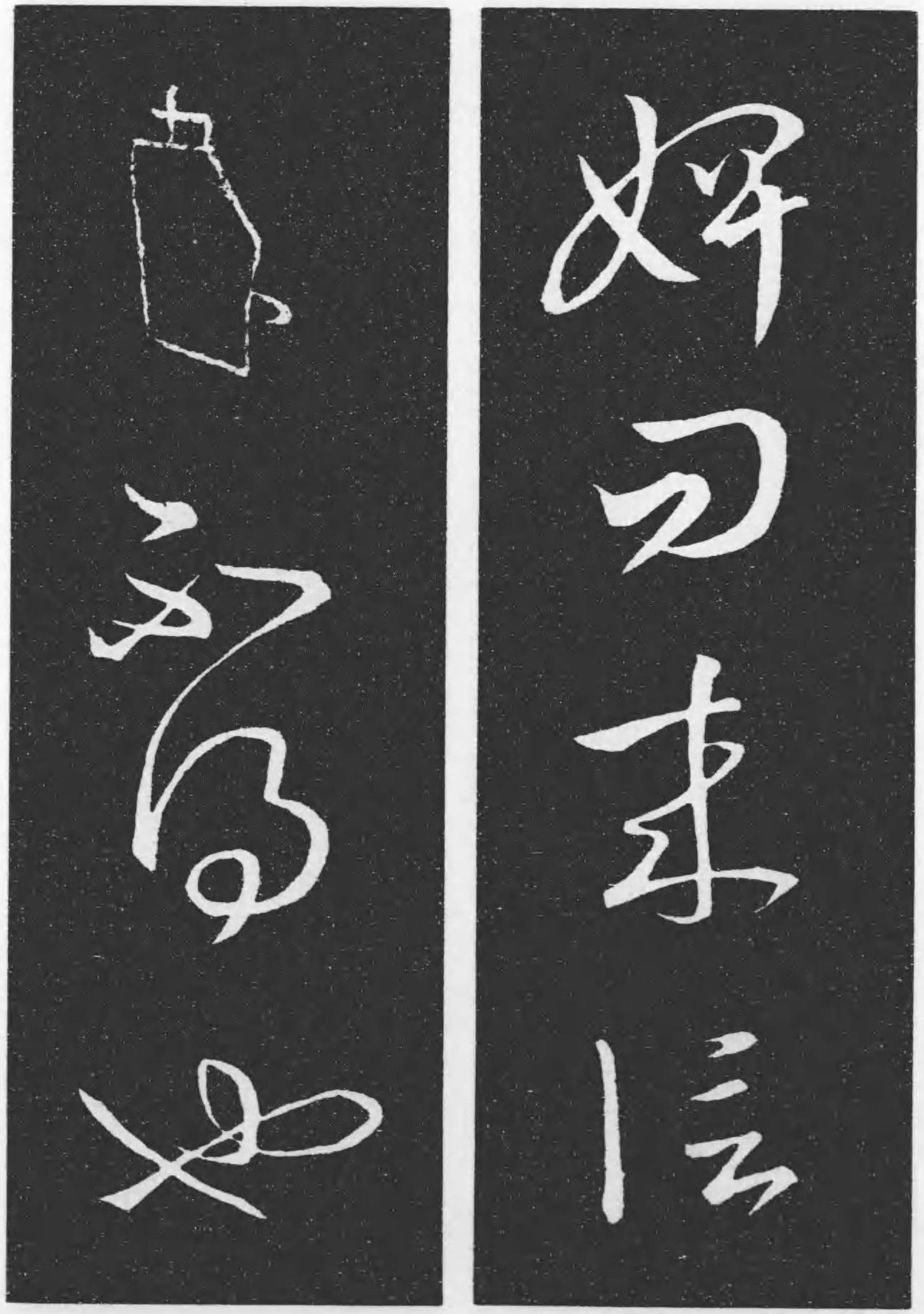
在永興。居去此七十也。



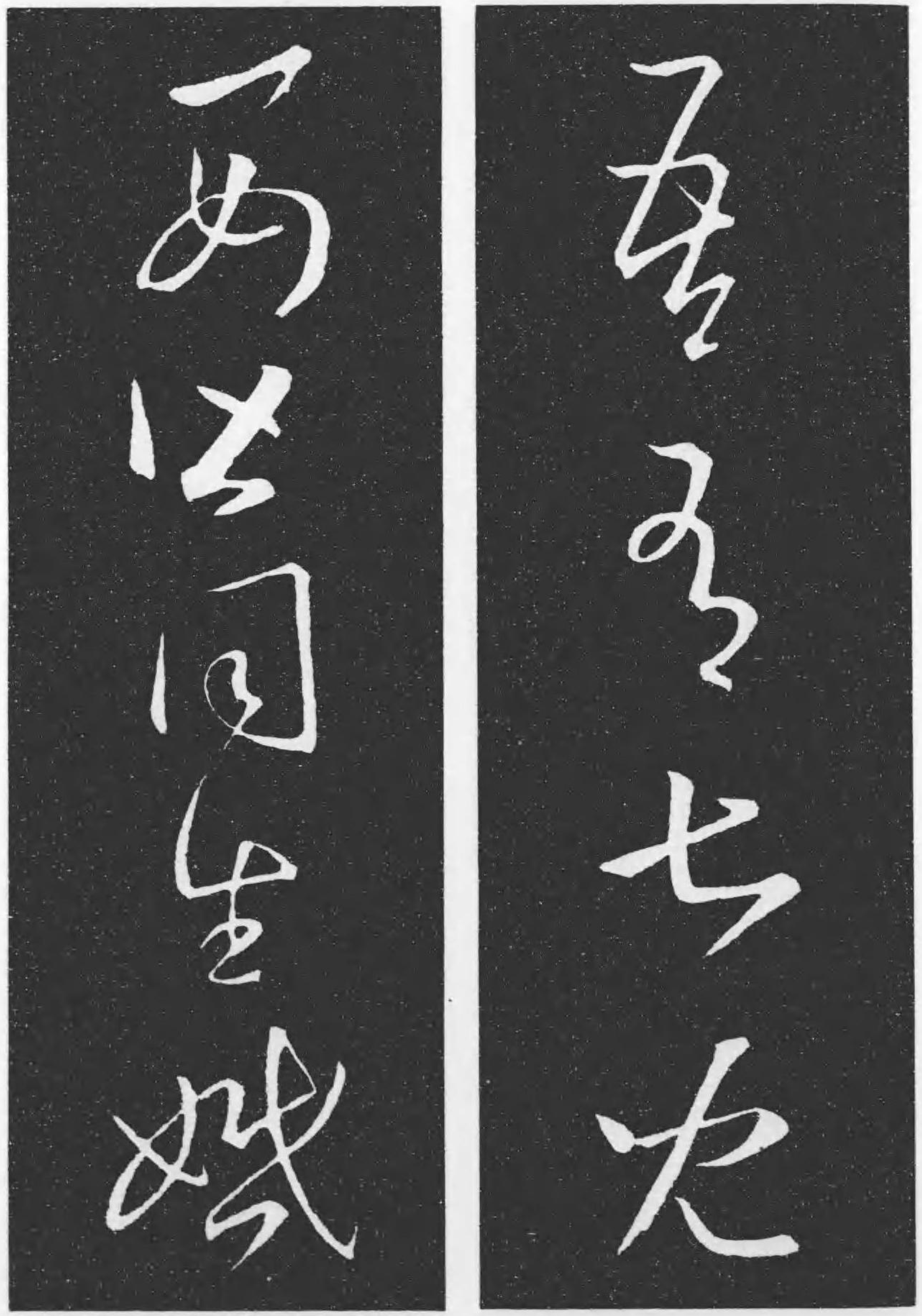
吾在官。諸理極差。頃



比復勿々。來示云與其

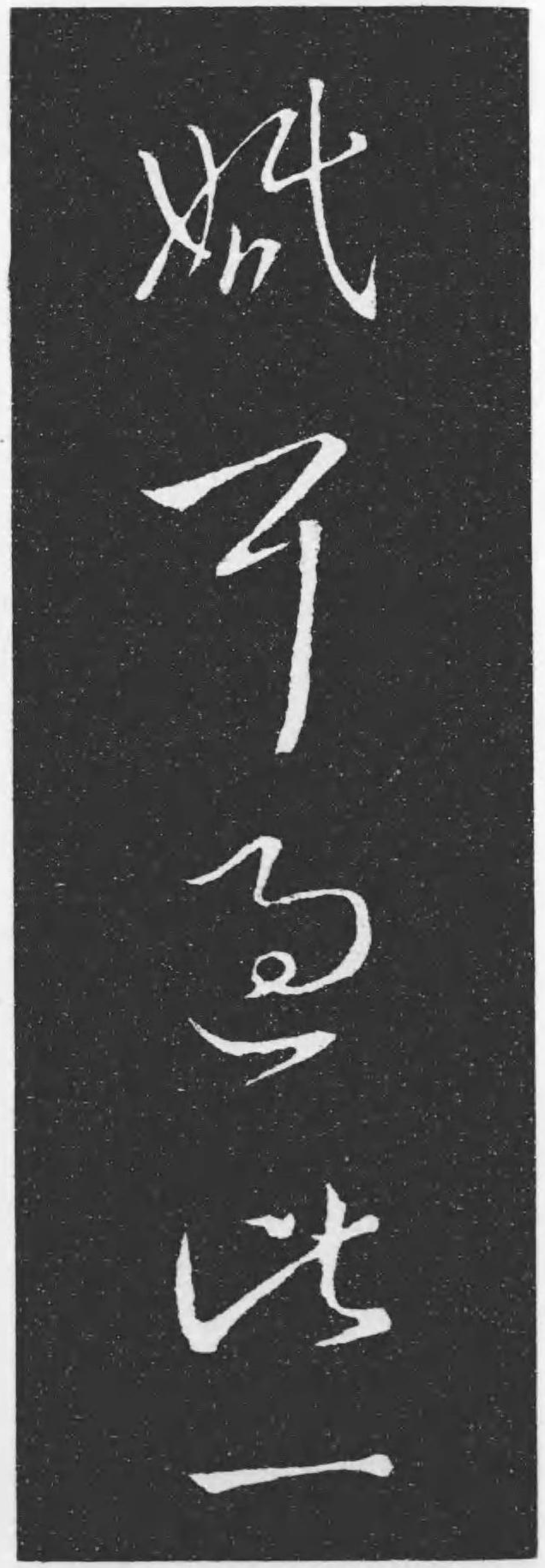


甥。聞來信不得也。



吾有七兒一女。皆同生。婚

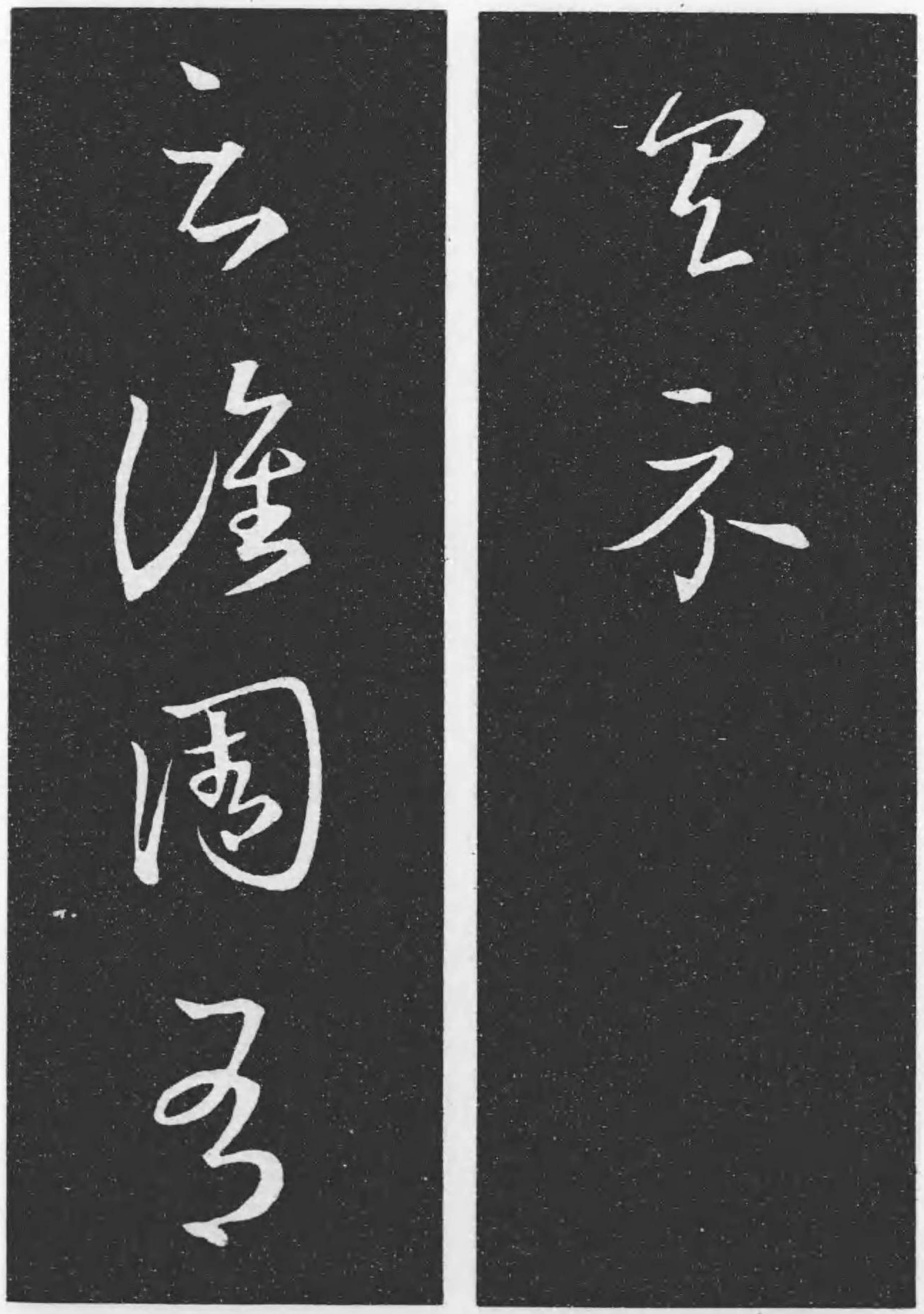
娶以畢。唯一少者尙未



婚耳。遇此一婚。便得至彼。

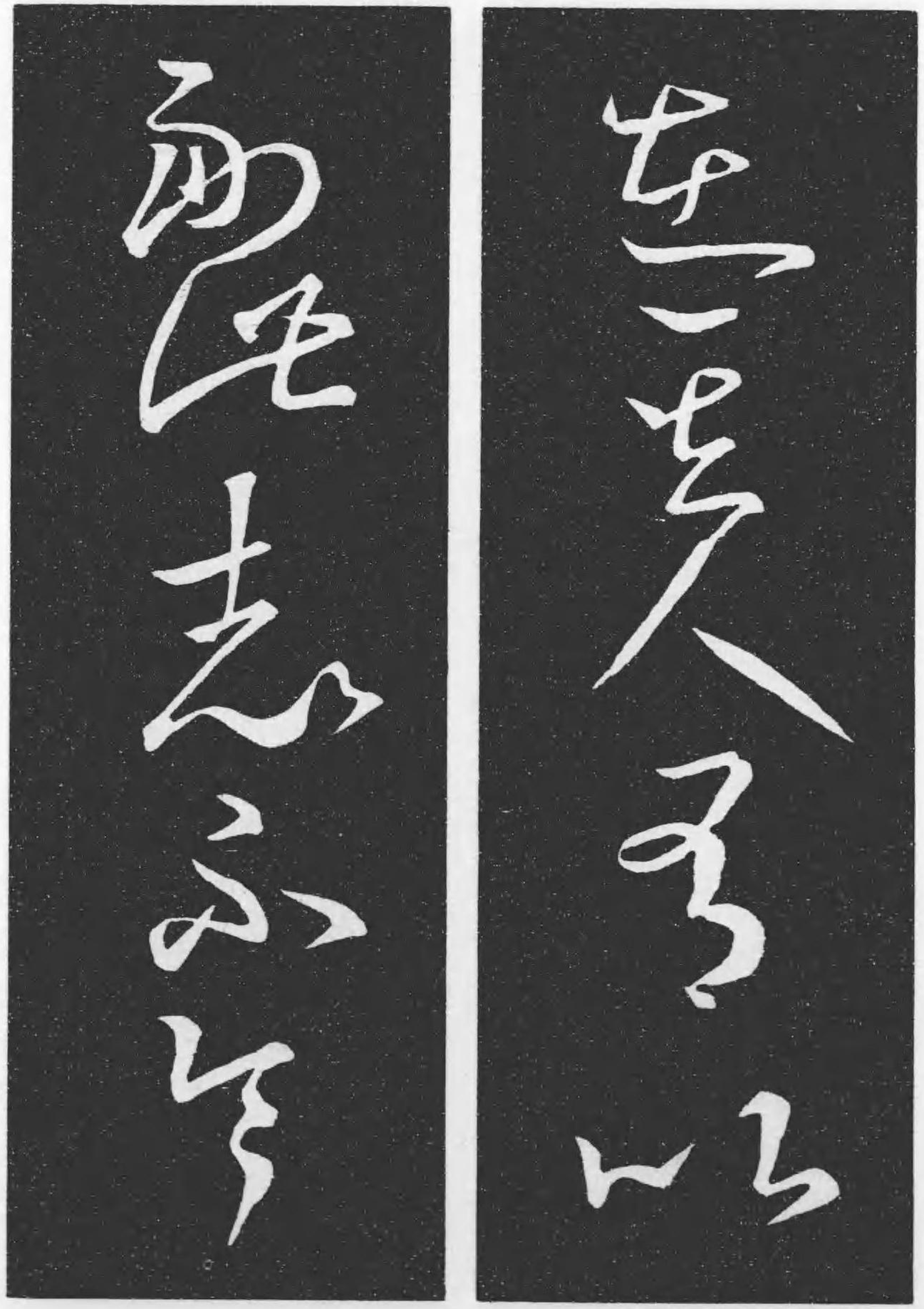
今內外孫有十六人。足慰

目前。足下情至委曲。故



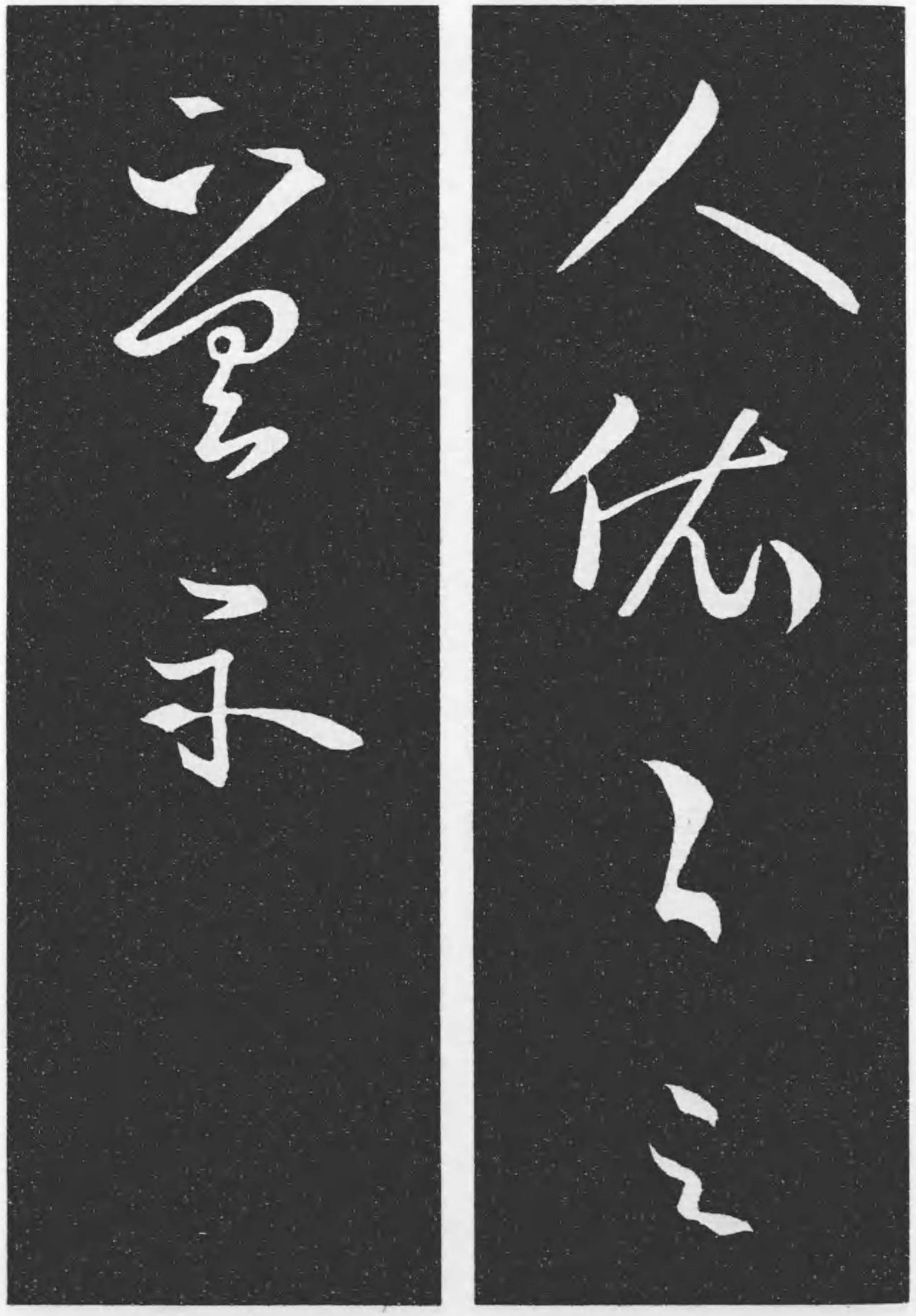
具示。云譙周有

孫。□高尚不出。今爲所。



在其人有以副此志不。會

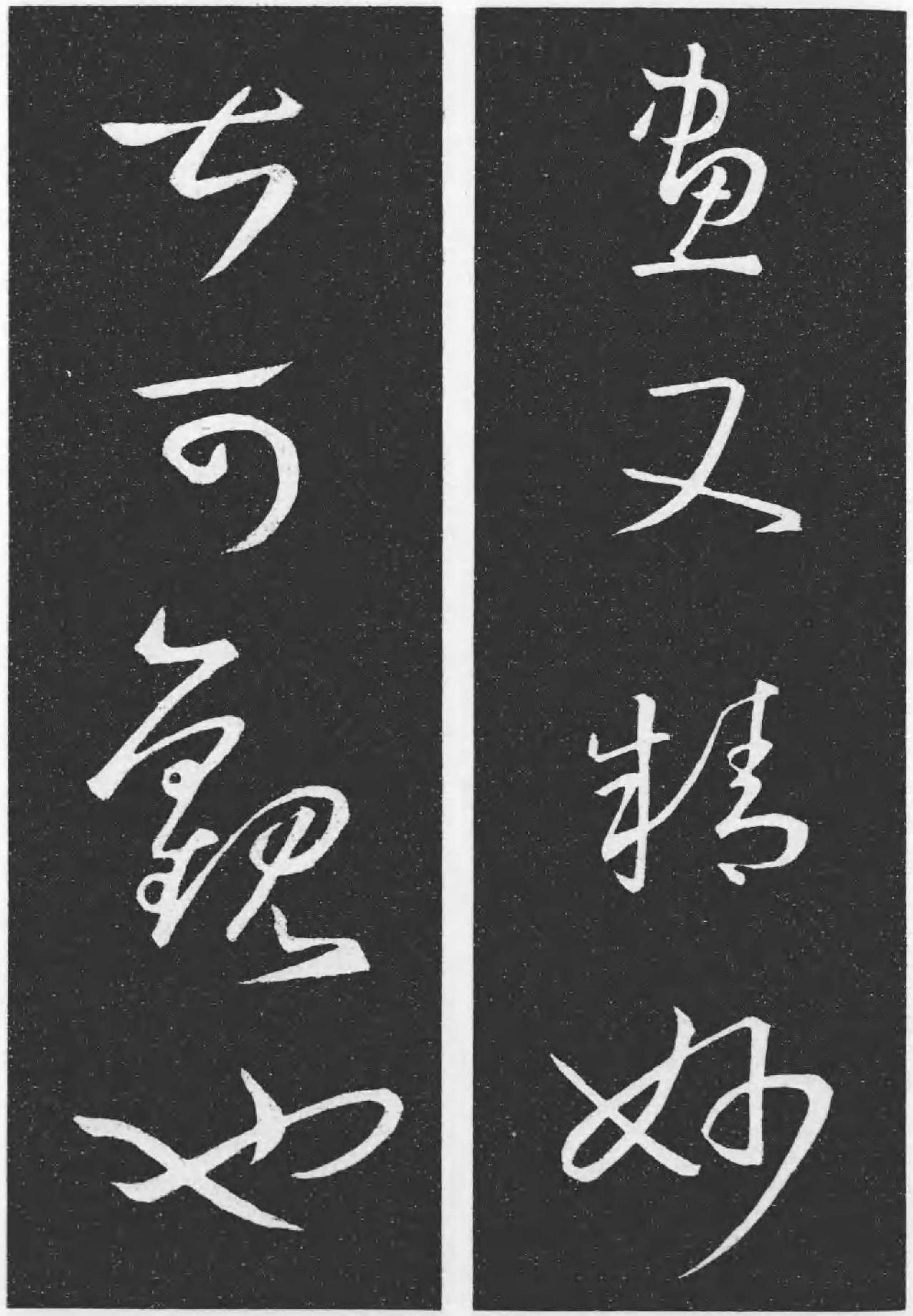
人依々足下具示。



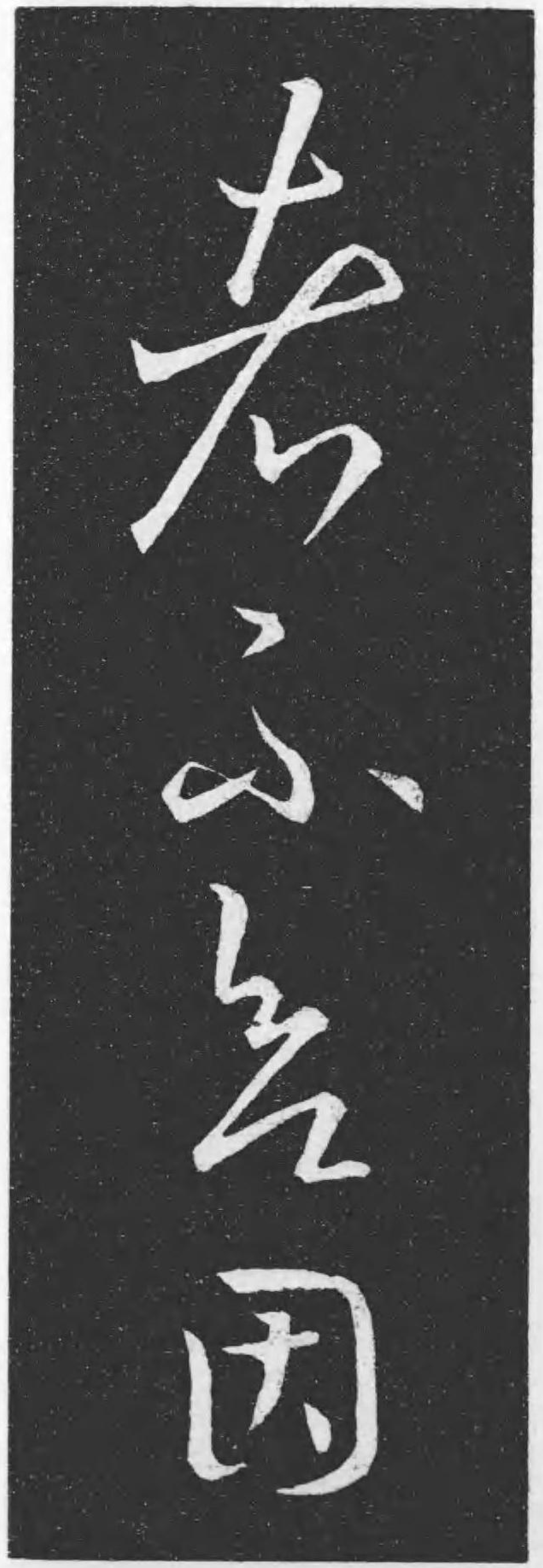
知有漢時講堂在。是

漢何帝時立此知畫

三皇五帝以來備有。

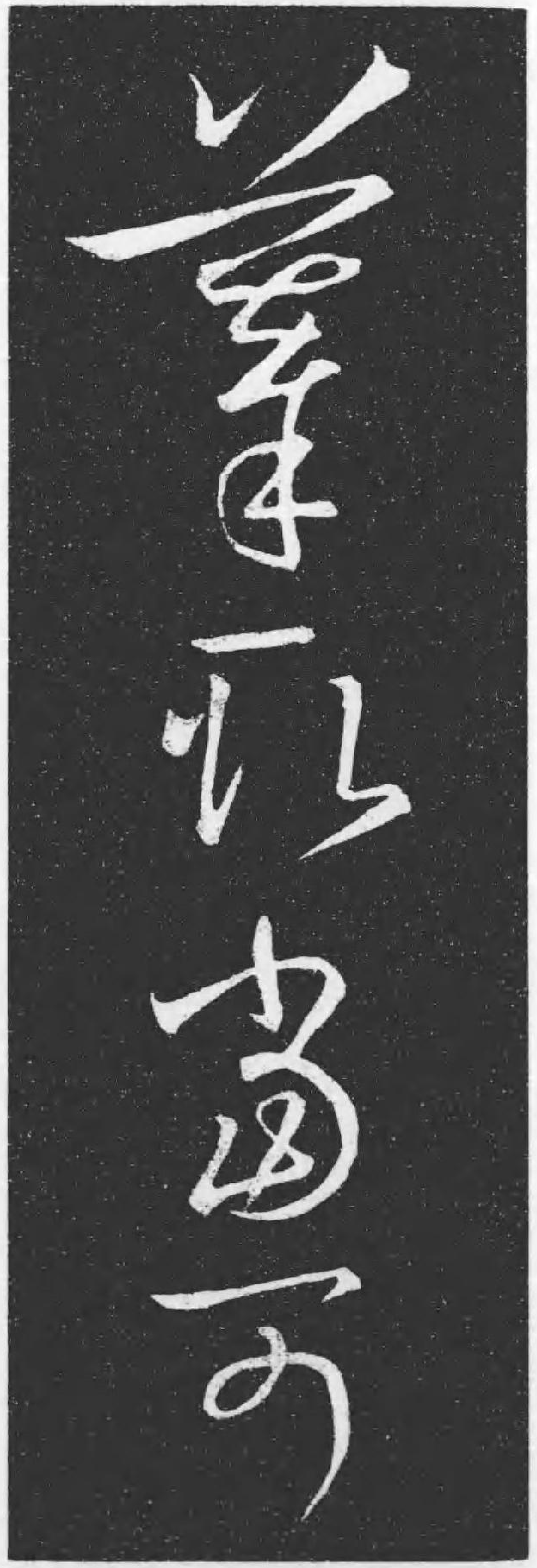


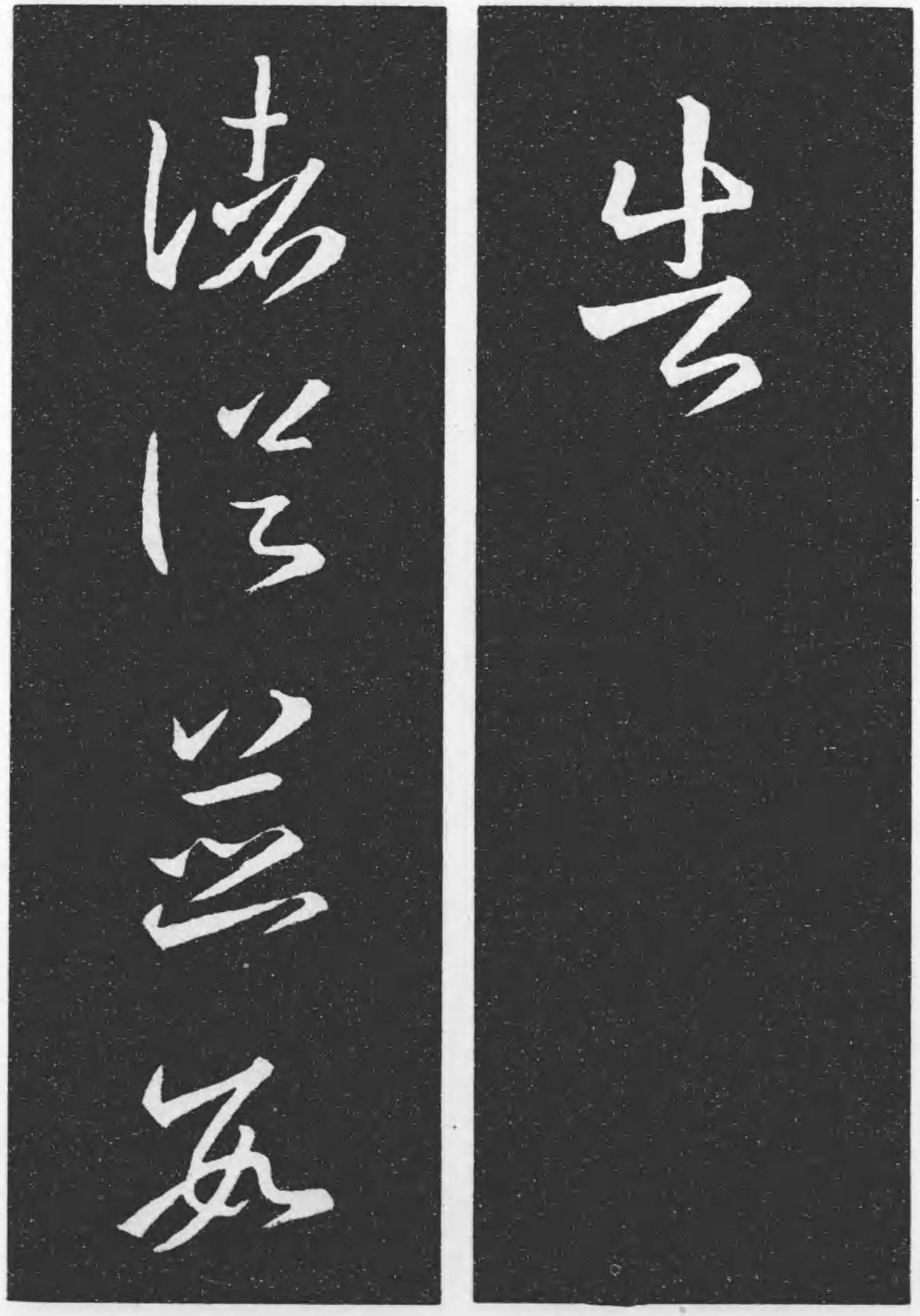
書又精妙甚可觀也。



彼有能畫者不欲因

摹取。當可得不信具



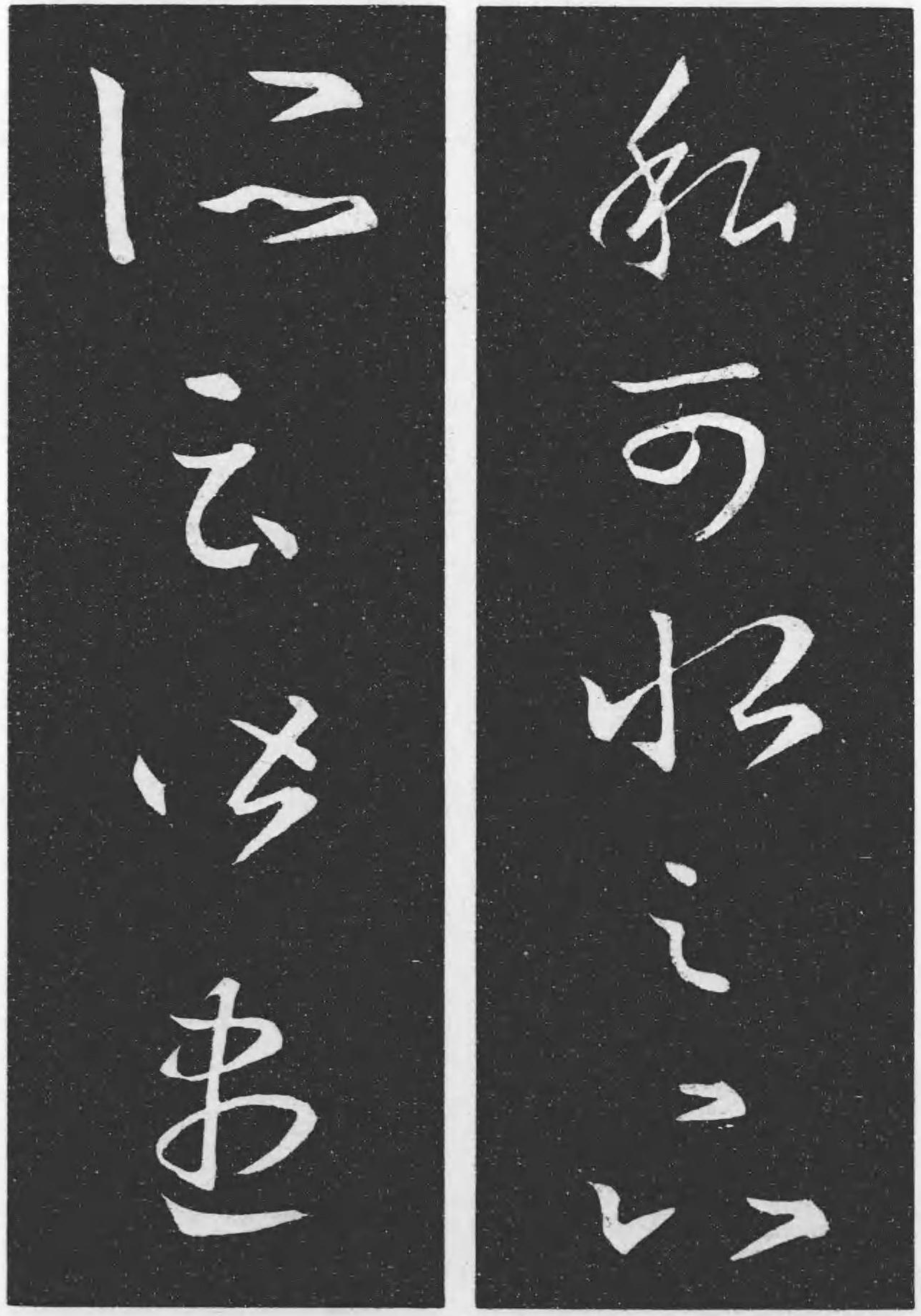


告諸從並數

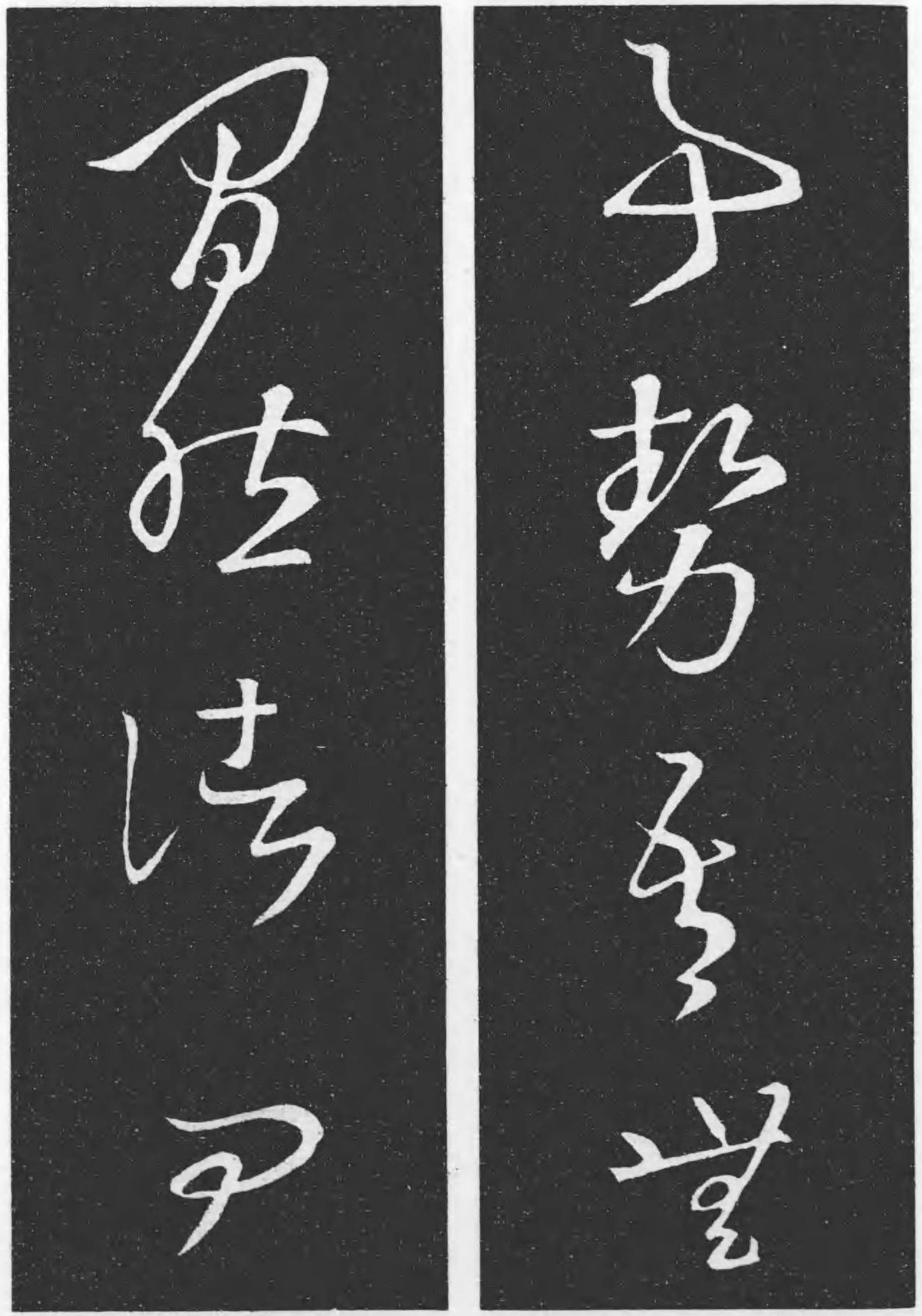
有問。粗平安。唯修載

在遠。音問不數。懸情。

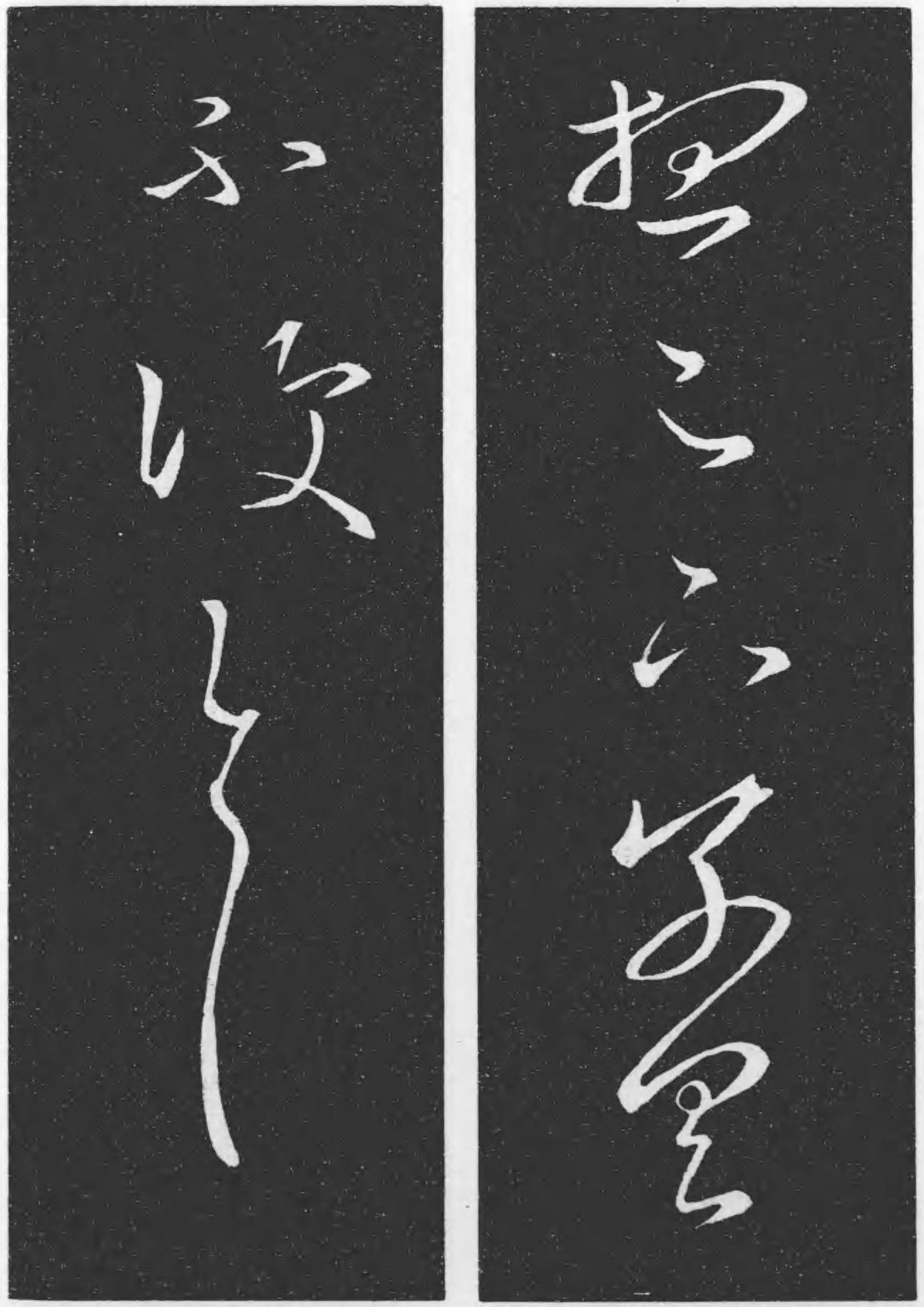
司州疾篤不果西。公



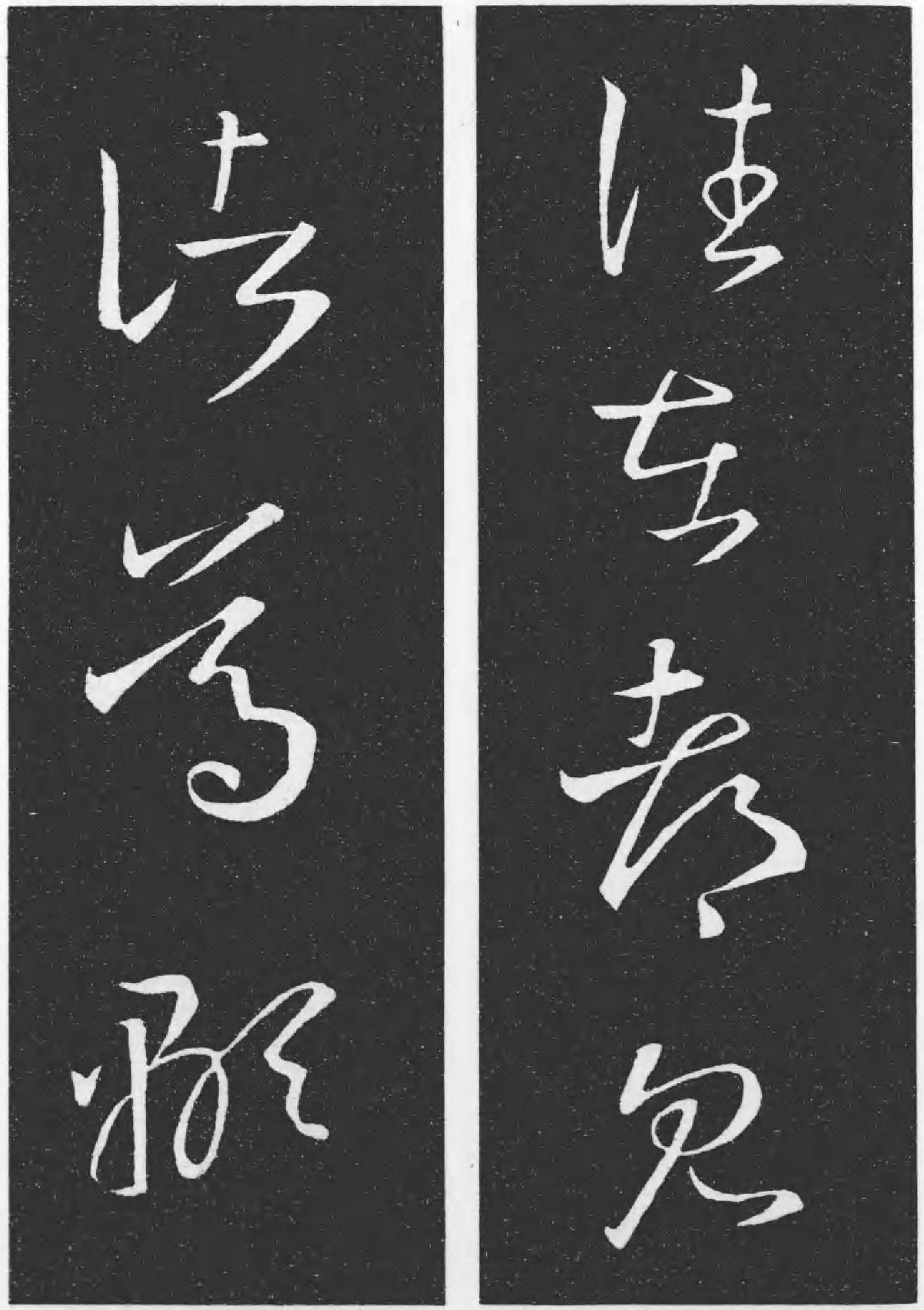
私可恨。足下所云。皆畫



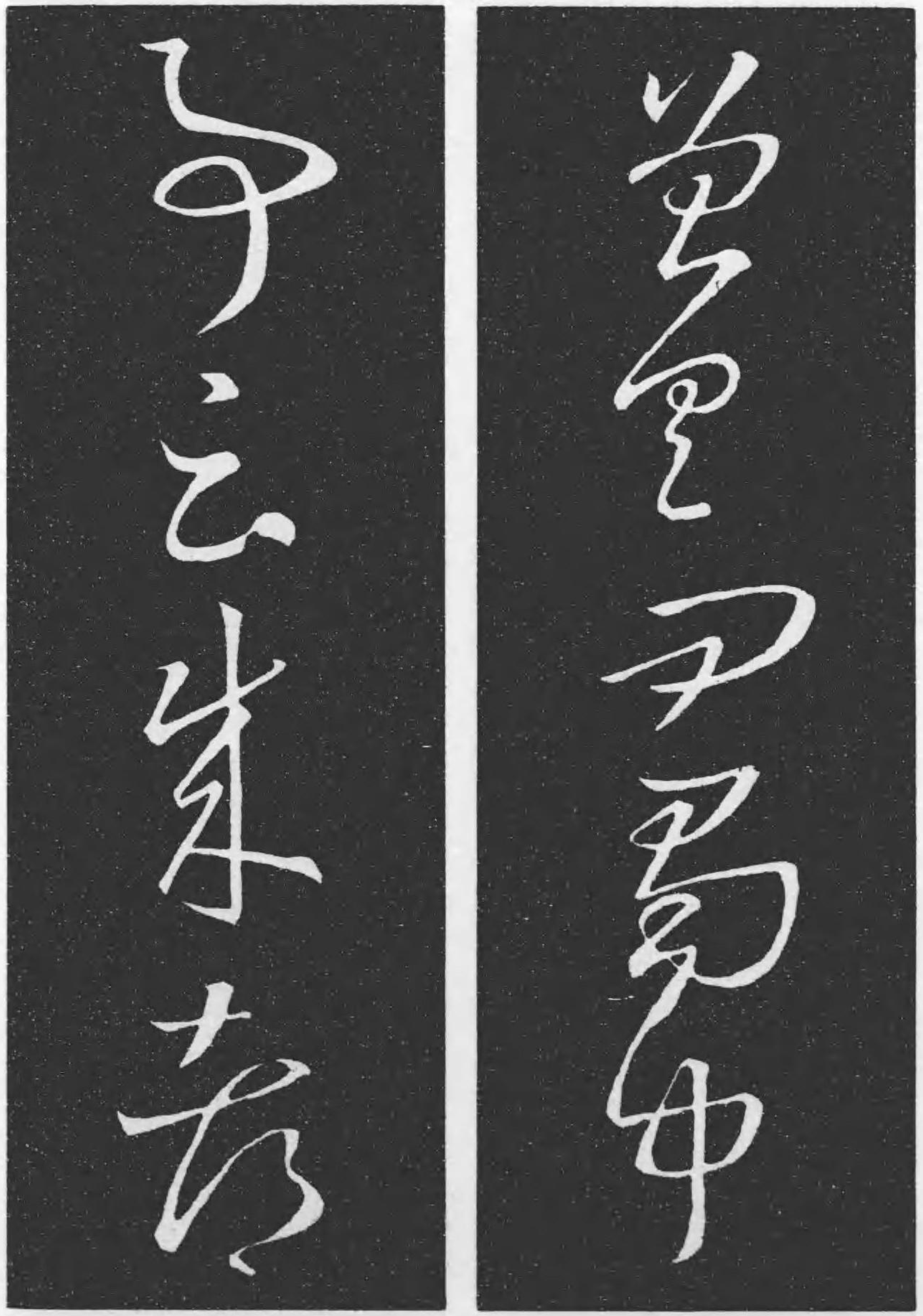
事勢。吾無間然諸問



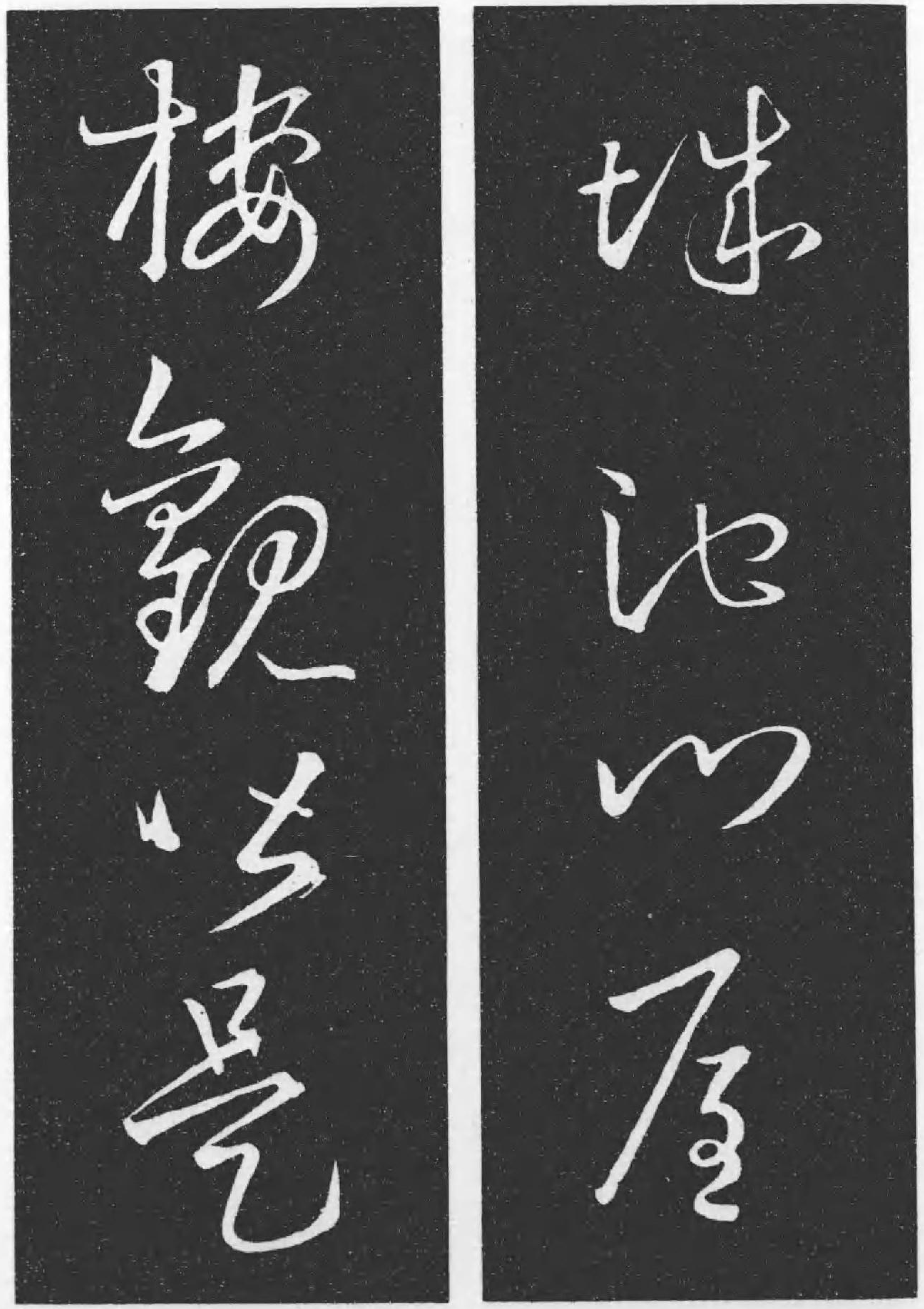
想足下別具。不復一々。



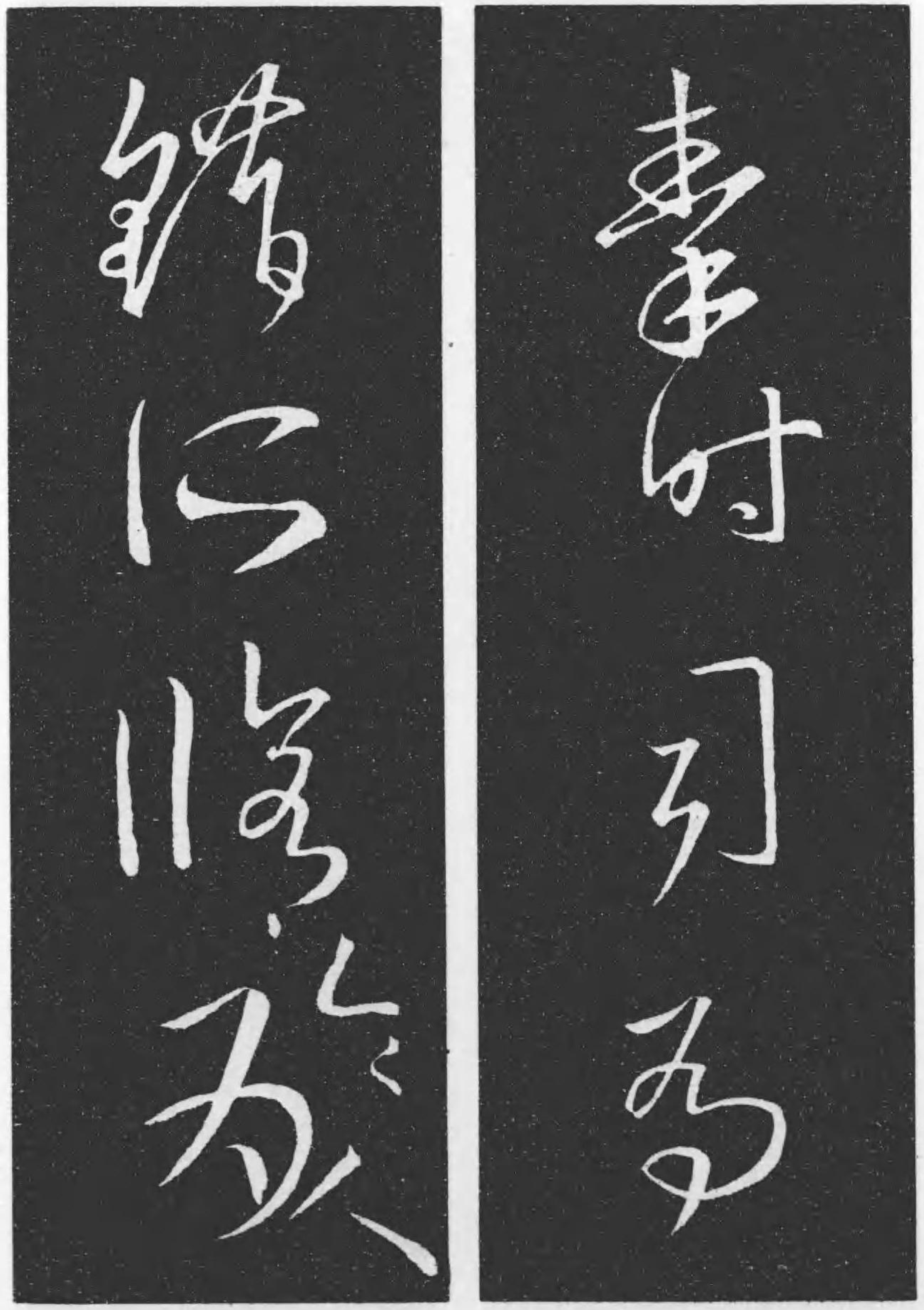
往在都。見諸葛顯



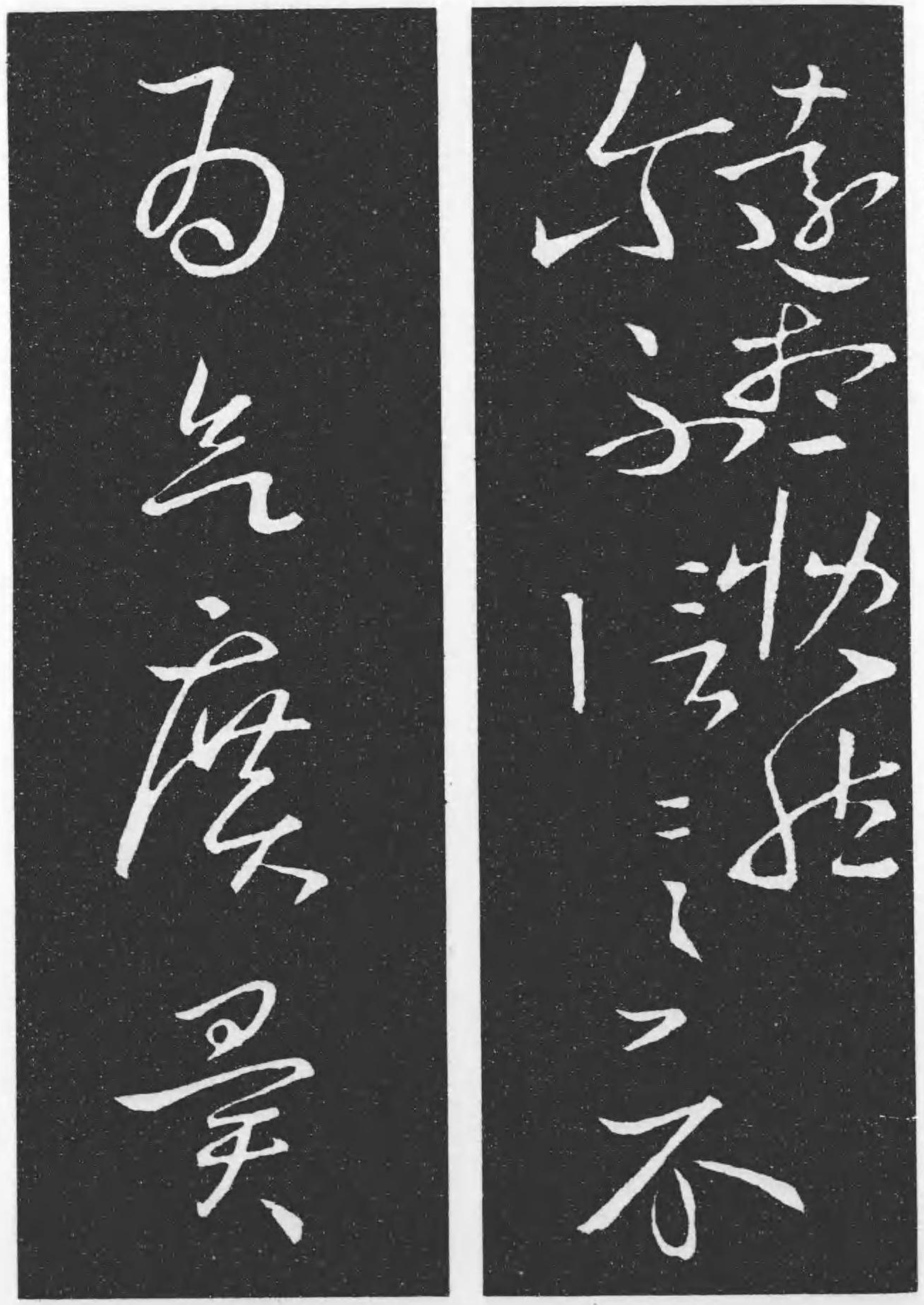
曾具問蜀中事。云。成都



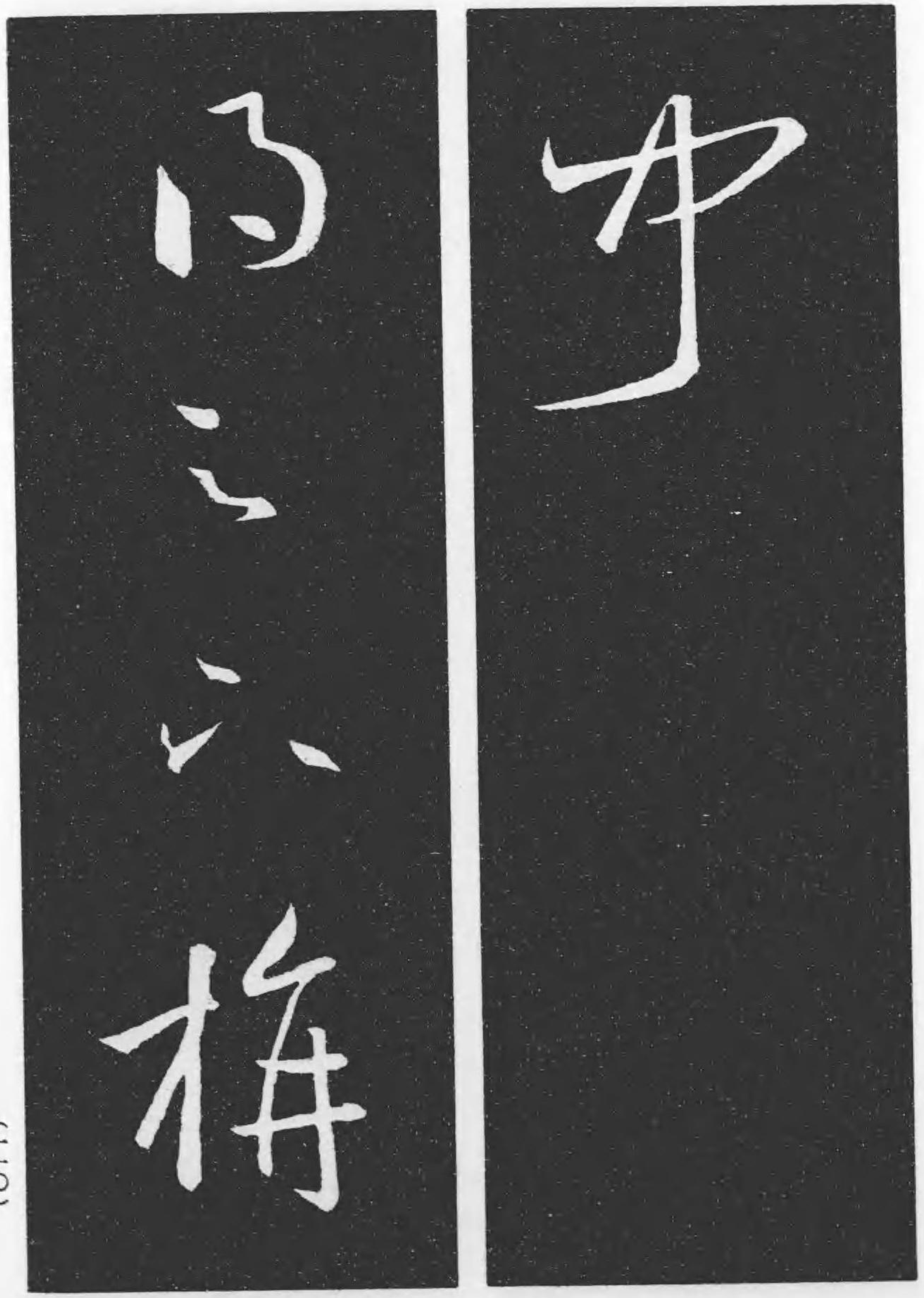
城池門屋樓觀。皆是



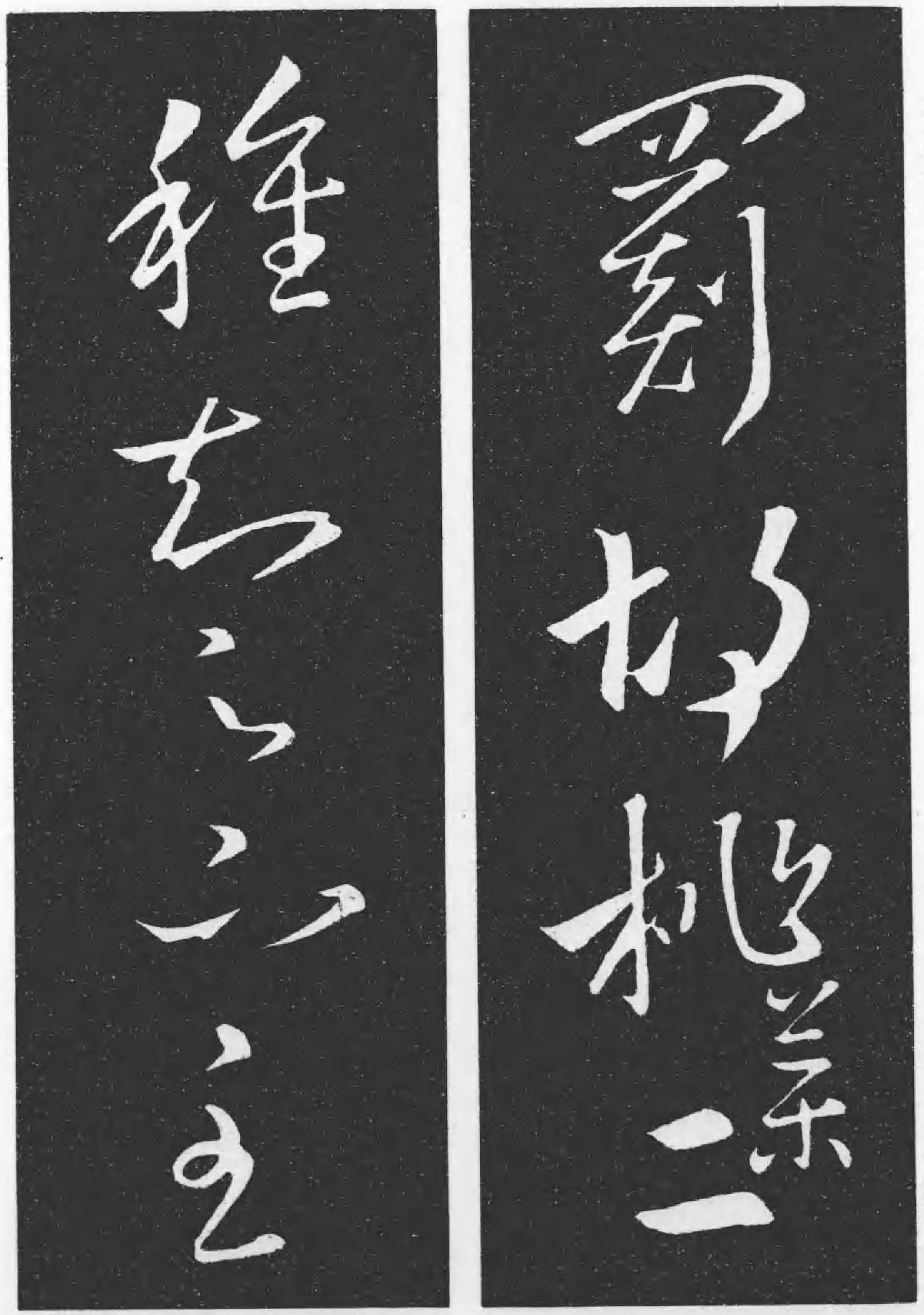
秦時司馬錯所修。（令人遠想慨然。）爲



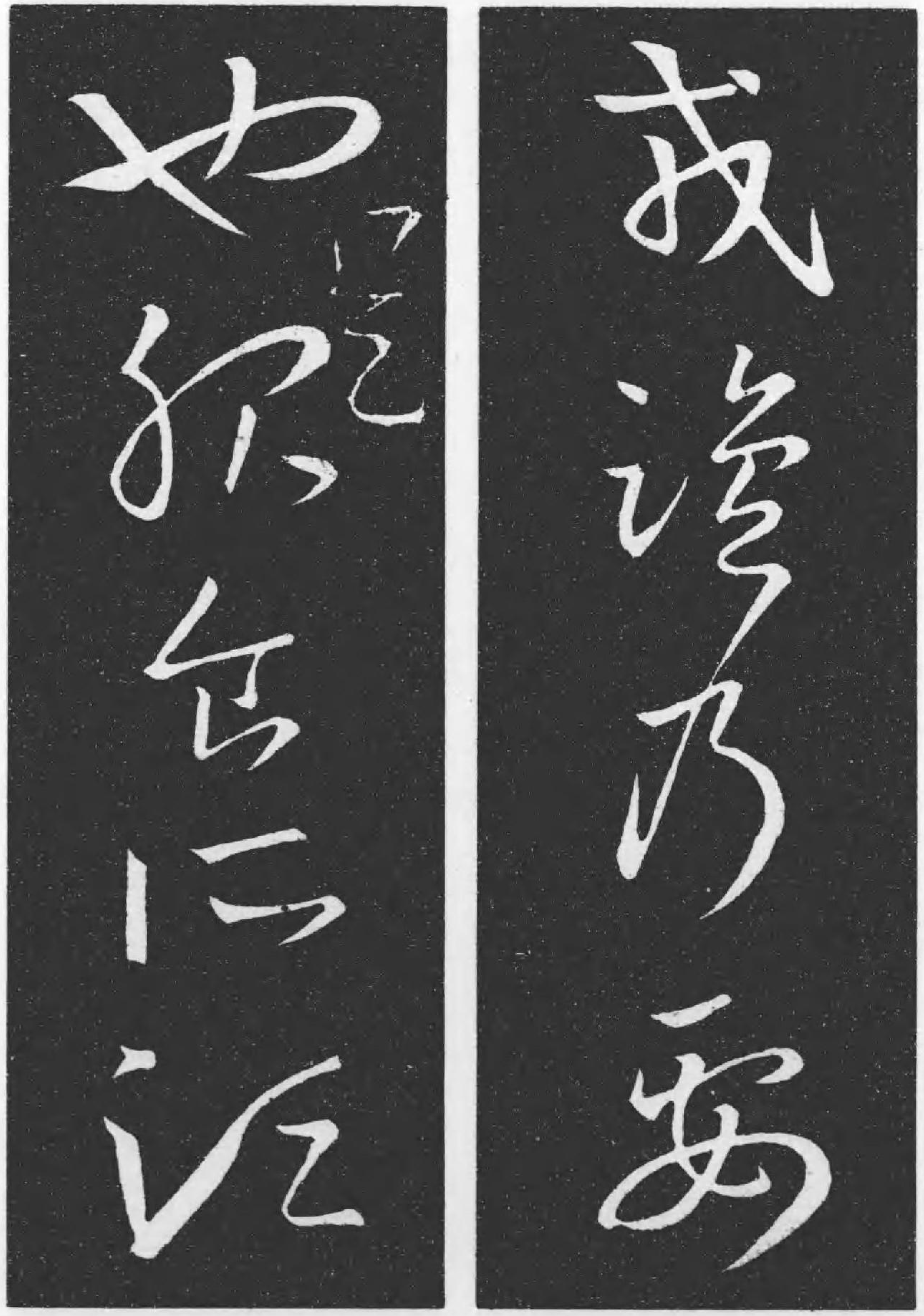
爾不。信具示。爲欲廣異



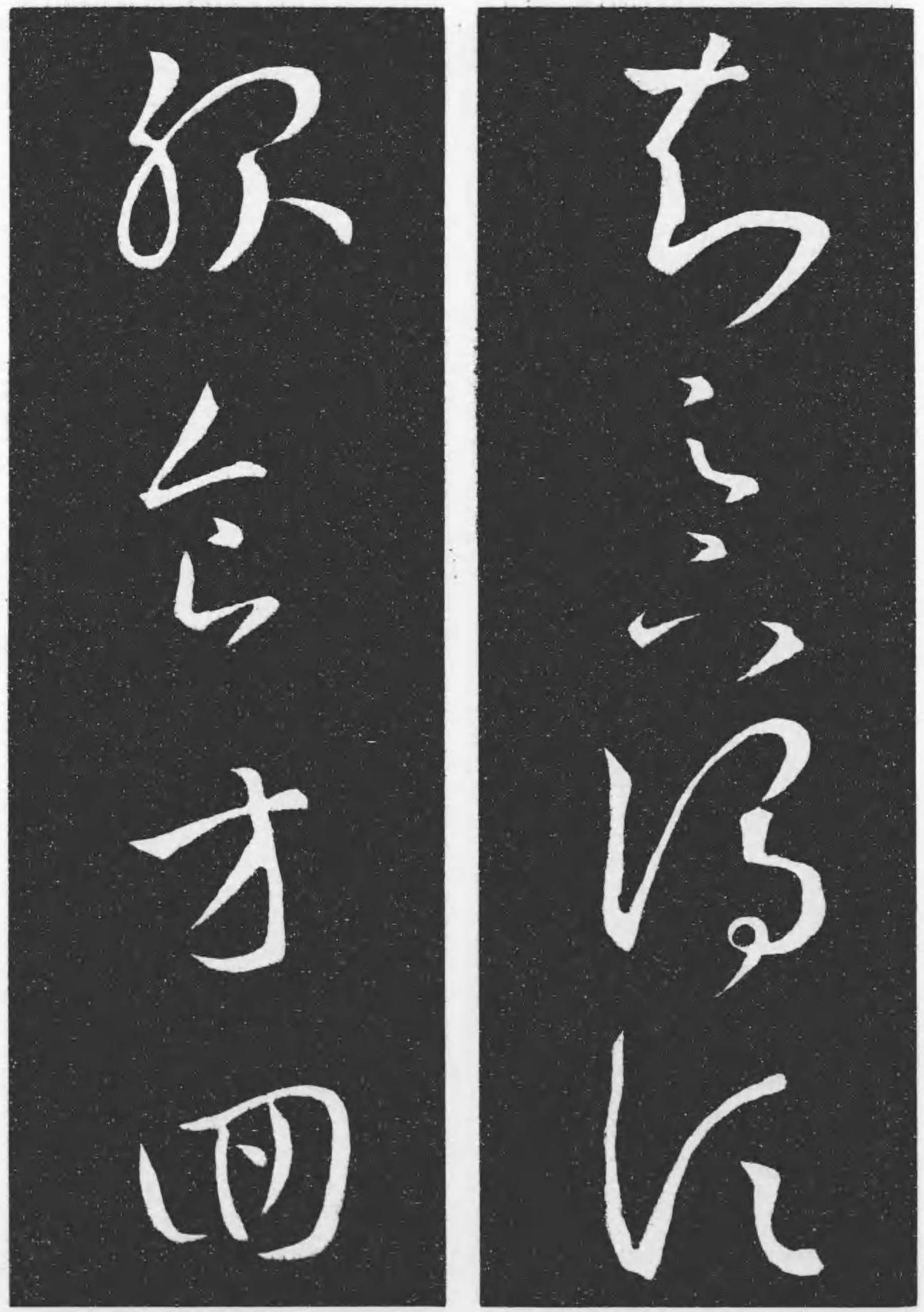
問。得足下旃



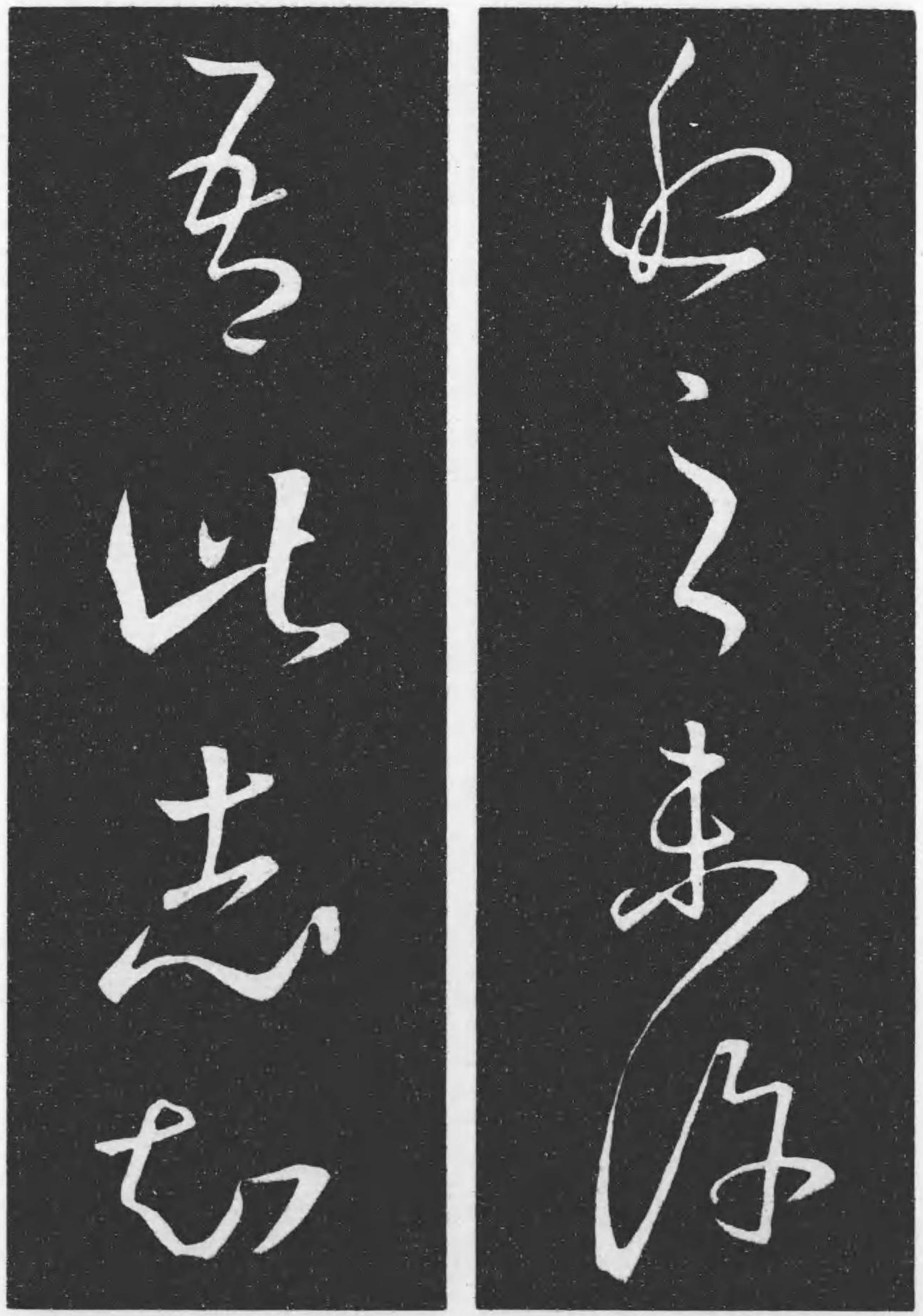
劉胡桃柰二種。知足下至



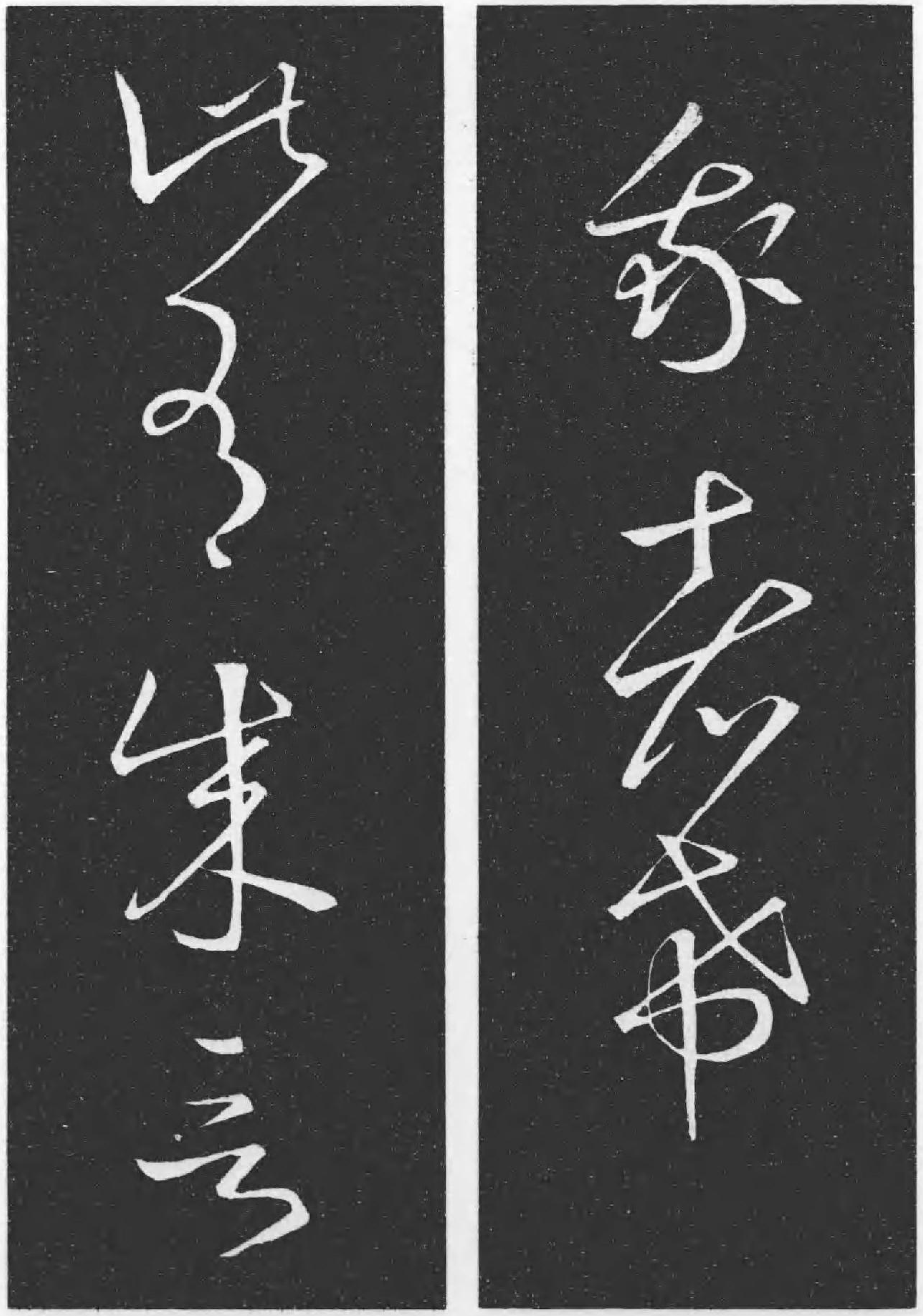
戎鹽乃要也。是服食所須



知足下調嗔服食。方回



近之。未許吾此志。知



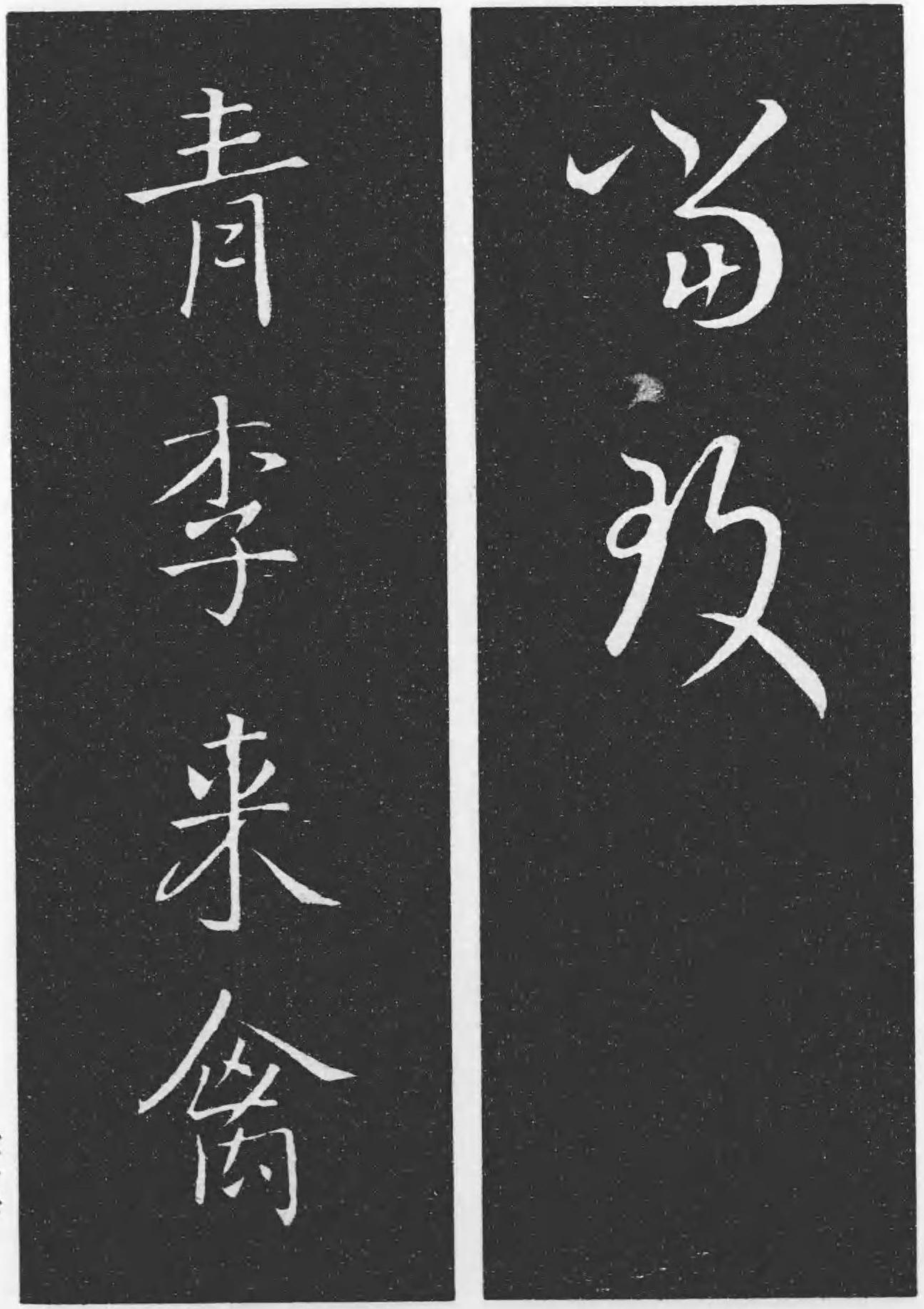
我者希。此有成言

無緣見卿
以當一咲

無緣見卿。以當一咲。

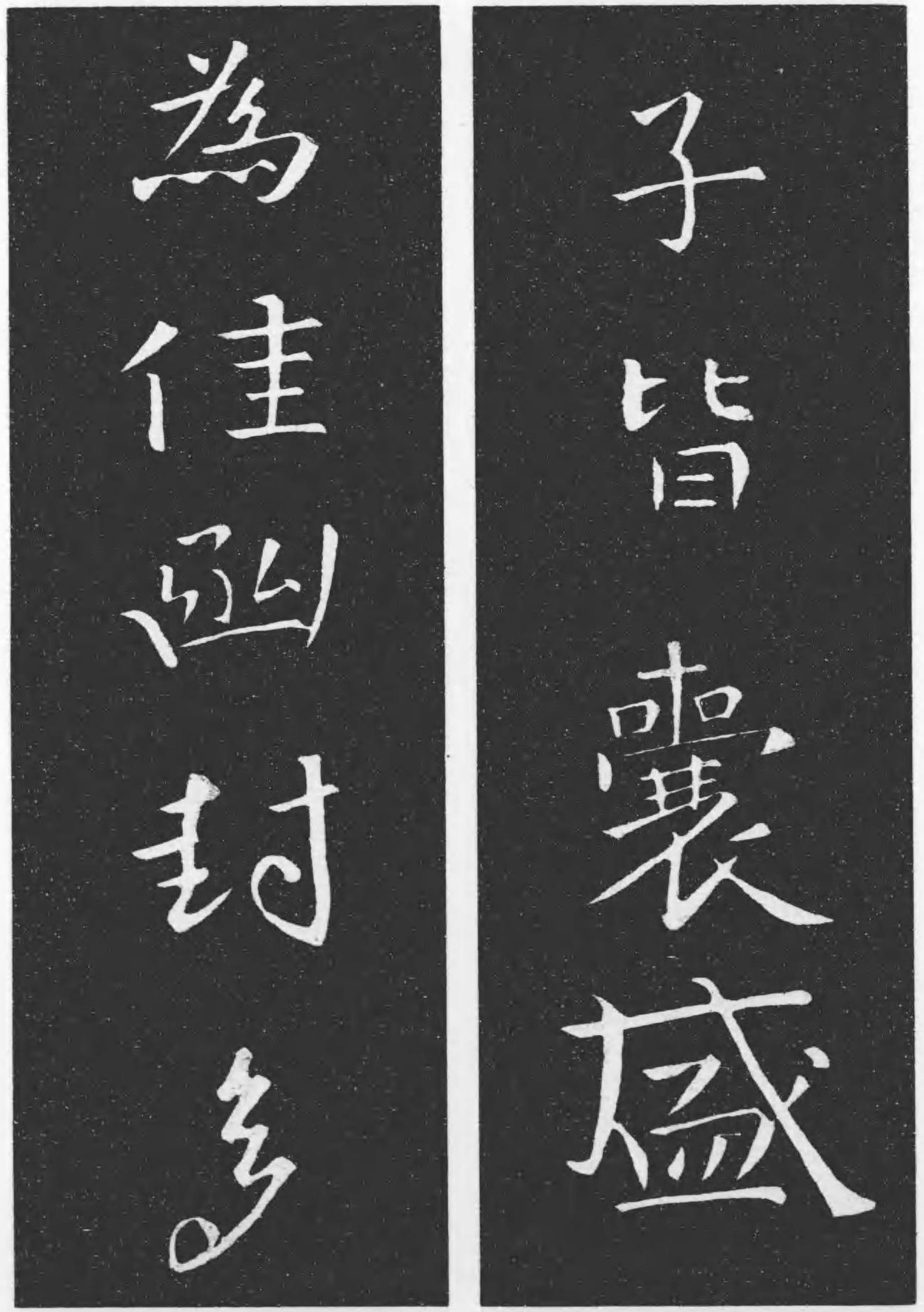
彼所須此
藥草可示

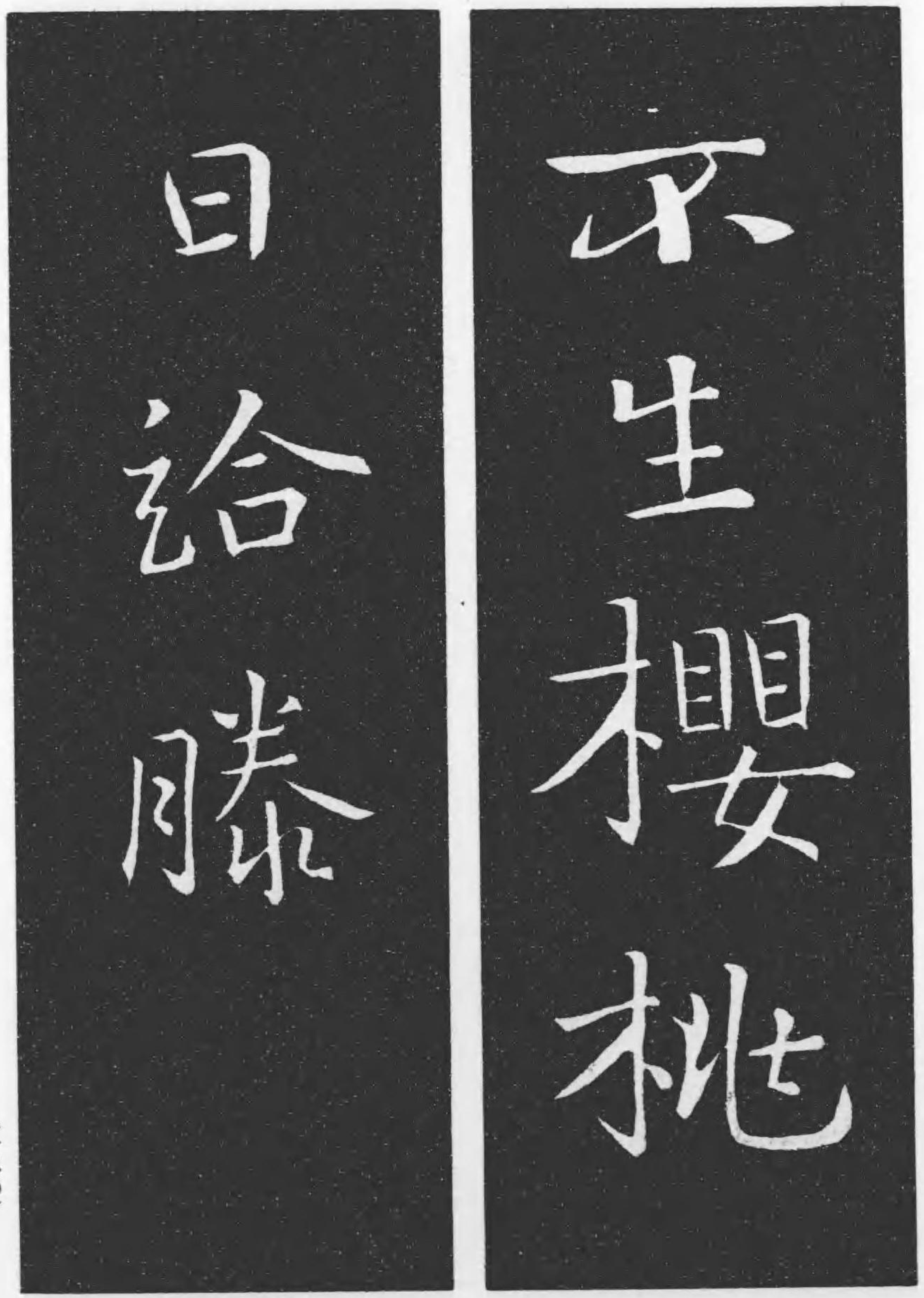
彼所須此藥草。可示。



當致。青李。来禽。

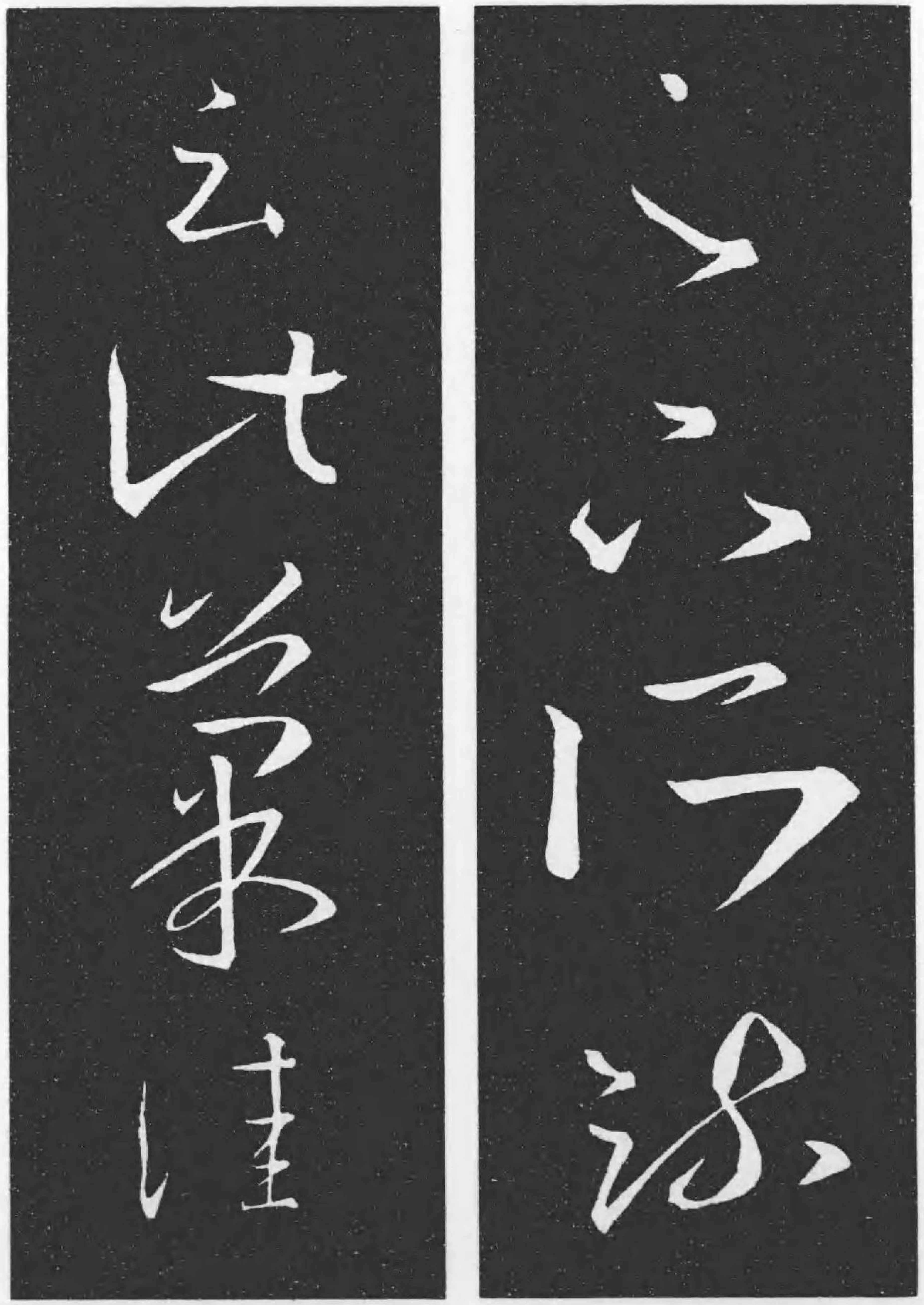
子皆囊盛爲佳。函封多



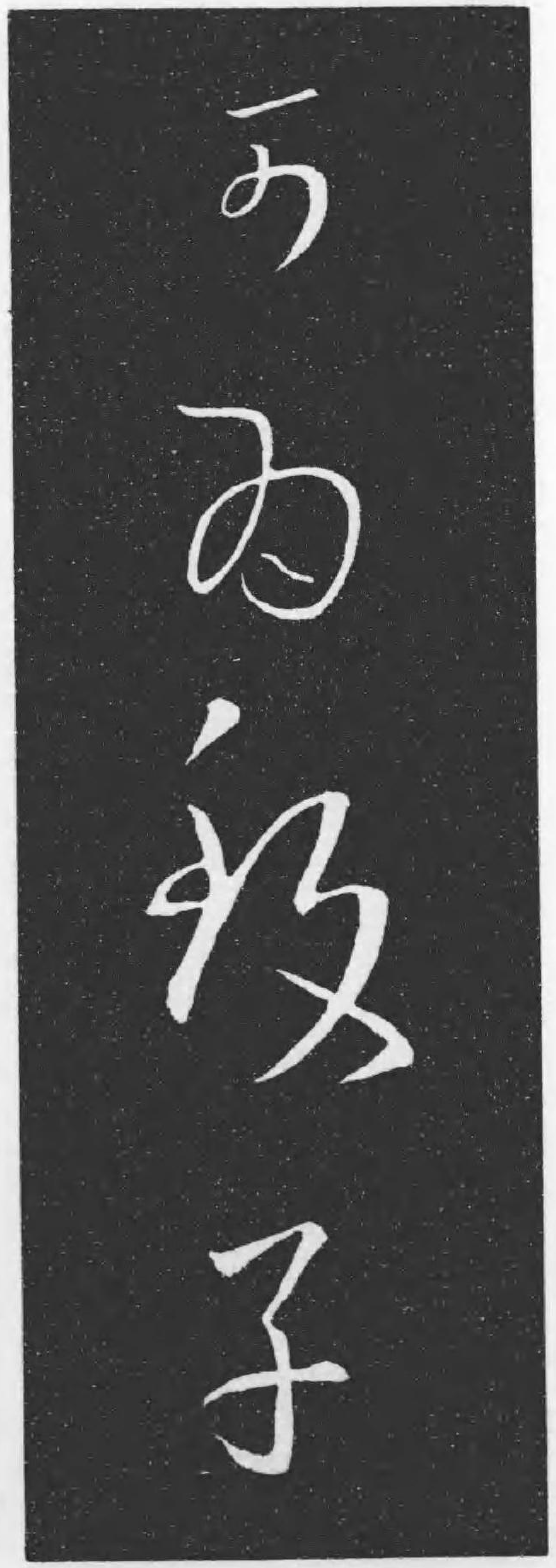


不生。櫻桃日給滕

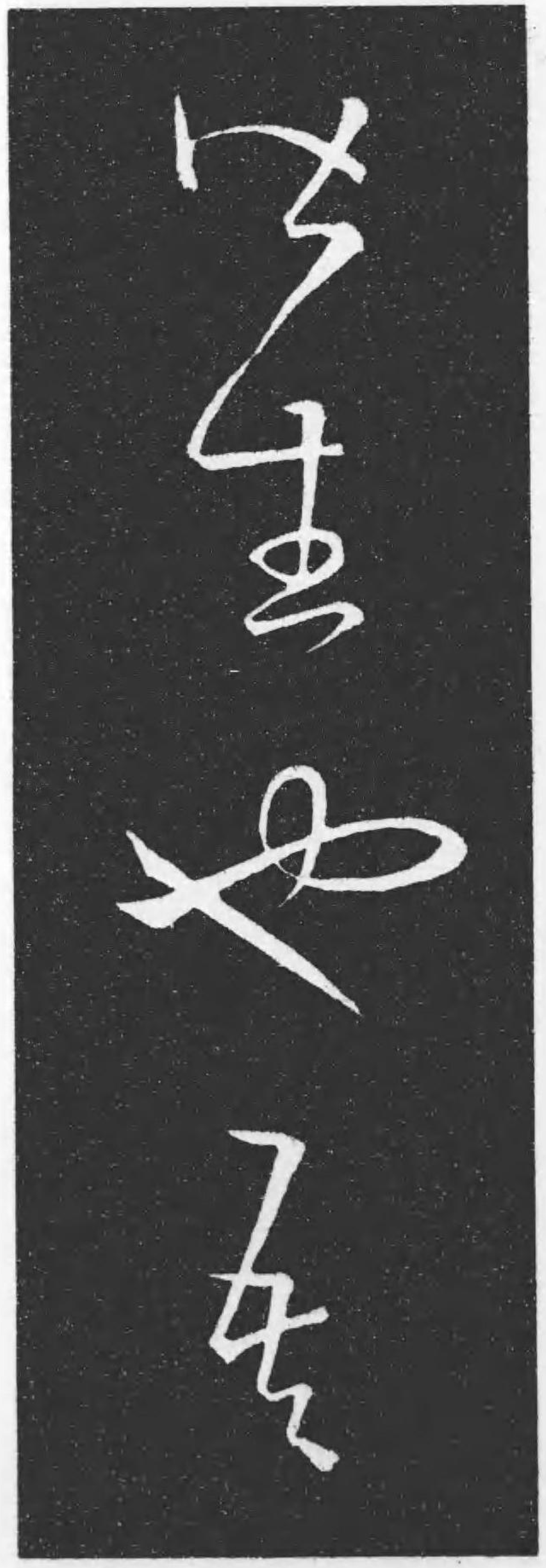
足下所疏云。此菓佳。

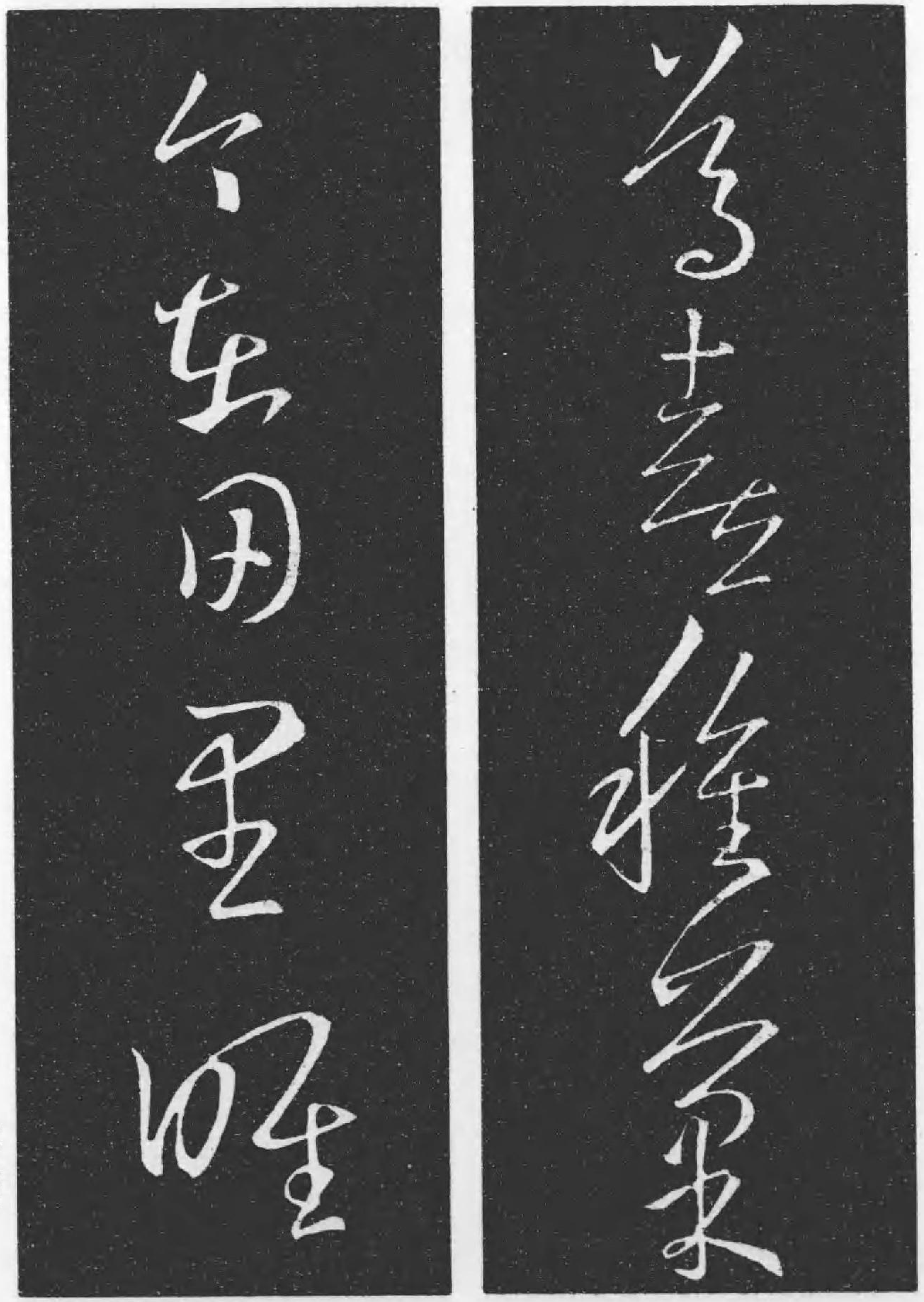


可爲致子。當種之。此

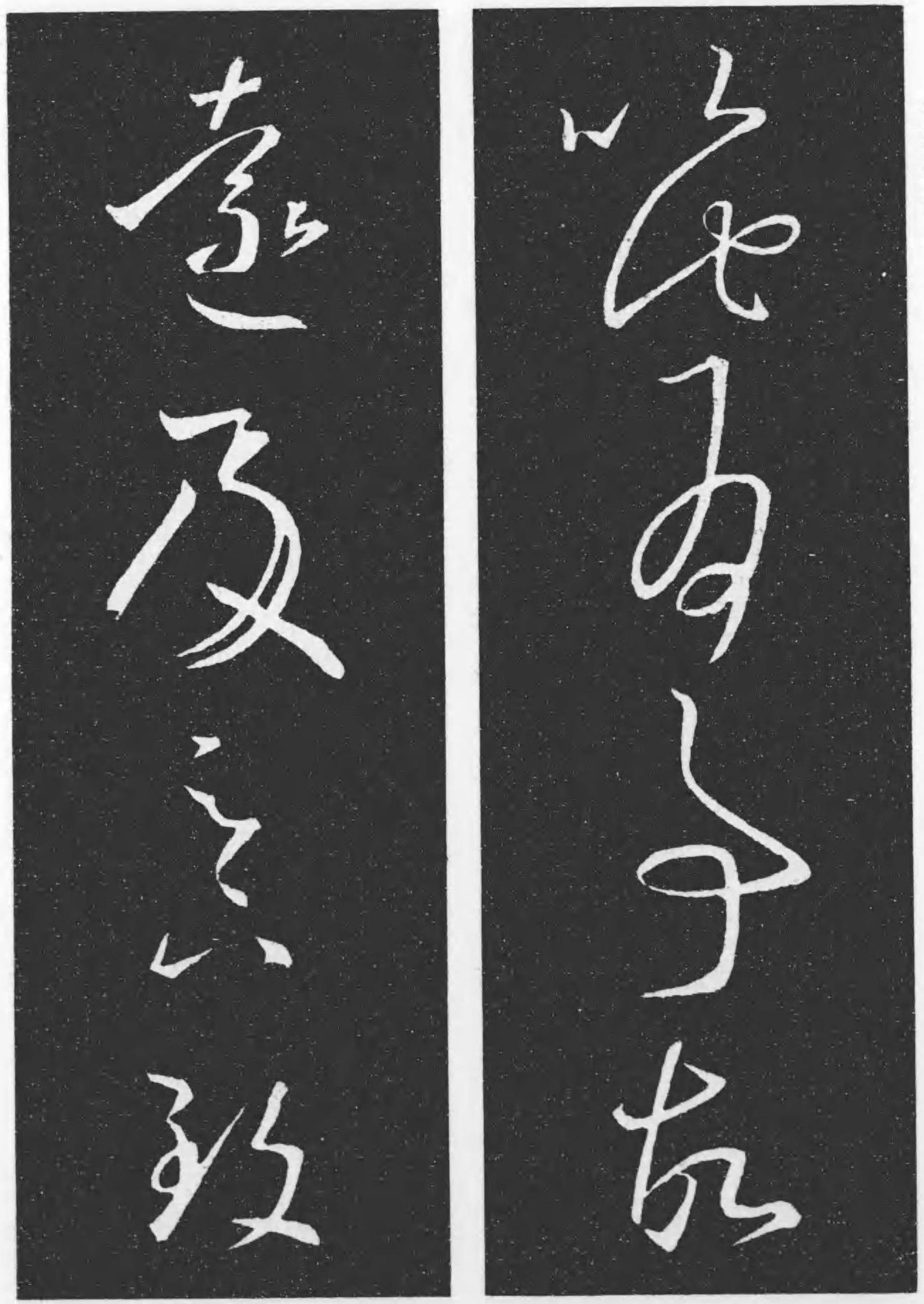


種。彼胡桃。皆生也。吾

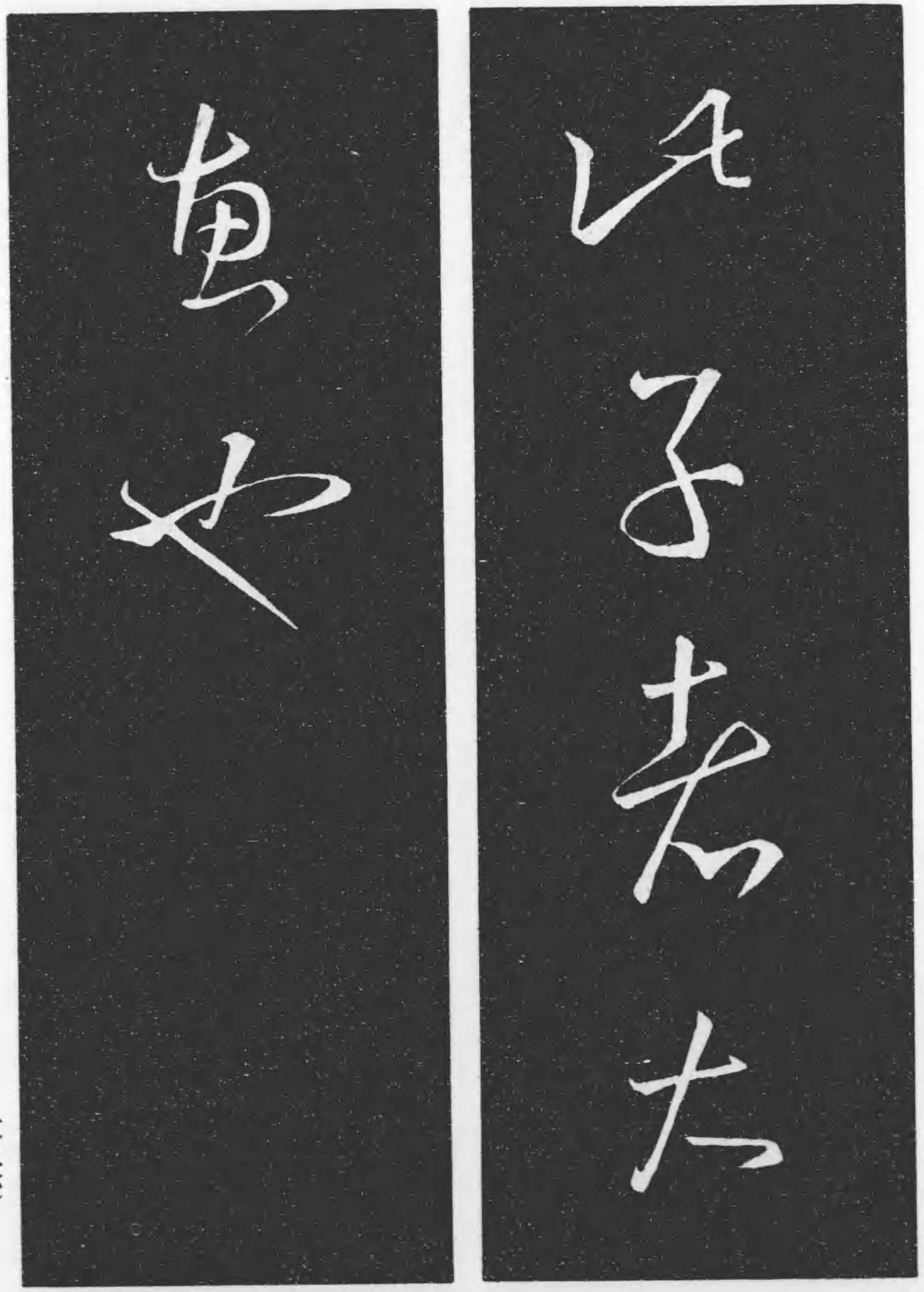




篤壽稱藥。今在田里唯

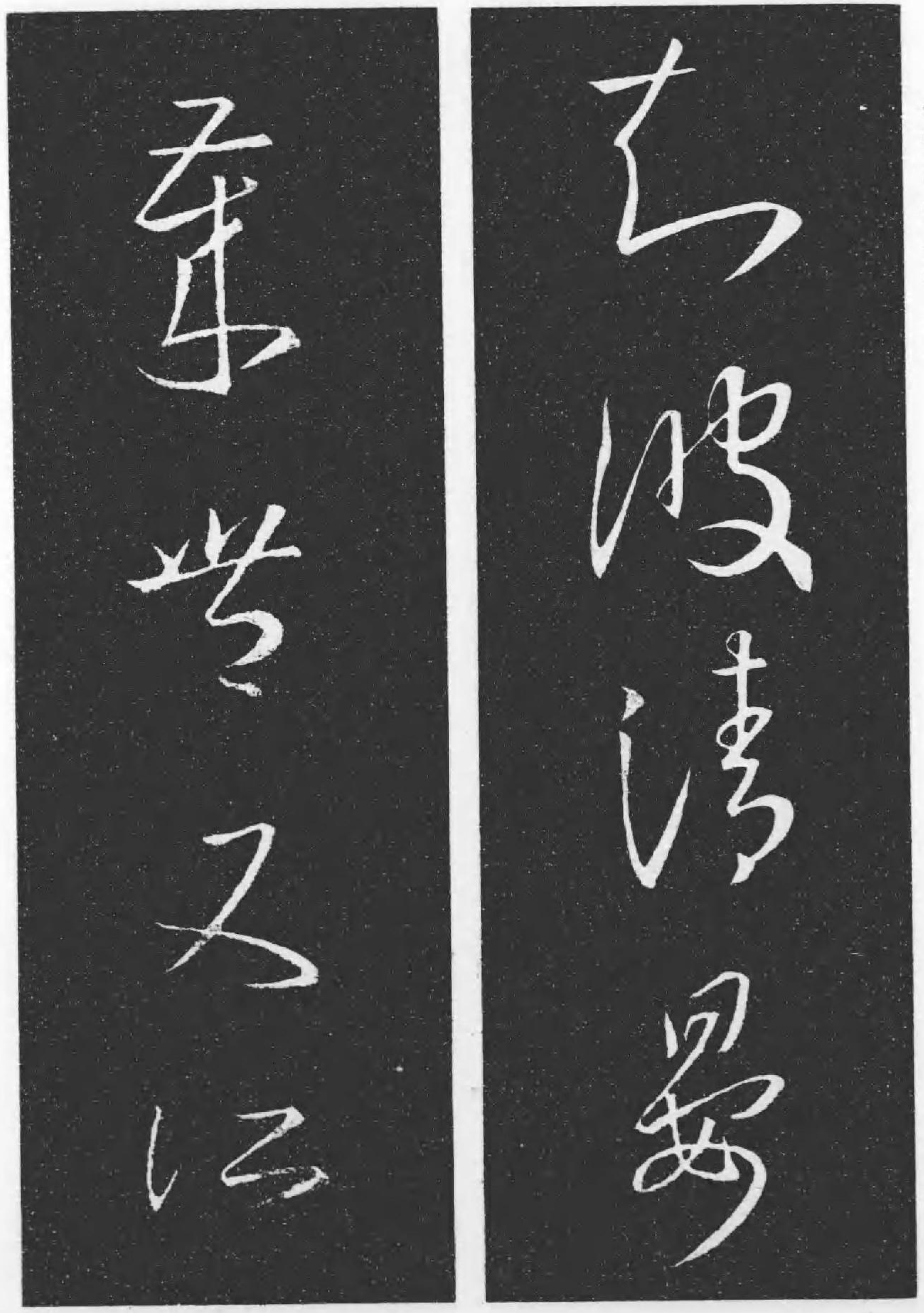


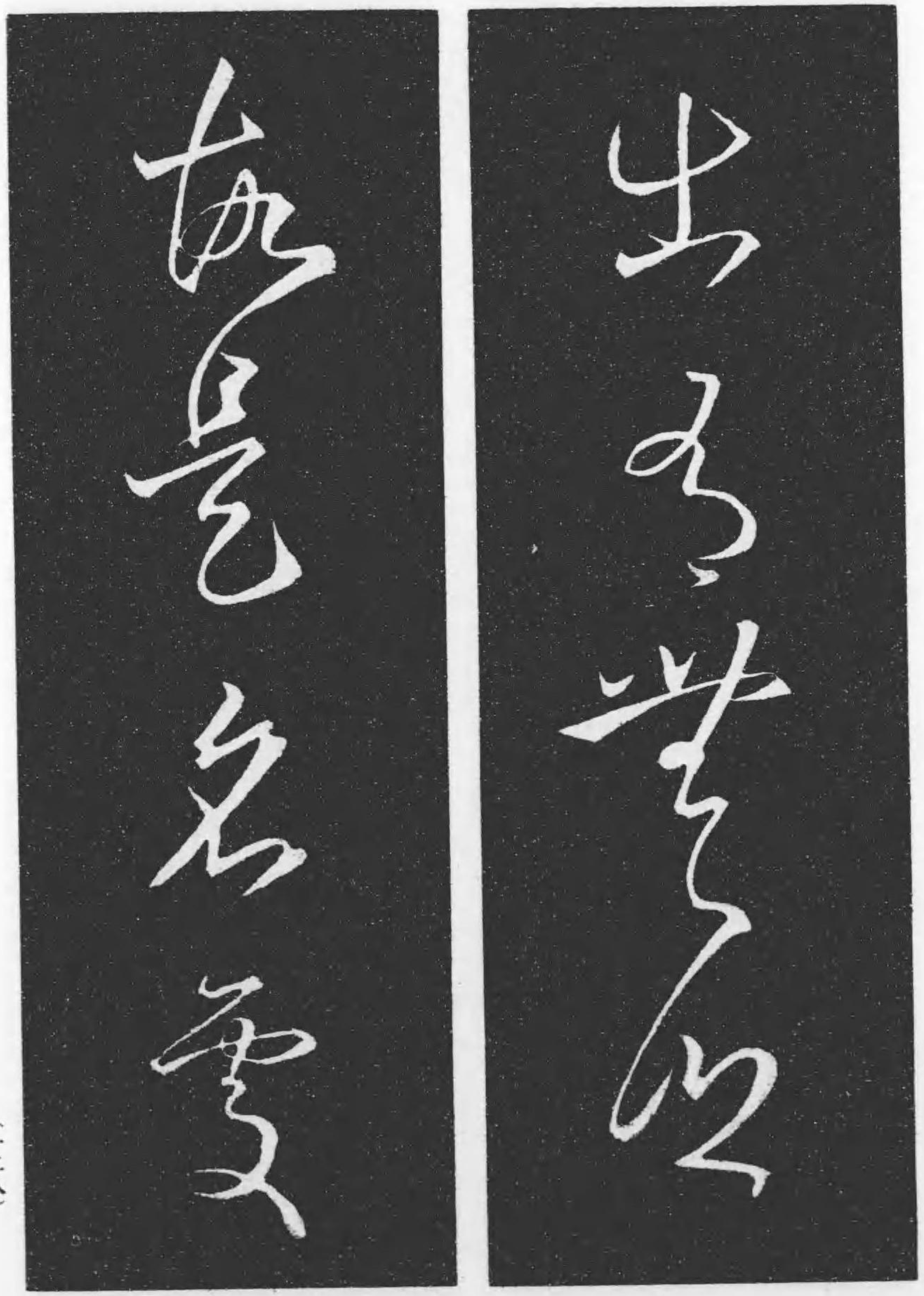
以此爲事。故遠及。足下致。



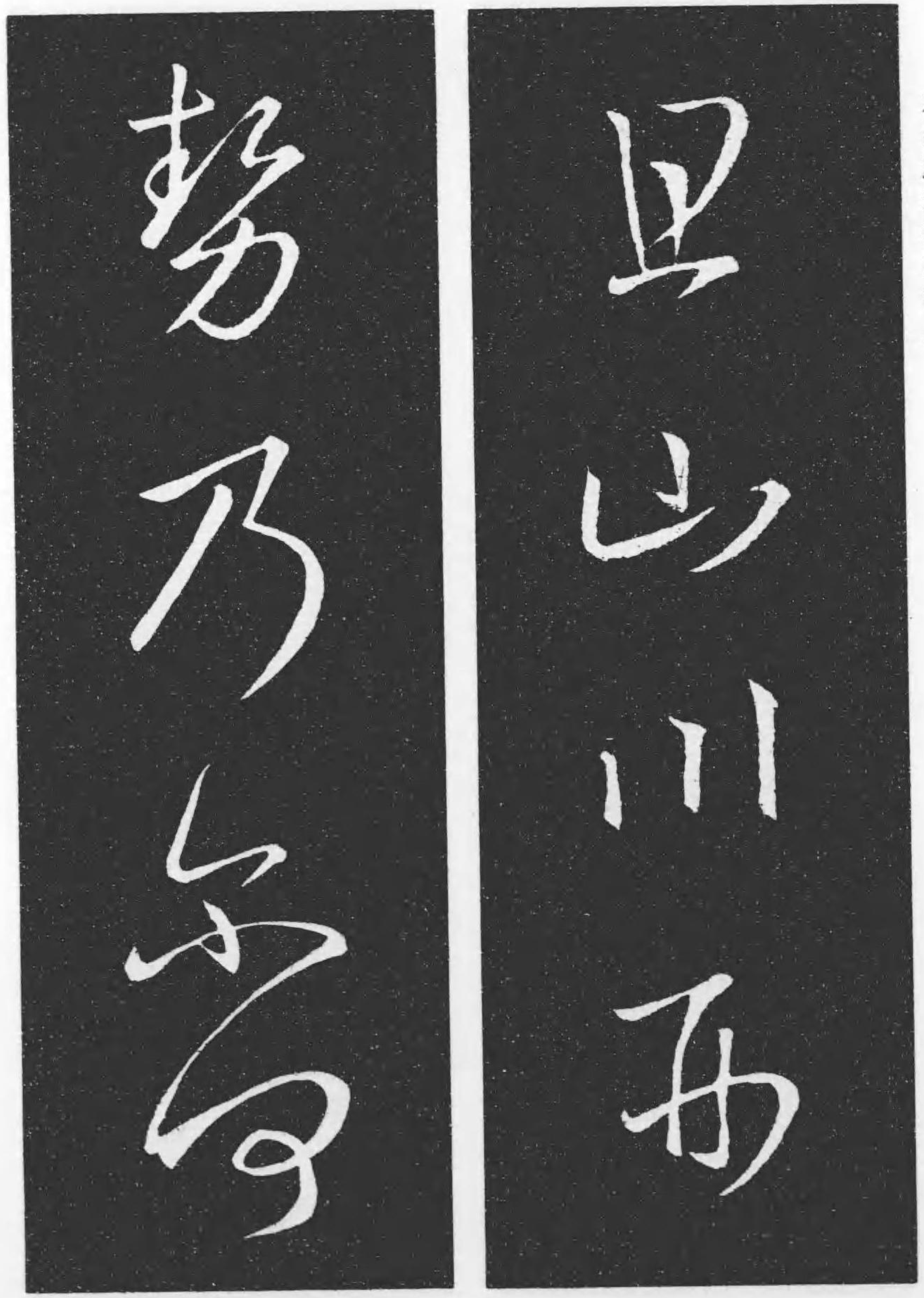
此子者大惠也。

知彼清晏歲豐。又所



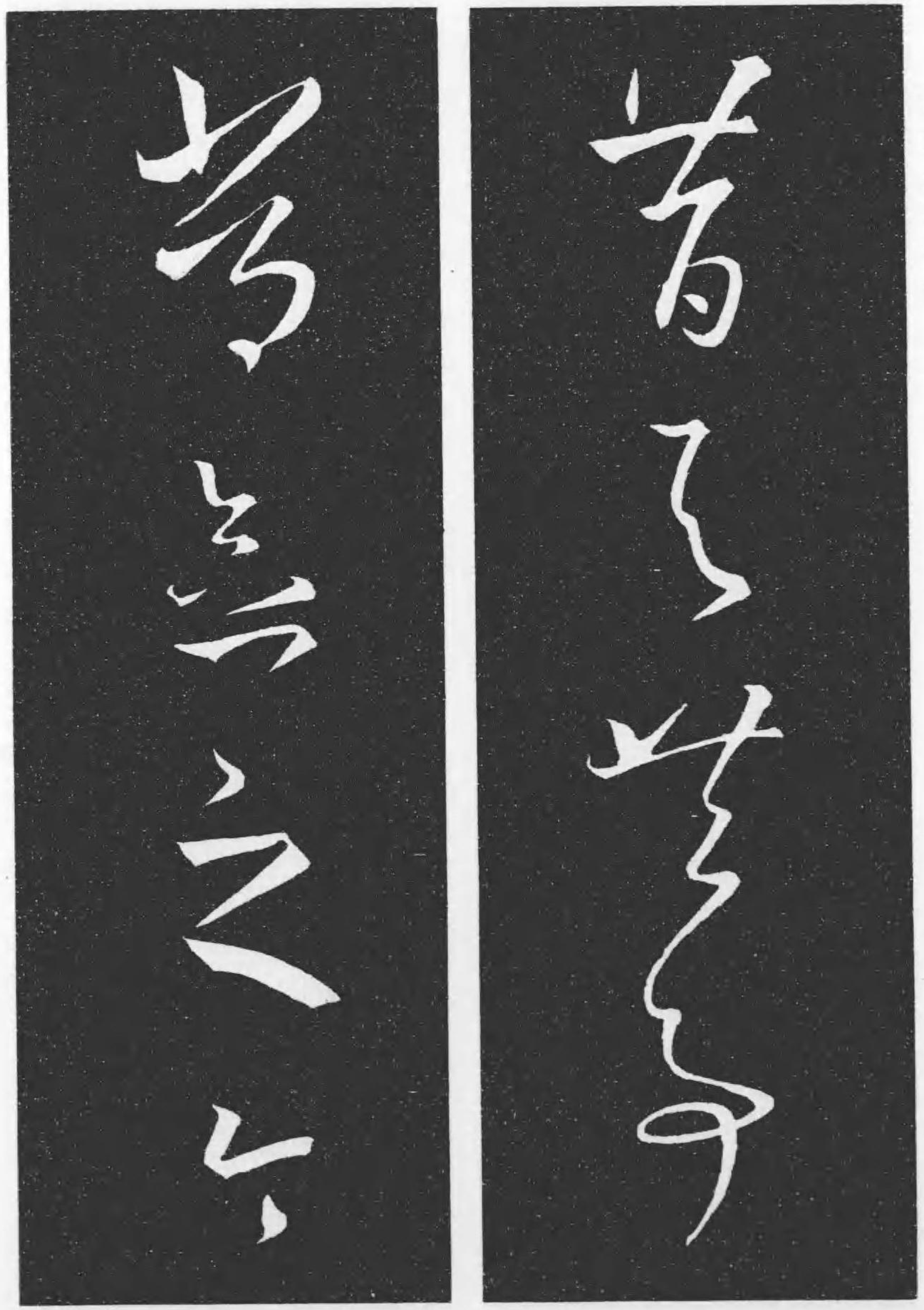


出有無〻卿故是名處。

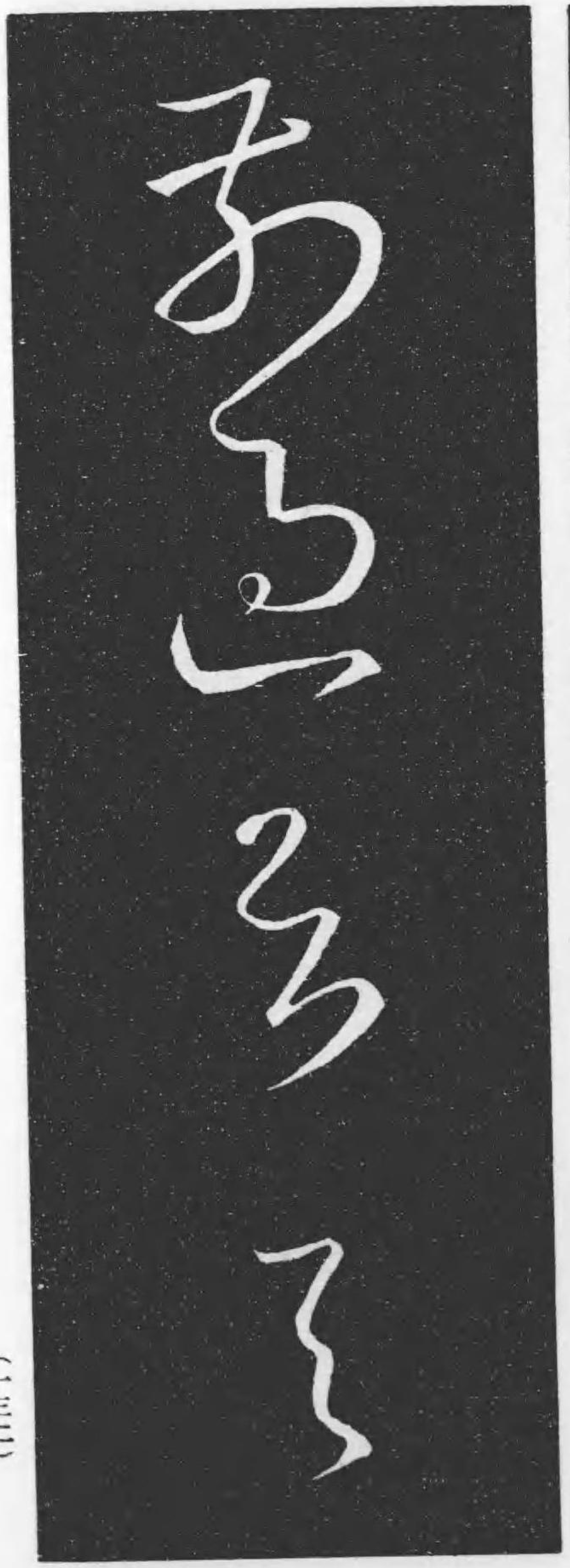


且山川形勢乃爾何

何以不遊目。虞安吉者

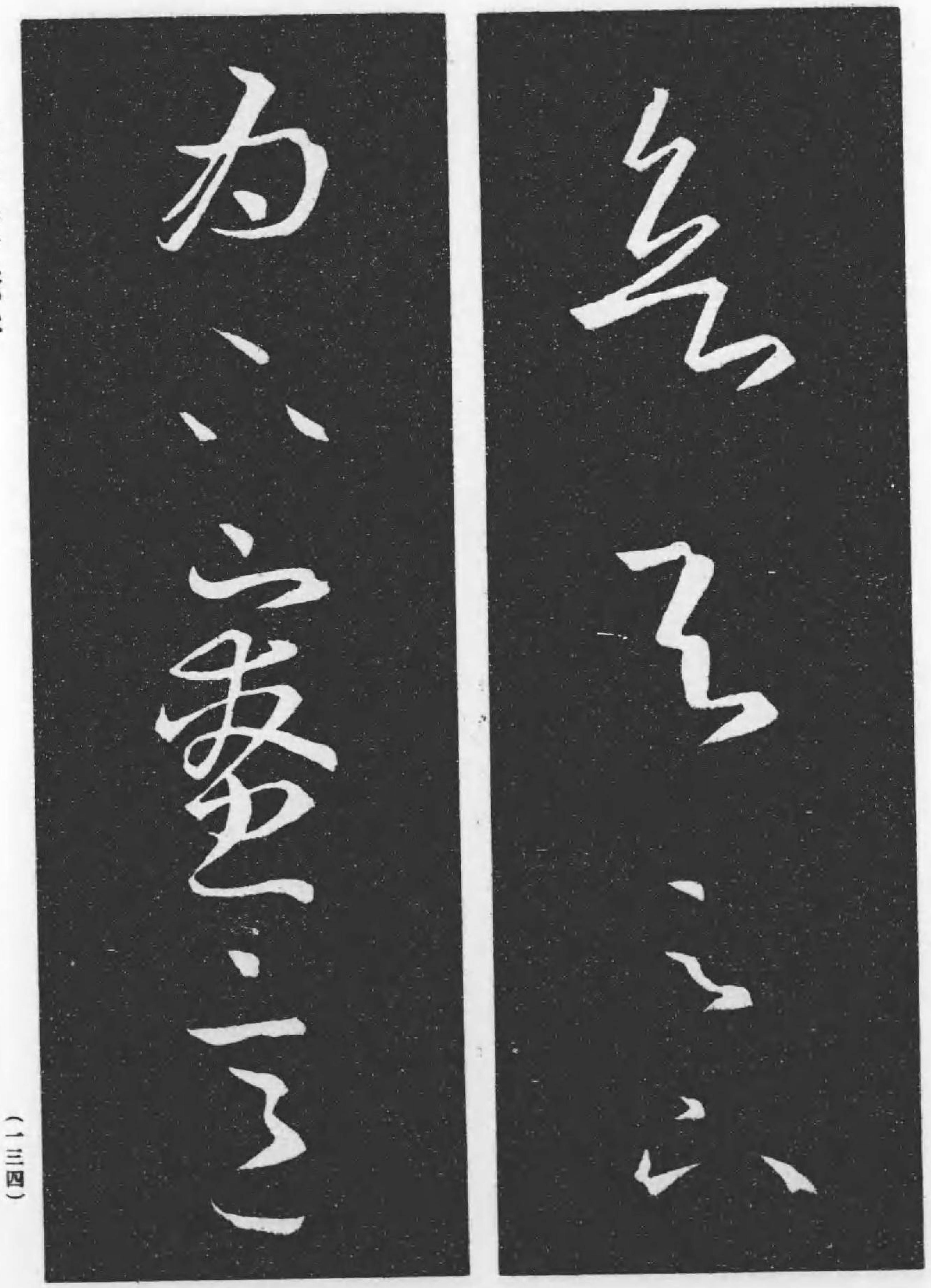


昔與共事。常念之。今

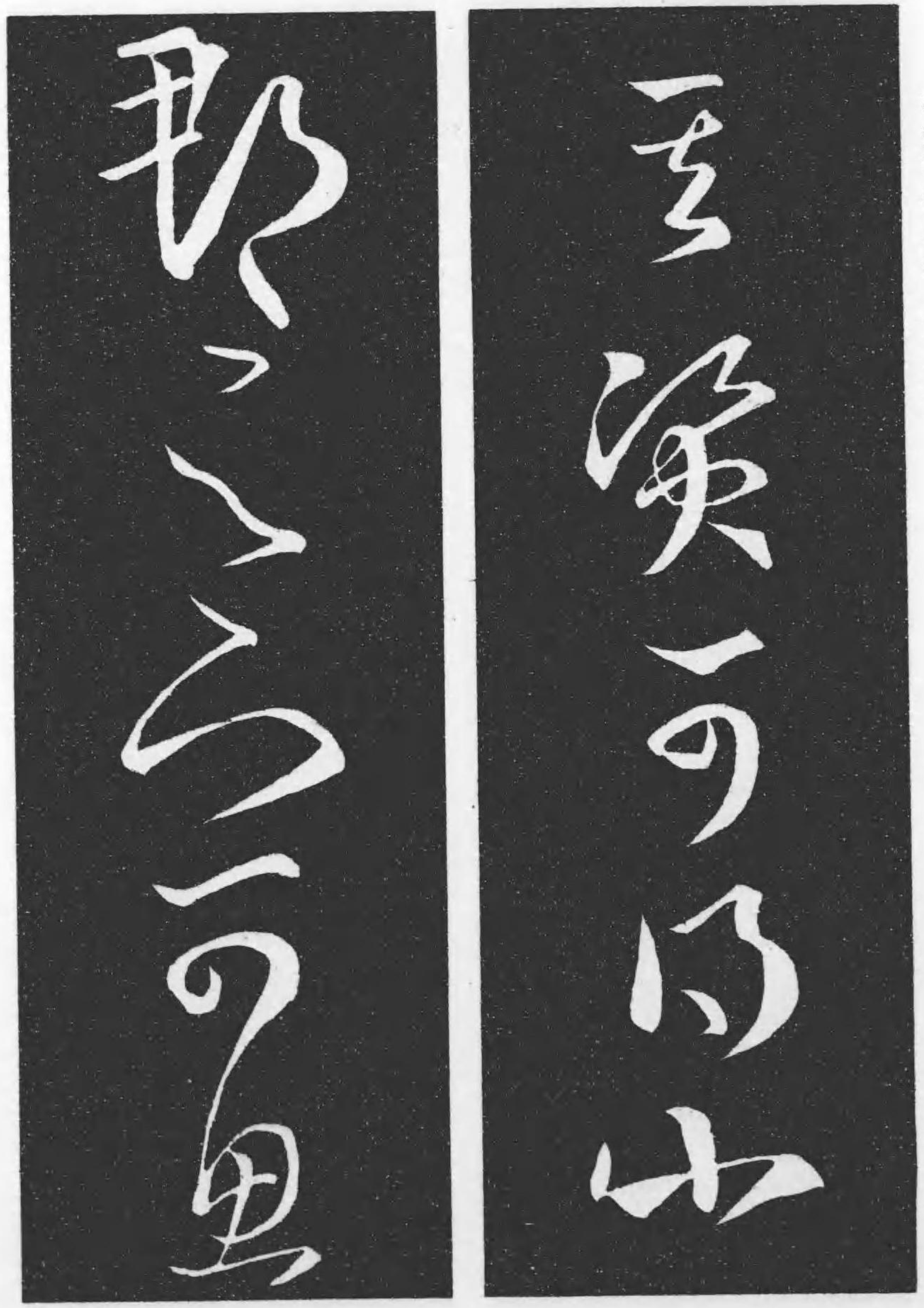


爲殿中將軍。前過。云與

足下中表。不以年老。舊



欲足下爲下寮。意



其資可得小郡。足下可思

十七帖の解説

この帖は、書聖王羲之の草書中では第一のものだと稱せられ、古今草書中の最高級のものとせられてゐます。王羲之がその故人たる益州（蜀）刺史周撫に及び近親に與へられた書簡を集めたものであります。

十七帖といふのは、巻頭に十七日の文字があるから、その頭首の字を取つて　名づけたものであります、館本とは巻末に太宗の御書勅の字と褚遂良の細楷弘文館云々の文字があるからであります。

この帖で最も權威ある代表的のものに、三井氏聽氷閣藏の館本十七帖といふのがありますから、本書はこれを寫眞で展大したものであります。この帖は、もと貫名海屋翁の舊藏でありました。海屋の高足内村鱸香と云ふ人が嘗て、人に語つて曰うやう「我師は十七帖を四十余種も藏して居られたが、其の數多き中でこの帖を冠となし、球圖も啻ならず愛重せられた」と。翁の歿後一六翁の手を經て鳴鶴翁の許にありましたが、今は三井氏の藏となつてゐます。金石文學者としての權威者楊子敬氏はこの帖を見て非常に感嘆し、那子愿の原本にも遜らぬとまで推重したとのことで御座います。鋒芒の鮮明なる事は、この帖の右に出るものは有りませんが、筆法轉折の處が悉く截斷してあります。この處を鳴鶴先生は「筆劃轉折の處斷ぜんと欲してまた連る。古人の謂ゆる連所皆斷じ、斷處皆連るの妙、この帖に於て始めて見ることを得べし」と言つて居られます。しかし眞蹟は恐らく、かく斷筆して書いたものではなく、初學者のために筆路を明瞭にするために鈎摹のときかくしたものであらうとの説もあります斷處中に不自然な處がある点から見ますと、或はこの方が正しい説かとも思はれますので、他の帖と比較出來る樣に掲げて置きましたから参照して下さい。

次に参考のために讀み方を掲げます。

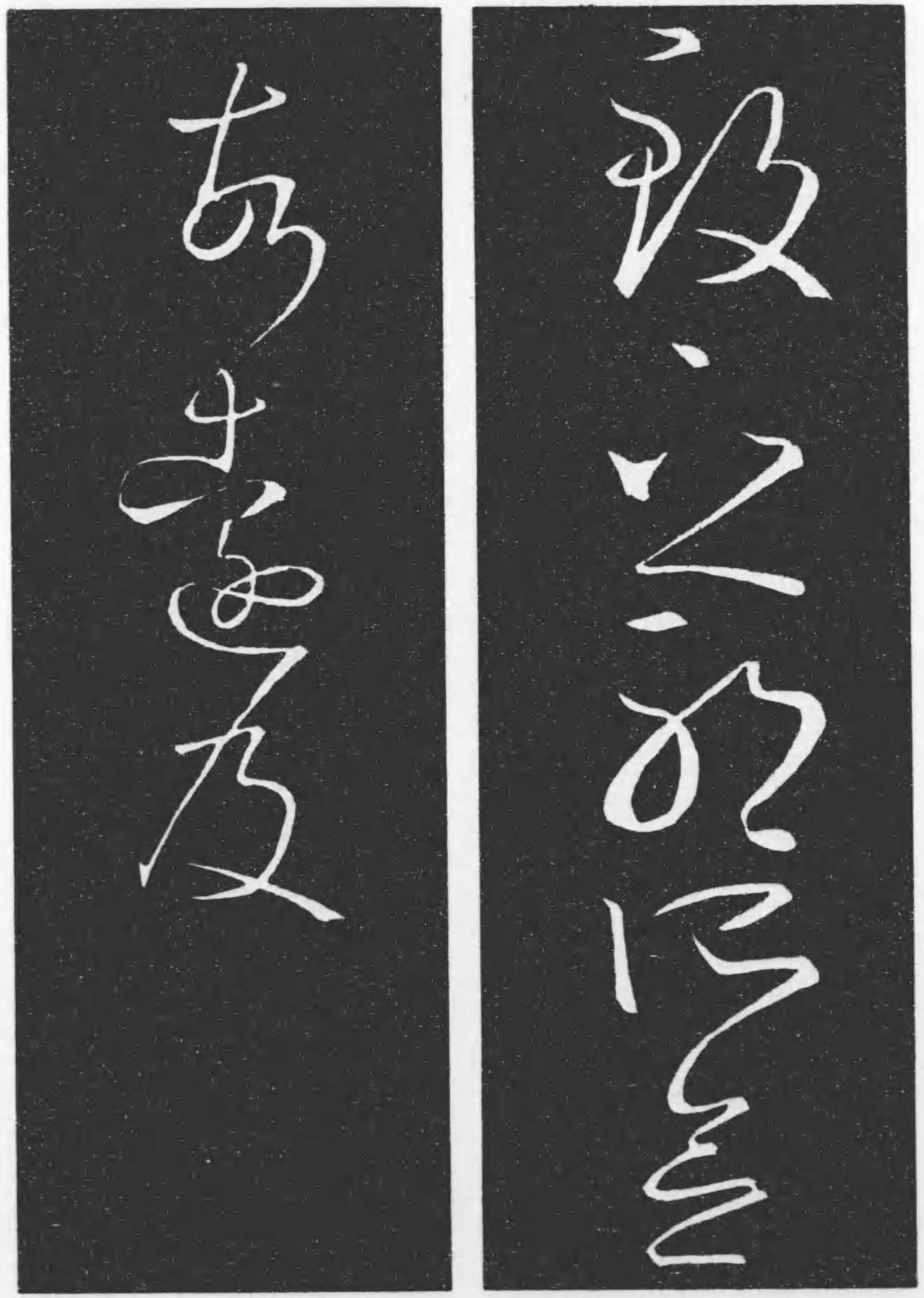
十七日先書。郗司馬未去。卽日得足下書。爲慰。先書以具示。復數字。

（釋）十七日ノ先書、郗司馬未ダ去ラザルニ、即日足下ノ書ヲ得テ、慰ヲナス。先書以ニ具示セリ。數字ヲ復スルノミ。

吾前東。粗足爲佳觀。吾爲逸民懷久矣。足下何以等。復及此。似夢中語耶。無緣言面。爲歎。書何能悉。

（釋）吾前ニ東ス。粗佳觀ヲ爲スニ足レリ。吾逸民ノ懷ヲ爲スコト久シ。足下何ゾ以テ等ツ。復此レニ及ブ。夢中ノ語ニ似タルカ。言面スルニ

【1】



致之耶。所念故違及

縁ナシ。歎ヲナスニ書何ゾ能ク悉サン。

龍保等平安也。謝之。甚遲卿來。舅可耳。至爲簡隔也。

（釋）龍保等平安ナリ。之ヲ謝ス。甚ダ卿ノ來ルヲ遲ツ。舅可ナラムノミ。ヨツテ間隔トナス。

今往絲布單衣財一端。示致意。

（釋）今絲布ノ單衣財カニ一端ヲ往ル。致意ヲ示スノミ。

計與足下別。廿六年於今。雖時書問。不解闊懷。省足下先後二書。但增歎慨。頃積雪凝寒。五十年中所無。想。頃如常。冀來夏秋間、或復得足下問耳。比者悠々。如何可言。

（釋）足下ト別レタルコトヲ計ルニ、今ニ廿六年ナリ。時ニ書問スト雖モ、闊懷ヲ解カズ。足下ノ先後ノ二書ヲ省シテ、但歎懷ヲ增ス。頃ロノ積雪凝寒ハ、五十年中ノ無キ所ナリ。頃ロ常ノ如クナラム。來夏秋ノ間ニ或ハ復ビ足下ノ問ヲ得ムコトヲ冀フノミ。比者悠々。如何ゾ言フベケム

吾服食久。猶爲劣々。大都比之年時。爲復可々。足下保愛爲上。臨書但有惆悵。

（釋）吾レ服食（發音餇ニ同ジ、職ト發音スベカラズ、古字ハ人食ノ合文飤ナリ）スルコト久シ。猶劣々トス。大都之ヲ年時ニ比スルニ、復可々トス。足下保愛ヲ上トス。書ニ臨ンデ但惆悵スルアルノミ。

知足下行至吳會。違離不可居。叔當西耶。遲知問。

（釋）知ル足下行クク吳會ニ至ルヲ。違離シテ居ルベカラズ。叔當ニ西スベキカ。知問ヲ遲ツ。

瞻近無緣省告。但有悲歎。足下小大悉平安也。云卿當來居此。喜遲不可言。想必果言。告有期耳。亦度卿當不居京。此既避。又節氣佳。是以欣卿來也。此信旨還。具示問。

（釋）瞻近ゴロ省告スルニ緣ナシ。但悲歎スルアルノミ。足下小大悉ク平安ナリヤ。云フ卿來ツテ此（會稽即チ吳ナリ）ニ居ルト。喜ビ待ツコト言フベカラズ。想フニ必ズ言ヲ果サン。告グルコト期アランノミ。亦度ルニ卿當ニ京ニ居ラザルベシ。此ニ既ニ避ク。又節氣佳ナリ。是ヲ以テ卿ノ來ルヲ欣ブナリ。此ノ信旨還ルトキ、具サニ示問セヨ。

天鼠膏治耳聾。有驗不。有驗者、乃是要藥。

（釋）天鼠膏ハ耳聾ヲ治スト。驗アリヤ不ヤ。驗アラバ、乃チ是レ要藥ナリ。

朱處仁今所在。往得其書。信遂不取答。今因足下答其書。可令必達。

（釋）朱處仁今所在。往ニ其ノ書ヲ得タリ。信遂ニ答ヲ取ラズ。今足下ニ因リテ其ノ二書答フ。必ズ達セシムベシ。

足下年政七十耶。知體氣當佳。此大慶也。想復懃加頤養。吾垂耳順。推之人理。得爾以爲厚幸。但恐前路轉欲逼耳。以爾要欲一遊目汶領。非復常言。足下但當保護以俟此期。勿謂虛言。得果此緣。一段奇事也。

（釋）足下年政ニ七十ナラン。知ル、體氣當ニ佳ナルベシ。此レ大慶ナリ。想フニ復懃ロニ頤養ヲ加ヘヨ。吾レ耳順ニ垂ントス。之ヲ人理ニ推スニ、爾ルヲ得ルハ、以ニ厚幸トナス。但前路ノ轉タ逼ラムト欲スルヲ恐ルルノミ。爾ルヲ以テ要ラズ一タビ汶嶺ニ遊目セムト欲ス常言ヲ復スルニ非ズ。足下但當ニ保護シテ以テ此ノ期ヲ待ツベシ。虛言ト謂フ勿レ。此ノ緣ヲ果スヲ得バ、一段ノ奇事ナリ。

去夏得足下致邛竹杖。皆至此。士人多有尊老者。皆卽分布。令知足下遠惠之至。

（釋）去夏足下ノ致レル邛竹杖ヲ得タリ。皆此ニ至ル。士人多ク尊老者有リ。皆卽チ分布シ、足下遠惠ノ至（摯ノ假）ヲ知ラシメタリ。

省足下別疏。具彼土山川諸奇。楊雄蜀都、左太沖三都。殊爲不備悉。彼故爲多奇、益令其遊目意足也。可得果。當告卿求迎。少人足耳。至時示意。遲此期。眞以日爲歲。想足下鎭彼土。未有動理耳。要欲及卿在彼。登汶領峨眉而旋。實不朽之盛事。但言此。心以馳於彼矣。

（釋）足下ノ別疏ヲ省ルニ、彼土ノ山川ノ諸奇ヲ具セリ。楊雄ノ蜀都「賦」左太沖ノ三都「賦」モ、殊ニ備悉セズトナス。彼レ故奇多シトナス。益々其レヲ遊目セシメバ、意足ラム。果スヲ得バ、當ニ卿ニ告ゲテ迎ヲ求ムベシ。少人ニテ足ラムノミ。「書」至ル時ニ意ヲ示セ。此ノ期ヲ遲チ、眞ニ日ヲ以テ歲トナス。想フニ足下ノ彼ノ土ヲ鎭スルコト、未ダ動ク理有ラザルノミ。要ズ卿ガ彼ニ在ルニ及ビ、汶領「岷嶺」峨眉「山」ニ登リテ旋ラムト欲ス。實ニ不朽ノ盛事ナリ。但此レヲ言フスラ、心以ニ彼ニ馳ス。

彼鹽井火井皆在不。足下目見不。爲欲廣異聞。具示。

（釋）彼ノ鹽井火井皆在リヤ否ヤ。足下目ノアタリ見タリヤ不ヤ。異聞ヲ廣クセムガタメニ、具ニ示セヨ。

省別具足下小大問。爲慰。多分張。念足下懸情。武昌諸子。亦多遠宦。足下兼懷。並數問不。老婦頃疾篤、救命。恒憂慮。餘粗平安。知足下情至。

（釋）別具ノ足下ノ小大ノ問ヲ省テ、慰ヲナス。多クハ分張ス。足下ヲ念ウテ懸情ス。武昌ノ諸子モ亦多クハ遠宦セリ。足下兼懷、並ビニ數ミ問セリヤ否ヤ。老婦頃ロ疾篤ク、救命ス。恒ニ憂慮セリ。餘ハ略平安ナリ。足下ノ情至ヲ知ル。

旦夕都邑動靜淸和。想。足下使還。具時。州將。桓公告慰。情企足下數使命也。謝無奕外任。數書問。無他。仁祖日往。言尋悲酸。如何可言。

（釋）旦夕都邑ノ動靜淸和ナリ。想フニ、足下使シテ還リ、時ヲ具セバ、州將タラン。桓公告慰ス。情足下ノ數々使命セムコトヲ企メリ。謝無奕外任（或ハ仕ト釋スル人アリ）數々書問ス。他ナシ。仁祖日ニ往ク。言尋悲酸ナリ。如何ムゾ言フベケム。（疏證）

嚴君平。司馬相如。楊子雲。皆有後不。

（釋）嚴君平、司馬相如、楊子雲、皆後有リヤ不ヤ。

胡母氏從妹平安。故在永興。居去此七十也。吾在官。諸理極差。頃比復匆々。來示云。與其婢。問來信不得也。

（釋）胡母氏ノ從妹平安ナリ。故永興ニ在リ。居此ヲ去ルコト七十（里）ナリ。吾官ニ在リテ、諸理極メテ差フ。頃ロ比リニ復匆々タリ。來示ニ云フ。其ノ婢ニ與フト。來信ニ問ヘドモ得ズ。

吾有七兒一女。皆同生。婚娶以畢。唯一少者。尚未婚耳。過此一婚。便得至彼。今內外孫有十六人。足慰目前。知足下情至委曲。故具示。

（釋）吾ニ七兒一女アリ。皆同（腹ノ）生ナリ。婚娶以ニ畢ル。唯リ一小者ノ尚未ダ婚セザルノミ。此ノ一婚ヲ過サバ、便チ彼ニ至ルヲ得ム。今內外孫十六人アリ。目前ヲ慰スルニ足ル。足下ノ情至委曲ヲ知ル。故ニ具示ス。

云。譙周有孫。高尙不出。今爲所。在其人有以副此志不。令人依々。足下具示。

（釋）云フ、譙周ニ孫アリ、高尙ニシテ出デズト。今所ヲナス。其ノ人ヲ在ルニ以テ此ノ志ニ副フ有リヤ不ヤ。人ヲシテ依々タラシム。足下具示セヨ。（疏證）

知有漢時講堂在。是漢何帝時立此。知畫三皇五帝以來備有。畫妙叉精。甚可歎也。彼有能畫者不。欲因摹取。當可得不　信具告。

（釋）知ル、漢ノ時ノ講堂ノ在ル有ルヲ。是レ漢ノ何ノ帝ノ時ニ此ヲ立テタリヤ。知ル、三皇五帝以來ヲ畫キテ備サニ有リ、畫又精妙ニシテ、甚ダ觀ルベキヲ。彼ニ畫ヲ能クスル者アリヤ不ヤ。因ツテ摹取セムト欲ス。當ニ得ベキヤ不ヤ。信（ヲ以テ）具サニ告ゲヨ。

諸從並數有問。粗平安。唯脩載在遠。音問不數。懸情。司州疾篤。不果西。公私可恨。足下所云。皆盡事勢。吾無間然。諸問想足下別具。不復一々。

（釋）諸從並ニ問アリ。粗平安ナリ。唯脩載遠キニ在リ。音問數々セズ。懸情ス。司州疾篤ク、西スルヲ果サズ。公私恨ムベシ。足下ノ云フ所皆事勢ヲ盡クス。吾レ間然スルコトナシ。諸問ハ想フニ足下別ニ具セム。復一々セズ。

往在都。見諸葛顯。曾具問蜀中事。云。成都城池門屋樓觀。皆是秦時司馬錯所修。令人遠想慨然。爲爾不。信具示。爲欲廣異聞。

（釋）往ニ都ニ在リシトキ、諸葛顯ヲ見テ、曾テ具サニ蜀中ノ事ヲ問ヒシニ、云フ、成都ノ城池門屋樓觀ハ、皆是レ秦ノ司馬錯ガ脩ムル所ト。人ヲシテ遠想慨然タラシム。爾リトナスヤ否ヤ。信具サニ示セ。異聞ヲ廣クセンガタメナリ。

得足下旃罽胡桃藥二種。知足下至。戎鹽乃要也。是服食所須知。足下謂頃服食。方回近之。未許吾此志。知我者希。此有成言。無緣見卿。以當一唉。

（釋）足下ノ（寄スル所ノ）旃罽・胡桃藥二種ヲ得タリ。足下ノ至ナルヲ知ル。戎鹽乃チ要（藥）ナリ。是レ服食（家）ノ須ラク知ルベキ所ナリ。足下謂メテ頃ラク服食セヨ。方回之ニ近シ。未ダ吾ガ志ヲ許サズ。我ヲ知ル者希ナリ。此レ成言アリ。卿ヲ見ルニ緣ナシ。以テ當ニ一唉スベシ。（疏證）

彼所須藥草。可示。當致。

（釋）彼ノ須フル所ノ藥草、示スベシ、當ニ致スベシ。（疏證）

青李•來禽•櫻桃•日給藤。子皆囊盛爲佳。函封不生。

（釋）青李。來禽。櫻桃。日給藤。子ハ皆嚢ニ盛ルヲ佳トス。函ニ封ズレバ、生ゼズ。

足下所疏云。此菓佳。可爲致子。當種之。此種彼胡桃。皆生也。吾篤喜種菓。今在田里。唯以此爲事。故遠及。足下致此子者大惠也。

（釋）足下ノ疏スル所ニ云ク。此ノ菓（青李。來禽。櫻桃。日給藤）佳ナリ、爲ニ子ヲ致スベシ、當ニ之ヲ種ウベシト。此（會稽）ニ彼ノ（嚢日送リ致サレタル）胡桃ヲ種エシニ、皆生ジタリ。吾レ篤ク菓ヲ種ウルコトヲ喜ブ。今田里ニ在リテ、唯此（果樹栽培）ヲ以テ事トナス。故ニ遠ク（索メ）及ブ。足下此ノ子ヲ致サバ大惠ナリ。

知彼淸晏歲豐。又所出有無。鄉故是名處。且山川形勢乃爾。何可不遊目。

（釋）知ル彼（蜀）ノ淸晏歲豐ナルヲ。又出ス所（ノ物產、他地ノ）無キモノ有リ。鄉ニ故是レ名處ナリ。且ツ山川ノ形勢乃チ爾リ。何ゾ遊目セザルベケムヤ。（疏證）

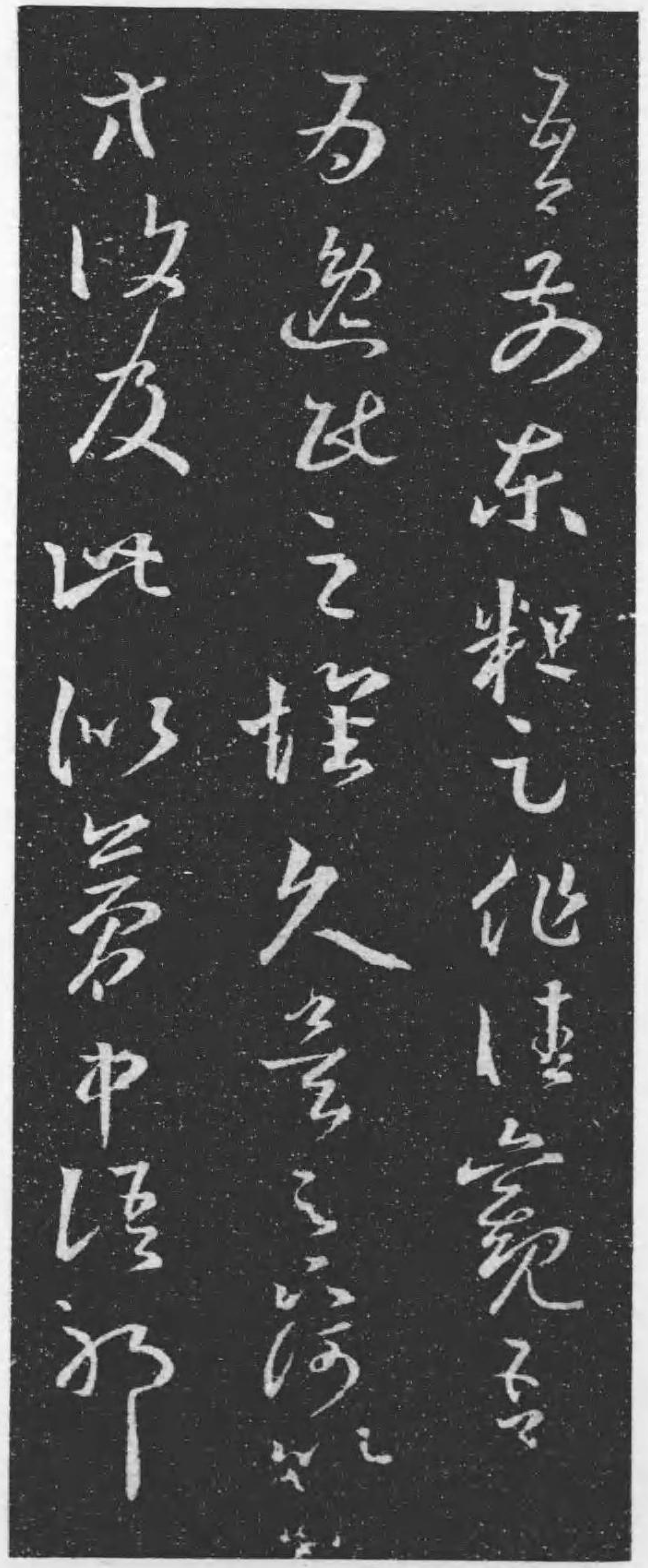
虞安吉者、昔與共事。常念之。今爲殿中將軍。前過云。與足下中表。不以年老。甚欲與足下爲下寮。意其資可得小郡。足下可思致之耶。所念故遠及。

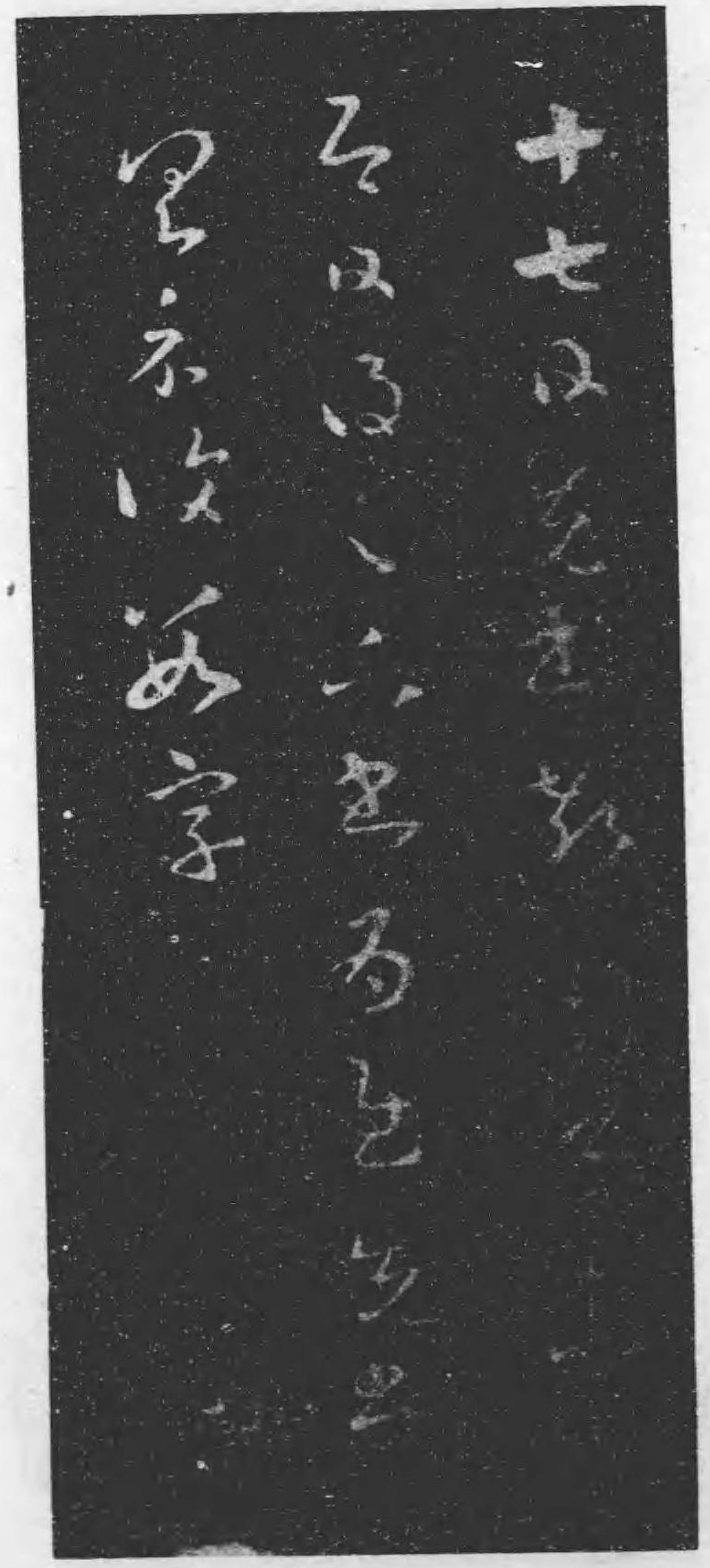
（釋）虞安吉ハ、昔與ニ事ヲ共ニセリ。常ニ之ヲ念ヘリ。今殿中將軍タリ。前ニ過ギリテ云フ。足下ト中表タリト。年老イタルヲ以テセズ。甚ダ足下ノ與ニ下寮タラムト欲ス。意フニ其ノ資小郡ヲ得ベケム。足下之ヲ致スヲ思フベキカ。念フ所ナルガ故ニ遠ク及ブ。

太宗の御勅書の字及び褚遂良の文字

本帖の原本聽氷閣帖の一部

本帖の原本聽氷閣帖の一部



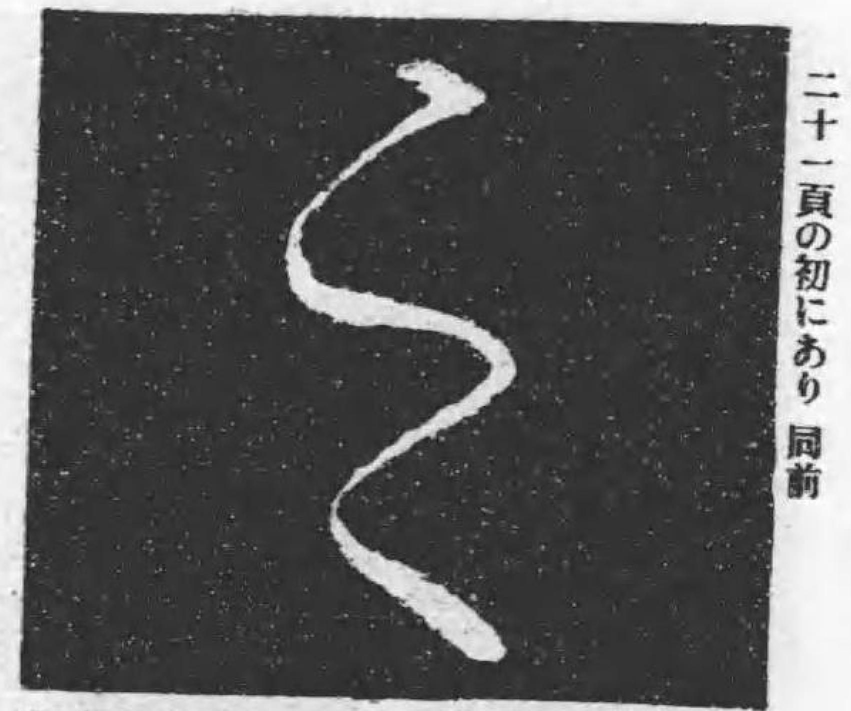


唐拓十七帖の一部（聽氷閣帖と比較を乞ふ）

一頁一行四字目にあり
横腕つゞき居る点に注意

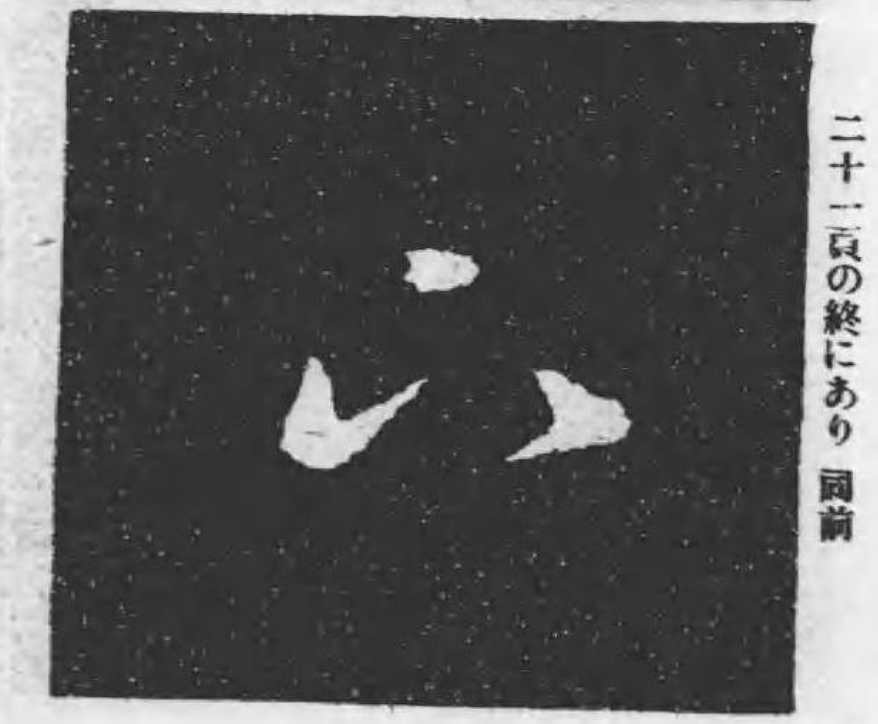
一頁二行の最初にあり 起筆に注意

五頁一行二字目にあり 点劃断接に注意



二十一頁の初にあり 同前

二十一頁の二行四字目にあり
この方自然

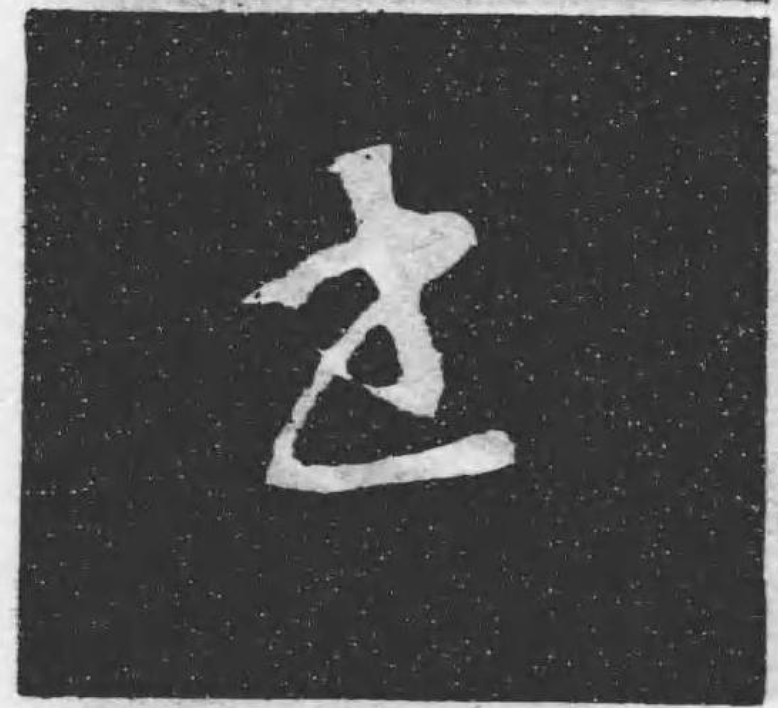


二十一頁の終にあり 同前

二十二頁の一行二字目にあり

一頁一行四字目にあり
横腕つゞき居る点に注意

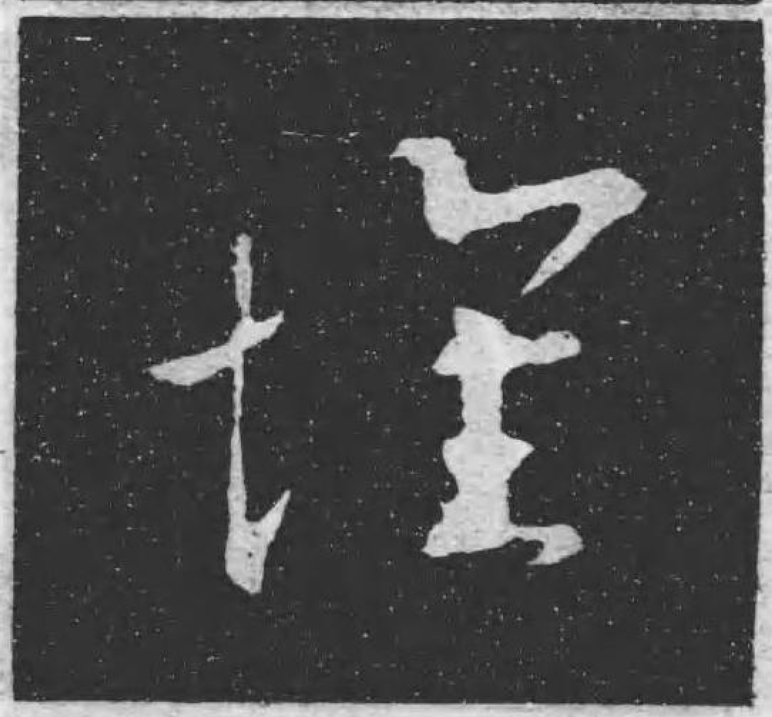
一頁二行の最初にあり　起筆に注意



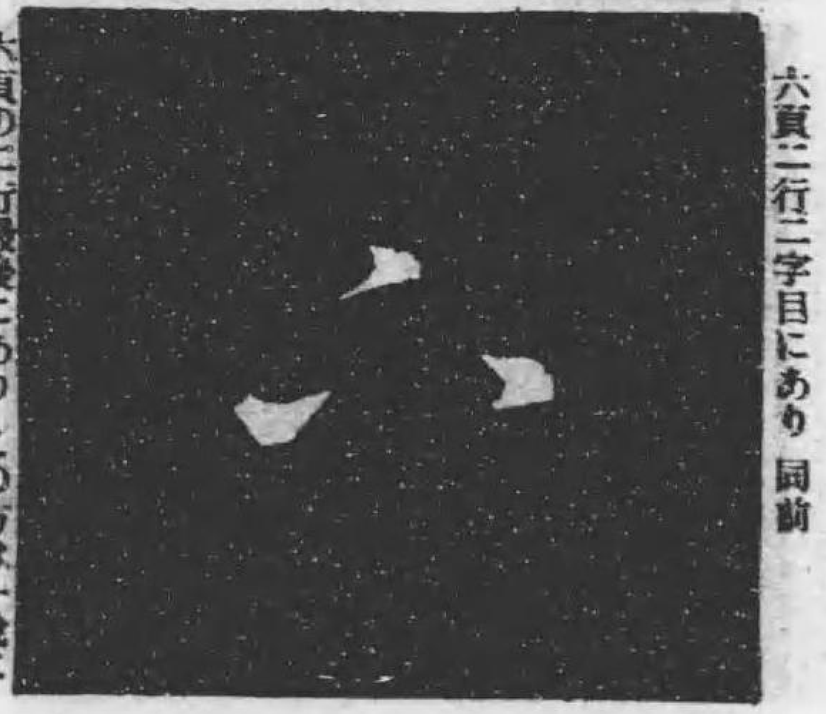
五頁一行二字目にあり　点劃断接に注意

五頁二行二字目にあり　同前

六頁一行二字目にあり　同前



六頁二行二字目にあり　同前



七頁の終にあり
初めの点つゞける点異る

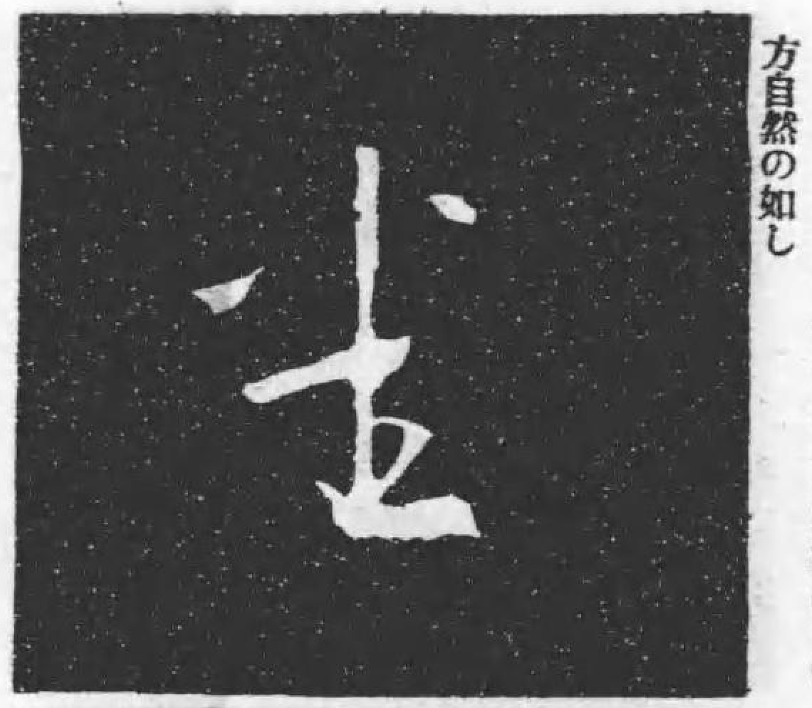
八頁二行の初にあり　この方字体まるし

六頁の二行最後にあり　この方は一説に
ある等の略字に見ゆ
備考　この字は方さいふ説と等といふ説
とあり

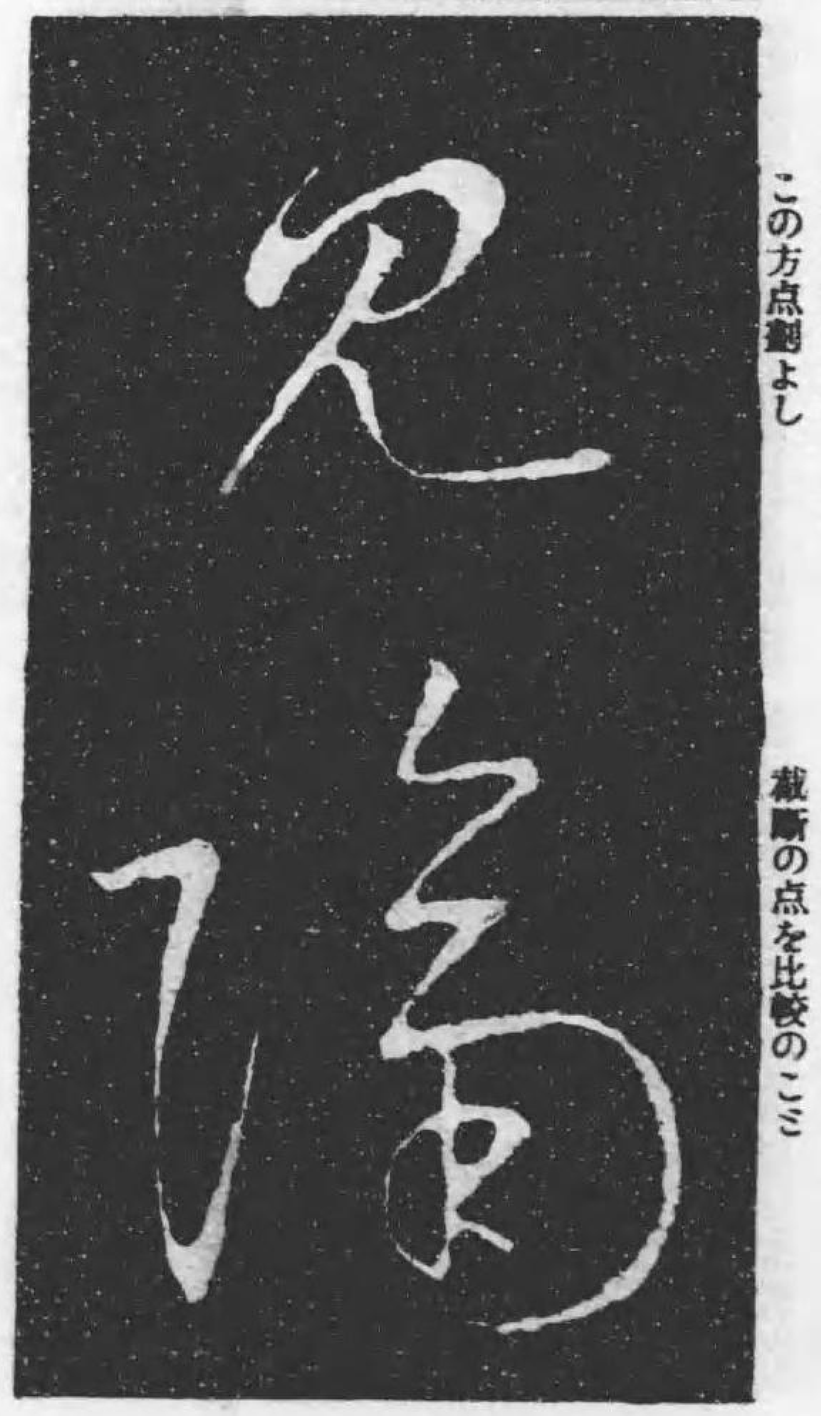
九頁の初にあり　初の点及び竪棒はこの
方自然の如し

十頁初行の二字目にあり
この方点劃よし

十一頁の初行二字目にあり
裁断の点を比較のこと



十一頁の二行二字目にあり　この方自然
の如し一方は裁断のためなり



十一頁の終にあり　同前

十二頁初行三字目にあり　同前

七頁の終にあり
初めの点つゞける点異る

八頁二行の初にあり　この方字体まるし

六頁の二行最後にあり　この方は一說にある等の略字に見ゆ
備考　この字は方ごいふ說ご等ごいふ說ごあり

九頁の初にあり　初の点及び堅棒はこの方自然の如し

十頁初行の二字目にあり
この方点劃よし

十一頁の初行二字目にあり
裁断の点を比較のこご

十一頁の二行二字目にあり　この方自然の如し一方は裁断のためなり

十一頁の終にあり　同前

十二頁初行三字目にあり　同前

十二頁二行初にあり　旁の点・この方自然

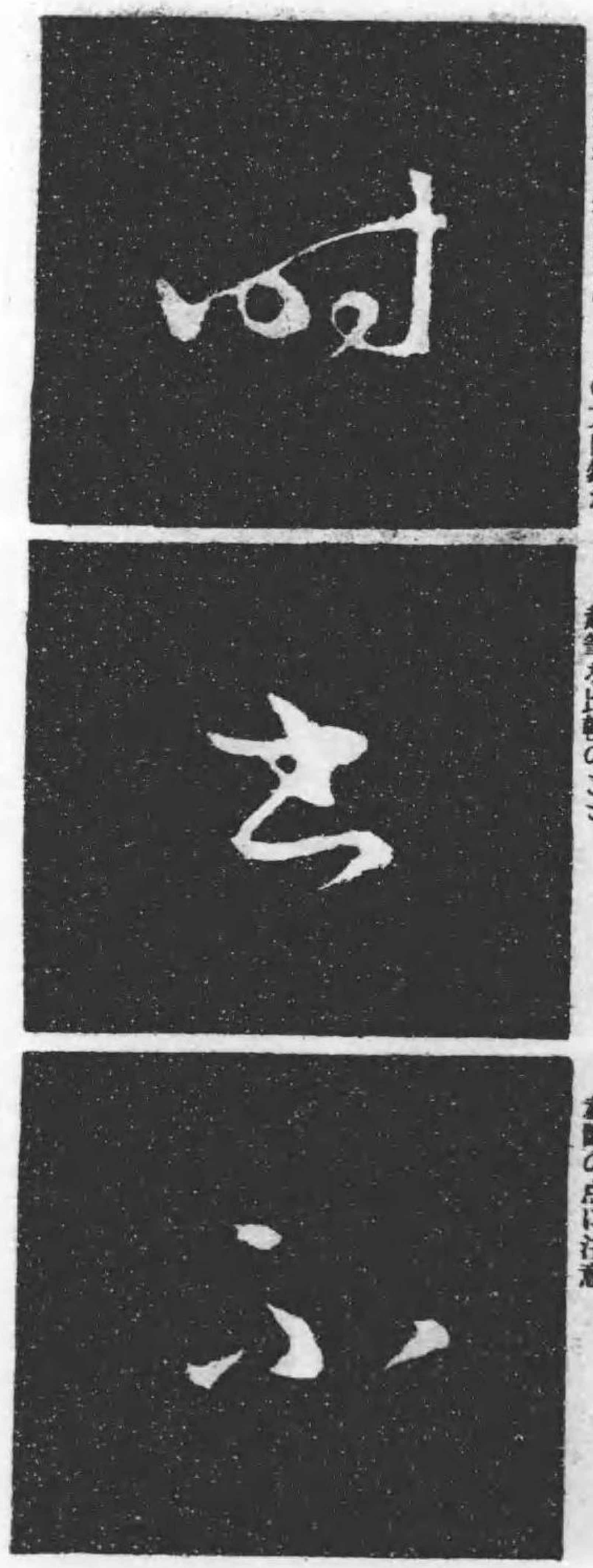
十三頁の初にあり　点劃裁断の点に注意

十三頁の二行二字目にあり　同前

十四頁初行二字目にあり　この方自然か

十四頁の初行三字目にあり
起筆を比較のこご

十四頁の初行五字目にあり
裁断の点に注意



十四頁の二行目最初にあり この方渾健

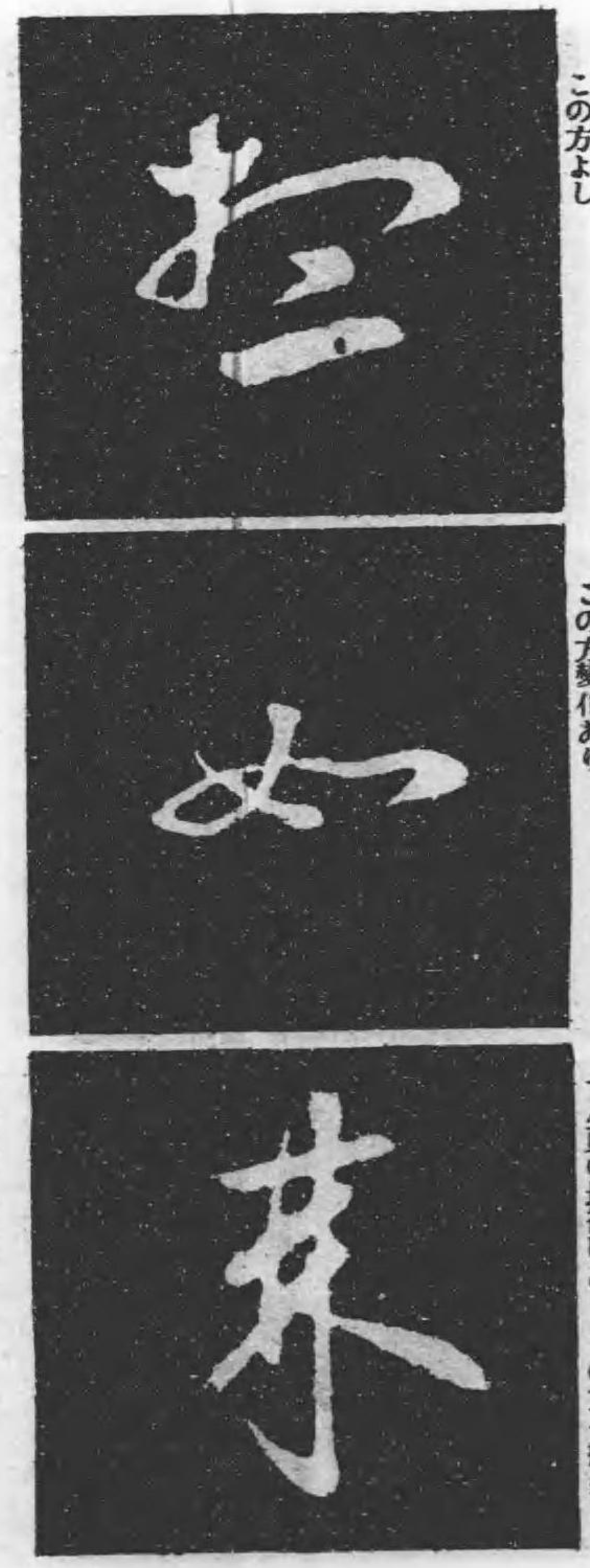
十六頁の二行目の二字目にあり この方面白し

十六頁の二行目の三字目にあり この方起筆自然

十七頁の初行四字目にあり この方よし

十七頁の二行二字目にあり この方變化あり

十八頁の最初にあり この方一劃多し



十八頁の二行初にあり この方自然

十八頁の二行終にあり 同前

十九頁の二行目四字目にあり この方よし

二十一頁の初にあり この方自然

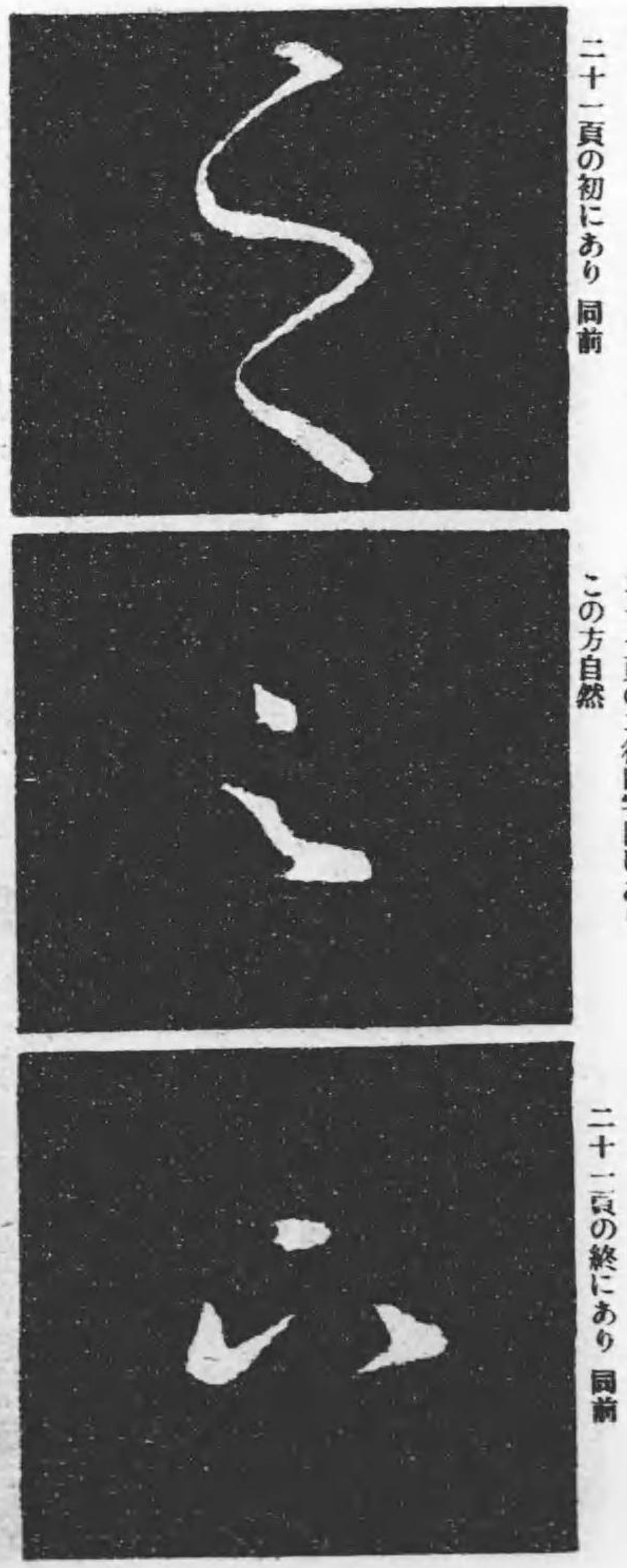
二十一頁の二行目の初にあり 同前

二十一頁の終にあり この方變化あり

二十一頁の初にあり 同前

二十一頁の二行四字目にあり この方自然

二十一頁の終にあり 同前



二十二頁の二行二字目にあり この方渾雅

二十二頁の一行の終にあり 同前

二十五頁の二行初にあり 同前

十八頁の二行初にあり　この方自然

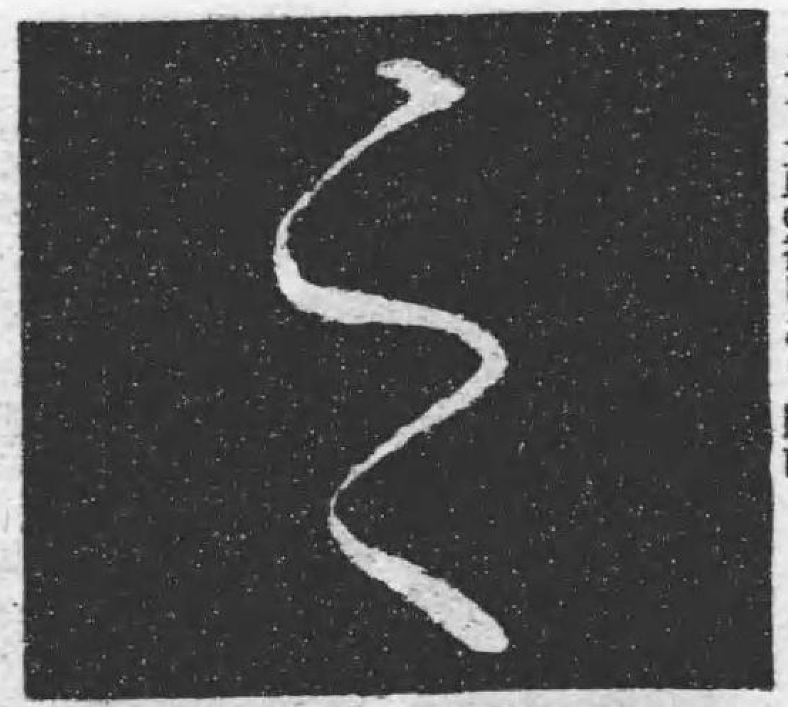
十八頁の二行終にあり　同前

十九頁の二行目四字目にあり　この方よし

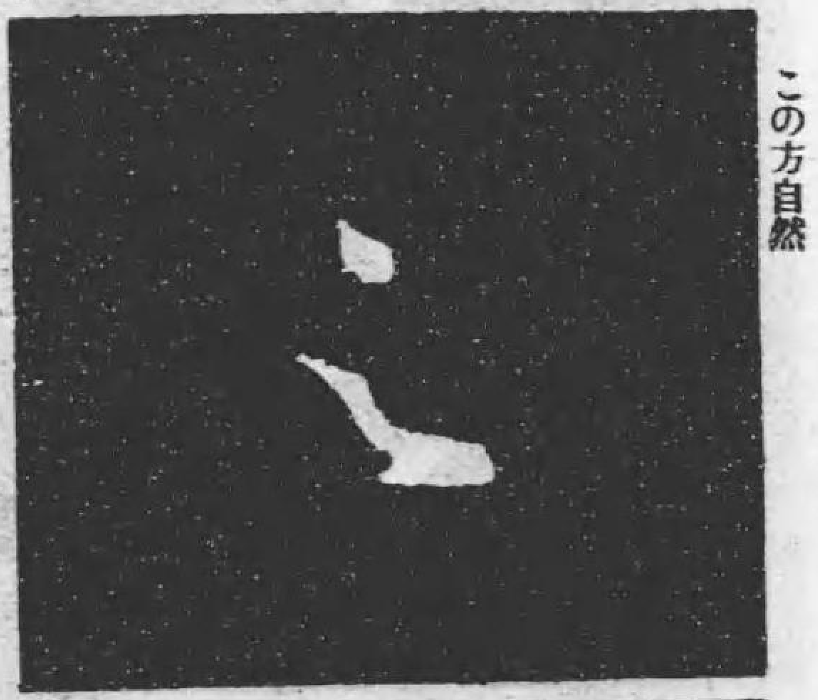
二十一頁の初にあり　この方自然

二十一頁の二行目の初にあり　同前

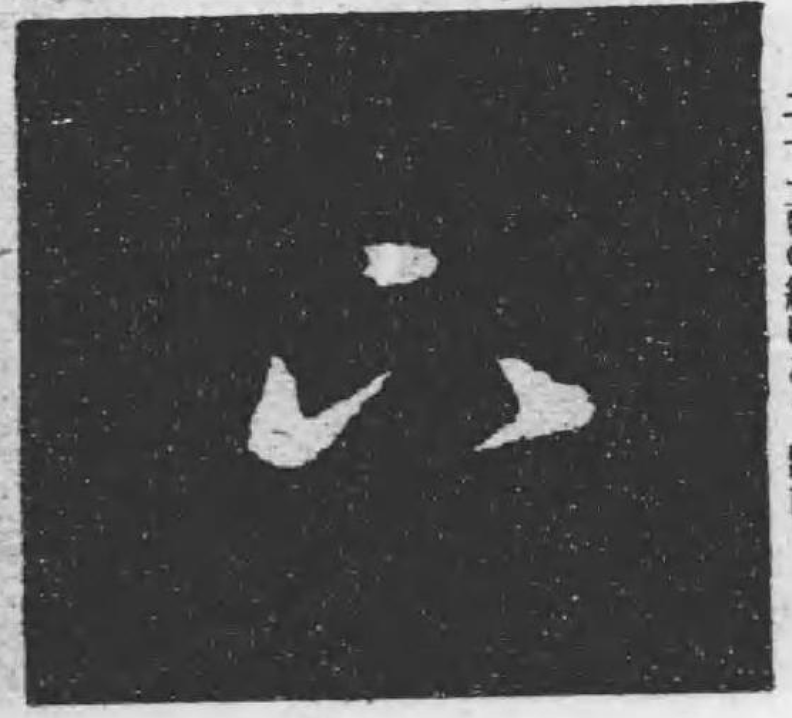
二十一頁の終にあり　この方變化あり



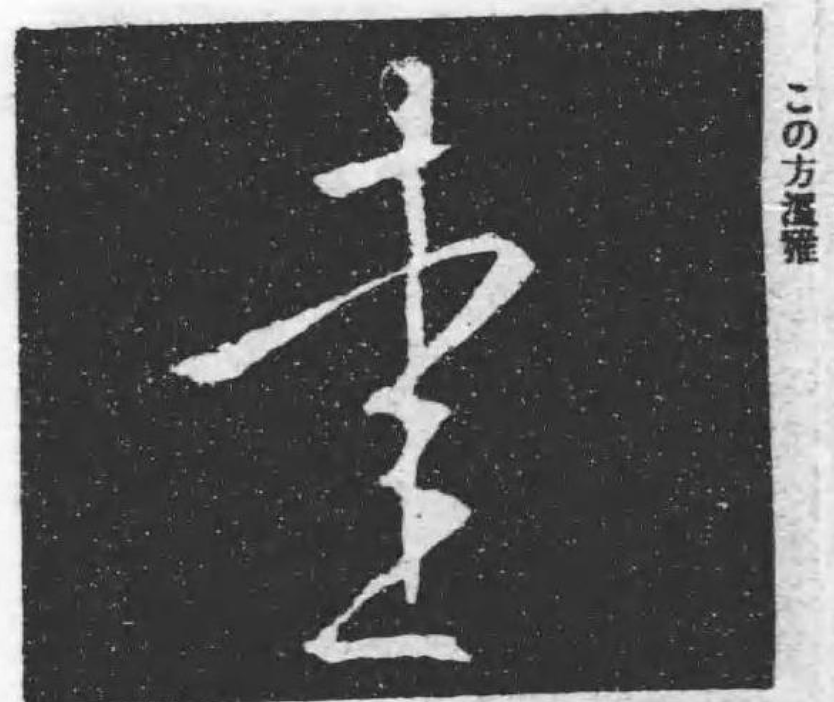
二十一頁の初にあり　同前



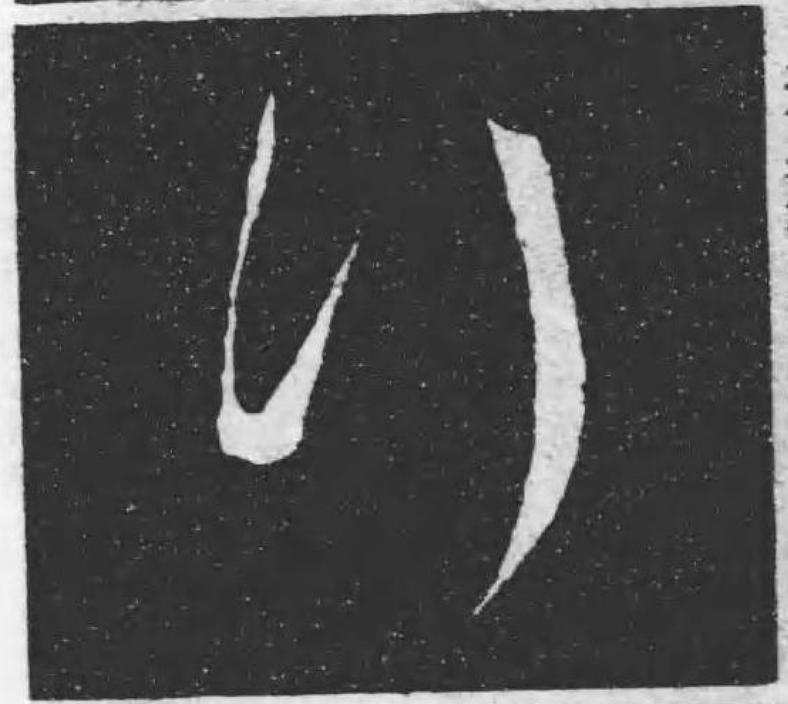
二十一頁の二行四字目にあり　この方自然



二十一頁の終にあり　同前

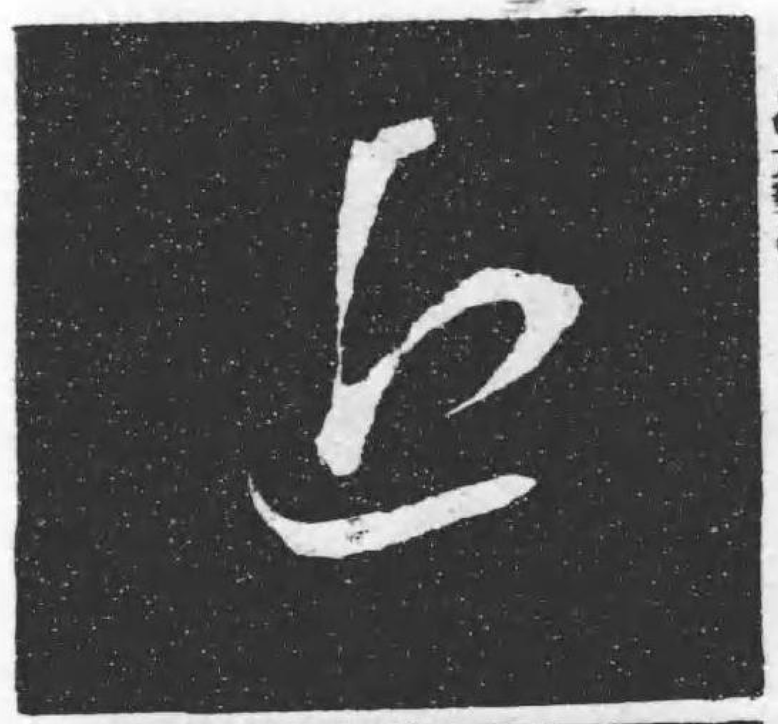


二十二頁の一行二字目にあり　この方渾雅



二十二頁の一行の終にあり　同前

二十五頁の二行初にあり　同前



二十五頁の二行二字目にあり　この方勢あり

二十六頁の二行目初にあり　点を比較のこと

二十九頁の初にあり　この方竪劃割れ居れり

三十頁の初にあり　この方点劃に變化あり

三十頁の初行三字目にあり　結構を比較のこと

二十九頁の二行二字目にあり　この方筆割れ居れり

二十五頁の二行二字目にあり
この方勢あり

二十六頁の二行目初にあり
点を比較のこと

二十九頁の初にあり
この方堅劃割れ居れり

三十頁の初にあり
この方点劃に變化あり

三十頁の初行三字目にあり
結構を比較のこと

二十九頁の二行二字目にあり
この方筆割れ居れり

三十頁の終にあり
この方變化あり

三十二頁の初行二字目にあり
結構を比較のこと

三十四頁の二行目の初にあり
この方温雅

三十四頁の終にあり
勾こ点に注意

三十五頁の初行二字目にあり
この方割れぬ点に注意

三十六頁の初行三字目にあり
比較のこと

三十六頁の終にあり
この方自然

三十九頁の初行三字目にあり
比較のこと

四十七頁の終にあり
この方連綿面白し

四十九頁の二行目の初にあり
この方自然

五十四頁の二行目の三字目にあり
同　前

五十五頁の終にあり
この方字體よしされど眞蹟本は
この字の方ならざる如し

三十四頁の終にあり
勾ミ点に注意

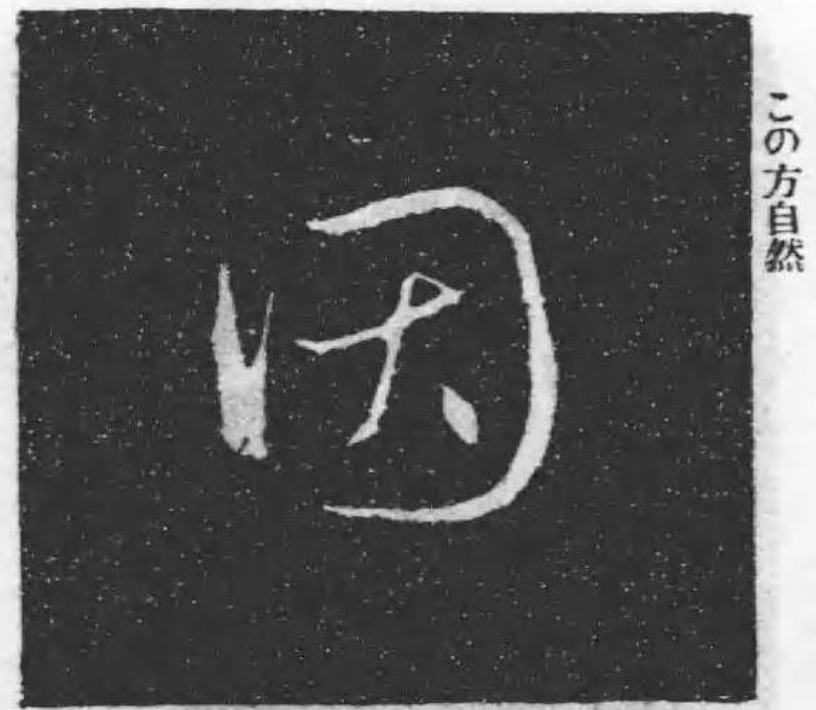
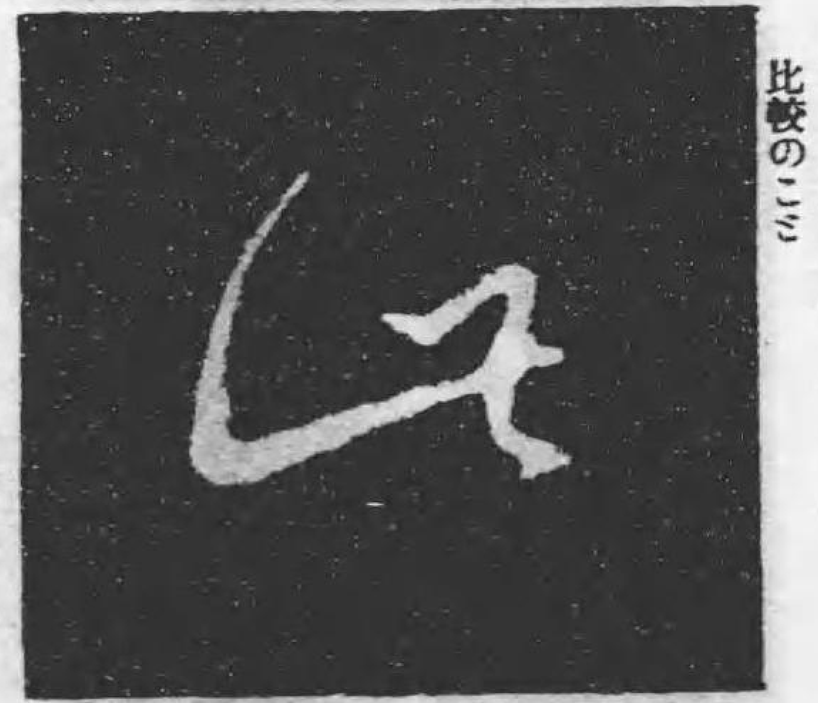
三十五頁の初行二字目にあり
この方割れぬ点に注意

三十六頁の初行三字目にあり
比較のこと

三十六頁の終にあり
この方自然

三十九頁の初行三字目にあり
比較のこと

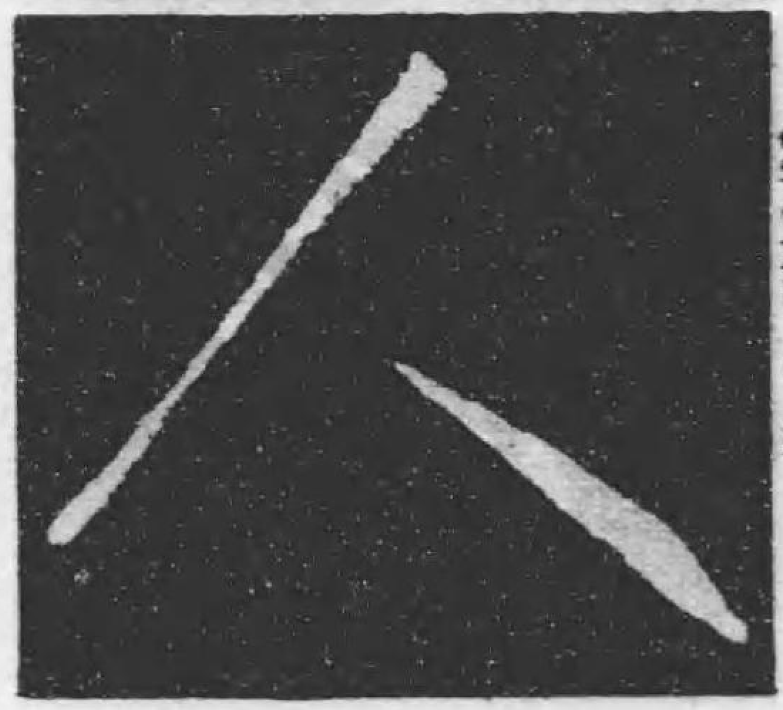
四十七頁の終にあり
この方連綿面白し

四十九頁の二行目の初にあり
この方自然

五十四頁の二行目の三字目にあり
同前

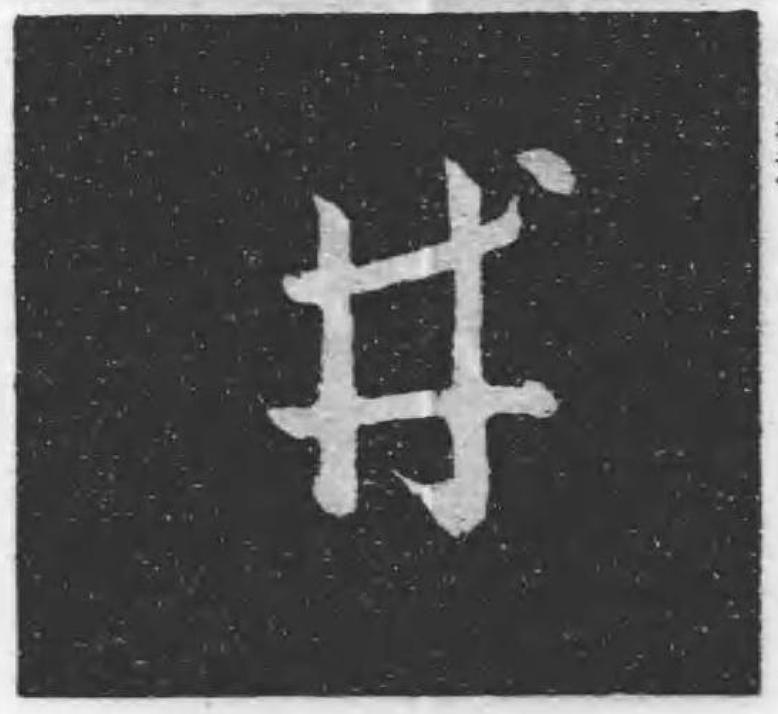
五十五頁の終にあり
この方字體よしされど異讀本は
この字の方ならざる如し



五十八頁の二行三字目にありこの方自然

五十八頁の終にあり
扁を比較のこと

六十二頁の二行三字目にあり点に注意



六十五頁の初行二字目にあり
この方力あり

六十五頁の二行二字目にあり
同前

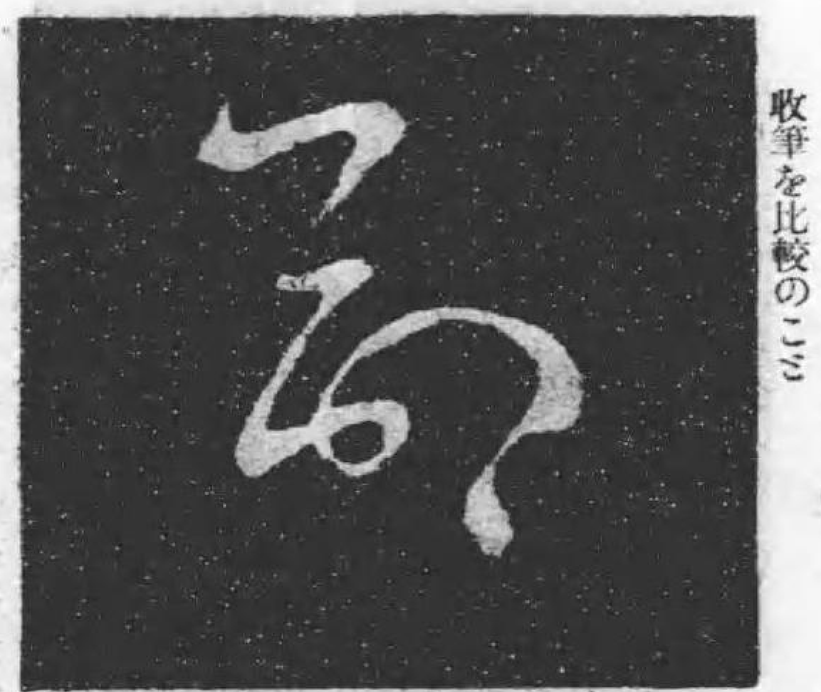
六十五頁の二行三字目にあり
同前

六十七頁の初行二字目にあり
兩方比較のこゝ

六十八頁の初にあり
扁の斷接に注意

六十八頁の初行の終にあり
この方變化あり

六十九頁の初行の終にあり
收筆を比較のこゝ



七十一頁の二行三字目にあり扁
の斷接に注意のこゝ

七十二頁の初行の終にあり
兩方比較のこゝ

七十五頁の初にあり
点この方よし

七十五頁の初行二字目にあり
この方溫健

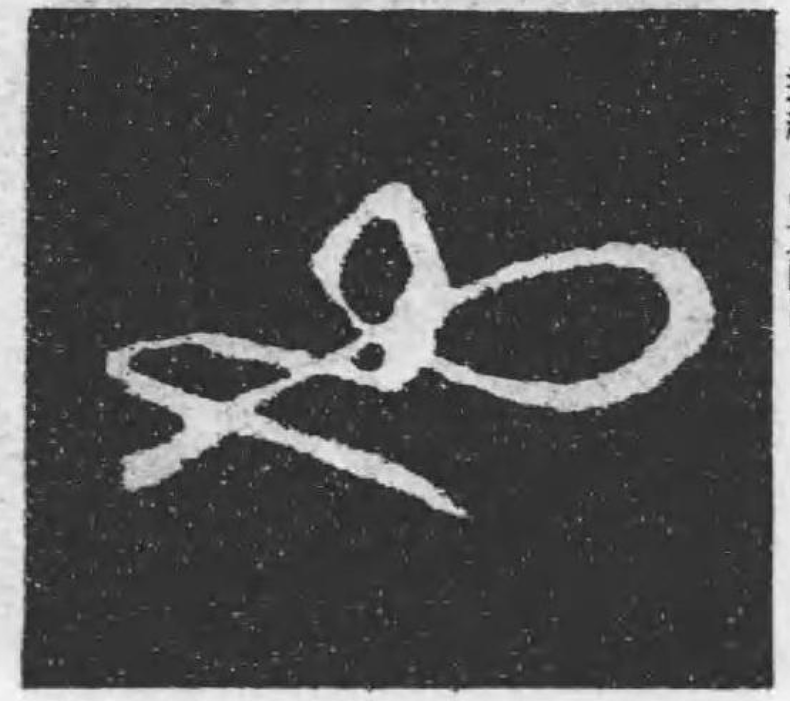
七十六頁の扁を
兩方比較のこゝ

七十七頁の初行四字目にあり
扁この方自然

七十八頁の二行二字目にあり
二字連綿に注意

七十九頁の初行二字目にあり
二字の連綿に注意

七十九頁の終にあり
連綿この方面白し



八十四頁の初行二字目にあり
この方正し

八十六頁の初行三字目にあり連
綿に注意

八十六頁の初行四字目にあり
終筆に注意

七十五頁の初にあり
点この方よし

七十五頁の初行二字目にあり
この方溫健

七十六頁の扁を
兩方比較のこと

七十七頁の初行四字目にあり
扁この方自然

七十八頁の二行二字目にあり
二字連綿に注意

七十九頁の初行二字目にあり
二字の連綿に注意

七十九頁の終にあり
連綿この方面白し

八十四頁の初行二字目にあり
この方正し

八十六頁の初行三字目にあり連
綿に注意

八十六頁の初行四字目にあり
終筆に注意

八十九頁の初行三字目にあり
この方割れ目なし

九十三頁の初行三字目にあり
終劃の違ひに注意

九十三頁の終にあり
兩方の結構に注意

九十六頁の初にあり
扁を比較のこと

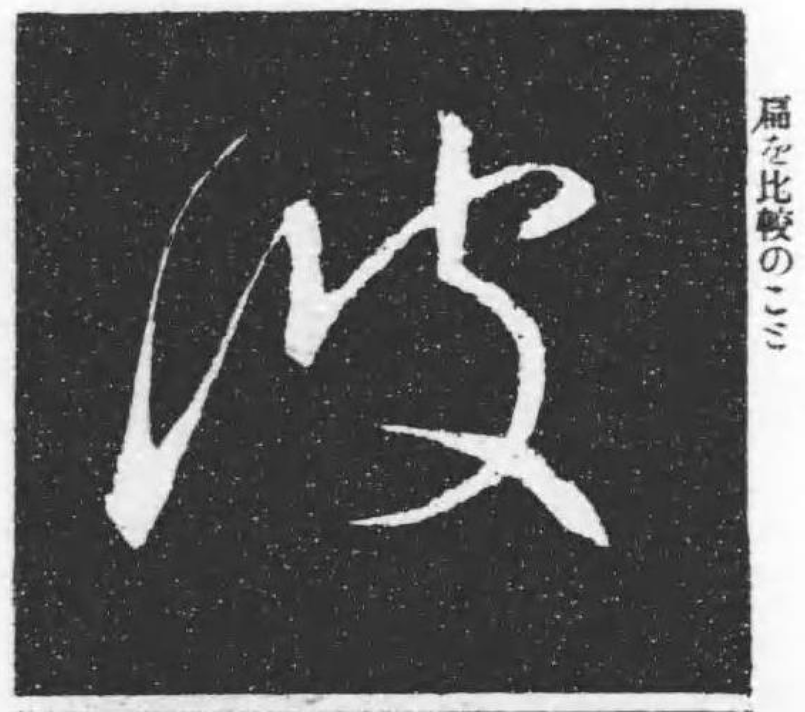
一〇〇頁の二行二字目にあり起
筆を比較のこと

一〇八頁の二行目の初にあり
扁を比較のこと

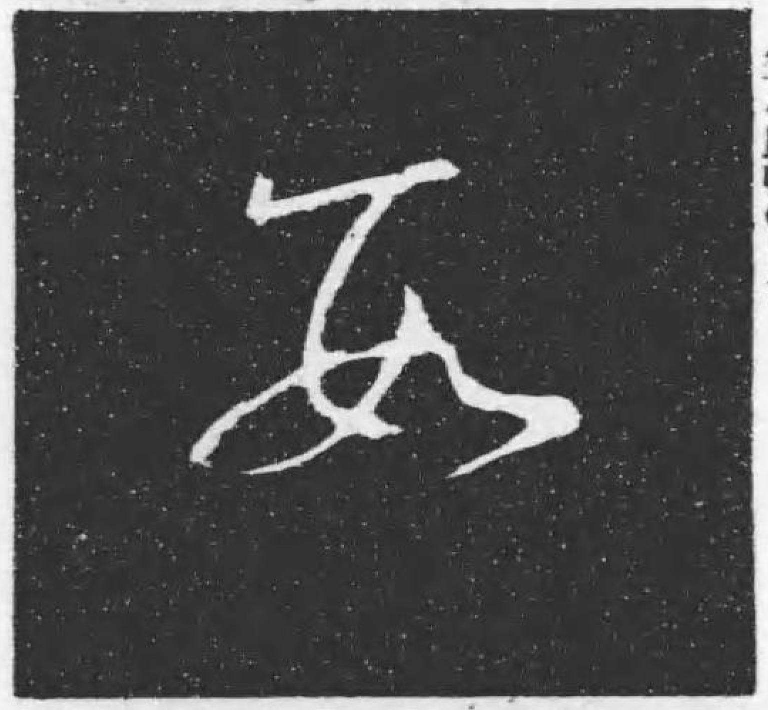
八十九頁の初行三字目にあり
この方割れ目なし

九十三頁の初行二字目にあり
終劃の違ひに注意

九十三頁の終にあり
兩方の結構に注意



九十六頁の初にあり
扁を比較のこと



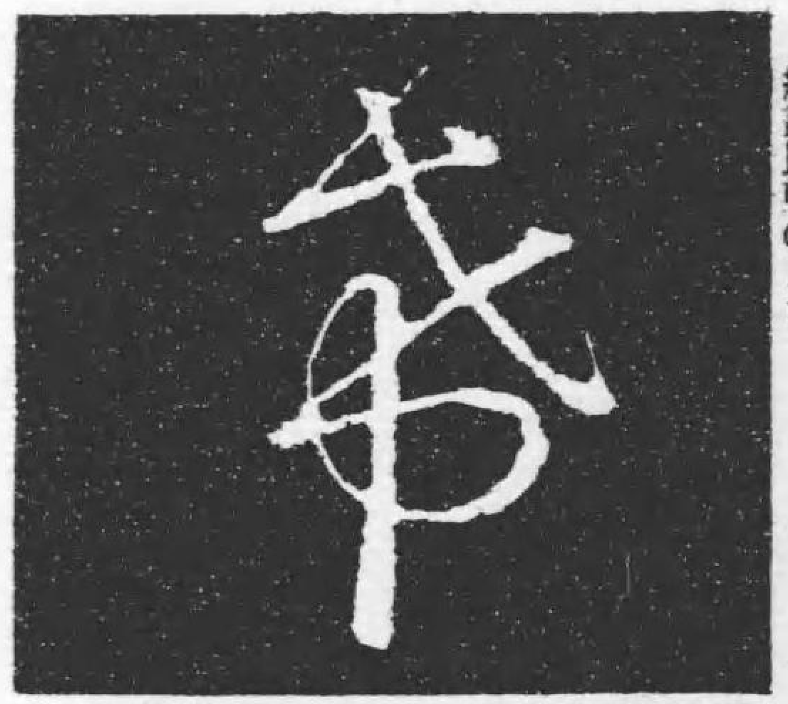
一〇〇頁の二行二字目にあり起
筆を比較のこと

一〇八頁の二行目の初にあり
扁を比較のこと

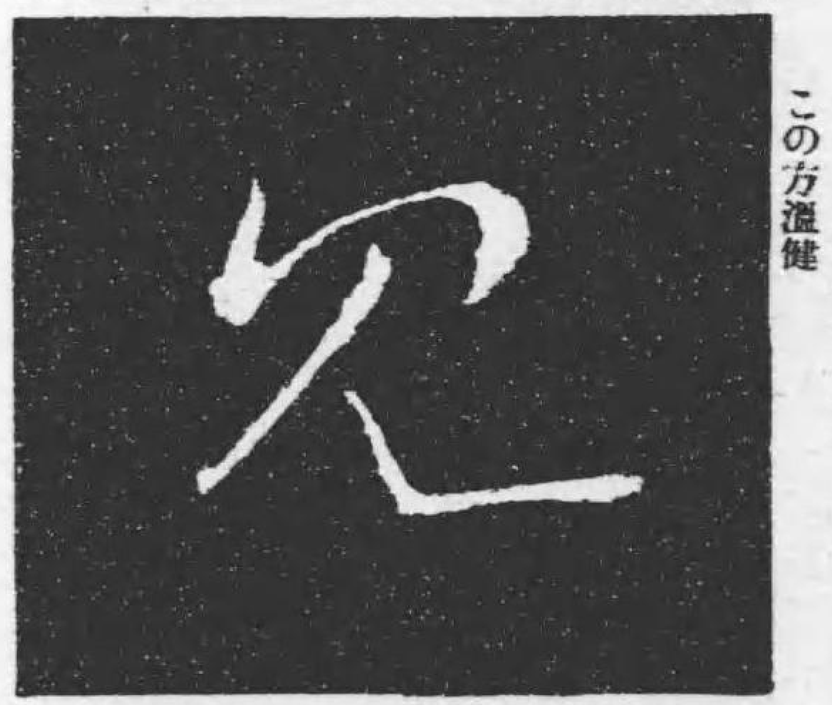
一〇八頁の終にあり
この方力あり

一〇九頁の初行四字目にあり
連綿比較のこと

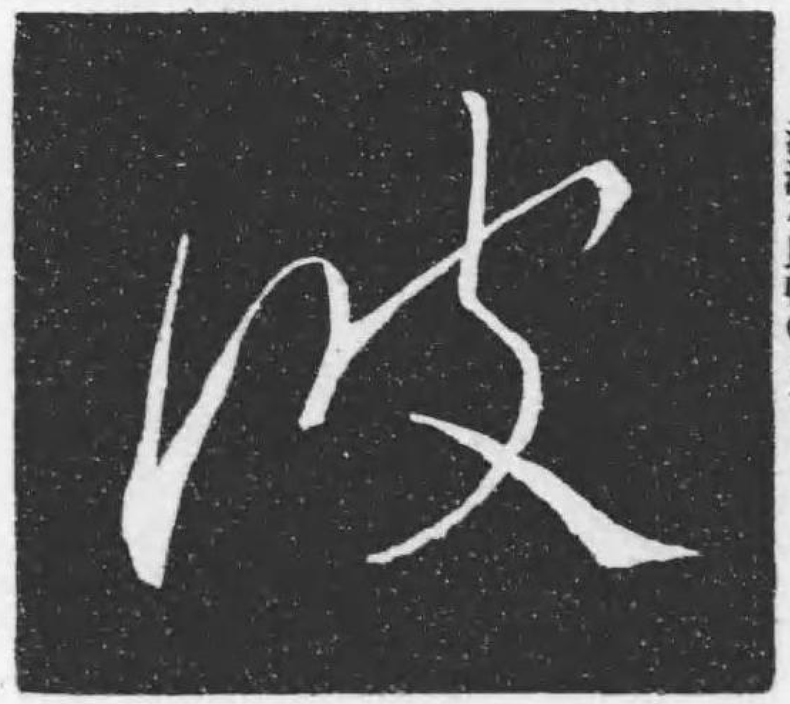
一〇九頁の初行終にあり
この方力あり



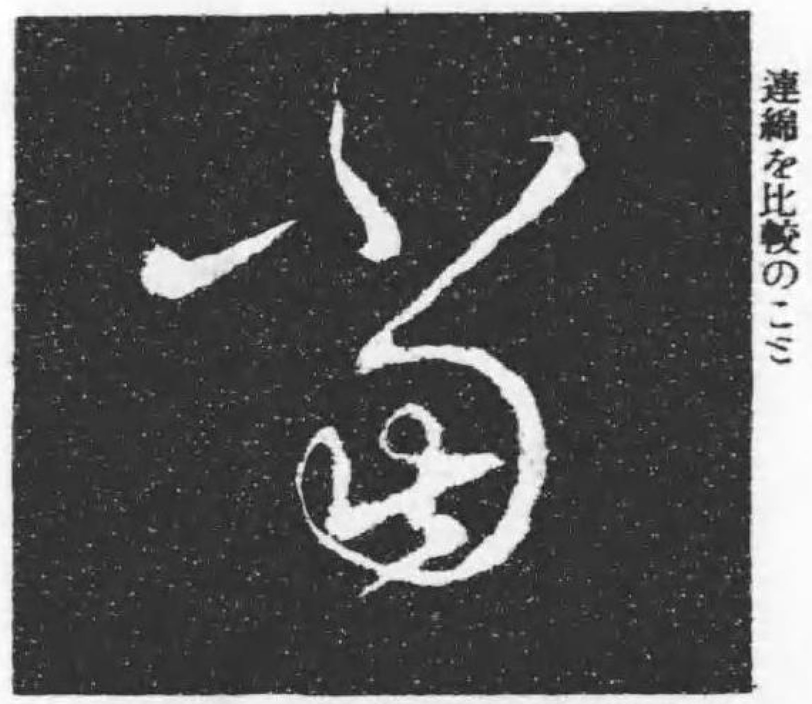
一一五頁の初行終にあり
終劃比較のこと



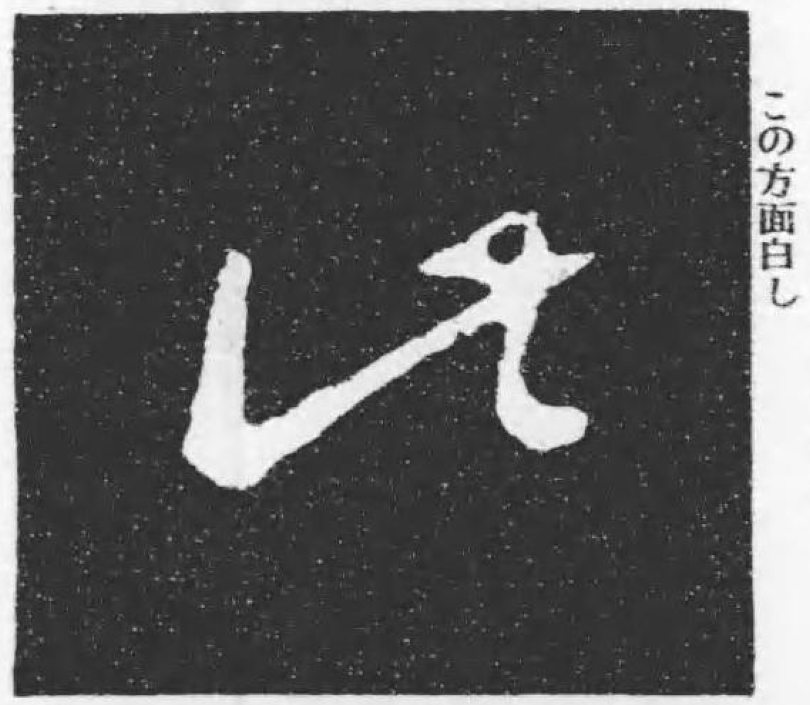
一一六頁の初行三字目にあり
この方澁健



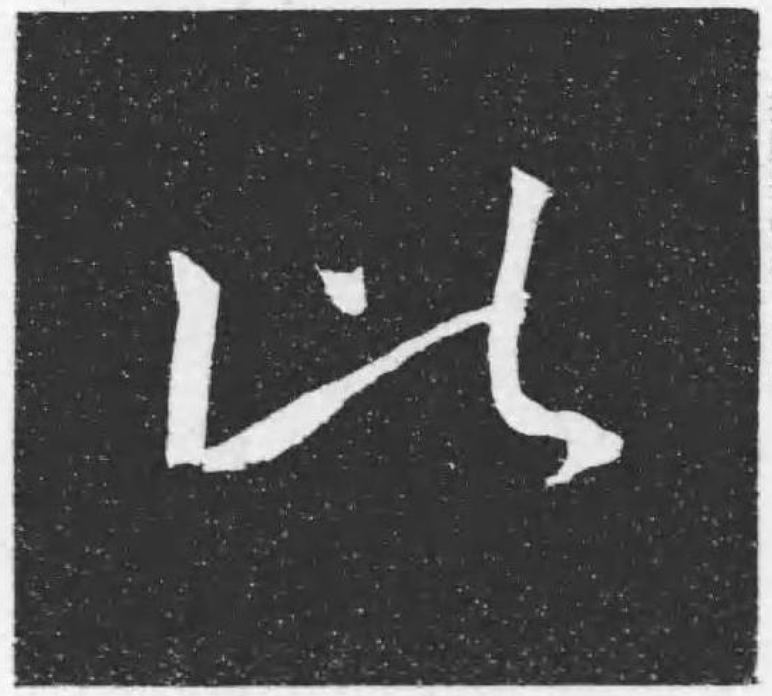
一一七頁の初にあり
波法を比較のこと



一一八頁の初にあり
連綿を比較のこと



一二一頁の二行二字目にあり
この方面白し



一二二頁の終にあり
点劃斷接の所に注意

一二三頁の初行二字目にあり
波法この方よし

一二三頁の初行三字目にあり
終劃この方正しきが如し

一二四頁の初にあり
この方變化あり

一一五頁の初行終にあり
終劃比較のこと

一一六頁の初行三字目にあり
この方溫健

一一七頁の初にあり
波法を比較のこと

一一八頁の初にあり
連綿を比較のこと

一二一頁の二行二字目にあり
この方面白し

一二二頁の終にあり
点劃斷接の所に注意

一二三頁の初行二字目にあり
波法この方よし

一二三頁の初行三字目にあり
終劃この方正しきが如し

一二四頁の初にあり
この方變化あり

一二四頁の二行四字目にあり
收筆を比較のこと

一二五頁の二行の初にあり
この方連綿面白し

一二六頁の初にあり
同　前

一二七頁の初行の終にあり
同　前

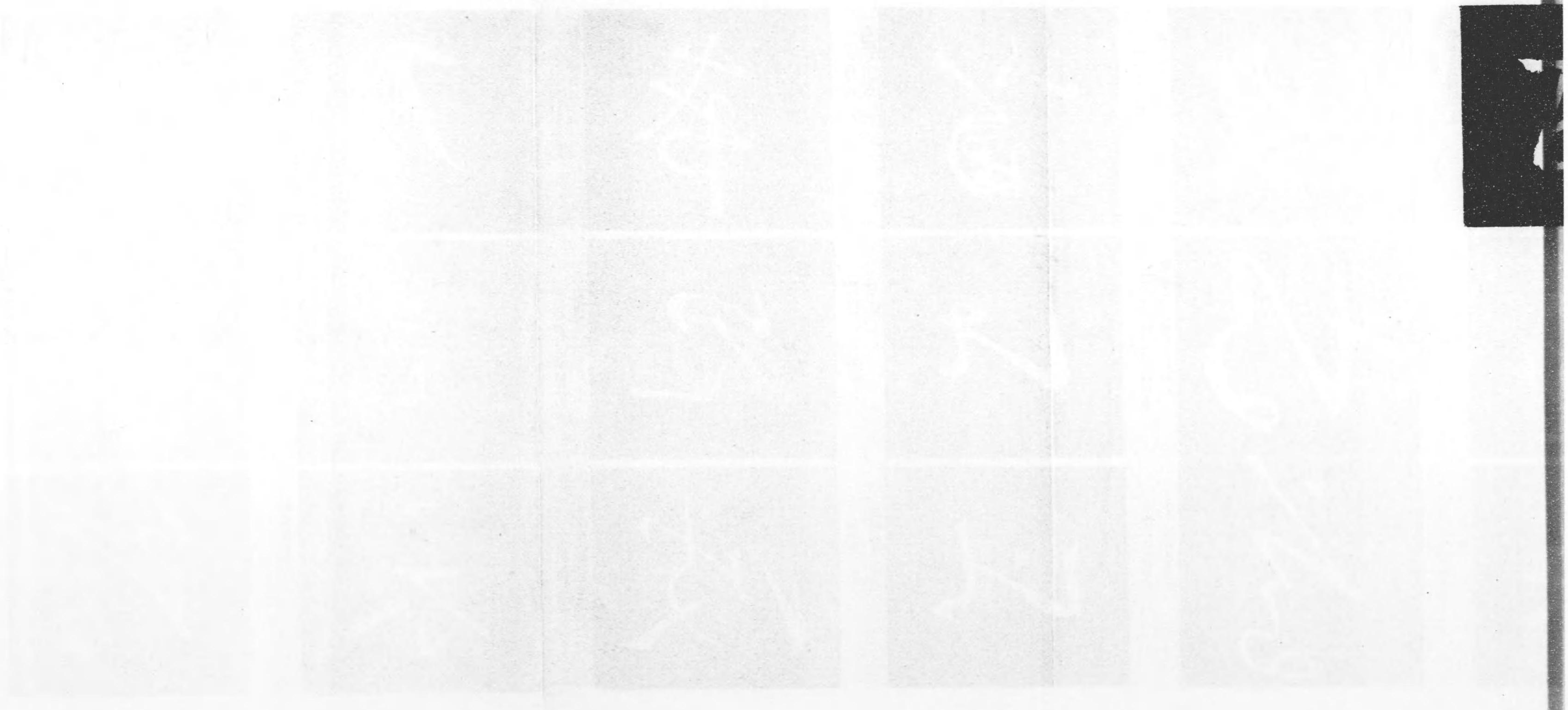
一二八頁の二行三字目にあり点
劃の斷接比較のこと

一三二頁の終にあり
・收筆比較のこと

一三四頁の二行目の初にあり
この方正しきが如し

一三六頁の初行終にあり
連綿比較のこと

一三六頁の二行目の初にあり
堅剛比較のこと



365
322

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月廿日發行

展大古法帖（第四卷十七帖）

不許復製

編輯兼發行人　中根佐一郎
岡崎市能見町一四

印刷所　中央書道協會専屬印刷所

印刷人　奥山仁平
岡崎市能見町一四

賣捌所
東京堂　大東舘　愛知書籍
東海堂　北隆舘　星野書店

發行所　岡崎市能見町一四
中央書道協會
振替口座　名古屋一二一二番
東京一九一四七番
電話（岡崎）一九〇番

（定價金貳圓）

終